藤原師賢
（楠正成肖像）
笠置山行幸
楠木の夢
（楠正成旗之圖）
志貴山毘沙門天祠
正成詔を奉ず

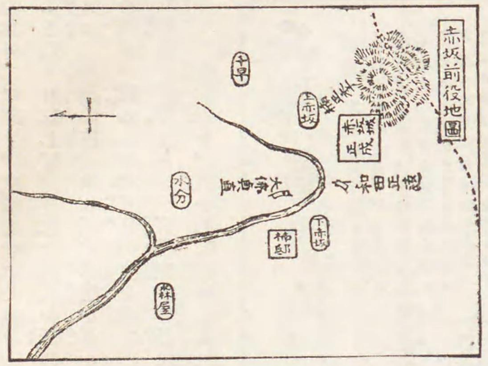
を捕へ、再俊基を執ふ。遂に宰高資と議を定めて帝を廢し、承久の故事の如くせんと欲す。二階堂貞藤を遣し、兵を潛めて西上し、夜、六波羅に至る。府將北條仲時、北條時益、高時の書を得て、未だ封を發ざるに帝、諜して之を知る。乃、護良の計を用ゐ、籃輿に御し、逃れて南都に之く。大納言藤原師賢をして、衮衣を服し、詐りて帝と稱し、叡山に赴かしむ。僧徒大に喜び、來り聚り、一夕にして萬人を得たり。而るに仲時、時益、帝猶宮中に在りと謂ひ、兵を遣して之を索むれども獲ず。則、大納言藤原宣房等四人を收へて去る。萬人を以て叡山を攻む。護良等擊ちて之を卻く。而して僧都、帝の眞に非ざるを知りて、悉く散じ去る。是時に當りて、帝、笠置に在り。仲時、時益、之を聞きて、兵を遣し來り攻めしむ。

未だ至らざるに、帝、詔を四方に下し、難に赴かしむ。復、命に應ずる者莫し。紫宸殿の南に大樹あり。樹下に虛位を設け二童子來り、泣を垂れて白して曰く、「天下の地、陛下を容るゝ所なし。獨此座あるのみ」と。既に覺めて自、念へらく、文に、木の南に從ふは楠なり。當に姓楠なる人ありて、出でゝ朕を扶けて、以て禍難を定むべしと。因りて山僧を召し、之に訪ひて曰く、「地方の豪傑に、豈、姓楠るか」と。對へて曰く、「金剛山の云ふ者あ」と。對へて曰く、「金剛山の西に、楠正成と云ふ者あり。正成の父、嘗て子無きを憂へ、其妻と志貴山に禱りて之を生む。少字は多聞と云ふ。長じて材武を以て名あり。嘗て土寇を平げし功を以て兵衛尉と爲る」と。帝曰く、「是なり」と。中納言藤原藤房をして、往きて正成を召さしむ。正成、即、意を決して之に赴き、藤房に從ひて行在に詣る。帝、藤房をして言はしめて曰く、「賊を討つ事、

非理法權天

元弘元年
赤坂城
（赤阪城前合戰地圖）
赤坂籠城
笠置落城

朕、一に以て汝に託す」と。因りて座を命じて計を問ふ。正成、感激し、對へて曰く、「天誅、時に乘ずれば、何の賊か斃れざらん。東夷、勇あれど智なし。如し勇を較ぶれば、六十州の兵を擧ぐるも、以て武藏、相模に當るに足らず。智を較べんか、則、臣、こゝに策あり。然りと雖、勝敗は常なり。少の挫折を以て、其志を變ずべからず。陛下、苟も正成の未だ死せざるを聞かば、則、復、宸慮を勞する毋れ」と。拜辭して還る。實に元弘元年八月なり。



正成、是に於て、赤坂に城き、將に乘輿を奉ぜんとす。而れども賊兵已に行在を圍む。三河の人足助重範、善く拒ぐ。備後の人櫻山玆俊、兵を起して之に應ず。高時、乃北條貞直、足利高氏等六十三將を遣し、武藏、相模等五州の兵、十餘萬騎を以て西上せしむ、未だ至らずして、笠置陷る。重範擒にせられ、錦織俊正、石川義純、之に死す。帝、藤房と神器を奉じて逃る。

是に於て、貞直等の諸軍、徑に赤坂の城に赴く。城纔に成り、農粟を取りて糧に充つ、兵僅に五百人、正成其三百を分ち、弟正季、族和田正遠を以て之に將たらしめ、城を出でゝ、山に蓐れ、東軍を竢たしむ。東軍至りて其城を望見す。方、百餘歩可りなり。乃悶笑して曰く、「此れ隻手もて掀ぐべきのみ」と。爭ひて馬より下り、肉薄して之を攻む。正成、士卒をして齊しく射しめ、立どころに千餘人を斃す。東兵沮み卻き、甲を卸して、且に息はんとす。而して伏兵左右より起る。正成二百騎を以て門を闢きて、突き出で、三面より合擊す。東軍大に驚きて擾亂し、器械を棄てゝ走る。旦日、東軍分れて二と爲り、一は伏に備へ、一は城を圍む。正成、豫め復垣を築き、繩

赤阪落城

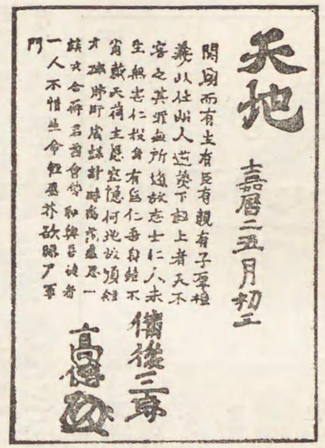
（兒島高德旗之圖）

光殿天皇

元弘二年隱岐に還幸

兒島氏系統高德

を其外垣に懸く。敵蟻附す。乃縄を斷つ。敵、垣と俱に墜つ。乃、大石巨材を投じ、七百餘人を殺す。居ること四五日にして、東軍、攻具を修め、楯を蒙むりて進み、鐵鉤を垣に鉤す。垣殆ど崩る。正成、城兵をして人々に長柄の杓を執りて、沸湯を沃がしむ。敵焦爛して退く。東兵、是に於て、營を築き城を環し、持久の計を爲す。而るに城兵五日の食を餘すのみ。正成、衆に謂て曰く「吾れ天下に先だちて大事を擧ぐ。固より生を圖らず。然りと雖、天子在す。吾れ未だ以て死す可からず。吾れ今佯りて死せば、敵則去らん。去らば則、復、起り、彼をして奔命に疲れしめん。是れ軀を全くして以て敵を亡ぼすの術なり」と。衆曰く「善し」と。乃、坑を鑿ち、尸を塡め、薪を以て之を蔽ひ、風雨に乘じて、夜、稍逃れ出でゝ、金剛山に入る。一人を留め、誡めて曰く、「我が還ざかるを度りて火を擧げよ」と。火起る。敵爭ひて城に上り坑中の積尸を見て、正成既に死せりと謂ひ、兵を引きて東に去る。湯淺定佛をして、代りて其城を守らしむ。櫻山氏の兵、之を聞きて潰を散ず。玆俊、自殺す。



賊、帝を宇治に執へ、平等院に奉じ、遂に之を六波羅に徙さんと欲す。帝、行幸の儀を備へしめて、乃往く。賊、乃、後伏見帝の子量仁を立てゝ位に卽かしむ。實に光嚴帝なり。帝に神器を傳へんことを請へども聽さず。帝に髪を削らんことを請ふ。又聽さず。毎日沐浴して、皇祖を拜し給ふこと常例の如し。賊之を畏憚す。僧良忠、帝を奪はんことを謀れども成らず。二年二月、高時、帝を隱岐に徙す。其禮、承久に比すれば頗る厚し。參議源忠顯、嬪藤原氏從ふ。而して賊將佐々木高氏等、兵三千を以て護送して、山陽道に由る。兒島高德、又之を奪はんことを謀れども復成らず。兒島氏は、本三宅氏なり。世備前の兒島に居る。兒島範長、備後守爲り。子の高德、備後三郎と稱す。帝の

高德櫻樹を削り詩を題して志を表す

【范蠡】越の謀臣なり、勾踐を助け、吳を滅し、以て會稽山の恥を雪ぐ、卽高德自らの范蠡に比すす

章良を土佐に宗良を讃岐に恒良を但馬に流し、恒性を越中に殺す

元弘三年湯淺定佛

天王寺陣

笠置に在しゝとき、範長、高德、赴き援はんと欲す。「笠置陷り、楠氏敗る」と聞きて、乃止む。已にして帝の西遷するを聞き、高德、其衆に謂ひて曰く、「吾れ聞く、『志士仁人身を殺して、以て仁を成す有り。義を見て爲さゞるは勇なきなり』と。盍ぞ要して駕を奪ひ、以て義を擧げざらんや」と。衆、奮ひて之に從ふ。船阪山に伏して待つ。之を久しくすれども駕至らず。人を遣し之を候はしむ。曰く、「駕は山陰道に向へり」と。乃、間道より杉坂に至れば、則已に過ぎたり。衆乃散じ去る。

高德、悵恨して去る能はず。乃、服を變へて、駕に尾して行くこと數日、一たび帝に見えて言ふ所あらんと欲す。而れども間を得ず。是に於て、夜、帝の館に入り、櫻樹を白して之に書して曰く「天、勾踐を空しくする莫れ、時に范蠡無きにしも非ず」と。旦日、護兵聚り視るに、讀む能はざるなり。乃、之を奏す。帝之を熟視して欣然たり。心に王に勤むる者あるを知れり。

帝、隱岐に至り、國府島に居る。高時、遙に隱岐の守護佐々木清高をして、兵を將ゐて監護せしむ。又藤房以下公卿六人を流し、藤原俊基等四人を殺す。藤原資朝、佐渡にあり。其子國光、京師より赴き父を省る。父已に本間三郎といふ者に殺されたり。國光、夜、三郎を斬りて去る。高時遂に皇子尊良、宗良、恒長を流し、恒性を殺す。獨、第三子兵部卿護良、逃れて吉野に奔る。是に於て四方、復王に勤むるの師なし。

四月、正成、金剛山を出でゝ、五百騎を以て赤阪の城を攻む。城將湯淺定佛、糧を紀伊に徵す。正成、遮りて之を奪ひ、苞に充つるに甲を以てし、三百人をして荷ひて城下に至らしめ、別に兵を分ちて之を追ふ。城兵望み見て謂へらく、敵且に我が糧を奪ふと。門を開きて之を納る。三百人甲を苞より取り出して甲し、吶喊して起り鬪ふ。正成、門を奪ひて入る。定佛、爲す所を知らず。乃降る。正成、其兵を幷せ、七百騎を將ゐて河內、和泉を徇へて、悉く之を下す。渡部に及ぶ比、二千人を得たり。進みて天王寺に陣す。北條氏、天子を徙してより、天下復虞るゝに足るなしと謂へり。正成、起るに及びて則大に驚く。六波羅の二帥、隅田通倫、高橋宗康を遣し、五千騎を將ゐて之を擊たしむ。正成、兵を分ちて四隊と爲し、其三隊

【讃文】皇子の未來記、正成聖德太子の讖文を讀む

元弘二年

を伏せて、羸兵一隊を以て渡部橋を扼して陣す。敵、望み見て之を易り、輒、競ひて渡る。羸兵伴りて走る。敵、北ぐるを追ひ、天王寺を過ぎて伏に陷る。急に兵を麾きて卻く。我が兵疾く之に乘ず。敵兵卻き走る。復制す可からず。橋を爭ひて溺るゝ者無數なり。京師、之が謠を爲りて曰く、「渡部の川、橋を墜し、田を決る」と。二帥之を愧づ。

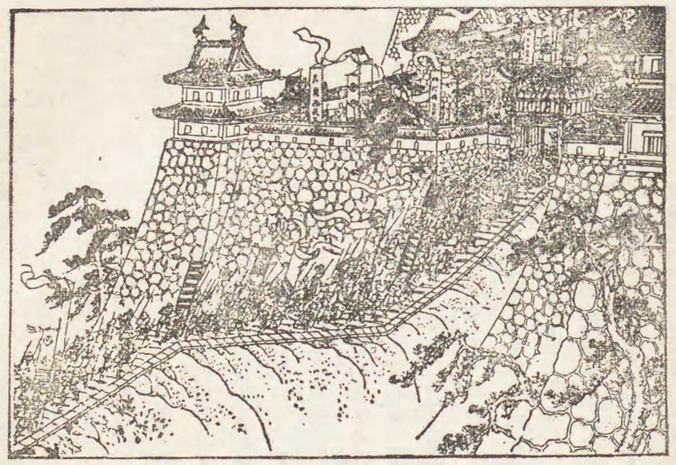
更に宇都宮公綱に命じて、紀清の兩黨五百騎を以て代り赴かしむ。正成の族和田某、逆へ戰はんと謂ひて曰く、「我れ已に五千に勝つ。五百に於ける何か有らん」と。正成、默然として、良久くして曰く、「勝敗の機は離同にありて、衆寡に在らず。公綱、素より勇名を負ふ。寡兵を以て敗れしを承く。其將士の、心を同じくすること、知る可きなり。我れ藉使之に克つとも、能く失亡するなからんや。吾れ大任を受く。前途甚遠し。而して首に我が士を傷はゞ、後誰か我が用を爲す者あらん。吾れ將に戰はずして之を屈せんとす」と。遂に營を拔きて去る。公綱代りて營す。既に夜なり。四面を望むに皆炬火なり。漸く多く、漸く近し。乃、甲を釋かずして待つこと三晝夜、兩黨懼れ、歸らんと請ひて曰く、「楠氏の兵日に加はるなり」と。公綱乃引きて歸る。正成、復天王寺に軍し、數々出でゝ兵を耀かし、軍中に令して鹵掠を禁ず。遠近心を歸して來り屬する者多し。正成の威、京畿に揮ふ。寺の舊藏に上宮太子の讖文あり、正成、僧に請ひて之を發き視る。文に曰く、「人皇九十五代に當りて、天下一たび亂れて主安からず。此の時、東魚來りて四海を呑み、日西天に沒する三百七十日にして、西鳥來りて東魚を食ひ、海內一に歸すること三年、獼猴の如き者ありて、天下を掠むる三十餘年、大凶變じて一元に歸す」と。正成指して衆に諭して曰く、「謂ゆる九十五代は今上に非ずや。東魚は乃、高時なり、而して西鳥の爲に食はるとは、則終に族滅に歸せんのみ。日、西天に沒する三百七十日とは、上の復辟、蓋し明春に在らん。諸君之を勗めよ」と。衆、皆奮勵す。

是時に當りて、皇子護良親王、兵を起して吉野に據る。又赤松則村を諭して王に勤めしむ。八月、則村、兵を播磨に起す。是に於て、京畿の警聞、交鎌倉に至る。高時、乃東北三道に檄し、兵を發せしむ。子の時

【別將】平野將監

元弘三年金剛山、千窟城

（千窟城合戰之圖）



沿、族高直、大臣貞藤を以て之に將とし、而して宰高資監して、西、正成等を擊たしむ。正成、金剛山の千窟を相して之に城く。城、山を挾み壑を帶ぶ。周囲一里、高さ數百仞、中に五泉あり。旱と雖も涸れず、糟を造りて之に蓄ふ。養ふに黃土を以てす。雨ふれば、則屋溜を糟に引く。乃、別將をして赤坂を守らしめ、自金剛山に徙る。

三年二月、東兵三道より上る。分ちて三軍と爲し、金剛山及び吉野、赤坂を攻む。赤坂の城兵力め拒ぐ。殺傷過當なり。賊兵、其水道を絕つ。城遂に陷る。吉野、圍を受くること七日にして乃陷る。吉野、赤坂、既に陷り、關東の三軍、皆金剛山に萃る。而して西南諸道の兵、高時の徵に應ずる者も亦會す。八十萬と稱す。勢を合せて正成を攻む。正成、千餘人を以て之を拒ぐ。賊兵四面より仰ぎ攻む。呼聲天地を動かす。正成、士卒に命じて大石を投じ、隨ひて之を亂射せしむ。復、虛箭なし。軍監高資、十二吏をして死傷を記さしむ。三晝夜、筆を擱かずと云ふ。乃、諸軍に令して、復城に薄ること勿らしむ。時大に旱す。賊、火箭を以て城を射る。正成、機を以て水を注ぎ、焚くこと能はざらしむ。賊將高直議して曰く、「蕞爾たる山巔、水ある可からず。夜に乘じて出でて汗むに非ざるを得んや。前に赤坂を攻むるに水を絕ちて克つ。此の計襲ぐ可きなり」と。名越某を遣し、三千人を將る、柵して東溪を守らしむ。之を久くするに、出でゝ汲む者なし。

正成奇策を設けて敵を圖る

正成、其倦怠せるを瞰ひ、夜、兵を出し、撃ちて之を走らし、其幟を奪ひて還る。旦日、之を壁上に書てゝ呼びて曰く、「此れ名越公の贈る所なり。公の徽號あり。我れ用ゐる所なし。願くば之を奉還せん」と。名越憖恚し、族を擧げて城に薄る。城上、豫横に大木を懸けおき、敵の薄るに及びて之を發す。因りて書て「千餘人を斃す。賊、益畏憚し、戰を休め、長圍を築きて環守す。城兵之に困しむ。正成、乃藁人形數十を作り、被らすに甲冑を以てし、夜、城下に列ね、兵を其後に伏せ、曉霧に乘じて大に鬨す。賊、相告げて曰く、「城兵窮蹙して、出でて戰ふなり」と。舉軍競ひ進む。我が兵頗る矢を發ち、輒退きて城に入る。而して敵、藁人に集る。則巨石已に其頭を碎き、立どころに死するもの五百餘人。賊、敢て復城に薄らざるなり。三月、高時、使者を遣し、諸將を督促して進み攻めしむ。諸將合議し、工に命じて雲梯を造らしむ。長さ二十丈あり。壑に跨り、壁に架す。銳兵六千、緣りて城に乘らんと欲す。正成大炬を投じ、喞筒にて油を注がしめ、以て雲梯を燒く。煙焰噴起す。賊兵前後に喧騰す。梯遂に中斷して、壑に陷り焚死する者數千なり。

諸道の豪傑正成の風を聞きて起る

諸道の豪傑、正成の風を望み、官軍に應ずる者多し。護良、又大和の土寇に命じ、敵の糧道を絶つ。敵兵多く逃れ亡ぐ。敵中に新田義貞といふ者あり。護良の令を請ひ、病と稱して東に歸り、鎌倉を攻めんことを謀る。是に於て六波羅の二帥、又宇都宮公綱を遣し、千餘人を以て來り援はしむ。急に攻め、柵を拔きて鋭鋒を繫す。正成、機に應じて之を拒ぐ。敵竟に拔く能はず。

佐々木義綱

北條氏、天下に王に勤むる者多きを以て、帝の逃れ出づるを慮り、佐々木清高を戒め、益防備を嚴にす。而して清高の族、義綱、中門を守る。竊に帝を脫さんことを謀り、未だ敢て發せず。一夜、宮女、帝の旨を傳へて、酒を守兵に賜ふ。義綱、因りて白して曰く、「上、未だ之を聞かざるか。楠正成、金剛山に據りて義兵を擧ぐ。高時、百萬の兵を以て之を攻め、三たび月を閱して未だ拔く能はず。播磨、備前、伊豫の將士、並び起りて之に應ず。或は駕を迎ふるを謀り、或は京師を窺ふ。是れ皇運の將に回らんとするの秋なり。而して聞くが如くば、『高時兇懼、陰に不良を謀らんとす』と。上、宜しく急に千波港に艤し、出雲、伯耆の間に幸すべ

天皇隱岐を逃れ出で給ふ

し。臣伴り追ひて之に從はん。事必濟らんと。帝、輙く信ぜず。因りて其宮女を賜ひて、以て之を察せしむ。義綱、志益固し。帝、乃、先づ出雲に往き、其族人を誘ひ來りて迎へしむ。義綱往く。族鹽冶高貞の爲に拘留せらる。帝、其久しくして返らざるを以て、遂に意を決し、夜、僞りて、嬪御と稱し源忠顯と徒行して逃れ出で、一民家を叩きて港の在る所を問ふ。主人、帝の狀貌を熟視し、常人に非ざるを知るや、乃、帝を負ひて港に至り、諸を舟人に託す。舟人も亦感喜の色あり。忠顯、告ぐるに實を以てす。帆を揚げて南す。天明、顧るに數十艘を見る。近づけば則清高なり。舟人、帝と忠顯とを船底に伏せ、覆ふに蓑魚を以てし、其上に坐す。清高來り赴む。舟人曰く、「何をか索む」と。曰く、「先帝逃る」と。舟人曰く、「果して是の事あり。鄉に京裝なる者二人、船に乘りて港を發す」と。因りて指して曰く、「彼れに在り」と。清高之に赴く。帝遂に名和の港に達し、名和氏に依る。

名和氏系統

名和氏は、本村上氏、世伯耆の名和に居る。承久の役に名和行秋といふ者あり。孫行高と官軍に從ひ、事敗れて邑を奪はる。行高四子あり、長高、長重、長生、氏高と曰ふ。皆武幹あり。帝、名和の港に至り、忠顯を召して岸に登らしめ、途人に豪族の倚るべき者を問はしむ。答ふるに長高を以てす。忠顯、乃、其家に踵る。家方に宴す。忠顯、直に入りて詔を傳ふ。長高、未だ答へず。長重進みて曰く、「人の重ずる所は名のみ。今忝なくも帝者の自託を受く。事の成否は定めなけれども、皆以て大に名を天下に揚ぐるに足る」と。長高、乃意を決し、帝を船上山に奉ぜんことを計り、長重等五人をして甲を擐き、走りて帝を迎へしむ。御舟の傍に跪くや、帝欣然たり。長重、薦を甲背に被り、帝を負ひて山に登り、木葉に藉きて食を進む。

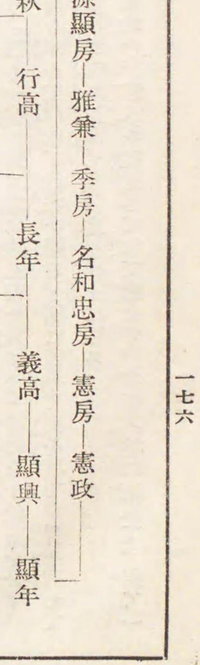
長重帝を負ふ

長高、倉粟を山に移さんと欲し、村民を募り、能く一擔を運ぶ者は錢五百を賞す。一日に五千餘石を致す。乃、盡く運び畢りて其宅を燒き、百五十騎を率ゐて、以て行在を護る。樹に因りて柵を植て、扉を列ねて垣と爲す。氏高、布旗數百を造り、近國諸豪の章識を煤印して、之を山上に張る。明日、清高、兵三千を以て、山の前後より來り攻む。旗章を望見して敢て進まず。我が兵林に蔽れて、射て一

船上山の戰

名和氏略系

○村上天皇——具平親王—師房—源顯房—雅兼—季房—名和忠房—憲房—憲政



名和氏系圖

將を殺す。敵八百騎、乃來り降る。清高、山後に在り。未だ之を知らず。兵を更め急に攻む。會日且に入らんとす。大に雷雨す。長重、長生、乘じて疾く擊ちて、賊を谷に擠し、千餘人を塵にす。清高、單騎にて逃れ去る。帝、長高に左衞門尉を授け、伯耆守を兼ねしめ、名を長年と賜ふ。子弟、官に拜する差あり。義綱高貞、千餘騎を以て至る。山陰、山陽の豪族來り屬する者、數十姓あり。而して兒島高德、備前より往く。帝、高德等をして、源忠顯に從ひて、六波羅を攻めしむ。長年の子義高、初め高時の徵に應じ、金剛山を

兵三萬を得

峯堂

（名和長年肖像）

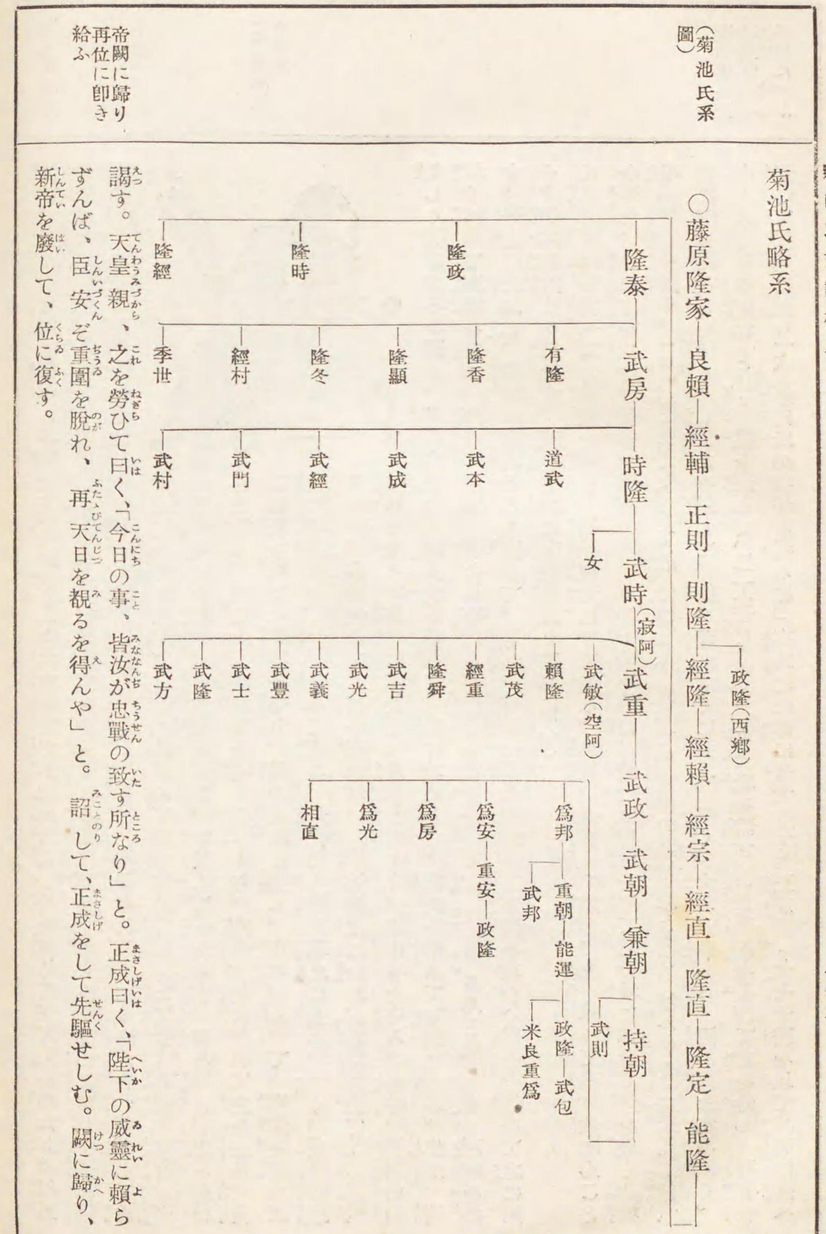
圍む。長年の官軍に應ずるを聞きて、拔け歸りて、亦忠顯に從ふ。忠顯、行兵を收めて三萬人を得たり。但馬の守護太田守延、皇子恒良を擁して來り會するに遇ふ。兵を合せて峯堂に軍す。僧良忠、男山に軍す。赤松則村、山崎に軍す。皆兵部卿護良の令を奉じて、叡山の僧徒と約し、將に力を戮せて京師に入らんとす。而して忠顯、功を專にせんと欲し、獨進みて敗走す。守延之に死す。高德、義高、留りて力戰す。忠顯、峯堂に在りて、恇怯して安からず。軍を卻け、敵を避けんと欲し、使をして高德等を召し還さしむ。高德、切に諫めて之を止め、自三百騎を以て七條橋を守り、敵の夜襲に備ふ。夜半、顧て、峯堂を望めば炬火稍熄ゆ。乃、怪みて還る。丹後の人狹野朝忠に遭ふ。曰く、「大將逃る」と。高德往きて其營を視れば、則錦幟地に仆れ、鎧裝狼藉たり。高德、錦幟を取りて朝忠に追及し、潰兵を收めて、高山寺を守る。高時、金剛山の久しく拔けざるを聞き、足利高氏、名越高家を遣して、助け攻めしむ。萬騎を率ゐて京師に至る。忠顯、則村、破りて高家を殺す。高氏の家聲、素より著はる。新帝の密旨を得て、行在を犯さんと欲し、意、兩端を持す。丹波に及ぶ比、高家の敗北せるを聞きて、乃、官軍に屬し、返りて京師を攻む。將士、競ひて之に附く。獨高德附くを欲せず。朝忠と別に若狹路より京師に入る。

五月、諸將を從へて六波羅を圍む。結城親光出でて降る。忠顯、金剛山の賊兵、圍を解きて來り救はんことを恐れ、急に之を攻む。伯耆、出雲の兵、車數十輛を聯ね、積むに屋材を以てし、城に傅けて之を火く。城兵の逃亡相踵ぐ。二帥、遂に東に走りて近江に死す。而して金剛山の圍始めて解け、捷を伯耆に報ず。天皇、閥に還らんことを議し、親之を筮して、師の蒙に之くに遇ふ。曰く、「大君、命あり。國を開き家を承く。小人は用ゐる勿れ」と。乃議を決して、二十三日、車駕、名和氏を發す。長年、劍を帶びて右を侍し、百官戎服にて播磨に至りて、新田氏の捷報を得るに、「高時已に誅に伏せり」と。正成、乃七千騎を以て兵庫に迎へ

帝伯耆を發し給ふ

正成、帝を兵庫に迎ふ

菊池氏略系



帝闕に歸り再位に卽き給ふ

謁す。天皇親、之を勞ひて曰く「今日の事、皆汝が忠戰の致す所なり」と。正成曰く「陛下の威靈に賴らずんば、臣安ぞ重圍を脫れ、再天日を覩るを得んや」と。詔して、正成をして先驅せしむ。闕に歸り、新帝を廢して、位に復す。

菊池氏系統

【是の歲】元弘三年

武時

土居、得能氏系統

土居、得能、時直を擊つ

是に於て、大に賊の餘黨を索む。詔して藤原師基を以て太宰帥と爲し、鎭西探題北條英時を討たしむ。未だ發せざるに、菊池氏、少貳氏、大友氏と並に使を馳せ、鎭西の捷を報ず。

菊池氏は、本、藤原氏なり。其先政則といふ者、元寇を防ぎて功あり。子の則隆に及びて、肥後の菊池郡を賜ひ、世襲ふ。後十餘世を武時と曰ふ。是の歲三月、武時、少貳貞經、大友貞宗と、官軍に應ぜんことを謀る。謀泄る。北條英時、太宰府に在りて、武時を召す。武時、先發せんと欲して、使をして少貳、大友と期を約せしむ。貞宗、依違して答へず。貞經も亦、京師の官軍、數利を失ふを聞きて、遂に其使を斬り、首を英時に送る。武時、大に怒りて曰く「吾れ誤れり。此奴輩と事を謀る。奴輩在らずとも、吾れ、寧ぞ戰ふ能はざらんや」と。乃百餘騎を以て發し、櫛田祠前を過ぐ。馬俄に進まず。武時曰く、「何物の牛鬼ぞ、敢て義兵を沮む」と顧みて其轡を射る。馬輙前む。前みて英時を攻む。譙門外に戰ひて之に克ち、前みて內城に逼る。英時、將に自殺せんとす。會貞經、貞宗、六千騎を以て來り救ふ。武時、乃、長子武重を遣歸し、自次子四人と進み戰ひて、之に死す。已にして貞經、貞宗、京師平ぎ、金剛山の圍解くと聞きて則懼る。議を合し、探題府を攻め陷れ、英時を殺す。長門探題府も、亦土居、得能氏の爲に攻め陷れらる。

土居、得能氏、皆河野氏、より出づ。河野と兒島とは同姓なり。世伊豫に著る。承久の時、河野通信といふ者、王事に死す。其庶子分れて兩家と爲り、土居と曰ひ、得能と曰ふ。元弘の時に及びて、土居通治、得能通言なるものあり。皆勇毅にして義を好む。是歲二月、並に兵を起して官軍に應じ、土佐を略地す。長門探題北條時直、兵艦三百を以て來り攻む。通治、通言、逆へて星岡に戰ひ、大に之を敗る。四國の兵多く來り屬す。乃、今治に纖して東し、六波羅を攻めんと欲す。金剛山の圍解け、車駕闕に歸ると聞きて、則、兵庫に往きて謁す。時直、既に二人の爲に破られて、走りて英時に歸す。英時已に死せり。則少貳、島津氏に從ひて降る。是に於て天下大に定る。而れども金剛山の潰兵、般若寺に聚る。猶數萬人あり。正成、源定平と、畿兵を率ゐて之を攻む。時春、高直、貞藤、高資、公綱等六十人、衆を率ゐて降る。皆斬に處す。獨、

建武元年中興の政事

公綱、特旨を以て罪を宥さる。

建武元年、帝、論じて戰功を賞す。正成を以て攝津、河内の守護と爲し、名和長年を因幡、伯耆の守護と爲す。正成、檢非違吏左衞門尉に任じ、特に長年と並に決斷所に直し、訟獄を聽斷す。天下をして兵を休め、農を務めしむ。武人の領邑、安堵故の如し。帝、京師の復するを以て足利氏の功と爲すや、闕に歸るの日、首として之を超擢す。是に至りて、四大國を管せしむ。尊氏猶缺望し、陰に異心を有す。帝、高時の邑を以て自奉じ、泰家の邑を以て皇子護良に賜ひ、貞直の邑を以て三位局に賜ふ。三位局は、卽嬪藤原氏なり。殊寵ありて、內謁漸く行はる。時に諸皇子皆故に復す。而して恒良は藤原氏の生む所たり。又成良、義良を生む。意、護良を害とす。尊氏、潛に與に謀を合せ、遂に之を構陷す。是時に當りて、帝、寢政に倦む。足利氏、資望獨盛にして、新田氏之に亞ぐ。此歲春、北條憲法、亂を作し、飯盛山に據る。赤橋重時、伊豫に起る。正成、憲法を討ち、土居、得能氏、重時を討ちて、纔に之を平ぐ。而して帝、游宴自如たり。益珍異を徵す。鹽谷高貞、千里の馬を獻ず。帝出でゝ之を觀、以て祥瑞と爲す。藤原藤房、諫めて曰く「天馬は平世に用ゐること毋し。近日、賞罰信なく、工役繁く興る。文臣內に諛ひ、武臣外に怨む。而して姦雄、釁を其間に窺ふ。天馬の出づる、烏ぞ亂兆に非ざるを知らんや」と。帝、色を變じて入る。藤房、驟諫むれども聽かず。遂に官を舍てゝ遁れ去る。帝、驚きて之を追はしむれども及ばず。

【四大國】武藏、遠江、常陸、下總

帝漸く政に倦む

天馬藤原藤房

建武二年

二年春、藤原公宗、北條氏の餘黨に結び、陰に大逆を謀る。名和長年等、詔を奉じて之を誅す。夏、北條時行等、亂を關東に起し、鎌倉を攻め陷る。帝、尊氏に命じ、往きて之を平げしむ。尊氏、遂に鎌倉に據りて反す。帝、震怒す。冬、遂に菊池武重等の諸將に詔して、新田義貞に從ひて東して、尊氏を伐たしむ。正成、名和長年と、京師を居守す。直義、箱根の嶮に拒ぐ。武重、時に肥後守たり。其兵を以て先登し、仰ぎ攻めて敵を卻く。北ぐるを追ひて山腹に陣す。諸軍乃纔きて進む。而して別軍、竹下を攻めて、敗れ退く。

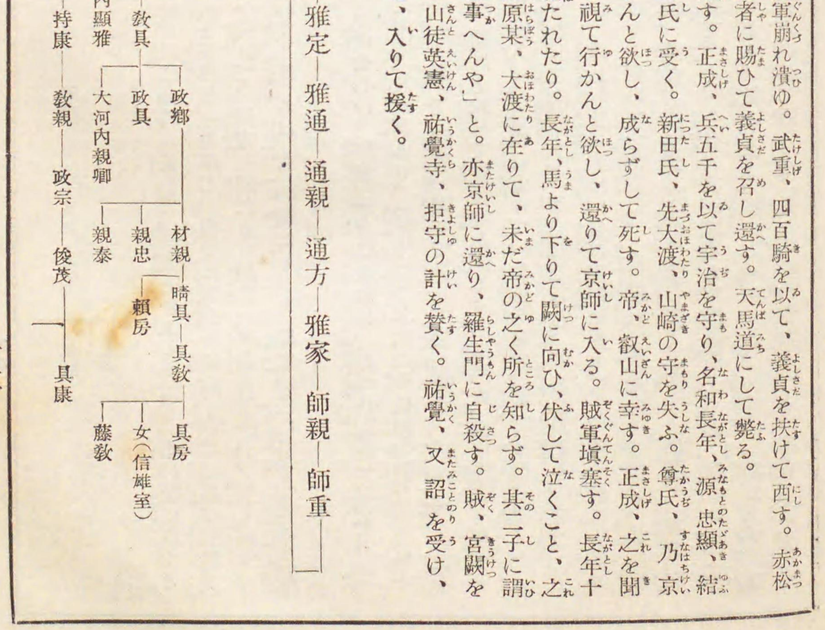
尊氏反す

延元元年尊氏、直義、京師を犯す

大友貞宗、鹽冶高貞、叛きて足利氏に降る。諸軍崩れ潰ゆ。武重、四百騎を以て、義貞を扶けて西す。赤松則村等、並び起りて尊氏に應ず。帝、天馬を使者に賜ひて義貞を召し還す。天馬道にして斃る。延元元年正月、尊氏、直義、入りて京師を犯す。正成、兵五千を以て宇治を守り、名和長年、源忠顯、結城親光と、二千を以て勢多を守り、皆制を新田氏に受く。新田氏、先大渡、山崎の守を失ふ。尊氏、乃京師に入る。結城親光、伴り降りて、尊氏を刺さんと欲し、成らずして死す。帝、叡山に幸す。正成、之を聞きて徑に行在に赴く。名和長年、一たび宮闕を視て行かんと欲し、還りて京師に入る。賊軍塡塞す。長年十七戰して大內に至れば、則、諸殿已に賊兵に毀たれたり。長年、馬より下りて闕に向ひ、伏して泣くこと、之を久くして、終に行在に赴く。信濃の人勅使河原某、大渡に在りて、未だ帝の之く所を知らず。其二子に謂て曰く「吾は亡朝の臣、何の顏ありて逆臣に事へんや」と。亦京師に還り、羅生門に自殺す。賊、宮闕を焚き、進みて園城寺に據り、以て叡山に逼る。山徒英憲、祐覺寺、拒守の計を贊く。祐覺、又詔を受け、舟七百艘を以て湖に泛べ、北畠氏の兵を迎へて、入りて援く。

(北畠氏系圖)

北畠氏略系



北畠氏系統
顯家

義貞京師を復す

尊氏と戰ふ

北畠氏、姓は源、具平親王より出づ。世名卿たり。元弘の時に及びて、顯家といふもの有り。帝の位に復するや、從三位參議を以て陸奥守に拜せらる。父親房と義良親王を奉じ、出でゝ東邊を鎭む。結城宗廣、世陸奥に居り、其子親光と先官軍に歸す。是に於て命を受けて、顯家に副たり。顯家、年甫めて十七。固く辭す。乃ち、詔して曰く、「文武岐つ可からず。貴戚、軍を掌るは古の制なり」と。顯家、任に赴きて東邊虞無し。尋いで鎭守府將軍に任ぜらる。

帝、足利尊氏を討つに及びて、顯家に詔して軍を會せしむ。顯家、鎌倉に至れば、則尊氏、業已に西せり。顯家、程を并せて之を追ふ。東北の兵、爭ひて顯家に附く、凡五萬あり。近江に至りて、六角氏賴の觀音寺の城を攻めて、之を拔く。首を斬ること五百級。遂に叡山に至る。諸將、因りて會して戰を議す。或は速に之を襲はんと欲す。正成等之を然りとす。即夜、顯家、諸將と攻めて園城寺を破る。新田義貞、遂に京師を復す。而して、夜、賊に返襲せられ、敗れて還る。尊氏復入る。是時に當りて、諸道の賊軍、悉く京師に聚る。凡數十萬人なり。而して官軍十萬に滿たず。諸將分れて之を將とし、復京師を攻む。兵各二萬可り。正成、五百騎を將ゐて、糺林に軍して、火を出雲路に縱つ。尊氏、上杉憲顯、足利高經等をして、東國の騎兵五萬を以て來り、衝きて之を擊たしむ。豫楯數百を造り、鉦にて之を聯ね、自蔽れて射しむ。賊卻く。輙、騎を縱ちて之に乘ず。賊、辟易して逃れ走る。顯家、義貞、遂に擊ちて尊氏を走らす。而して日暮る。義貞、留りて京中に陣せんと欲す。正成往きて、之に說きて曰く、「今日、我が軍克ちて獲る所少し。寡兵を以て京中に屯せば、鹵掠四散せん。盍ぞ前日の敗に懲りざる。敵をして復振はしめば、後、力を爲し難からん。我れ且く引き還り、銳を養ひて再擧し、以て敵を數百里の外に驅らん。是れ全勝の策なり」と。顯家、義貞、之を然り

泣男

尊氏敗走

尊氏西走

【七將】楠、新田、北畠顯家、結城親光、源忠顯等

【鞆濱】筑前九國悉く尊氏に歸す

【白旗城】播磨

とし、乃ち皆退きて阪本に陣す。尊氏諸軍を收めて、復京師に入る。正成、素より一卒の善く泣く者を蓄ふ。旦日、其卒に敎へ、僧數人と行ゆく原濕を物色せしむ。賊兵故を問ふ。輙泣きて曰く、「昨日の戰に七將皆歿せり。將に尸を獲て、之を葬らんとす」と。尊氏聞きて大に喜びて曰く、「彼れ戰ひ勝ちて退きしは、以有るなり」と。乃、義貞、正成の首を索め。稍肖たる者を獲て、之を梟して以て衆に示す。其夜、正成、卒數千を遣し、炬を執りて北に走り、累々として絕えざらしむ。尊氏軍望み見て、官軍其將領を喪ひて潰え走ると謂ふや、急に其兵を分ち四出して要擊す。在る者、復備を設けず。正成、諸將と兵を合せ、夜發し、昧爽、直に尊氏の軍に薄り、火を縱ちて鼓譟す。尊氏の軍大に潰えて走る。委甲野を蔽ふ。官軍甚しく追はず。賊の前なる者は、後なるものを顧み、以て追兵と爲し、往々自殺し、死亡大半なり。二月尊氏、直義、湊川に走る。官軍追ひ擊ちて豐島に戰ふ。勝敗未だ決せず。正成後れ至る。遶りて敵の後に出づ。直義、戰はずして走る。會、土居通治、得能通言、舟師を以て來り援ふ。賊の先鋒大友貞宗の兵を擊破し、復擊ちて直義を走らす。尊氏、終に赤松則村をして播磨を守らしめ、海に航して鎭西に走る。菊地武敏は、武重の弟なり。時に肥後に在り。少貳賴尙、兵を發し、尊氏を迎ふと聞きて、三千人を將ゐて之を追ふ。水木渡に至れば、賴尙已に濟る。餘衆、船を待つ。武敏擊ちて之を殲す。遂に少貳貞經を內山に攻めて之を斬る。遂に尊氏と鞆濱に戰ふ。叛き降るものあり。武敏、敗れて菊池の城に歸る。城尋いで陷る。武敏、山中に逃れ匿る。是に於て九國悉く尊氏に附く。

旗城に攻む。城固くして拔けず。義貞の兵を擧げて、之を攻むれども克たず。力を一城に竭し、顧て天下を失ふ。君盍ぞ監みざる。尊氏、已に九國を並せて且に東に上ると聞く。君宜しく兵を分ちて、城を圍みて急に舟阪を拔き、以て山陽を徇ふべし」と。義貞、乃、義助をして舟阪を攻めしむ。舟阪の賊兵險に據りて下らず。

義貞、乃ち發して、赤松則村を白旗城に攻む。城固くして拔けず。義貞の弟義助、之に說きて曰く、「嚮に楠氏金剛山に據る。北條氏天下の兵を並せて且に東に上ると聞く。君宜しく兵を分ちて、城を圍みて急に舟阪を拔き、以て山陽を徇ふべし」と。義貞、乃、義助をして舟阪を攻めしむ。舟阪の賊兵險に據りて下らず。

兒島高德

初め尊氏、闕を犯すとき、山陽みな之に應ず。獨、兒島高德、孤軍を以て福山城を攻む。克たず。其兵連に叛く。乃三石山に逃る。義助の舟阪を攻むるを聞くに及びて、則喜び、間使を遣して告げて曰く、「三石の南に間道あり、以て舟阪の背に出づべし。吾れ兵を熊山に起し、賊をして兵を分たしめん。公則一軍を間道よりし、夾みて之を攻めば、必舟阪を拔かん。舟阪拔けば、則西國服せざる者なからん」と。義助、大に喜び、與に期を約す。期に先だつこと一夜、高德、父範長と熊山に上る。倉卒にして族人を聚むるに及ばず。兵僅に二百なり。天明、舟阪の賊、果して三千人を分ち、七道より來り攻む。高德防戰して重傷す。終に奮擊して賊兵を走らす。而して義助、軍を潛めて賊の後に出て、舟阪を拔く。一將を遣し、福山に據らしむ。

義助舟阪を拔く

赤松則村、使を馳せて尊氏に告げて曰く、「白旗城陷らば、則公は衆ありと雖、之を用ゐる所なからん」と。尊氏、乃ち大擧して東に上り、水陸竝び進む。福山城陷り、義助兵を引きて退く。菊池武重、之に殿す。賊の舟師、陸に上りて、西川尻に陣す。高德之を聞き、義助に合し、山を踰えて東せんと欲するに創劇し。範長之を寺僧に託し、八十餘人を以て東走す。曾、義貞已に白旗の圍を釋く。赤松氏の兵三百騎、範長の過ぐるを見て呼びて曰く、「敗卒、盍ぞ甲を釋きて降らざる」と。範長笑ひて曰く、「鄕に尊氏百方我を招けども、我れ輒其書を毀りて火に投ず。今曷ぞ汝が輩に降らんや」と。其陣を潰して出づ。賊傳呼す、「敗卒過ぐ」と。士兵群り起る。範長、悉く其兵を亡ひ、餘る所の者六人なり。曰く、「悔ゆらくは、我れ族を擧げ來らざるを」と。乃、双に伏して死す。

兒島範長

賊軍、勝に乘じて進む。義貞、兵庫に軍し、書を飛ばして急を告ぐ。朝廷震動す。時に北畠顯家、已に鎭に歸り、京師兵寡し。帝、正成に命じて、往きて義貞を援けしむ。正成、奏して曰く、「尊氏、新に九國を擧げて來る。其鋒甚銳し。我れ疲兵を以て格鬪す。他に奇道無くば、其敗れんこと必せり。今計を爲さんに、陛下、復叡山に幸し、義貞を召し還し、賊を縱ちて京師に入らしめ、而して臣河內に歸りて、其糧道を絕たば則賊兵は日に散じ、我が兵は日に聚らん。是に於て夾みて之を攻めば、一戰にして破る可きなり。義貞の計も

正成議を上る

藤原清忠正成の議を排す

蓋亦此に出でん。顧ふに人言を慮るのみ。戰道は一にあらず。要は勝に歸す。願くば朝廷再之を計れ」と。諸公卿皆之を然りとす。獨、參議藤原清忠、可かずして曰く、「賊衆盛なりと雖、前役の如きに過ぎず。王師には天命あり。宜しく之を外に防ぐべきなり」と。帝之に從ふ。正成退きて、其子弟に謂て曰く、「事已に此に至る。何ぞ必しも抗議せん」と。五月十六日、弟正季、子正行等と闕を辭して西し、櫻井驛に至る。正行時に年十一なり。正成、之を河內に遣し歸し、之を誡めて曰く、「汝、幼しと雖も已に十歲を過ぐ。猶能く吾が言を記せよ。今日の役は天下安危の決する所、意ふに吾れ復汝を見ざらん。汝、吾れ已に戰死すと聞かば、則天下盡く足利氏に歸すと知る可し。愼みて禍福を計較し、利に嚮ひ義を忘れ、以て乃父の忠を廢つるなかれ。苟も我が族隷をして一人の存する者有らしめば、則率ゐて以て金剛山の舊址を守り、身を以て國に殉ひ、死有りて他なかれ。汝の我に報ずる所以、此れより大なるは莫し」と。因りて帝の嘗て賜ひし所の寶刀を以て、之を授けて訣別す。正行從ひて共に死せんと請ふ。正成之を叱して起つ。正行涕を揮ひて去る。

櫻井驛訣別

（足利兄弟水陸より攻上る圖）

正成兵庫に至る

正成、乃兵庫に至りて、義貞を慰め勉め、訣飲すること終日。是の時に當りて、尊氏は水軍を將ゐ、直義は陸軍を將ゐたり。陸軍、五十萬と稱す。正成、手兵七百を率ゐ、

尊氏全軍上陸す

正成走りて民舍に入る

正成正季刺して死す

（楠正成之墓）

湊川に陣して以て之に當る。義貞、三萬騎を以て和田崎に陣し、以て水軍を扞ぐ。水軍の先鋒過ぎて東す。義貞、軍を拔きて之に循ふ。而して尊氏の全軍已に和田崎に上る。正成、顧て正季に謂て曰く「我れ腹背に敵を受く。遁る可からず。先づ前なる者を破りて、而る後背なる者に接せば如何」と。是に於て兄弟並に陸軍に突き入る。七離七遭して、直義を獲へんと欲す。直義、馬傷きて墮つ。我が兵及ぶに垂とす。一敵將あり、遮り鬪ひて之を逸せしむ。尊氏も亦兵を分ちて來り援け、我が軍の後を包む。正成兄弟、馬を回し之に當る。血戰十六合、盡く其騎を亡ふ。餘る所七十三騎なり。猶以て圍を潰すべし。而して正成、心に生を欲せず。乃走りて湊川の北の民舍に入り、坐して鎧を釋く。身に十一創を被る。顧て正季に謂て曰く「死して何をか爲さん」と。曰く「願くば七たび人間に生れて以て、國賊を殺さん」と。正成、欣然として曰く「是れ吾が心を獲たり」と。耦刺して死す。正成、年四十三。宗族十六人、從士五十四人、悉く之に死す。菊池武重は義貞の軍に在り。弟武吉をして來りて湊川の戰狀を視しむ。正成、且に死するに會ひて、去るに忍びず、亦之に死す。義貞敗れ退き、尊氏京師に入る。正成の首を河內に送る。一家聚り哭す。正行起ちて室に入る。其母尾して之を闚へば、則父の授けし所の刀を執りて、將に自殺せんとす。母徑に入り、刀を奪ひ泣きて曰く「汝、何ぞ惑へる。乃父の汝を遣歸せしは、豈汝をして自殺せしめんや。汝遺命を啣み、歸り來りて我に告げぬ。而して汝、先之を忘れたるか。惡ぞ能く王子に任へんや」と。正行大に悟る。是より國賊を討ち、父の讎を復するを以て志と爲す。常に兒童と嬉戲するに、馳逐の狀を爲して「足利を追ふ」と曰ひ、首を斬る狀を爲して「尊氏の元を獲たり」と曰ふ。楠氏の族黨多く湊川に死せり。而れども河內、紀伊の間、猶養故の存する者あり。皆正行を戴かんと思へり。

長年戰死す

義貞、皇太子皇子を奉じて北國に行く

金崎城陷る

光明天皇

後醍醐天皇吉野に入る

【穴生】大和賀名生

正行吉野行宮

征西將軍

【靈山】陸奥

是時に當りて、天子、賊を叡山に避く。名和、菊池、土居、得能氏、みな義貞に從ひて扞禦し、源忠顯戰歿す。官軍、遂に出でゝ京師を攻む。路人、名和長年を指して曰く「正成、忠顯等、既に死すれども獨此人あり」と。戰ふに及びて大に敗れ、長年、退きて大宮巷に至り、自後門を閉ぢ、二百人と力戰して死す。冬、尊氏伴り降りて、帝の闕に還らんことを請ふ。菊池武重等之に從ふ。皇子宗良は遠江に走り、懷良は大和に走る。義貞、詔を以て、皇太子恒良及び尊良親王を奉じて北國に之く。土居通治、得能通言等、之に從ふ。通言、族の通繩と殿す。大雪に會ひ、鹽津に至り、迷ひて道を失ふ。適賊兵に値ふ。將士凍飢して、兵を操る能はず。三百人みな刀を地に植て、之に伏し、自貫きて死す。通治、諸將と金崎城を守る。城陷り、力戰して自殺す。尊良薨ず。太子虜へられて京師に入る。帝の闕に還りしとき、尊氏已に新帝の弟を擁立す。是を北朝の光明帝と爲す。帝に神器を傳へんことを請ふ。帝聽さず。尊氏、帝を花山院に囚し、從行の者、僧祐覺等を殺し、其餘を拘執す。獨り三條景繁侍するを得たり。景繁、潛に計を進め、逃れて大和に幸せしむ。帝、夜、婦人の衣を服して、壞墻より出で、扶けられて馬に上る。景繁、神器を荷ひて從ふ。夜、方に黑し。赤電の路を照すに逢ふ。曉に及びて穴生に達す。景繁を遣して吉野の僧宗信に諭す。宗信は嘗て將軍護良を助けし者なり。是に於て、衆に先だちて來り迎ふ。正行聞きて大に喜び、從弟の和田正朝等と馳せて之に赴き、駕を護りて吉野に入る。河內、紀伊の將士相踵いで來り衞り、官軍復振ふ。帝、正成の王事に死せしことを思ひ、正三位左近衞中將を追贈し、正行を四位下に叙し、帶刀と爲す。遂に父の官を襲ひ、檢非違使左衞門尉に任じ、河內守を兼ぬ。是に於て行宮を吉野に建てゝ四方に號令す。是より先、菊池武重、帝に從ひて拘へられしが、守者の懈るを候ひ、逃れ歸りて菊池に據る。帝、因りて皇子懷良を拜して征西將軍と爲し、菊池に赴かしむ。大館氏明も亦逃れて伊豫に如く。土居通治の子通鄕、得能通言の子彈正、迎へて兵を起す。北畠顯家の弟顯信も、亦兵を伊勢に起す。而して顯家、國內の叛く者を討ちて靈山に據る。明年秋、顯家、入りて行在を援けんと欲し、結城宗廣等の兵を得て義良親王を奉じて、白河

三年
青野原

【兩親王】義良、宗良
顯家戰死

（後醍醐天皇御影）

高德の議

（後醍醐天皇御宸筆）

關に軍す。兵來り屬する者數萬人。進みて尊氏の子義詮と利根川に相拒ぐ。齋藤實永、流を亂して先づ渡る。全軍之に繼ぐ。水西岸に激す。賊兵漂ひ溺れて敗走す。顯家北ぐるを追ひて、義詮を鎌倉に攻めて、之を走らす。三年春、宗良親王と兵を合せて、偕に京師に赴く。賊兵大に起りて後を擁す。顯家、回りて青野原に戰ひて之を敗る。尊氏、高師泰を遣し、來り迎ふと聞き、乃轉じて伊勢に出づ。師泰尾擊す。顯家、回りて雲津川に戰ひて之を破り、南都に至る。結城宗廣曰く「敵を行宮に避け、賊を王城に攘ふに若かず」と。顯家之に從ふ。賊兵の逆へ擊つに逢ひて、顯家敗走す。乃兩親王をして行宮に赴かしめ、自、敗兵を收め、安倍野に軍す。五月、高師直來り襲ふ。顯家二十餘騎と、圍を衝きて死す。名和義高之に死す。宗廣、走りて吉野に歸る。師直、遂に顯信を男山に圍む。顯信、善く拒ぎ、出でゝ擊つ。利少し。賊、火を縱ちて城に登る。城兵擊ちて之を走らす。已にして糧竭き、圍を潰して河內に走る。帝、初め廷臣を遣し、兵を將ゐて顯信を救はしむ。又北國の將士に詔して、之を援けしむ。

義貞、驟に赴き、援けんと欲す。兒島高德、從ひて軍中に在り。說きて曰く、「前日の敗は、賊、我糧道を絕ちしを以てなり。今數千人を遣し、叡山に據りて糧を北陸に取り、時に出でゝ京師を援すに若くはなし。是れ根を深くし、蔕を固くするの策なり。請ふ、書を山徒に貽れ」と。義貞之に從ふ。山徒之を肯ふ。義貞、義助を遣し之に赴かしむ。男山の火を望み、逡巡して去る。尋いで義貞戰死す。

結城宗廣、顯家の餘威未だ盡きざるに及びて、東邊の兵を收めんと請ふ。帝、

【天龍洋】遠州灘
四年

後村上天皇興國元年

細川頼春四國を攻む

高師冬北畠を攻む

後醍醐天皇崩ず

宗良親王をして先づ發せしめ、遠江に至り、之を待たしむ。遂に顯信を以て兄の官職を襲はしむ。親房及び宗廣と、義良親王を奉じ、海路より任に赴かしむ。天龍洋にて颶に遇ひ、舟四散す。親房は常陸に抵り、宗廣は安濃津に至り、顯信と義良親王とは篠島に抵る。宗廣病みて死す。四年、三月、顯信、親王を奉じて吉野に歸る。是より先、皇太子及び成良親王、尊氏に鴆弑せらる。乃義良を立てゝ皇太子と爲す。八月、帝疾を獲て、大漸す。乃遺詔して曰く、「朕、賊を滅し、天下を平げざるを憾む。骨を此に埋むと雖、魂魄は常に北闕を望まん。後人、其れ朕が志を體し、力を竭して賊を討て、然らざる者は、吾が子孫に非ず。吾が臣屬に非ず」と。劍を按じて崩ず。

帝、既に崩じて、群臣氣沮し、逃れ散ぜんと欲す。僧宗信、力言して、之を止む。已にして正行、正朝と、兵二千を率ゐて衞る。衆情大に安ず。是に於て、相與に俱に太子を奉じ、神器を拜して、位に卽かしむ。是を後村上天皇と爲す。先帝の遺詔を四方に頒つ。興國元年春、土居道鄕、得能彈正等、請ひて一將帥を得んと奏す。會新田義助、戰ひ敗れて、兒島高德等と來りて吉野に詣る。因りて義助に詔して伊豫に赴かしむ。幾何もなくして病みて死す。高德等、逃れて備前に歸る。五月、賊將細川頼春、來りて河江を攻む。通鄕、彈正、金谷經氏を推して將と爲し、舟師赴き救ふ。賊に海に値ふ。戰利あらず。轉じて鞆城を攻め取り、之に據りて賊を拒ぐこと十餘日。頼春、已に河江を陷れ、將に世田を攻めんとすと聞き、經氏に勸めて之を救はしむ。死士三百を選び、凶日を選びて發す。賊七千と千町原に戰ひて盡く其卒を亡ふ。經氏等十七騎と、圍を潰して備後に走る。是より西南の官軍振はず。是歲、北畠顯信は白河に居り、親房は小田に居る。賊將高師冬、大兵を以て來り攻む。親房、援を結城親朝に請ふ。親朝は宗廣の子なり。宗廣死するに臨みて、賊を討たんことを遺言す。而るに親朝、欵を尊氏に送る。故を以て、輙く援けず。數月にして城將出でて降る。親房、走りて關城を保つ。親房の從子顯時は大寶城を保つ。賊二城の間に陣す。父子、數出でて力戰す。而れども城且に陷らんとす。親房、間使して顯信に告げしめて曰く、「親朝の子弟を率ゐて來り救へ」と。親朝、之

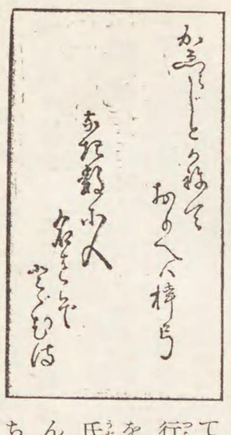
四年親房吉野に入る

を擁して遣らず。四年春、親房、手書して切に諭せども、親朝聽かず。遂に賊に降る。親房走りて吉野に歸る。是より東北の官軍振はず。顯信留りて陸奥に居る。是に於て、四方勤王の士、所在耗散す。而して足利氏の勢威、天下に擅なり。

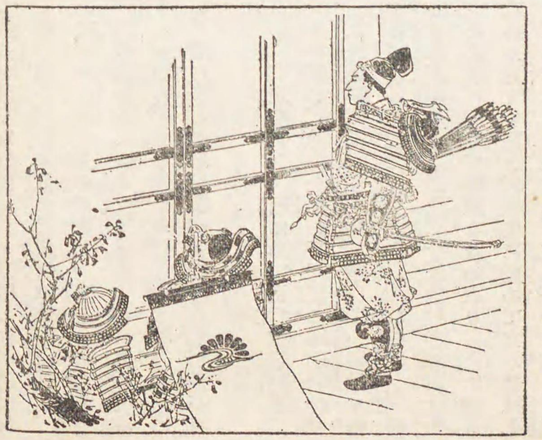
正行金剛山に在り正平二年

正行、金剛山に在りて、漸く義故を保聚す。時に兵を攝津に出し、火を縱ちて賊を挑む。正平二年秋、尊氏、細川顯氏をして三千騎に將として來り攻めしむ。未だ金剛山に至らざる七里にして、止り舍す。正行の旦に箭尾城を攻めんとするを聞くや、其山を離るゝを俟ちて其後を絶たんと欲す。正行、諜して之を知り、七百人を以て、行ゆく聚落を火き、箭尾に向ふ爲して、還りて譽田林に伏す。敵、火の起るを望み、輙山下に趨き、隊を亂して疾く馳せて林を過ぐ。伏の起るに遇ひ、大に駭きて敗走す。退きて天王寺を守る。山名時氏、六千騎を以て來り援け、退きて住吉に軍す。正行曰く「先づ時氏を破らば、則顯氏戰はずして走らん」と。兵二千を分ちて五隊と爲し、進みて住吉に向ふ。時氏、兵を分ちて之に當る。正行、北軍に塵起るを視て曰く「敵四處に陣し、而して衆、我に倍す。我、兵を分つ可からざるなり」と。乃復、五隊を合せて一と爲し、疾く行きて時氏の麾下を擊つ。時氏創を被り、走りて顯

住吉合戰



（正行如意輪堂に辭世を記す圖とその詠）



正行吉野の行宮に詣る

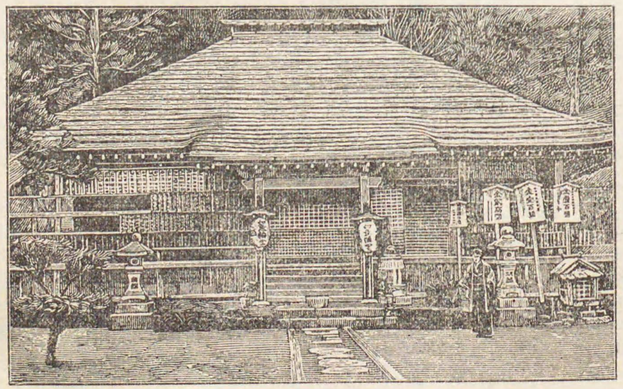
家に歸す。顯家の軍亂れ走りて渡部を過ぐぎて、溺るゝ者無數なり。京畿震駭す。正行、溺卒五百人を援ひ、衣甲を與へ、禮して之を遣る。留り仕へんと願ふ者多し。

正行、遂に進みて京師に逼る。尊氏大に懼れ、乃二十餘州の兵を發し、高師直を以て諸將帥を統べ、以て正行を擊たしむ。正行、弟の正時と、諸宗族を率ゐて行宮に詣り、中納言藤原資隆に因りて、上言して曰く「先臣正成、嘗て微力を以て强賊を挫き、先帝の宸憂を安じぬ。天下再亂れ、逆賊四襲するに及びて、遂に命を湊川に致しき。臣、時に十一。命じて河内に歸し、囑するに餘燼を收合し、國讎を報復せしめんことを以てす。臣、年已に壯なり。而れども稟性羸弱なり。常に念ふ、今に及びて力戰せず、待つ有るの身を以て、虞無きの疾に罹ば、上は不忠の臣と爲り、下は不孝の子と爲らんと。而るに今、賊の渠帥大擧して來り犯す。是れ眞に臣の命を効す秋なり。臣、彼の首を獲るに非ざれば、則臣の首を彼に授けん。臣の生死、今日に決せり。切に希ふ。一たび天顏を拜して行くことを得ん」と。隆資入りて奏す。帝簾を揭げて將士を臨視し、正行を前ましめて之を勞ひて曰く、「曩日、再捷ちて大に賊勢を殺ぎ、甚朕が心を慰む。朕、深く汝が世忠を嘉す。今、賊、銳を悉して來る。眞に安危の決なり。然りと雖、其の進退は宜しきに從ふを貴ぶ。朕、汝を以て股肱と爲す。汝、其れ自愛せよ」と。正行俯伏し、泣を垂れて出づ。後醍醐の廟に辭訣し、族黨百四十三人の姓名を廟壁に題し、而して後、途に上る。帝、隆資をして之を援けしむ。

（如意輪堂の圖）

正行天顏を拜す

【廟壁】如意輪堂



四條畷の合戰

明年正月、北軍四條畷に至り、分ちて五隊と爲り、四隊前に在り、左右相向ふ。而して師直の中軍、遙に其後に居る。兵、凡八萬騎なり。正行、隆資をして賊の前軍を緩めしめて、自三千騎に將とし、直に其中軍を指す。賊の前隊馳せて之を遮る。正行、先鋒を以て擊ち破りて過ぐ。賊隊又至り、我が後軍と戰ふ。我が後軍終に敗走す。正行顧ず。三百騎を以て直に前む。賊將細川清氏、仁木頼章等、更進みて遮り鬪ふ。正行、悉く之を破る。乃、其騎を聚むるに、馬皆重傷せり。乃、馬を舍て、隴に踞して餉す。賊衆環り視て、敢て迫らず。其走路を開きて皆中軍に合す。正行餉し畢り、起ちて衆に謂ひて曰く、「必師直と死を決せん」と。進みて其中堅を衝く。我が兵殊死して戰ふ。一以て百に當らざる無し。賊軍披靡す。正行、進みて師直に逼る。師直の臣僞りて、師直と稱して死す。正行大に喜び、首を空に抛ちて、手もて承くること三たび。軍士其實を告ぐる者あり。正行頭を地に投じて蹴り、且罵りて曰く、「咦、汝も亦無雙の國賊なり」と。已にして曰く、「其勇嘉す可きなり」と。自、袖を斷ちて首を裹み、隴上に置き、復進みて師直を索む。其幟を望み見て、之を追はんと欲す。正朝曰く、「彼は騎、我は歩、及ぶ可からず。伴り走りて之を誘ふに若かず」と。乃、殘兵五十餘人と楯を負ひて以て北ぐ。師直背て追はず。其裨將をして、數百騎を以て之を尾擊せしむ。正行大に呼びて返り戰ふ。走るを追ひ、復師直に逼る。相去る數歩なれども、我が兵晨より晡に至るまで三十餘合、力索きて能く起つなし。正行、目を師直に注ぎ、衆を勉めて進ましむ。敵連に之を射る。正行、身に箭を被ること蝟の如し。乃、呼びて曰く、「已みなんか。賊の爲に獲らるゝ勿れ」と。正時と相刺して、北に向ひて斃る。年二十二。餘兵皆自刎して駢び斃る。

必す師直と死を決せん

和田賢秀は、正頼の弟なり。獨、敵卒に混じて師直を伺擊す。楠氏の卒湯淺と云ふ者、降りて賊軍に在り。賢秀を識見し、後より之を斬る。賢秀眼を瞋して湯淺を視る。湯淺惧れ、後、疾を獲て死すと云ふ。正朝還りて狀を奏せんと欲す。一賊あり、呼びて曰く、「獨亡ぐるに忍びんや」と。正朝笑ひて之に返す。賊輙走る。此の如きこと數しして、賊數騎至る。正朝遂に死す。是に於て百四十三人悉く之に死す。賊軍進みて

四年

行宮を犯す。帝逃れて穴生に入る。賊火を縱ちて之を索む。正行の弟左衞門尉正儀、兵を石川に出し、高師泰と相持す。師直、則、敢て深く入らず。兵を引きて去る。四年、畠山國清、來りて師泰に代る。正儀、益堅守す。

五年

五年、足利直義、尊氏と隙あり。乃來り降る。朝議して、納れて大將と爲す。國清之に附く。六年、正儀に詔して、直義を助け、尊氏を京師に擊ちて之を走らす。已にして直義叛き去りて、遂に關東に走る。尊氏、往きて之を擊たんと欲す。而れども楠氏の後を窺ふを恐るゝや、則子の義詮をして伴り降らしめて、帝の闕に歸るを請ふ。帝其情を知り、亦伴りて之を許す。尊氏乃東す。七年正月、正儀、族の和田正忠等と、兵七千を將ゐて乘輿を奉じ、男山に軍す。兒島高德、時に髮を削り、來りて吉野に在り。密詔を奉じて、往きて北の諸將を促す。宗良親王を拜して征東將軍と爲し、並に來り援けしむ。北畠顯能は顯信の弟なり。伊勢守たり。兵數千を擧げて先來り援ひ、鳥羽より入る。正儀、正忠、五千人を將ゐて、夜、桂川を涉りて大宮に至る。黎明、賊將、細川顯氏來り迎ふ。我が兵圍み擊ちて、其從士の七郎を斬る。細川頼春、繼ぎ至りて巷戰す。正儀、楯を接ぎて梯と爲し、屋に升りて下射す。賊兵卻く。騎を縱ちて、之に乘ず。頼春、馬驚きて墜つ。正忠の兵、槍もて之を刺殺す。義詮遂に近江に走る。帝、人をして、北朝の三帝を取りて、軍中に置かしむ。是の時に當りて、將軍宗良、新田氏の族を率ゐ、尊氏を武藏に擊つ。利あらず。義詮、兵三萬を得て、返りて東山に陣す。顯能三たび其陣を退く。賊軍、進みて男山を攻む。帝、正儀、正忠等を召して拒ぎ戰はしむ。正忠、年十六なり。入りて奏して曰く、「建武以來、臣の族類、大半此賊に殺されたり。今日の戰、公は、國賊を討ち、私は家仇を復するなり。其一將を斬らずんば、復還り謁せず」と。正儀と兵三千を合して、荒坂に據る。細川清氏、土岐康貞、六千騎を以て仰ぎ攻む。康貞驍名あり。衆に先だちて進む。正忠、薙刀を揮ひて之を斬る。乃還り謁す。遂に正儀と更科に拒ぎて、利あらず。左兵衞督藤原康長、夜、賊の營を襲ひ敗る。而れども賊の男山を圍むこと益密なり。正儀、正忠、詔を受けて河内に還り、兵を聚めて夾

七年

七年正儀

征東將軍

正忠

隆資以下三百餘人死す

み攻めんとす。會正忠、疾作りて暴に卒す。正儀未だ發せざるに、賊、急に行在を犯す。帝、甲を擐し、馬に上り、圍を潰して南に走る。賊兵之を追ふこと甚急なり。藤原隆資以下三百餘人、之に死す。箭、御鎧に及ぶ。藤原康長、力戰して吉野に達するを得たり。神鏡を路に委す。名和長生、之を收めて返る。時に將軍宗良及び、新田、逃井氏は東北より、土居、得能氏は西南より、並に入りて援ふ。男山陷るを聞きて皆返る。

八年

是の役に賊將山名時氏、功ありて賞なし。怒りて來り降る。足利直冬もまた降りて、京師を攻めんと請ふ。詔して諸將をして助け攻めしむ。十一月、正儀等、賊將佐々木秀綱を渡部に擊ちて之を敗る。八年六月、諸軍京師を攻む。正儀、弓手五百を以て戰を挑む。時氏之に繼ぎ、遂に擊ちて義詮を走らす。時氏等、兵寡きを以て引きて還る。十年、直冬、時氏、復兵を發して尊氏を擊ちて、之を走らす。正儀、時氏、義詮と

十年

播磨に戰ひ、糧盡きて引きて還る。

菊池武光十三年

是の歲、將軍宗良、仁科、足助の諸族と、兵を起せども應ずる者少く、北畠顯信、結城氏の爲に攻められ、走りて吉野に歸る。遂に西に走り、菊池武光に依る。武光も亦武重の弟なり。武重死するに及びて、嗣ぎて其の衆を統べ、屢賊黨大友、少貳氏を討つ。十三年、武光、一色直氏を筑前に討ちて、大に之に克つ。大友氏時、少貳頼尙等、皆武光に降る。時に尊氏既に死す。義詮兵を遣し、氏時、頼尙を助けて武光を擊つ。

十四年

武光、方に畠山國久を日向に討つ。氏時高崎に據りて、其歸途を絶つ。武光顧ず。進みて國久を攻めて之を走らし、乃還る。氏時、敢て要擊す。十四年、頼尙、兵六萬を以て來り攻む。武光、八千人を發し、將軍懷良を奉じて筑後河を夾みて陣す。武光、夜、子の武政等を遣し、兵を潛めて河水に因り、軍聲を亂して、以て之を襲ひ、頼尙の二子を獲たり。因りて大に戰ふ。懷良創を被り、北畠顯信等之に死す。武光、身、士卒に先だち馬傷き冑裂く。一敵將を斬り、其馬と冑とを奪ひ、復進み、竟に大に之を破る。西南の官軍復振ふ。賊將畠山國清、大擧して楠氏を滅し、以て官軍の根本を奪はんことを建議す。正儀、和泉守和田正武と行宮に詣り、奏して曰く、「聞く、國清、關東の軍を擧げ、已

筑後河の戰

正儀、正武等の奏言

に京師に至りしと。而れども臣其能く爲す莫きを知れり。兵道に三あり。曰く、天時、地利、人和なり。明歲、大將軍星、西に在り。而して彼れ東より來る。天の時に違ふなり。我れ居る所山を負ひ、河を帶ぶ。形勢深阻なり。千窟の圍は論ずるまでも毋し。爾後、敵五たび來りて、皆敗る。地の利に違ふなり。國清、公を借り、私を營み、等儕の嫉む所たり。人の和に違ふなり。三の者皆違ふ。百萬ありと雖、何ぞ能く爲さん。請ふ、徒りて金剛山に御し給へ。臣等、石川に拒ぎ、別將をして龍門に出でしめ、時に輕兵を出して、出沒散合し、敵をして我が在る所を知らざらしめば、東兵慓悍なるも氣屈して退かん。退かば即之を追はん。必大に克たん」と。帝、之に從ふ。明年春、正儀等、平岩、箭尾、龍泉の三城を修め、樓堞を益し、形勢を張りて、自、赤城に居る。義詮、國清、兵三十萬を合せて入りて犯す。箇山に軍して以て楠氏に逼る。一軍を以て龍門より入る。大納言藤原隆俊、擊ちて之に克つ。賊、兵を更へて來り攻む。隆俊大に敗走す。帝、將軍興良を遣して之を援ふ。興良叛きて義詮に應じ、行宮を燒きて銀嵩に據る。帝、前關白藤原師基をして討たしめて之を走らす。龍泉の城將、疑兵を措きて退く。賊敢て迫らず。五十餘日に至りて、乃、攻めて之を取り、遂に攻めて平岩、箭尾を陷る。軍を合せて赤坂を圍む。正儀、退きて金剛山を守らんと欲す。正武曰く、「子、鼠を知るか。人を見れば則竄る。世將に笑ひて、南人、天下に抗して、鼠鬪するのみと曰はんとす。何ぞ一戰して以て賊鋒を挫かざる。然して後退く、未だ晚からずと爲すなり」と。乃、三百人を選び、約するに暗號を以てし、夜出でゝ結城氏の營を斫りて大に戰ふ。克たずして入る。衆をして號を唱へて坐作せしむ。四敵卒ありて之に雜る。捕へて之を斬る。乃、正儀と退きて金剛山に入る。賊軍引きて還る。正儀、正武、出でゝ渡部橋を絶ち、譽田城を攻む。國清、復來り攻む。又退きて山に入る。會國清、仁木義長と相惡しく、賊中大に騷ぐ。我が兵爭ひ起る。國清東に歸る。正儀、水速城を攻めて之を拔く。官軍勝に乘じて、速に諸城を下す。義長來り降る。帝、北、住吉に幸す。征東將軍宗良に詔して、兵を發して入りて援けしむ。岐蘇早く雪ふるを以て果さず。

【銀嵩】大和

結城氏の營を斫りて戰ふ

十五年

帝正儀に諮詢せらる

行宮の君臣古都を思ふ

十五年、征西將軍懐良、菊池武光と、兵三千を以て宰府に出づ。少貳頼尚、大友氏時、松浦黨と謀りて、武光を夾みて攻む。武光、反間を縱ち、因りて松浦の軍を襲ひて敗る。頼尚等もまた走る。去歳の役、賊將赤松光範功あり。而るに佐々木道譽之を譖して、其攝津の守護を奪ふ。國人憤怨す。正儀、正武、伺ひて之を知る。九月、兵五百を以て天神林に軍す。佐々木秀詮、弟氏詮と千餘騎を以て、神崎橋を渡る。正儀、人をして行呼ばしめて曰く「南軍、西より來れり」と。秀詮之を聞きて、馬を回して西に嚮ふ。田を經りて軍列して行く。正儀、輕卒三百を遣し、夾みて之を射る。賊兵、徑を爭ひ還らんと欲す。正儀、正武、薄り擊ちて之を走らし、秀詮、氏詮を斬る。水に溺るゝ者二百餘人。正儀、之を援け衣を給して遣歸す。山名清氏、亦道譽と惡し。遂に來り降り、奏して曰く、「義詮の兵、西は山名時氏を拒ぎ、東は仁木義長を拒ぐ。臣請ふ、虛に乘じて京師を復せん」と。帝之を正儀に諮る。正儀、對へて曰く、「王師嘗て京師を攻む。五たび得て五たび失ひぬ。今苟も之を得んと欲せば、臣一人の力にて辨ず可し。何ぞ清氏を假ることを爲さん。獨、復、之を失はんことを病ふるのみ」と。行宮の君臣、皆故都を戀ふ。遂に正儀をして、清氏と共に京師を攻めしむ。義詮、戰はずして走る。未だ幾ならずして、義長敗れ、時氏退く。而して義詮の軍振ひ、行宮を犯して、我が軍の後を絶たんと欲す。我が軍、京師に留ること二十六日にして還る。清氏、讃岐に戰死す。四國悉く叛く。正儀、正武、議して曰く、「近日の勢、坐視す可からず。須く一戰して、以て諸國の官軍の氣を振はすべきなり」と。八月、騎八百、土兵數千を以て、神崎、株瀨の二處に軍す。賊、兵を分ち、水を阻て〻之を拒ぐ。正儀等、篝火を其營に張りて、兵を潛めて三國渡を涉り、繞りて賊の背に出づ。賊、北軍來り援ふと謂へり。天明に顧て其旗を視れば、皆菊水なり。菊水は楠氏の號なり。而して大に驚き潰え去る。正儀、正武、進みて赤松氏の一城を拔き兵庫に火して還る。

是に於て、北畠顯能、仁木義長と並に伊勢を略し、菊池武光、筑紫を略す。義詮、足利氏經を遣し、鎭西探題に充つ。武光、弟武義、族重經をして兵を將ゐて、之を逆へ擊たしむ。武義傷き走る。重經更に進みて

十九年

武光卒す

後村上天皇崩ず

長慶天皇建德二年

文中二年

後龜山天皇

三年

征東將軍吉野に歸る

征西將軍九州の一隅を守る

天授四年

弘和二年

元中九年

金剛山の城遂に陷る

南北朝和睦す

少貳頼貧を斬る。武光繼ぎ至りて豐後の府に軍し、擊ちて氏經を走らす。十九年、大内弘世、周防、長門を以て、叛きて義詮に降り、厚東氏の邑を幷す。厚東、怒りて武光に降り、弘世と豐後に戰ひて之を走らす。已にして武光病みて卒す。子武政、肥後守を襲ふ。山名時氏、仁木義長も、亦義詮に降る。官軍振はず。二十三年、天皇崩ず。皇太子寛成、位に卽く。是を長慶天皇と爲す。天皇の建德二年、賊將細川頼之、大擧して入りて寇す。和田正武、楠氏の族を率ゐて、諸城を堅守す。賊軍引きて還る。文中二年、細川氏春、復入りて寇す。大納言藤原隆俊之に死す。天皇、位を皇太弟熙成に讓る。是を後龜山天皇と爲す。天皇幼にして聰敏なり。人々、興復を冀ふ。而れども楠氏衰へ、國勢日に削らる。義詮既に死して、子義滿嗣ぐ。勢益張る。我が將士多く叛きて、北朝に降る。紀伊の諸城陷る。三年、關東の賊兵、屢征東將軍宗良を信濃に攻む。宗良拒ぐ能はず。走りて吉野に歸る。東北復官軍なし。征西將軍懐良、獨菊池氏に依りて一隅を保守す。是より先、明主朱元璋、使をして征西府に來らしむ。其書辭、禮無きを以て卻けて納れず。明主更に書を北朝に貽る。北朝之を納る。征西府其往來を梗ぐを以て、今川貞世を遣して、探題に充て、來り攻めしむ。菊池武政、其子武朝と、相繼いで拒ぎ戰ひ、屢之に克つ。已にして懷良、武政、武朝と、前後皆病みて卒す。西南復官軍なし。是に於て、義滿、專楠氏を圖る。天授四年、山名氏清等を遣し、入りて寇せしむ。楠氏の族橋本正時、神宮正種等、力め拒げども、克たずして退く。六年、和田正武、病みて卒す。弘和二年、正儀も亦卒す。是の時に當りて、官軍保つ所、獨金剛山一城のみ。元中九年、義滿、畠山義深をして數千騎に將として、來りて金剛山を攻めしめ、四の糧道を絶つ。城兵僅に數十人、飢ゑて戰ふ能はず。賊急に之に薄る。城兵逃れ走りて、十津川に匿る。正成、城を築きてより、凡六十年、乃賊兵に陷れられたり。義滿、乃大内義弘をして、來りて和議を講ぜしむ。神器を北朝に傳へ、則兩統更立せんことを約す。遂に之を許す。是の年冬、遂に法駕を備へて吉野を發し、大覺寺に御し、父子の禮を以て、神器を後小松帝に授く。

稱光天皇

萬壽寺金藏主

三神器

金藤主自殺す

楠氏終る

後七年、義弘、兵を和泉に揚げて、足利氏を擊つ。楠正秀、兵百餘を以て之に屬す。正秀は蓋し正儀の子なり。菊池氏、北畠氏の餘孽も亦來り屬す。戰ひ敗れて散じ歸る。

後十三年、後小松、位を後龜山の皇子に禪る。立たんとするに當りて、足利氏、乃、後小松の皇子を立つ。是を稱光帝と爲す。楠氏及び北畠氏、並に之を訴へ、約の如くせんと欲す。足利氏聽かず。則並に兵を起す。足利氏、帝の後、當に南朝の皇子に傳ふべきを約す。乃兵を止む。稱光崩ずるに及びて嗣なし。足利氏、復北朝の皇族を索めて之を立つ。後龜山天皇の子小倉と曰ふ者、京師より伊勢に走り、北畠氏に依りて兵を起す。戰ひ敗れて和を講ず。京師に歸りて髮を削り、萬壽寺に入る。

又十餘年、歲の癸亥、足利氏內亂あり。楠二郎、南國の兵を收めて三百人を得、萬壽寺の金藏主といふ者を奉じて主と爲し、兵を分ちて二隊と爲し、二郎、自一隊に將とし、越智某、一隊に將として、夜大內に入りて三神器を取る內侍の鏡は東門の衞士に奪はれ、寶劍を淸水寺の側に遺て、獨神璽を擁して、叡山の中堂に據る。足利氏の管領畠山基國、兵を遣して、來り攻めしむ。二郎、越智と、みな戰死し、金藏主自殺す。二郎といふ者、其出づる所を詳にせず。二郎の殘兵、神璽を以て、後醍醐の曾孫某を奉じて、吉野を保つ。戊寅の歲、赤松氏の遺臣二人、詐りて來り仕へ、皇曾孫を弑し、從者一人を追殺す。其一人、遂に璽を奪ひて去る。

是より先、後村上天皇の子泰成、圓胤を生む。圓滿院の僧正たり。髮を蓄へて、名を義有と更む。癸亥の難に、楠二郎の弟某、義有を奉じて兵を起し、八幡に據り、畠山氏の兵を迎へ擊ちて大に之を破る。細川氏、來り攻む。楠氏、利あらず、退きて紀伊に入り、湯淺の城に據る。丙寅の歲、畠山氏の將遊佐、來りて攻む。楠氏、又擊ちて之を破る。丁卯の冬、遊佐、復兵を聚めて來り攻む。城終に陷る。義有害に遇ひ、楠某、之に死す。楠氏の事此に終る。復觀る所なし。

名和、兒島、土居、得能氏は、蓋し楠氏に先だちて亡ぶ。楠氏に後れて存する者は、菊池、北畠氏なり。

鳴呼忠臣楠氏之墓

櫻井驛跡

身を以て國に許す

建武中興其擧措を失ふ

子孫を留めて天子を衞らしむ

菊池氏は數世にして、義宗といふ者に至りて乃亡ぶ。北畠氏十餘世、具敎といふ者に至りて乃亡ぶ。此二氏は楠氏衰へてよりの、皆足利氏に降る。或は曰く、「楠正儀も亦足利氏に降る」と。蓋し、こゝに深謀あらん。史乘散佚して信を考ふ可からず。之を要するに、正成の宗族、後醍醐の皇統と始終を相成す。楠氏亡びて後一百餘年、權中納言源光圀、私に石を湊川に立て、題して曰く「嗚呼忠臣楠氏之墓」と。外史氏曰く。余數播の間を往來して、謂ゆる櫻井驛を訪ふ。之を山崎の路に得たり。一小村なるのみ。過ぐる者、或は其驛址爲るを省ず。蓋し、足利、織、豐の數氏を經て、世故變移して、道里驛程、隨ひて輒改まれるのみ。余、是に於て低回して去る能はず。顧みて金剛山の雲際に巋立するを望み、公の義を擧げし秋、及び其子孫の據りて以て王室を扞護せしことを想見するなり。

公の行在に詣りて、天子に對へしを覩るに曰く、「臣未だ死せざるときは、賊の滅びざるを患へざれ」と。夫れ一の兵衞尉を以てして、居然として天下の重きを以て自任す。豈値遇に感激して、身を以て國に許すに非ざらんや。故に能く赤手を以て江河を障へ、天日の旣に墜ちたるを回す。何ぞ其れ壯なるや。公、北條氏の精鋭を一城の下に聚めて、新田、足利の屬をして、其空虛を擣きて、以て其渠魁を殪さしむ。帝の復辟するや、爵を醵い、職に任ずること、宜しく公を以て首と爲すべし。而るを纒に能く結城、名和の輩と肩を比べしむ。其擧措を失ふ、以て中興の成る無きを知るに足れり。

足利氏の叛くに及びて、朝廷方に新田氏に倚りて重きを爲す。公は特に褊裨に充て、其驅使に供す。亦其門地の若かざる有るを以てのみ。然れども京師大に捷ちて殆ど掃殄を致しゝもの、公の策によるに非ざらんや。

嚮に帝をして其新田氏に任ぜし所のものを以て、公に任ぜしめば、曷ぞ犬羊狐鼠の賊をして、吾が朝廷を蹂踐せしむるに至らんや。

然れども其死するに臨みて、子を戒めしを觀るに、又曰く、「吾れ死せば、天下悉く足利氏に歸せん」と。夫れ天下の爲す可からざるを知りて、猶其子孫を留めて以て天子を衞らしむ。其心を設くる、古の大臣と雖、

楠氏あらざれば三器ありとも安そ四方の望を繫がん

大節巍然として山河と並存す

何を以て遠く過ぎん。故に子孫能く其遺訓を守りて、正統の天子を彈丸黑子の地に護り、以て四海の寇賊を防ぎしこと、三朝五十餘年の久しきに及べり。一門の肝腦を擧げて、諸を國家の難に竭す。其澌盡灰滅するに至りて、而る後、足利氏始めて大に其志を天下に成すを得たり。蓋し朝廷大に楠氏に任ずる能はずして、楠氏以て自任ずる所以はこれに加ふる莫し。世の中興の諸將を論ずること、尙其資望の大小を視て、深く其實を揆らざる、亦當時の見と等しきのみ。楠氏有らずば、三器有りと雖、將に安に託して、以て四方の望を繫がんや。笠置の夢兆是に於て益驗あり。而れども南風競はず、俱に傷ひ、共に亡ぶ。終古以て其勞を恤む莫し。悲しいかな。抑正閏殊なりと雖、卒に一に歸し、能く鴻號を無窮に熙む。公をして知る有らしめば、亦以て瞑す可けん。而して其大節巍然として山河と並び存す。以て世道人心を萬古の下に維持するに足れり。之を姦雄迭に起りて、僅に數百年を傳ふる者に比すれば、其得失果して如何ぞや。

外史氏曰。余數往二來攝播間一。訪二所レ謂櫻井驛者一。得二之山崎路一。一小村耳。過者或不レ省二其爲二驛趾一。蓋經二足利織豐數氏一。世故變移。道里驛程。隨輙改耳。余於レ是低回不レ能レ去。顧望三金剛山嶷一立雲際一。想三見公擧レ義之秋一。及其子孫據以扞二護王室一也。觀下公詣二行在一。對中天子上。曰。臣而未レ死。賊不レ患レ不レ滅。夫以二一兵衞尉一。而居然以二天下之重一自任。豈非下感二激値遇一以レ身許中國上哉。故能以二赤手一障二江河一。回三天日於二旣墜一。何其壯也。公聚三北條氏精銳於二一城之下一。而使下新田足利之屬。擣二其空虛一。以殪中其渠魁上。帝之復辟。疇レ爵任レ職。宜二以レ公爲レ首。而纔能與二結城名和輩一比レ肩。其失レ於二擧措一。足三以知二中興之無レ成矣。及二足利氏叛一。朝廷方倚二新田氏一爲レ重。公特充二褊裨一。供二其驅使一。亦以二其門地有レ不レ若焉爾一。然京師大捷。殆致二掃殄一者。非レ因二公之策一邪。嚮使下帝以下其所レ任二新田氏一者上。以任下於レ公乎。曷至レ使三犬羊狐鼠之賊蹂二踐吾朝廷一哉。然觀二其臨レ死戒レ子。又曰。吾死。天下悉歸二足利氏一。夫知二天下之不レ可レ爲。而猶留二其子孫一。以衞二天子一。其設レ心。雖二古大臣一。何以遠過。故子孫能守二其遺訓一。護三正統天子於二彈丸黑子之地一。以防二四海寇賊一者。及二三朝五十餘年之久一。擧二一門之肝腦一。而竭二諸國家之難一。至二其澌盡灰滅一。而後足利氏始得四大成三其志於二天下一。蓋朝廷不能三大任二楠氏一。而楠氏所二以自任一。莫二以加一焉。世之論二中興諸將一。尙視二其資望大小一。而不三深揆二其實一。亦與二當時之見一等耳。不レ有二楠氏一。雖レ有二三器一。將安託焉。以繫二四方望一哉。笠置夢兆。於レ是益驗。而南風不レ競。俱傷共亡。終古莫三以恤二其勞一。悲夫。抑正閏雖レ殊。卒歸レ於レ一。能熙三鴻號於二無窮一。使二公有レ知。亦可二以瞑一矣。而其大節巍然。與二山河一竝存。足四以維三持世道人心於二萬古之下一。比下之姦雄迭起僅傳二數百年一者上。其得失果何如哉。

題二楠公訣レ子圖一　　賴山陽

海甸陰風草木腥。　　史編特筆姓名馨。

一腔熱血存二餘瀝一。　　分二與兒曹一灑二賊庭一。

過櫻井驛址

山崎西去櫻井驛。傳是楠公訣レ子處。　林際東指金剛山。
堤樹依稀河内路。想見警報交奔馳。　促驅羸羊餧猛虎。
問レ耕拒レ奴織拒レ婢。國論顛倒君不レ悟。　驛門立レ馬臨路岐。
遺訓丁寧垂髫兒。從騎肅聽皆含レ涙。　兒伏不レ去叱起レ之。
西望武庫賊氛惡。回レ頭幾度覩去旗。　旣殲全躬支傾覆。
爲レ君更貽一塊肉。剪屠空復膏賊鋒。　頗似祁山與綿竹。
脈脈熱血灑國難。大澱東西野艸綠。　雄志難レ繼空逝水。

賴山陽

改版 邦文日本外史 卷之五 終

改版

邦文日本外史 卷之六

新田氏正記

新田氏

新田、足利二家祖を同じくす

【官爵】爵は從五位下、官は式部大輔

義康

【熱田】尾張熱田大宮司

外史氏曰く。新田、足利の二氏は、皆八幡公より出づ。其門閥固より相下らざるなり。而して新田氏は嫡宗たり。舊史に、皆、足利氏を以て源氏の統を承け、號して將軍と曰ひしものは、成敗の跡を以て之を軒輊せしのみ。然れども二家の聲威、優劣ある者は由來あり。蓋し二家の同じく祖とする所の者は義國なり。義國、八幡公の子を以て、上野に謫せらる。謂ゆる新田郡は其食みし所なり。二子義重、義康あり。義康は、其外家田原氏に依りて足利郡に居る。終に分れて其半を食むを得たり。而して義重、新田を繼有し、又義國の官爵を襲ふ。則義重の嫡宗たること明けし。

然れども源頼朝起るに及びて、義重之と隙あり。大炊助を以て其身を終る。子孫、上野の一武族と曰ふに過ぎず。而して義康は事變に遭遇し、官爵頓に進む。又源義朝と同じく熱田に娶る。故に子孫、頼朝の親昵を受く。又世婚を北條氏に結び、互に相依頼し、鎌倉に著る。

後醍醐帝の未だ事を起さゞるや、蓋し足利氏の强宗たるを稔聞せしなり。是を以て其戈を倒にするを聞くに及びて、遽に寵爵を許す。其朝廷を褻玩し、非望を覬覦せしは、帝以て之を啓く有り。而して新田氏の功勞、遠く其上に出でしものは、則二家交訟へし日を待ちて然る後、之を知る。尊氏の叛逆に及びて、乃

朝廷新田氏に倚る

【三世】義滿【其父其祖】義詮、尊氏

【兩家】新田足利

義貞の宗族に命じて、以て之を防がしむ。而れども其勢既に成りて、復遏む可らず。歎ずるに勝ふ可けんや。世或は謂ふ「義貞の族望、尊氏に及ばず。故に獨立する能はずして、朝廷に倚りて以て重きをなせり」と。余以爲、然らずと。朝廷新田氏に倚る。新田氏の朝廷に倚れるに非ざるなり。新田氏の將帥の材武にして、部屬の精勁なる、足利氏の企て及ぶ所に非ざりしなり。

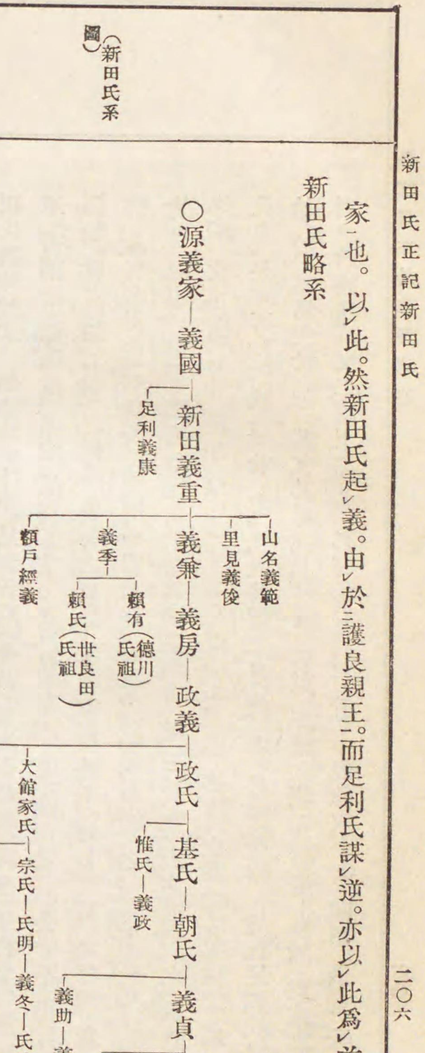
而れども數奇敗衂して、終に消亡に至れる者は、他に故なきなり。天下、朝政を厭苦して、武治を謳歌せり。故に尊氏の私を營めるを利とし、義貞の公に奉ぜしを便ならずと爲せり。已むを得ずして之に從ひ、勉强して戰に赴く。雜ふるに依纓の褊裨、畿甸の召募を以てし、掣肘牽累、動もすれば意の如くならず。之が將帥たる者、豈難からざらんや。嚮に義貞をして、亦足利の爲に出でしめんには、則介冑の族、將に雲の如く合ひ、霧の如く集りて、之に歸せん。而らば足利氏焉んぞ能く之に加へん。天下の事、皆圖るべきなり。何ぞ困賠、此の如きに至らんや。是れ其禍福利害は、三尺の童子と雖、亦能く之を知る。義貞寧ぞ知らざらんや。終に其節を改めざりし者、豈、已王家の倚賴に任へ、倍畔に忍びざるを以てせるに非ざらんや　否らざれば、則源氏の統、其新田氏に歸する、久しからん。是れ寧ぞ成敗を以て論ず可けんや。且夫れ將門の統あるは、必しも帝室の如きに非ざるなり。況んや足利氏の謂ゆる將軍は、其第三世より始まる。其父其祖の如きは、皆命を正統の朝に受けたるに非ざりしなり。命を正統の朝に受けて、將軍と爲りし者は、乃護良、成良二親王なり。而れども必しも其實ありしに非ず。中興總戎の寄に至りては、固より義貞に屬せりと云ふ。余が兩家を列叙するは、此を以てなり。然して新田氏の義を起ししも、護良親王に由る。而して足利氏の逆を謀りしも、亦此を以て首と爲す。故に付見す。

外史氏曰。新田足利二氏。皆出於八幡公。其門閥固不相下也。而新田氏爲嫡宗。舊史皆以足利氏承源氏之統。號曰將軍者。以成敗之迹軒輊之耳。然二家聲威有優劣者。

有由來矣。蓋二家之所同祖者義國。義國以八幡公之子。而謫於上野。所謂新田郡。其所食也。二子。義重。義康。義康依其外家田原氏。居足利郡。終得分食其半。而義重繼有新田。又襲義國官爵。則義重之爲嫡宗。明矣。然及源賴朝起。義重與之有隙。以大炊助終其身。子孫不過曰上野一武族。而義康遭遇事變。頓進官爵。又與源義朝同娶於熱田。故子孫受賴朝親昵。又世結婚於北條氏。互相倚賴。著於鎌倉。後醍醐帝之未起事。蓋稔聞足利氏之爲强宗也。是以及聞其倒戈。遽許寵爵。其藝玩朝廷。覬覦非望。帝有以啓之。而新田氏之功勞遠出其上者。則待二家交訟之日。然後知之。及尊氏叛逆。乃命義貞宗族。以防之。而其勢既成。不可復遏。可勝歎哉。世或謂。義貞族望不及尊氏。故不能獨立。而倚朝廷。以爲重。余以爲不然。朝廷倚新田氏。非新田氏倚朝廷也。新田氏將帥材武。部屬精勁。非足利氏所企及。而數奇敗衂。終至消亡者。無他故也。天下厭苦朝政。而謳歌武治。故利尊氏之營私。而不便義貞之奉公。不得已而從之。勉强而赴戰。雜以衣纓之褊裨。畿甸之召募。掣肘牽累。動不如意。爲之將帥者。豈不難哉。嚮使義貞亦出足利氏所爲。則介冑之族。將雲合霧集而歸之。而足利氏焉能加之。天下之事皆可圖也。何至困踣如此哉。是其禍福利害。雖三尺童子。亦能知之。義貞寧有不知。而終不改其節者。豈非以己任王家倚賴。不忍倍畔也邪。否則源氏之統。其歸新田氏久矣。是寧可以成敗論也。且夫將門之有統。非必如帝室也。況足利氏之所謂將軍者。始於其第三世。如其父其祖。皆非受命於正統之朝也。受命於正統之朝。而爲將軍者。乃護良成良二親王。而非必有其實。至於中興總戎之寄。固屬義貞云。余之列叙兩

家」也。以レ此。然新田氏起レ義。由レ於二護良親王一。而足利氏謀レ逆。亦以レ此爲レ首。故附見焉云。

新田氏略系



（新田氏系圖）

新田氏系統

新田氏は、源義家より出づ。義家の第三子を義國と曰ふ。從五位下に叙し、式部大輔に任ぜらる。嘗て朝に入るとき、途に右大臣藤原實能に遇ふ。實能の從者叱して之を避けしむ。馬より墮つ。義國の隷士、怒りて實能の宅を焚く。義國坐して上野に謫せらる。二子義重、義康を生む。義重は新田郡を食み、義康は足利郡を食む。

義康

治承中、平氏政を失ひ、源氏競ひ起る。義重、兵を集めて寺尾城に據る。源頼朝、鎌倉に起り、之を招けども答へず。頼朝、關東を定むるに及びて、義康、子義兼等と並に往きて歸す。頼朝、義重の女を娶りて、妾と爲んと欲す。又肯ぜず。遂に與に隙あり。諸源の官爵を奏し請ふに及びて、義重、纔に父の爵を襲ふを

六世、新田郡を食む

新田氏分族す

義貞

（護良親王潛經之圖）

大塔宮護良親王

得て、大炊助に任ず。七子あり。其第二義包を嗣と爲す。義包、義房を生む。義房、政氏を生む。政氏、基氏を生む。基氏、朝氏を生む。凡六世、みな邑を新田に襲ふ。遂に以て氏と爲す。旗は白を用ゐ、旗號は中黑を用ゐる。脇屋、里見、大館、堀口、鳥山、羽川、山名、桃井、一井、金谷、細谷、江田、大井田、德川、世良田の諸族、みな新田氏より出づ。分れて上野、越後に居る。而して皆北條氏に役屬す。北條高時の後醍醐天皇を隱岐に遷すや、楠氏、兵を金剛山に起す。高時、關東の將士を遣して之を攻めしむ。朝氏子あり。義貞と曰ふ。又遣中に在り。已にして城固くして拔けず。東兵多く逃れ亡ぐ。義貞、其家宰舟田義昌を召し、之に語りて曰く、「源平相制し、並に王家を護る。古より之を然りと爲す。吾れ無似なりと雖、忝くも源氏の胄裔に列す。特時勢を以て、北條氏に驅使せらるゝが爲、遂に官軍に敵す。豈に其本心ならんや。吾れ高時の近狀を視るに、亡滅するは遠きに非ざるべし。吾れ、我が國に歸りて義兵を擧げ、上は以て宸憂を除き、下は以て家聲を興さんと欲す。而れども命を受くる所あるに非ざれば不可なり。安にか大塔宮の令旨を得ん。則吾が事成らん」と。

大塔宮は、帝の第三子護良なり。護良、初め北條氏の權を專にせるを疾み、帝と密に之を討滅せんと謀る。二品に叙し、兵部卿に任ぜられ、山門の座主に充つ。尊雲と號し、大塔に居る。世因りて大塔宮と稱す。謀泄るゝに及びて、東兵來りて帝を執へんとす。護良、先づ諜して之を知り、帝をして笠置

般若寺に匿る

山に逃れしめて、自ら弟の宗良と、兵を將ゐ迎へ擊ちて賊を破る。已にして兵潰え、宗良と路を分ちて走り、南都の般若寺に匿る。笠置既に陷り、宗良擒に就く。賊、兵を遣して寺を圍む。護良、經函中に潛みて免る。遂に、從士九人と道士の裝を爲して、笈を負ひ、南に走り、十津川に至り、土豪戸野兵衛に依る。髮を蓄へ兵衛の族の女を娶る。賊之を聞き、其頭を千金に贖ふ。護良逃れて吉野山に入る。明年五月、兵を

吉野山に入る

吉野に起し、寺に據りて城と爲す。又從士赤松則祐を遣し、其父則村に諭し兵を播磨に起さしむ。既にして賊將二階堂貞藤等の大兵來り攻む。護良親戰へども支へず。城遂に陷る。從士村上義光、僞りて護良と稱して死す。護良遂に高野山谷の間に匿る。山寇を指使して以て楠氏を助け、又賊の糧餉を奪はしむ。

村上義光

義貞、頗る其蹤跡を知れども、未だ在る所を詳にせず。故に義昌に謀る。義昌、乃三十人をして、山寇の狀を爲さしめて、自亡卒と爲りて山下に鬬ふ。山上の寇之を見て下り援く。義昌之を生得し、其一人を縱ち意を護良に通ず。護良素より新田氏の名族たるを知り、大に喜び、卽令を爲りて之を與へ、權に詔辭を用ゐる。義貞感喜、意外に出づ。翌日病と稱して東に歸り、子義顯、弟脇屋義助等と、高時を討たんと謀る。高時、未だ之を覺らざるなり。金剛山久しく拔けずして、官軍並び起るを以て、益々兵食を調發す。新田、素より豪戸多し、因りて六十萬錢を課し、限るに五日を以てし、吏卒を縱ちて催迫す。義貞曰く「奴輩亡狀、敗て我が地を蹈藉す」と。兵を遣し其吏を捕へ、首を里門に梟す。高時、聞きて大に怒り、令を下して新田氏を擊つ。新田氏會議す。或は曰く「越後に赴き、其宗族に依らん」と。義助、進みて言ひて曰く「利根河に拒がん」と。或は曰く、「二つの者皆計に非ざるなり。坐して强敵を待ち、情見はれ形屈せば、則我が兵內に潰え、一敗地に塗れ、人をして『新田氏は、使者を戕して誅死せらる』と曰はしめん。死は一なり。寧王事に死せん。今匹馬、單兵と雖、出でゝ國中に徇へ、衆附かば則進みて鎌倉を攻めん。不らずば則戰死せん。坐ながら誅殺を取ると孰與ぞ」と。衆以て然りと爲し、乃兵を起す。大舘宗氏、堀口貞滿、岩松經家、里見義氏、江田行義等の百五十騎、義貞を推して將となし、族を邑の生品祠前に竪てゝ、以て義を擧

高時新田氏を擊つ

義助

義貞兵を起す

元弘三年

ぐ。實に元弘三年五月八日なり。

義貞、詔書を拜讀し畢り、進みて笠懸野に陣す。日暮に北びて利根河の側塵起る。兵あり、至ること二千騎可り。衆謂へらく敵來ると。漸く近づけば則越後の宗族來り援ふなり。義貞驚き喜びて曰く、「諸君、來ること何ぞ速なる。何を以て吾が義を擧ぐるを知りしか」と。大井田經隆、鞍に伏して對へて曰く、「今旦、羽黑の俊賢、來りて國中に徇ふ。是を以て馳せ至る。遠境に在る者は明日當に至るべし」と。俊賢は經隆の弟、善く走る者なり。明日、越後の全兵、及び甲斐、信濃の諸源、五千騎を以て至る。乃兵を合せ進みて武藏に入る。近國の將士、期せずして會する者、一日に二萬人。入間河の北に軍す。高時、義貞の事を起すを聞き、以て意と爲さず。兵十一萬を發す。族の貞國、貞將之が將たり。前後より來り擊つ。貞國、河南に抵り新田氏の軍甚盛なるを望み見て、乃敢て進まず。而して義貞已に流を亂りて至り、大に武藏野に戰ふ。兩軍皆東國の驍兵、素より騎戰に習ふ。地も亦平曠、射戰罷み、卽、相馳突すること、凡三十餘合。乃交退く。

入間河の北に陣す

武藏野

久米河

三浦義勝

旦日、又久米河に戰ふ。戰ふ每に、鎌倉の兵、死傷輒倍す。高時、弟の泰家をして、生兵數萬を以て來り援けしむ。夜、其軍に抵る。義貞察せず。晨を侵して又戰ふ。利あらずして退く。泰家、益々新田氏を輕ず。曰く、「敵中必義貞を斬致する者あらん」と。皆甲を釋き、酒を飲む。相模の人三浦義勝、心素より義貞に嚮ふ。兵六千を率ゐ來りて之に屬す。義貞禮して計を詢ふ。義勝曰く、「方今天下分崩し、勝敗互に變ず。而れども天命の歸する所、終に在るあらん。公、幸に僕の兵を併せて以て一戰すべし」と。義貞曰く、「疲兵を以て新勝の衆に當る、如何」と。曰く「戰勝ちて、將驕り、卒懈る者は敗るとは、泰家の謂なり。敗兆已に備る。畏あゝに足らざる耳。詰朝の事、僕、請ふ、公の先を爲さん」と。旦日、旗を卷きて徐に進む。敵相指し語りて曰く「嚮に三浦氏の徵に應じて至るを聞く。是れなり」と。俄に義貞等翼して進み、三面より掩ひ擊つ、泰家の軍大に敗る。貞將の一軍、小山、千葉氏と、鶴水に戰ひて、亦大に敗れ、皆走りて鎌倉に入る。

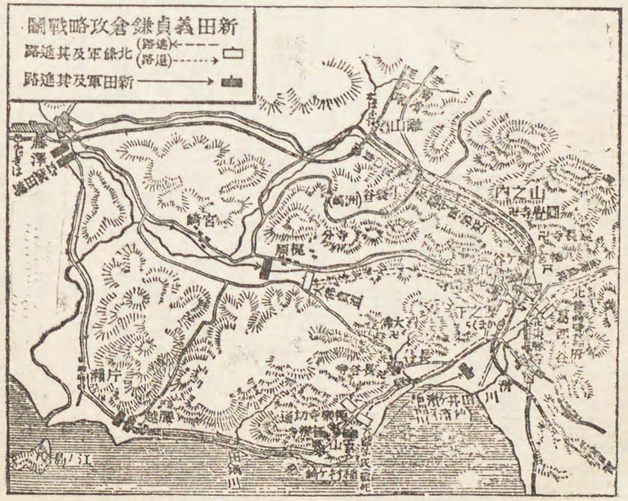
八州の豪傑響の如く應じ、爭ひて、義貞に歸す。

義貞進みて關戸に至る。兵凡十二萬騎なり。分ちて三軍と爲し、三道より鎌倉を攻む。先鋒の大將大館宗氏、江田行義は極樂寺よりし、堀口貞滿、大島守之は兒嚢阪よりし、義貞、義助、自諸將を率ゐて假粧阪よりし、火を五十餘所に縱ちて進む。鎌倉震駭す。而して北條氏の見兵、猶十餘萬あり。分ちて三道を拒ぐ。義貞、貞滿進みて山内に入る。而して宗氏戰死し、其兵皆卻く。義貞、選兵二萬を以て夜に乘じて之に赴く。則敵の大兵、海岸に據り、柵を樹て、兵艦を其南に列ねて、以て傍射に備ふ。貞義、馬より下りて冑を免ぎ、海に向ひて拜して曰く、「天子、逆臣の爲に遷されて西海に越在す。臣義貞、坐視するに忍びず。兵を提げて賊を討たんとす。伏して願くは、海神、臣の忠義を眷み、潮を退けて、以て道を開きたまへ」と。因りて佩ぶる所の金裝の刀を釋き、之を海中に投ず。曉に比びて潮大に退き、兵艦皆漂ひ去る。義貞大に喜び、衆を麾きて進む。諸軍之に從ひ、直に府中に入り、風に乘じて火を縱つ。烟焰天に漲る。義貞、兵を縱ちて鏖戰す。高時、族を舉げて遂に誅に伏す。兵を舉げしより此に至るまで、蓋し十五日なり。義貞、因りて鎌倉に居り、餘黨を誅し、新附を撫す。威、關東に振ふ。

（湯戸十二萬の兵を以て鎌倉を攻む）

（新田義貞鎌倉攻略戰圖）

稻村崎



（新田義貞稻村崎に海神を祈る圖）

是より先、天子伯耆に在り。京師平ぐと聞き、將に闕に還らんとす。或人諫めて曰く、「京師平くと雖、金剛山の攻兵、猶畿内に滿つ。且諺に曰く『八州は海内に敵し、鎌倉は八州に敵す』と。承久の役、伊賀光季を誅せしは甚易くして、東兵と鬪ひて、乃敗衂を取れり。今天下十に一二を得るのみ。宜しく暫此に居て、以て東國の變を視るべし」と。諸公喇、皆之を然りとす。帝聽かずして發す。兵庫に至りて義貞の捷書を得、上下大に喜ぶ。詔して義貞を以て左馬助と爲し、義助を兵庫助と爲し、使者に爵を賜ふ。

建武元年族を擧げて入朝す。義貞を從四位上に叙し、左兵衛督に任じ、播磨守を兼ね、上野の守護を領せしめ、義顯に越後の守護を領せしめ、義助を兵部少輔に任じ、武者所の頭人に充て、駿河の守護を領せしめ、並に京師に宿衛せしむ。

足利尊氏は、義兼の遠孫なり。地望素より著る。佐けて京師を攻め、首として寵爵を蒙むり官祿皆遠く新田氏の上に出づ。遂に陰に異圖を蓄へ、義貞及び皇子護良を忌む。初め帝の闕に歸るとき、護良、志貫山に居る。近畿の兵爭ひて之に歸す。將に率ゐて以て入朝せんとして果さず。帝、參議藤原清忠をして就きて言はしめて曰く、「天下既に定まる。汝將に何を爲さんとす。盍ぞ髮を削り、舊に復せざる」と。護良對へて曰く、「高時、誅に伏すと雖、餘黨未だ殲きず。宜しく武備を嚴にして、以て覬覦を絶つべし。且陛下の德、微臣の謀、以て今日有るを致す。而るに足利尊氏攘みて己が功と爲す。彼れ其志を觀るに測る可からざる者あり。其力微なるに及びて之を除くにあらずば、復一の高時を生ずるならん。臣聞く、『佛に二道あり。鐵

（建武元年尊氏）

（志貫山）大和藤原忠清勅旨を護良に傳ふ

征夷大將軍

【寵姫藤原氏】近衛中將公廉の女廉子

護良を囚す

護良冤枉を訴ふ

護良鎌倉に下す

二年時行の亂

受と曰ひ、折伏と曰ふ』願くば陛下、臣に任ずるに戎事を以てせよ。臣將に陛下の爲に折伏せんとす」と。帝懌ばず。勉めて之に從ひ、拜して征夷大將軍と爲す。然れども尊氏を誅するを許さず。護良、騶從を具へて入朝す。松赤則村を先驅と爲す。

尊氏深く之を嫉む。乃、帝の寵姫藤原氏に結び、陰に排陷せんことを謀る。而るに護良察せず。輒、尊氏を除かんと欲し、多く死士を蓄へ、密に兵を徵す。尊氏、其檄を得て、變を上り、「大將軍反し、帝を廢し、其子興良を立てゝ帝と爲さんと欲す」と告ぐ。藤原氏、傍より之を贊く。帝怒る。十月、甲を伏せ護良を召して、之を執へて宮中に囚す。護良憤怒して、識る所の宮人に因りて上書して曰く、「臣、罪纍を以て、敢て寃枉を訴ふ。唯陛下之を憫察せよ。臣、夙に武臣の專恣なるを憤り、法服を釋きて戎衣を被る。寧世の譏を受くるも、君父の爲に軀を忘れん。在廷の臣子、敢て力を効す莫し。而るに臣獨空拳を張りて、以て强敵に抗す。賊の耳目、臣が身に集り、臣を購ふに萬戶を以てす。臣晝伏し夜行きて、山谷に匿れ、霜雪を踐みて、殆ど死して復生きしこと數〻なり。思を焦し籌を運し、遂に誅夷の績を抵すを得たり。而して圖らざりき、罪を此に獲んとは。仰ぎて將に天に訴へんとすれども、日月は不孝の子を照さず。俯して地に哭せんとすれども、山川は無禮の臣を載せず。父子、義絕えて、乾坤共に棄つ。臣、敢て復世に望みあらざるなり。讒し死刑を宥し、籍を削り佛に歸せしめば、臣、終身悔ゆる毋らん。抑〻申生死して晉國亂れ、扶蘇刑せられて秦の世傾く。聖明盍ぞ古を延きて以て今を鑒みざる。沸隕ち心惛み、言はんと欲する所を終へず」と。書、入れども敢て奏達する者なし。諸〻の護良に從ひて終始する者、皆誅せられ、赤松則村も、亦其守護職を褫はる。十一月、敕して護良を足利直義に附し、之を鎌倉に徙し、窖を二階堂谷に穿ちて之を幽し、一宮人を縱して侍せしむ。

二年七月、北條時行、亂を作し、鎌倉を襲ふ。直義敗れ走る。走るに臨みて淵邊義博を召して曰く、「時行は患ふるに足らず。患ふ可き者は兵部卿なり。宜しく此時に乘じて之を除くべし」と。義博、往きて窖中を窺ふ。

直義、淵邊義博をして護良を殺さしむ

（鎌倉土牢之圖）

尊氏反す

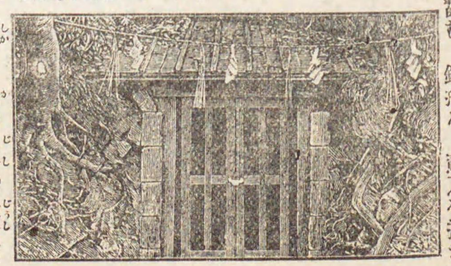
尊氏奏して義貞を罪狀す

義貞　抗疏す

【抗疏】不遜の上書

尊氏の八罪を論ず

護良方に燭を焚き經を讀む。顧て矚起して曰く、「汝、我を殺さんとするや」と。前みて其刀を奪はんとす。義博、其膝を斫りて之を踣し、胸に跨りて吮を刺す。護良、頸を縮め其鋒を齧む。鋒折る。貳刀を拔きて心を刺すこと二たび。乃絕ゆ。年二十八なり。義博、首を以て直義に示さんと欲す。其瞑せずして鋒を含むを見て、棄てゝ去る。侍せし所の宮人、之を收め葬り、將に歸りて狀を奏せんとす。而して帝、已に尊氏に命じて、東、時行を伐たしむ。尊氏遂に鎌倉に據りて自將軍と稱す。新田氏の邑の關東に在る者を奪ひて、以て將士に分ち予ふ。抗疏して義貞を罪狀す。義貞、乃上書して曰く、「鬻者天下大に亂れ、乘輿播遷するに當りて、楠正成等の豪傑並び起り、相共に王に勤む。而るに足利尊氏、首鼠兩端にして勝敗を觀望す。賊軍、利を失ふに非ざるによりては、蓋し肯て降らざりしならん。功微にして、賞多し。遂に非望を冀ひ、臣の忠義を害し、詭言して之を陷れんと欲す。臣、五月八日を以て兵を上野に起す。彼れ其七日を以て六波羅を佐け攻む。而るに臣、京師に復するを聞き、乃肯て兵を起すと曰ひて、以て天聽を欺罔す。其罪一なり。臣、五月二十二日を以て、諸軍を率る高時を誅す。而るに彼の兒子、從士百餘人を率ゐて、六月三日を以て鎌倉に入る。而して臣、其兒子に賴りて以て功を成すと曰ふ。其罪二なり。彼れ輩下に在りて、擅に親王の卒を誅す。其罪三なり。征夷の任、兵部卿親王に在り。而るに彼れ輒其號を掠む。其罪四なり。矯りて管領と稱し、務めて威福を張る。其罪五なり。中興の業、天運に因ると雖、抑〻兵部卿の謀策、居多なり。而るに彼れ百方讒構して、遂に流謫するに抵る。其罪六なり。陛下、心に兵部卿の自ら艾むるあらんことを期す。而るに彼れ私仇を修めて、之を牢狴に辱しむ。其罪七なり。直義亂に乘じて、遂に刃を兵部卿に傳す。大逆無道、其罪八なり。此八罪は天地の容れざる所、措きて論ぜ



十一月詔を下して尊氏を討たしむ

矢矧川

手越河

尊氏大に窘む

竹下箱根の戰

す。百敗將に隳ひて至らんとす。後、臍を噬むも及ぶなからん。願くは陛下、之を照鑒し、速に明詔を下して以て尊氏の兄弟を誅伐せよ」と。廷議疑ひて未だ決せず。會護良の侍婢至りて狀を奏す。尊氏の反逃遂に天下に暴る。

十一月、乃詔を下して尊氏を討たしむ。兵を徵すこと六萬、節刀を貞義に陛授して、以て諸將を總べしむ。皇子尊良を奉じて海道より進む。忠房親王、一軍を以て山道より進む。義貞、常に精兵七千を掄みて中堅と爲す。而して栗生顯友、篠塚伊賀、畑時能、亘忠景、由良具滋、長濱顯寛等の十六騎、最精悍にして轂擊を善くす。其徽號を同じくし、進退を與俱にす。

義貞、矢矧河に至る。河東皆足利氏の兵なり。義貞顯寛を召して津を視しむ。還り報じて曰く、「三處あり。然れども前岸峻絶にして敵、鏃を攢めて之を守る。敵を誘ひて渡らしめて、之を水に蹙むるに若かざるなり」と。義貞之に從ふ。賊兵を分ち左右より渡り、戰ひ且卻き、遂に萬騎を縱ち、中より渡りて、義貞を犯す。義貞、乃、中堅を以て、迫り擊ちて之を破る。賊退きて驚阪に陣す。又進み擊ちて之を破る。足利直義、二萬騎を以て來り援ふ。兵を手越河に盛にす。義貞、之を望みて曰く、「敗卒後に在り、必先走らん。餘衆支ふる能はざらん」と。戰ひて夜に逮び、夜、驍騎を遣し間道に循ひ、薄りて其後隊を射しむ。後隊援れ走る。諸營遂に大に潰え、走りて鎌倉に返る。尊氏大に窘み、髮を削り出でゝ降らんと欲して、未だ果さず。義貞、降附數萬を引きて伊豆の府に至り、山道の軍を遲つこと數日。賊軍微振ふ。凡數十萬人なり。直義出でゝ箱根に拒ぐ。十二月十二日、義貞、義助をして皇子を奉じ、竹下に向はしめ、而して自箱根を攻め、高きに上りて將士を覽視するに、將士皆奮戰す。直義の兵沮靡し、殆ど支ふる能はず。而して尊氏十餘萬を以て竹下に出づ。竹下の官軍七千人、其皇子に隸する者、先進み先走る。義助、手兵を以て之に代り、格鬪して交退く。其子義治、年甫めて十三、三騎と賊中に陷り、號を撤し髮を被り、賊と偕に退く。義助、營に還り義治を見ず。復た進みて之を索め、直に賊軍を冒す。軍潰え走る。義治、父の來り救ふを知りて、佯りて賊兵を呼ふ、

篠塚伊賀守

天龍河を濟る

【矢矧驛】二河

【洲股】美濃

義貞京師に還る

延元元年

【大渡山崎】山城

「盍ぞ返り戰はざる」と。二賊之に從ふ。我が軍に及ぶ比、義治、從騎に目して、其の賊を斬らしめ、歸りて義助に獻ず。義助大に喜び、乃退き息ふ。驚谷高貞等を遣して更に進ましむ。高貞等叛きて賊に降り、官軍に亂射す。義助、夜退き、義貞に合せんと欲す。義貞、方に直義に克ち、明旦を俟ちて進まんとす。舟田義昌、前軍に在り。直義の陣中「將軍捷てり」と傳呼するを聞く。乃我が諸營を巡視するに、帷幕儼として在れども、復一人も無し。走りて之を義貞に告ぐ。義貞、默然として曰く「是或は降り、或は逃るゝなり。吾れ少く退きて其逃るゝ者を扼めて復戰はん」と。乃山を下りて西す。兵僅に五百人。尊氏の兵數十萬、伊豆の府に充牣すと聞く。栗生顯友、篠塚伊賀、鞍に據りて衆を顧て曰く、「一騎當千とは、諸君の謂なり」と。乃衆に先だちて前む。賊、爭ひて義貞に薄る。伊賀、蹴て之を仆し、立どころに九人を斬る。餘賊敢て薄らず。義貞、行きて散兵を收め、二千人を得たり。天龍河に至り、浮橋を造りて軍を濟す。軍悉く濟る。義貞、乃義昌と濟る。叛く者在りて、潛に其綱を絶つ。僕、馬を牽きて前み、輙陷る。義昌曰く、「誰か之を援くる者」と。顯友重鎧のまゝ水に沒し、兩手に人馬を提げ前岸に達す。時に橋陷ること丈餘なり。義貞、義昌相挈げて跳り、既に濟る。或は橋を撤して追兵を沮まんと議す。義貞曰く、「我れ且之を爲す。彼れ寧ぞ爲す能はざらんや」と。橋を存して去る。矢矧驛に屯す。兵多く道に亡ぐ。宇都宮公綱、其退きて洲股を阻がんことを勸む。義貞之に從ふ。朝廷も亦近畿皆叛きて、四方より京師を窺ふを以て、急に義貞を召し京師に還り、諸將を部署し、自、萬人を以て大渡を守る。義助、權中納言藤原公泰、僧文觀等と七千人を以て山崎を守る。江田行義、五千を以て應援に備ふ。延元元年正月、行義、丹後の賊兵を峯堂に擊ちて之を走らす。而して尊氏、已に數十萬を率ゐて大渡に抵る。義貞豫橋板を撤して桁を截り殊たず。柵を水中に樹て、兵をして岸に呼ばしめて曰く「丹後の兵、我已に之を殲せり。公、盍ぞ亦來りて死を決せざる」と。賊兵怒りて、筏を造りて以て渡り、柵に遇ひて止る。我が軍亂射す。賊紛擾し、筏壞れて溺るゝ者數百

義貞尊氏と大に戰ふ

人。又橋より呼ばしめて曰く「舟筏益なし。請ふ、此に由りて來れ」と。賊、千餘人爭ひて進む。桁斷ちて皆溺る。尊氏遂に戰を休めて進まず。已にして賊兵二萬、來りて山崎を攻む。公泰、文觀の隷士、爭ひて賊に降る。賊乃入る。義貞、山崎の軍破れ、賊兵闘に詣ると聞きて、則ち馳せて義助を援け、將に與に俱に帝を叡山に奉ぜんとす。賊將細川定禪、兵六萬に將として之に尾す。義顯、三千騎を以て、告げずして返り、射戰之を久くす。義貞、已に闕に至るを度りて、則大呼して敵を衝く。大友氏泰、宇都宮公綱、新に降りて賊中に在り。義顯を識り、必之を獲んと欲す。義顯、奮ひ戰ひしこと八合、大創數十を被り、流血淋漓たり。還りて紫宸殿の前に至る。帝、親臨みて之を勞ふ。遂に義貞、義助と俱に乘輿に扈して叡山に赴く。細川定禪、來りて園城寺に據る。相持して未だ戰はず。會陸奥守源顯家入りて援ふ。新田氏の族の東國に在りし者、相率ゐて之に從ふ。大館氏明は、宗氏の子なり。從ひて近江に至り、攻めて一城を拔き、遂に來りて義貞に會ふ。顯家、馬を休めて後戰はんと欲す。氏明曰く「我が馬遠く來る。休まば則足重く、輙く用ゐる可からざらん。今夜直に園城寺を襲ひ、其不意に出づるに若かじ」と。義貞之を然りとし、卽夜、兵を唐崎に出し、黎明に諸將と騎六萬を將ゐ、園城寺を圍む。賊、門中より鎗を叢めて之を拒ぐ。亘忠景、十六鎗を奪ふ。畑時能、足を擧げて門扇を蹋みて之を倒す。我が軍入りて火を縱ち、定禪を走らす。首を斬ること七十餘級。顯家乃退く。義貞も、兵を收めんと欲す。舟田經政、馬を控へて說きて曰く、「兵の利は勢に乘ずるに在り。賊兵一敗して魄褫はれ、氣沮む。我因りて之を蹂み、勝に乘じて速に進み、以て終に其渠魁を獲んなり」と。義貞曰く「然り」と。卽三萬騎を率ゐて之を追ふ。險に遇へば逼り擊ち、夷に遇へば遙に射る。賊返り戰ふを得ず。伏尸狼藉たり。餘衆走りて京師に歸り、尊氏の軍に合す。義貞、進みて華頂山に上り、尊氏の軍を望む。尊氏の軍、京師に充塞する、其幾千萬なるを知らざるなり。義貞計るに「寡を以て衆に當る、徒に戰ひて勝つ可からず」と。乃我が兵の略面を相識る者をして、五十每に、伍を爲し、旗を卷き號を撤し、敗卒の狀を爲し、彼の軍に混入し、戰を待ちて起らしむ。二千騎を部して之を遣る。已

義顯

大館氏明

園城寺を襲ふ

舟田經政

華頂山

尊氏迫蹙

にして兩軍接戰すること六十餘合。我が軍每に勝ち、以て日暮に至る。遣る所の二千騎、賊の軍中に在りて旗を揚げて並び起る。賊軍大に驚き、擾亂して相擊刺す。遂に大に潰え奔る。我が軍勝に乘じて之を追ひ、疾兵急に接す。尊氏、迫蹙して自刄せんとせしこと三たび。義貞、桂河より還りて京師に陣す。其兵四に散じて鹵掠し、在る者も亦疲る。賊軍返り襲ふ。支へずして退く。舟田義昌等戰ひて之に死す。山道の兵、戰期を失ふ者還り至るに會ふ。諸將復戰を議し、夜、山を下りて陣す。旦日、楠正成、源顯家、路を分ちて進み戰ふ。尊氏親顯家と四條に戰ふ。義貞、義助、旗五十旒の建てゝ、横より之を擊ち、馳せて其背に出づ。賊軍呼びて曰く「中黑至れり」と。輙崩れ駭く。義貞、獨服を變じて賊中に入り、尊氏を索むれども獲ず。兵を分ちて之を追ふ。日暮に乃退き、還りて坂本に軍し、尊氏を誘ひ京師に還らしむ。而して間日之を襲ひ擊つ。尊氏大に敗れ、攝津に走る。義貞、諸將を率ゐて追ひ擊ち、又大に之を敗る。尊氏狼狽して海に航す。諸軍舟を爭ひて溺る者數千人、鎧仗を委棄せり。二月乘輿闕に還る。義貞振旅して還る。詔して義貞を左近衛中將に、義助を右衛門佐に遷さる。時に新附の兵萬餘あり。

（新田義貞旗之圖）

（新田義貞筆蹟）

【書寫山】播磨

元弘三年十二月廿日

源朝臣

中黑と爲す。淡濃辨ず可し。京師傳へて以て笑と爲す。已にして足利氏、西土を保聚し、勢復大に振ふ。赤松則村、石橋和義、及び菅某等、並び起りて之に應ず。三月、義貞に詔して山陽、山陰十六國を管領して西伐せしむ。疾有るに會ひ、江田行義、大館氏明を遣し、二千騎を將ゐて先發せしむ。赤松則村の兵に書寫山の下に遇ひ、擊ちて之を走らす。義貞、疾愈ゆ。五

【鹿子河班鳩驛】播磨
【白旗城】

萬騎を將ゐ、出でゝ鹿子河に次し、降附萬人を併せ、進みて班鳩驛に至り、且に則村の白旗城を攻む。城壁未だ成らず。則村降らんと請ふ。義貞喜びて爲に朝に請ふ。朝旨の至る比、壁成る。則村乃降らず。義貞大に怒りて曰く、「吾寧之を禽にして、而る後前み行かん」と。軍を合せて之を圍む。城險にして降らず。義助之を諫む。乃二萬人を分ちて義助に附し、進みて石橋和義を攻めしむ。和義、三石に據りて舟坂を距ぐ。義助、兒島高德の鄕導を得て、乃一軍を舟坂に留め、而して一軍は枚を銜み、馬舌を縛り、間道より舟坂の背に出づ。賊顧て驚駭す。義助、夾み擊ちて舟坂を拔き、遂に三石城を攻む。江田行義を遣し、菅氏の菩提城を攻め、大江田經隆の孫氏經を遣し、一千人を以て進みて、福山城に據らしむ。城未だ修めずして、尊氏・直義、九國の兵を擧けて來る。城兵之を避けんと欲す。氏經肯ぜず。五月直義兵數萬を將ゐて之を圍む。

【福山城】備後
尊氏、直義、九國の兵を率ゐて來る

氏經出でゝ擊ち、圍を潰して東に走り、義助に合す。義助、使を馳せて義貞に告ぐ。義貞答へて曰く、「敵、海陸並び進む。則陸なる者を扞がば、則海なる者、直に闕を犯さん。吾れ退きて兵庫に屯し、海陸を合せ捍んと欲す」と、此に於て、白旗、三石、菩提の三城、圍皆解く。義貞、先鹿子河に至る。河水方に漲る。衆、敵の後より逼らんことを以ひて、將帥の先に濟らんことを請ふ。義貞曰く、「敵來らば則水を背にして戰を決せん。吾れ殿して濟らんのみ」と。乃創病の者をして先濟らしむ。明日、水減じて義助、行義も亦至る。遂に濟りて兵庫に至れば、則其兵亡ぐる者半に過ぐ。帝、楠正成を遣し來り援はしむ。義貞、迎へ問ひて曰く、「朝議如何」と。曰く、吾れ公を召し還し、駕を叡山に奉ぜんと欲すれども聽されざるなり」と。義貞曰く「敗卒を驅りて銳師に當る。吾れ其必敗れんことを知る。願ふに、去歲、關東に敗れ、今復未だ一城をも拔かず。何を以て復命せん。吾故に死を決して一戰せんと欲するのみ」と。正成曰く「進退宜しきに從ふ。是を良將と謂ふ。公、且徐に之を計れ。且前に高時を殪し、後に尊氏を攘ふ。公の武多し。衆言何ぞ恤ふるに足らんや」と。義貞色釋く。旦日、尊氏の兵艦、海を蔽ひて至る。而して直義須臾より來る。旌旗天に彌る。義貞、正成をして直義を拒かしめ、義助、氏明をして尊氏を拒がしめ、自其後に居る。

尊氏の兵艦海を蔽て至る
正成義貞相會す

【津妓】播洲室津の遊女
本間資氏鬚を射る

相持して未だ戰はず。我が軍一騎あり。弓を挾み岸に立ち呼びて曰く、「將軍西より來る。必津妓を載せ、置酒高會せん。請ふ、一物を進めて酒を佐けん」と。箭を注ぎて俟つ。適鱸の魚を攫みて擧がるあり。乃馳せて之を射、其隻翼を斷ちて、敵の舟中に墮す。兩軍讙呼す。尊氏人をして其名を問はしむ。答へて曰く、「東人或は識らん。請ふ、刺を投ぜん」と。復一箭を發つ。三百歩を軼ぎ、船舷を貫く。尊氏其箭を視れば苛に彫りて曰く、「相模の人本間資氏」と。敵中傳へ觀る。資氏、扇を揚げて呼びて曰く、「方に今戰國なり。一矢愛しむべし。返し賜はらんことを願ふ」と。賊中答射する者あり。箭岸に達せず。我が軍齊しく笑ふ。射し者慙憤し、三百人を以て岸に上る。義助擊ちて之を殲す。賊の先鋒七百艘、過ぎて東し、將に西宮より上らんとす。新田氏の軍三萬、先往きて之を拒がんと欲し、岸に循ひて馳す。騎者走るが如く、舟者追ふが如し。而して兵庫、人なし。賊の後隊六千艘、盡く兵庫に上る。楠正成戰歿す。乃其陸軍と合して、以て義貞を蹂む。義貞曰く、「吾れ、西宮の旗幟を覩るに支賊のみ。兵庫より來る者は乃其渠魁にして、吾が擊たんと願ふ所なり」と。乃還りて、生田の林を背にして陣し、迎へ戰へども終に利あらずして走る。義貞、自殿して數返し擊つ。馬殪れて徒し、丘に上りて救を待つ。敵環りて之を射る。義貞、二刀を揮ひて十六箭を截る。小山田高家望み見て還り救ふ。其馬を授けて留り死す。

【西宮】生田攝津
正成戰歿す
小山田高家

初め高家軍に從ひ、民の麥を刈る。法、斬に當る。義貞人をして其營を視しむれば、則鎧馬鮮にして粒粟なし。義貞曰く「吾が罪なり。士は亡ふ可からず。法は亂す可からず」と。乃爲に田主に償ひ、粟を高家に賜ふ。高家愧す。故に之に死せしなり。義貞、因りて脫するを得たり。丹後より、殘兵六千を以て京師に歸る。上下色を失ふ。天子復叡山に幸す。

天皇叡山に幸す

六月、尊氏京師に入り、高師重等をして來り攻めしむ。分ちて三百餘所に陣す。義貞、義助、諸將を以て東阪を距ぎ、公卿、僧徒をして西阪を守らしむ。賊乃先西阪を攻む。二卿戰死し、僧徒力支へずして、急を義

【二卿】源忠顯、藤原雅忠

清紀兩黨

本間資氏、相馬忠重

軍約

高師重を生禽す

南都及畿内の兵來付す

御する所の紅裳を剪りて分賜す

貞に告ぐ。義貞、紀清の兩黨と赴き援け、賊を谷に擠し、數千人を殺す。因りて大嶽に陣す。賊又東阪を攻む。義助擊ちて之を卻く。賊更に西阪を攻めんと欲す。熊野の兵五百を以て前鋒と爲す。皆黑甲を被り、雲母坂より上る。本間資氏、相馬忠重、義貞の側に在り。瞰て笑ひて曰く、「今日の事、復諸君を煩さず」と。下ること百餘歩にして、相命じて各一賊を射る。甲を貫き冑を穿つ。賊敢て前まず。二人、我が軍を顧て曰く、「戰且に合へり。吾が爲に的を立てよ。吾れ將に射を習はんとす」と。我が軍、畫月扇を植つ。二人相滅めて、「月を射る勿れ」と。乃發す。兩箭、月を夾む。乃箙を解き弦を皷し、自ら敵に名いふて曰く、「盍ぞ吾が箭を受けて甲の堅脆を試ざる」と。賊懼れ、戰はずして卻く。山徒光澄叛き、夜、賊兵を啓くに會ふ。紀清の兩黨、覺りて之を鏖にす。初め我軍約あり、「急あらば鐘を撞き相報ず」と。一日群猿ありて鐘を撞く。諸營讙む。賊兵以て官軍下り擊つと爲し、乃大に騷ぐ。官軍遂に諸門を開き、一時に並び下る。火を賊營に縱ち、擊ちて大に之を走らせ、高師重を生禽す。義貞、山僧に附し、斬りて其首を梟せしむ。賊兵四に潰ゆ。既にして又聚る。官軍、猶賊兵寡しと謂ふや、出でゝ之を攻む。尊氏、光嚴帝を挾み、東寺に據りて城と爲し、兵を京師に出して官軍を要擊す。官軍破れ還る。七月、藤原師基、北兵三千を以て入りて援く。諸將議して曰く、「前日の戰、路を京中に取りしは敗れし所以なり。内野、磧、二道より之に赴くに若かず」と。已にして叛く者ありて其議を泄す。尊氏、乃大兵を以て邀へ擊つ。官軍復敗れ還る。天子、乃邑を叡山の僧徒に賜ひて、以て之を奬激し、南都を招かしむ。南都輙ち之に應ず。畿内の兵、之を聞き、所在相聚り、各將帥を請ひ、四の糧道を塞ぐ、賊窮困し、鎧馬を粥ぐに至る。遂に大に出でゝ鹵掠す。義貞、此に於て、出でゝ戰はんと議す。四國の兵を遣し、炬を阿彌陀峯に列ね、諸將帥と齊しく進まんことを約す。天子親臨みて軍を勞ひ、御する所の紅裳を剪り、分ちて之を賜ひ、以て笠識と爲さしむ。義貞發するに臨みて、白して曰く、「勝敗は天なり。豫逆睹す可からず。今日の戰、箭を尊氏の營に送らざらば、復生きて還る毋らん」と。

東寺に抵る

義貞、尊氏を呼びて其志を云ふ

藤原實世

堀口貞滿

乘輿方に駕す

貞滿諫奏

【元兇】北條氏を謂ふ

幡より入り、敗れ走る。南都の兵も亦期を失ひて至らず。義貞二萬騎を以て、行きて賊軍を破り、終に東寺に抵り、弓を執り矢を注ぎ、尊氏を呼び、之に語げて曰く、「天下擾亂すること久し。皇統の爭と曰ふと雖抑公と義貞とに由るのみ。其一身の爲に萬民を苦しましめんより、寧各單騎を以て決鬪し、雌雄を決せん。請ふ、一箭を送らん」と。箭、門樓を軼ぎて尊氏の帳中に入る。尊氏出でず。時に諸公卿の軍、及び四國の兵、皆賊に破らる。賊兵、悉く義貞に萃る。義貞返り擊ち、奮戰して之を破る。五條に至れば、賊復四より合る。義貞の額、流矢に中り流血面に被ふ。乃其騎をして、皆馬首を西せしめ、死を決せんと欲す。紅笠識の者八百騎、來りて之を救ふ。義貞を擁し、圍を潰して山門に歸る。是に於て諸將帥、皆守を棄てゝ走り歸へる。

八月、足利高經、佐々木高氏等、我が糧食を絕つ。九月、兵を遣し高氏を擊ち、敗れ歸る。我が軍多く逃亡す。

尊氏、伴りて降を乞ひ、帝の闕に歸らんことを請ひ、密に人をして款を致さしむ。帝、信じて之を聽す。尊氏又陰に諸將を招く。諸將多く之に應ず。十月、左衞門督藤原實世、人をして來りて義貞の營に告げしめて曰く「尊氏款を納る。車駕其營に赴かんとす。公、之を知るや」と。義貞、時に將士を延見し、報を得て信ぜずして曰く、「是れ使者の誤聽のみ」と。美濃守堀口貞滿曰く、「今旦、氏明、行義、故無くして中堂に赴く。吾固より之を怪む。請ふ、往きて詗はん」と。馳せて行在に至れば、則乘輿方に駕す。貞滿、揖して進み、其轅に攀ぢ、泣きて曰く、「臣、道路の說を聞き、未だ信否を知らず。今、乃信ず。義貞、何の罪あるかを審にせずして、陛下乃其聖眷を回し、以て反賊を庇ふや。元弘の初めに當りて、義貞齡を奉じて罪を伐つ。元兇を旬日に殪し、以て宸憂を除く。古の忠臣と雖、恐らくは過ぐること能はじ。尊氏反きてより以來、又族を擧けて王に勤め、陛下の爲に屢萬死を冒せり。宗族の義に死せし者八千餘人。而れども賊勢滋熾に、王師利を失ふこと、豈盡く戰の罪ならんや。蓋し天未だ聖德を眷ざるのみ。今日西駕の轅、竟に還す可か

天皇義貞等を慰諭す

らざるか。則義貞以下の族屬、見に在る者五十餘人を召して、死を御前に賜ひ、然る後發せよ」と。帝、憮然たり。頃くして、義貞、義助、義顯と、三千人を率ゐ、入りて階下に列す。色惱にして禮恭し。上、義貞兄弟を前め、之を慰諭して曰く「尊氏反するに當りて、卿は其同宗爲れども、乃挺でゝ義に歸し、傾く之を支へ、廢るを扶け、終始渝らず。朕深く之を嘉す。卿の宗族に仗りて、以て四海を鎭平せんと欲す。天運未だ會せず。兵疲れ、勢蹙る。是を以て權に和議を講じて、以て時を待つのみ。本宜しく謀及ぶべし。而れども漏泄を慮り、期に臨みて相告げんと欲す。顧ふに、貞滿未だ之を察せざるなり。然れども其言に由り、亦省る所あり。朕聞く、『越前の地方、順に歸する者多し』と。又前に遣しゝ所の將士あり。卿宜しく彼れに赴き、北陸を經略し、以て恢復を圖るべし。朕が京師に還るを以て、卿が賊名を得んことを恐る。今特に太子を以て相附す。卿、之を視ること猶朕の如くせよ。軍國の事は大小となく、當に卿の處分に由るべし。朕已に卿の爲に耻を忍ぶ。卿も亦朕の爲に努力せよ」と。言畢りて涙を垂れ給ふ。將士皆泣き、能く仰ぎ視る者莫し。是に於て遂に義貞をして、皇太子を奉じて越前に赴かしむ。義貞、卽夜、日吉祠に造り、寶刀を納め禱りて曰く「神、吾が忠義を鑒み、吾が行をして恙なく、兵を發して賊を滅すを得しめよ。卽然るを得ずば、猶子孫をして再び起る者有らしめよ」と。明日、東宮及び皇子尊良を奉じて北行す。族を擧げて之に從ふ。獨大館氏明、江田行義、及び宇都宮公綱、本間資氏等、乘輿に從ひて京師に入る。尊氏、帝及び從者を囚し、資氏を殺して以て兵庫、雲母阪の役に報ず。義貞七千騎を以て驛津に至り、足利高經の大兵途を塞ぐと聞き、轉じて木芽嶺より行く。大雪に會ひ、士卒凍ゑ飢う。弓箭を燎き、相抱へて煖を取る。土居、得能氏は賊兵に遇ひ自殺す。千葉氏は其衆を擧げ、叛きて賊に降る。義貞、行くこと三日にして、纔に敦賀に至る。河島維賴、氣比氏治、迎へて金崎に入る。義顯、義助を越後に遣し、杣山に至らしむ。杣山の城主瓜生保、厚く之を待す。而して高經詐りて、詔旨、新田氏を討つの檄至ると傳ふ。保、之を信じ、門を閉ぢて自ら守る。其弟僧の義鑑來り謁して曰く、「臣が兄、愚魯に

義貞乘輿に別れ皇太子を奉じて越前に下る

木芽嶺

敦賀【金崎杣山】

越前瓜生保

由良光氏

して輕しく賊の計を信ず。然りと雖、苟くも是非を曉らば、終に順に歸せん。臣願くは一公子を擁戴するを得て、時を候ひて乃起らんのみ」と。義助、其他無きを察し、遂に其子式部少輔義治を以て之に託す。而して兵を引きて金崎に還る。兵道より亡ぐ。二百騎あり。今莊淨慶兵を聚めて道を塞ぐに會ふ。淨慶の父は、嘗て我軍に屬せし者なり。義助、乃由良光氏をして往きて之に說かしむ。淨慶答へて曰く、「臣の去就父と異なり、沮まざるを得ず。願くは部下の一名士を得て以て口を藉らん」と。光氏歸り報ず。義顯曰く、「諸君、我に從ひて此に至る。情父子と同じ。寧吾れ士に代らん。士をして我に代らしむる莫けん。往きて更に之を告げよ、聽かずば則齊しく戰死せんのみ」と。光氏往きて告ぐ。淨慶決せず。光氏馬を下りて坐して曰く、「將帥の身は天下の輕重に係る。猶身を以て吾が輩に代らんと欲す。吾れ其れ命を致さゞる可けんや」と。刀を拔きて將に自殺せんとす。淨慶、感歎して遽に之を止めて曰く、「吾れ、其れ罪に當らん」と。道を開きて跪伏す。義助、義顯、撫勞して過ぐ。其兵又亡ぐ。在る者僅に十六騎なり。而るに敵三萬騎を以て金崎を圍むと聞き、圍を衝きて城に入らんと欲す。衆之を難ず。栗生顯友、策を出し、夜、衆をして衣帶を解き、之を樹に掛け、旗幟の狀を爲さしめ、以て疑兵を張る。武田與一、右手を傷く。木刀を腕に約し、顯友、副刀を亡ひ、木を斫りて梃と爲し、曉に乘じ敵に薄り、呼びて曰く「杣山の援兵至る」と。敵駭き顧る、義貞、因りて出で擊ちて之を走せ、義助、義顯を納る。是に於て、相與に、東宮、皇子を船に奉じ、酒を置き樂を奏し、以て之を慰藉す。尊氏、又高師泰等を遣し、兵六萬を將ゐ、海陸より來り攻めしむ。城、山を負ひ海に臨む。城兵拒ぎ戰ふ。日に千餘人を斃す。十一月、城兵、海上に人の泅ぐ者有りて、城を望みて來るを見る、至れば則亘忠景なり。詔書を髻に結び、之を進む。蓋し天皇吉野に逃れ、行宮を建て、義貞に詔して京師を攻めしめんとなり。義貞等大に喜ぶ。時に瓜生保、賊軍に屬して城下に在り。然れども其諸弟、杣山に起りて、以て義貞に應ず。保、將に拔け還らんとし、同志の者を得んと思ふ。宇都宮泰藤、天野政貞、保と營を隣す。一日客あり。二人

栗生顯友

亘忠景

【重畫】足利の紋
【中黑】新田の紋

に問ひて曰く、「重畫、中黑、孰か美なる」と。泰藤曰く、「中黑なる哉。三鱗廢れて重畫興る」。重畫に代る者は中黑に非ずや」と。三鱗は北條氏の徽號なり。政貞曰く、「然り」と。保、聞きて竊に喜び、宴二人と款し、因りて其志を告ぐ。二人之を同じくす。時に高師泰、四に關を設け、符を以て出入せしむ。保、詐りて百五十人を以て邑に歸り、菽を取らんことを請ふ。吏、符を給し。其言の如くせしむ。保、符を剽り三百人と改書し、泰藤、政貞と俱に關を出で、杣山に入る。義鑑及び三弟源淋、重、照、皆大に喜び、義治を推して將と爲し、族を擧げて兵を招く。兵聚るもの千餘なり。北道を扼守す。師泰之を聞き、六千騎を遣し、來り擊たしむ。保、悉く聚落を焚き故に湯尾一驛を遣して以て敵を誘ふ。敵、至りて驛中に宿す。保、泰藤と輕兵を遣し、夜、襲ひて之を敗る。足利高經、兵を引きて國府に歸ると聞き、又要擊して之を破る。旁近風を望み、爭ひて義治に附く。義治、不豫の色あり。義鑑曰く、「郎君、喜ぶ可きに憂ふるは何ぞや」と。曰く、「金崎城守の苦を思ふのみ」と。義鑑泣下る。泰藤、政貞、墻を隔てゝ之を聞きて曰く、「此子、心腸あること此の如し。吾曹曷ぞ力を出さゞる可けんや」と。

延元二年里見時成

明年、正月、里見時成を推して將と爲し、五千騎を以て金崎を救ふ。師泰、兵二萬を遣し逆へ戰ふ。諸將敗れ走る。時成、賊の爲に圍る。保、義鑑、身を拠んで、赴き援ふ。其三弟之に從はんと欲す。義鑑、叱して曰く、「吾が兄弟皆死せば、誰か式部君を翼くる者ぞ」と。三弟乃止る。時成、保、義鑑、皆死す。餘衆走り杣山に歸る。保、老母あり。酒を酌みて、義治に献じて曰く、「兒輩力めず、乃里見公を亡ふ。然れども兒輩をして盡く還らしめば、則妾が心、何と云はん。今二兒命を致す。妾が心を慰むるに足るのみ」と。將士、之が爲に奮激す。然れども力再舉する能はず。金崎城中、日杣山の援を望めども至らず。已にして糧竭く。義貞、義助、愛する所の馬を殺して、以て士卒に食ましむ。將士皆其出でゝ杣山に赴き、計を以て夾攻めんことを勸む。義貞、義助、之に從ふ。三月、河島維頼を以て鄉導と爲し、夜に乘じて城を出で、潛に杣山城に入る。城兵大に喜び、日金崎を援はんことを議す。而れども賊兵暖に乘じ、來り聚まること十萬騎に至る。杣山の兵僅に五百人、甲馬備はらず。逗撓すること二旬、金崎の兵、馬を食ふ。馬盡きて食ふ可き者なし。賊候ひて之を知り、四面より齊しく登る。城兵力竭きて戰ふ能はず。外城既に破る。由良具滋、長濱顯寛、入りて義顯に見えて曰く、「事已に此に至る。東宮を脫せしめて留死せん。臣等請ふ、拒ぎ戰はん。君、徐に計を爲せ」と。五十人を率ゐて出で、死尸を割き、相共に之を食ひ、力めて前門を拒ぐ。義顯、皇子尊良に謂て曰く、「臣は將種なり。死せざる可からず。殿下は臣と異なり。遽に自殘ふ勿れ」と。皇子笑ひて曰く、「吾れ卿が死を視て、豈獨り生く可けんや」と。因りて義顯に、「自殺の方如何」と問ふ。義顯曰く、「臣の爲す所を視給へ」と。卽、刀を拔きて自左脇に樹て、劃して其右に至り、刀を皇子に奉じて伏す。皇子刀を取る。血滑にして握る可からず。握るに衣袖を以てし、自刃して死す。藤原行房、里見時義、武田與一、氣比氏治等、皆之に殉死す。氣比齊晴、膂力ありて善く泅ぐ。舟に太子を載す。楫櫓なし。絙を舟に施し、之を執りて游ぐ。游ぐこと千餘步にして、蕪木浦に至り、土人に託して之を杣山に奉ぜしめ、歸りて金崎に死す。具滋、顯寛、謂へらく、「事畢れり」と。門を開き陣を冒し、進みて師泰に薄る。賊其疲羸するを認め、覷れば輒之を殺す。凡城兵八百、降る者十二人のみ、其餘皆死す。栗生顯友、船田經政等四人、岩穴に匿れて免る。太子、蕪木浦に匿る。浦人叛きて之を賊に告ぐ。賊太子を取りて、義貞兄弟の所在を問ふ。太子紿きて曰く、「昨、自殺し、其兵之を火く」と。賊乃太子を尊氏に押送す。義顯の首を傳へて、義貞ハ問はず。

城兵力竭く

尊良親王以下自刃す

氣比齊晴

死尸を割きて之を食ふ

金崎落城

金崎城中糧盡きて馬を食ふ

義貞杣山に在り

太子捕へらる

足利高經

義貞杣山に在り。當に一戰して耻を雪ぎ、以て行宮の聲援を爲さんと欲し、間に義故を招き聚む。夏、大舘氏明、京師より伊豫に逃れ、江田行義は丹波に逃れ、金谷經氏は播磨に逃れ、並に兵を起す。義貞の次子德壽上野に在り。源顯家西上すと聞き、兵を聚めて之に應じ、先發して鎌倉を攻めんと欲す。顯家至るに及びて、兵を合せて之を攻拔す。是に於て、義貞未だ死せずと聞くや、冬、足利高經を遣し、北陸の兵を擧げて來り擊たしむ。越前の府に據り、兵を出して交戰す。義貞、畑時能

三年

足羽

尊氏太子を鴆殺す

帝手書して義貞をして男山を援けしむ

平泉寺の僧兵

義貞夢みる

【陰】北地燈明寺

を遣し加賀の兵を糾し、攻めて大聖寺の城を拔く。義助及び細谷秀國を遣し、越前に入り三の砦を築きて、高經と相持す。

明年二月、雪釋く。義助、益城を築きて敵に逼らんと欲し、百餘騎を率ゐ、地を鯖江に相す。賊將細川孝基五百騎を以て奄至するに遇ふ。義助擊ちて之を走らす。因りて火を擧げて援を招く。義貞來り援ふ。高經、又數千騎を以て來り、水を夾みて陣す。我が兵、流を亂りて大に戰ひ、擊ちて高經を破る。高經走りて足羽を保つ。賊、風を望み解走する者三十餘城なり。義貞因りて國府に據る。

事、京師に聞ゆ。尊氏、直義、怒りて曰く、「太子我を紿くこと此に至る」と。遂に之を鴆殺す。是の時に當りて官軍頗る振ふ。德壽、顯家に從ひて美濃に至る。堀口貞滿も亦之に附す。皆義貞と軍を合せ、以て京師に入らんことを願ふ。而るに顯家、獨、其功を專にせんと欲し、遂に兵を引きて回りて南都に出づ。時に叡山の僧徒、又多く義貞の來るを望む。而して義貞、必足羽を拔きて後西せんと欲す。是の時顯家、和泉に敗死す。其弟顯信、德壽等と男山に據る。帝、手書して義貞に諭して男山を援はしむ。

時に大江田氏經等越後の兵を發し、擊ちて普門、富樫の二氏を破る。七月、進みて越前に至る。義貞其兵を併せ、將に高經を攻めんとす。而して詔書適に至る。義貞感奮して曰く、「源平氏ありしより、未だ天子親書の詔を得る者を聞かざるなり」と。因りて直に赴き援はんと欲す。兒島高德の策を用ゐ、自、兵三千を以て高經に備へ、二萬を以て義助に附し、敦賀に至らしむ。男山陷ると聞き、引きて還る。

是に於て兵を合せて專高經を攻む。高經、平泉寺の僧兵を誘ひ、藤島以下の七寨を修め、之を守らしむ。義貞、河合城に在り。己龍と爲りて地に臥し、高經駭き走ると夢みる。衆以て吉夢と爲す。或は曰く、「龍は陽物たり。陰に方りて見る。是れ凶兆なり」と。是月二日、義貞、諸軍を以て足羽を攻め、燈明寺の前に至り、兵を分ちて七隊と爲し、以て七寨に當る。藤島の兵、援動す。我が兵、因りて疾く攻むれども拔く能はず。義貞、望み見て、遽に五十餘騎を以て之に赴き、賊兵三百に田中に遇ふ。矢下ること雨の如し。我が兵楯なし。身を以て義貞を蔽ふ。中野宗昌、義貞に獨身遁逃せよと勸む。義貞曰く、「士を失ひて獨免るゝは吾が志に非ず」と。馬に鞭ちて且進む。馬、箭を被りて瘡る。義貞起たんと欲す。白羽箭あり。其眉間に中る。乃、刀を拔きて自ら刎ねて死す。年三十八なり。賊未だ其何人たるを知らざるなり。宗昌等、屍を環りて自殺するを見る。又尸を檢して錦囊の書を得。書辭に曰く、「賊を討つの役、朕一に卿を煩す」と。蓋し帝の手書なり。

義貞戰死す

乃其義貞なりしを知れり。

時に日暮、我が軍赴き援ふ者なし。已にして數騎河合に還るを見るや、以て義貞と爲し、各自退き還る。義助還りて河合に至り、義貞を求むるに在らず。久しくして實を知る。將士惶惑して叛く者あり。夜、城に火せんとする者三たび。天明其兵を檢すれば則二千のみ。義助乃走りて國府に歸る。河島維頼に三峯を保たせ、畑時能に湊城を保たせ、瓜生照に杣山を保たしむ。

勾當內侍

照歸り、藤原氏に淺津橋に遇ふ。藤原氏は、中納言行房の妹にして義貞の夫人なり。初め勾當內侍たり。延元の初め義貞、夜、入りて直し、其箏を彈ずるを見、心これを慕ふ。帝聞きて之を憐み、義貞を召して酒を賜ひ、因りて內侍を賜ひて妻と爲さしむ。伉儷甚篤し。義貞の詔を受けて北行するとき、之を近江に置き、居ること二歲、迎へて杣山に致す。既に至る。義貞、足羽に在りと聞き、轉じて之に赴き、途に照に遇ふ。照、馬を下り、輿前に跪きて曰く、「夫人安に往く。公已に戰沒せり」と。夫人大に慟し殆ど絕ゆ。杣山に歸り、喪を義貞の舊居に執らんと欲す。敵來り逼るを以て、遂に京師に歸る。

義貞の首を京師に梟す

是の時、義貞の首、傳へて京師に至る。足利氏の君臣相慶び、終に之を梟す。

藤原氏之を聞き、卽夜、髮を削り、遂に西山に匿れて身を終れり。藤原氏、子なし。義顯、義興、義宗、皆東國に產る。義顯、義貞に先だちて難に殉ず。義興は妾の出なり。故に義宗、義顯に代りて嗣と爲る。六歲にして左兵衞佐となり、武藏守を兼ぬ。義興は卽德壽なり。男山の陷るや、走りて吉野に歸る。帝、其貌を壯として曰く、「汝は乃、父の家を起す者」と。因りて名を義興と賜ひ、右兵衞佐を授く。義貞歿して二

義興

宗良親王

旬、義興をして北條時行と、皇子宗良に從ひて東國に趣かしむ。颶に遇ひて相失し、漂ひて武藏に至る。是に於て、義宗と皆東國に匿る。

義助、稍、敗軍を收め、畑時能、由良光氏、一井氏政等と各諸城を屠りて義治、北國に在り。七月、義助、足利高經、城に火して走り河合に會し、六千を以て足羽を攻む。時能先往き、夜、賊に薄りて戰を挑む。

後村上天皇位に卽く

畑時能鷹巢城

る。是の歲、帝崩じ、後村上天皇位に卽く。十二月、義助に詔して、義貞に代り、師を統べしむ。義助、先帝崩ずるに臨みて、特に新田氏を眷眷すと聞くや、方に報効を思ふ。而して尊氏、七國の兵を發し來り攻む。諸城悉く陷る。義助、美濃に走る。獨、畑時能、殘兵二十七人を以て、鷹巢城に據る。城甚險固にして、賊拔く能はず。足利高經、高師治、兵を合せて之を圍む。三十七營を結び、互に進み迭に攻む。時能、幼より角觝を喜び、材武人に絕れたり。姪の僧快舜、善く戰ひ、僕の惡八郎、缺唇にして力あり。又一狗を畜ふ。犬獅子と名づく。三人の者、夜出でゝ賊を襲ふ。一營に向ふ每に、輒狗をして先往かしむ。賊備あれば則ち吠ゆ。不らざれば則尾を搖し還り報ず。三人の者、乃營を斫りて入る。大に呼びて奮擊す。賊輒甲を委てゝ走る。各潛に時能に賂して曰く、「願くは我が營を襲ふこと勿れ」と。時能の驍名敵中に振ふ。呼びて「畑將軍」と曰ふ。會一井氏政來り、城に入りて共に守る。時能、乃氏政を城に留めて、自十六人を以て、夜、伊地山に出づ。高經、以て平泉の僧徒來りて城兵を援くと爲し、三千騎を將ゐて邀へ擊つ。時能、鮮甲鐵馬、躍り出でゝ曰く、「畑將軍此に在り」と。高經の陣動く。時能馳せて之に乘ず。高經潰え走る。而れども快舜七創を被り、卽日死す。時能、甲隙みな創つき、飛鏃肩に沒す。病むこと三日にして死す。是より北國復官軍なし。

時能死す

賊乃義助を根尾城に攻む。城陷る。義助、族從數十人を以て、微服して尾張氏に投ず。留まること十餘日、伊賀、伊勢に道して、行宮に至る。帝、延見し、泣きて之を勞ふ。詔して一級を加へ、且從者を賞す。藤原實世、竊に言て曰く、「是れ何ぞ平維盛敗れ歸りて爵を加ふるに異ならんや」と。藤原隆資之を折きて曰く、「義助の敗は、其罪に非ざるなり。近日北國の將士、大將に由らずして、裁を南山に取る。南山の臣僚、徵勞に服するを以て邑を北國に得、將權以て輕く、士心以て驕る。而して義助、其敗を受く。豈其罪ならんや。主上之を察す。乃是命あるなり。猶奏穆の孟明を勞する如きのみ。子何ぞ喩を失するや」と。實世答ふる能はず。帝遂に義助を刑部卿に拜す。

藤原隆資

【南山】吉野行宮

興國元年

興國元年三月、伊豫の官軍、將帥を得んことを請ふ。朝議、義助を擬す。而して海陸皆敵なり。備前の人飽浦信胤、官軍に應ずるに會ふ。道乃開く。是に於て、義助、兵五百を以て發す。四月、伊豫の國府に至る。大館氏明に遇ふ。氏明、初め京師を逃れ行宮に詣り、伊豫の守護となるを得、土居、得能氏と諸城を保守す。義助を得るに及びて、軍益々振ふ。議する者、皆謂へらく、「西南復す可きなり」と。五月、義助疾作り、七日にして卒す。將士喪を秘す。而れども賊已に之を知り、來りて河江城を攻む。金谷經氏、伊豫の兵を統べて之を救ひ、大に海上に戰ふ。風起るに會ひ、我が船漂ひ去る。賊船岸に達す。我が兵風を冒して之を返さんと欲す。經氏曰く、「我が軍數奇此に至る。返すも必利あらじ。唯當に前み、山陽に至りて之に據るべし」と。乃備後に上り、鞆城を攻め、拔きて之に據る。山陽の賊兵も來り戰ふ。未だ決せざるに、賊將細川頼春、氏明を世田城に圍むと聞く。經氏、乃、數百人を將ゐて赴き救ふ。賊兵數千と戰ひて敗れ、殘兵を率ゐて備後に歸る。頼春、乃、萬騎を以て世田を攻む。三旬にして城內食竭き、氏明以下悉く自殺す。篠塚伊賀、船中に在り。門を開き、鐵梃を提げて出で、呼びて曰く、「吾は新田公の親兵篠塚なり。盍ぞ吾を殺して以て賞を得ざる」と。賊皆披靡す。乃徐行して去る。賊敢て追蹤せず。今治の浦に至りて賊の空船を見る。獨舟人あり。篠塚游ぎて之に達し、跳りて船に入り、自ら名いふて曰く、「吾を隱岐に送れ」と。手づから錨を拔きて桅を樹て、船屋に登りて鼾睡す。舟人畏怖し、送りて隱岐に至る。以て終れり。篠塚に女あり。皇太后に仕へ、伊賀局と曰ふ。楠正儀に嫁す。勇力、父に類すと云ふ。義貞、義助、既に死せり。足利氏復忌憚なし。兒島高德備前に在り。新田義治を上野より招き、謀りて兵を起せども克たず。乃間に

世田城

篠塚伊賀

伊賀局

正平六年

京師に入り、尊氏を襲はんと欲す。又克たず。義治走りて東國に匿る。從兄義興、義宗と、皆潛に父の仇を復せんと圖る。釁を窺ひて未だ發せざるなり。

正平六年、尊氏、直義と隙あり。長子義詮をして京師を守らしめ、而して自ら東し、直義を擊ちて之を殺し、入りて鎌倉に居る。次子基氏を立てゝ東國を管領せしむ。義詮、偽りて降らんことを請ふ。帝之を許す。兒島高德、由良信阿と行宮より至り、旨を新田氏に諭して曰く、「天子、義詮の降を納れ、北、京師に還らん。其實は虛に乘じて、誅を行はん爲なり。尊氏彼に在り。公等之を圖れ。機を失ふ可からず」と。因りて義宗を左近衛少將に進む。義宗、乃東國を徇ふ。義貞、義助の遺臣、奮起して來り從ひ、數萬人を得たり。直義の故黨石堂義房、三浦高通等又內應を爲す。戰酣なるとき、起ちて尊氏を刺さんと約す。尊氏、覺りて之に逐ふ。而して義宗等未だ知らず。閏正月、兵を武藏野に勒す。義興左に居り、義治右に居る。義宗自中軍に將として其後に在り。尊氏の兵十餘萬なり。義興先合し、義治之に次ぐ。殺傷相當る。敵將饗場某、六千騎を率ゐて更り進む。義宗、兒玉黨を麾き、擊ちて饗場を走らす。饗場走りて尊氏の陣に入る。尊氏の陣大に亂る。義宗、直に前みて其牙旗を指し、大に呼びて曰く、「吾れ、今日、天下の爲に賊を討ち、一家の爲に仇を復すしと。奮擊して之を破る。北ぐるを追ひ、馳すること三十餘里にして石濱に至る。尊氏自殺せんと欲す。其兵返りて戰ひて之に死す。尊氏間を得、濟りて前岸に達す。兵三萬を收め水を壓して軍す。而して義宗の騎能く屬せし者五百人。時已に昏黑、來り助くる者なし。義宗切齒して止り、乃還る。義興、義治を求む。義興、義治、白旗の兵三萬北げるを見て、以て尊氏と爲し、兵を合せて之を追ふ。降る者路に屬す。二人馬を駐めて之に揖することと數。其兵顧ずして前む。留り從ふ者僅に三百。伏兵數千之を圍むに遇ふ。二人苦戰して出づ。甲冑皆破れ、刀刃、鋸の如し。身各數創を被り、百餘騎を亡ふ。乃議して曰く、「我れ既に武藏守と相失す。此寡羸を以て將に安くに歸らんとするや。基氏に遇ひて死を決するに若かず」と。衆、之を然りとし、進みて關戶に至る。石堂、三浦氏、五千騎を以て西行するに會ふ。其兵を并せ、鎌倉を襲ふ。某氏甲を悉し、出でゝ義興を拒ぎ、海濱に鬪ふ。三騎を斬り、馳せて賊陣を貫く。左轢斷ちて地に委す。乃刀を脇に挾み俯して之を結ぶ。賊群り至りて其頸及び背を擊つ。義興爲に動ぜず。結び畢りて賊に應ず。賊驚き走る。遂に義治と合し、擊ちて基氏を走らせ、仍鎌倉に據る。義宗、時に碓氷嶺に據る。越後、信濃の兵二萬、皇子宗良を奉じて來り會す。上杉憲顯等又屬す。尊氏兵八萬を收め、鎌倉を復せんと欲す。義宗の軍復振ふと聞き、乃先碓氷を攻む。碓氷の地は山を負ひ、川を帶び、據守に便なり。而して義宗、年若くして氣銳し。數出でゝ平地に戰ふ。敵、兵を更へて交進み、午より酉に至る。義宗終に敗走し、嶺に上りて陣す。既に夜なり。足利氏の軍炬を舉げ、山澤に布滿す。顧て我が軍を視る。炬、燭火の如し。義宗驚きて曰く、晝日失亡する所、未だ此の如きに至らず。逃るゝ者有るに非ざるを得ん。前に勁敵あり。後に鄕土あり。衆、我れ退き走るかと疑ふなり」と。乃自鎧を釋き、鞍を卸し、以て走らざるを示す。衆稍定まる。夜半、上杉氏、炬火數千を望み見て、復賊軍に屬す。則遽に信濃に走る。是に於て走る者相ひ踵ぐ。義宗獨留るを得ず。曉に比び、退きて越後に入る。八州の兵盡く尊氏に附く。還りて鎌倉に向ふ。義興、義治、迎へ戰ひ、死を決せんと欲す。將士諫め止む。乃信濃に走る。義宗は既に越後に歸る。帝、猶行宮に在すと聞き、赴き之を援けんと欲し、兵七千を收めて越中に入る。桃井、吉良、石堂、小山、宇都宮の諸族、皆之に應ず。皇子宗良を奉じて西上す。途に行宮已に陷ると聞き、卽解きて歸る。是の役や、赤松則祐も亦行宮に就きて降り、將軍興良を奉ぜんと請ふ。興良は故護良の子なり。材武父に類す。則祐、護良の舊恩を思ひ、擁して播磨に據りて、以て聲援を爲さんと欲す。帝之を許す。則祐、敗れ叛き去るに及びて、興良、京師に拘はる。但馬の人本莊某、之を奪ひ、則祐と戰ひて敗れ死す。興良走りて吉野に歸る。後十餘年、赤松氏範官軍に屬し、復興良を奉じて主と爲す。已にして叛きて義詮に應ず。帝、兵を遣し、擊ちて氏範を走らす。興良、南都に奔り、終る所を知らず。人其護良を辱むるを譏る。

尊氏を刺んとす武藏陣

義興、義治

關戶

義興、義治、基氏を走らす

【碓氷嶺】上野

義宗

八州の兵皆尊氏に應ず

赤松則祐來り降る

興良吉野山に入る

義宗、義興、義治越後に匿る

〔二人〕長衡 堯寛

矢口渡

義興自殺す

正平十三年

二十二年

義宗死す

建德元年

義治終はる所を知らず

元中二年

元中九年

小山義政

義宗、義興、義治と、倶に越後に匿れ、居ること數年、武藏、上野の將士、連署して來りて一人を請ひ、奉戴して義を擧げんとす。國人相倶に之を匿す。或人、兵を以て圍む。義興、義治、皆疑ひ、敢て往かず。義興、奮ひて往く。足利基氏、兵を發して來り捕へんとす。義興、輙圍を潰して逃る。蹤迹す可からず。基氏之を患ふ。我が故將竹澤良衡、族の江戸堯寛と叛きて、基氏に降る。基氏の宰畠山國清、二人に囑して義興を圖らしむ。乃罪を獲る爲して、亡け來りて義興を索めて之に仕へ、昭すに美姫を以てし、漸く狎れ近づくを得たり。因りて之を誑きて曰く、「鎌倉襲ふ可し」と。義興衆を遣し、先往かしめ、親信と之に繼ぐ。路、矢口渡に由る。堯寛、舟人に敎へ、舟腹を鑿ちて之に枘せしめ、載せて中流に至り、枘を拔きて泗ぎ去る。伏兵河を夾みて起る。舟將に沒せんとす。井伊直秀、手に義興を扼ぐ。義興眼を瞋らして曰く、「豎子の計に陷るを悔ゆ」と。腹を割きて死す。直秀、世良田、由良、大島等と、皆自刃す。土肥、市川等、刀を啣みて泗ぎ、堯寛と鬬ひ、十餘人を殺傷して死す。時に正平十三年十月なり。基氏重く二人を賞す。堯寛邑に赴き、復矢口に由る。天俄に雷雨あり。顧て義興己れを追ふを睹み、馬より墮ち、疾作りて死す。鎌倉の人、又義興の來り襲ふを夢みるや、矢口の民、祠を立てゝ義興を祀る。

義興已に死して、義宗、義治、仍越後に在り。二十二年、足利義詮死す。子の義滿猶幼なり。明年七月、義宗、義治、兵を越後、上野に起し、足利氏の將上杉能憲と戰ふ。克たずして義宗之に死す。義治、出羽に走る。建德元年正月、義治、兵を收め武藏、上野に出で、上杉朝房と戰ひ、復克たず。走りて信濃に匿れ、終はる所を知らず。

義宗の子貞方、相模守たり。義治の子義隆、刑部少輔たり。後龜山天皇の元中二年、二人並に信濃の浪合に匿れ、潛に宗族を集む。足利氏滿、鎌倉を管領し、兵を遣して之を鏖にす。貞方、義隆、脫走して陸奥に入る。九年、天皇、足利義滿の劫和を納れ北京師に入る。義滿天下に贖ひて、新田氏の族を索む。是より先、小山義政、小山城に據りて、新田氏の爲にす。氏滿の爲に攻め破られて死す。義政の子稚狗も、復兵を起し

義隆鬪死す

君臣の際會難し

て男體城に據る。年餘にして城陷る。走りて陸奥に入りて、田村淸包に依る。是に於て相與に義を擧ぐ。貞方、義隆を推して將と爲し、白河に軍す。氏滿、十一州の兵を將ゐて來り擊つ。吾が衆潰ゆ。貞方、義隆復逃れ走る。是年丙子なり。癸未の歲、義隆、箱根の山中に匿る。竹下の人安藤某之を鎌倉に告ぐ。來り捕ふ。義隆鬪ひ死す。庚寅の歲、貞方、鎌倉に在りて、陰に義故を糾合す。事覺はれ、千葉兼胤に捕へられ、七里濱に斬らる。新田の宗統、是に於て絕ゆ。而して其支族參河に匿るゝ者、歲再庚寅に周りて後、大に興る。事末編に詳なり。

外史氏曰く。余、義貞の手記せるものを見る。蓋し其未だ事を擧げざりし時、家の子弟に武門の法戒を語る。淺近のみ。然れども言へることあり。曰く、「將爲る者は上を奉じ下を撫し、志を決して行き、運を天に聽せ、人を尤むる勿れ」と。義貞、元弘に成りて、延元に敗れしも、又時運の可と不可とに有るか。將上の人、之に負くに有るか。叡山の事に至りては、負くの甚だしきものと謂ふ可し。帝蓋し此より先、未だ曾て事を面議せず。此に至るも亦兩端を嘗試し、孰れか成るか僥倖せり。是を以て將帥を待つ、惡ぞ時艱を濟はんや。吾れ嘗て咎む、「義貞の東伐するとき、兵を按じ重きを持し、奥兵、其内を援すを俟ちて、而る後之に應ぜんともせず。懸軍長驅し、一敗して賊勢を爲す。賊、西奔するに及びて、乃甲を捲きて窮追せず。兵を堅城に頓めて、以て賊の再燃するを致す。是緩急兩ながら機を失ひしなり。然して當時、主聰壅蔽せられ、國論苟嬉なりしこと此の如し。蓋し善謀ありと雖、輙く行はれ難ければ、則亶に其戰を罪す可からざるなり。是の故に官の爲にすれば、則敗れ、私の爲にすれば則ち成る。寧敗れて忠義たるも、成りて奸賊たらざれ」と。義貞の志も亦悲しむ可し。

吾れ平安に居り、東山の岡阜起伏を睹る毎に義貞の力戰せし處を指し、仰ぎて叡山を觀て、又其拜辭して北行せし時を念ふ。帝、南遷するに及びて、蓋し深く此擧を悔い、哀痛の詔を下せり。而れども已に及ぶ無し。噫、君臣の際會難きかな。慨歎せざる可けんや。假に義貞をして覇心有らしめば、其初め鎌倉に克つ

に當りて、北條氏の餘燼未だ滅びず。而して足利氏の反跡已に形る。義貞此を以て請を爲し、坐して舊府を鎭め、力を蓄へ威を養ひ、護良親王と、東西謀を合せ、君側を清めんと請はゞ、朝廷敢て聽さずばあらじ。尊氏をして天子を挾みて我に臨ましむるも、其逆節漸く長じ、天子終に堪ふる能はず。必將に我を引きて以て自ら援けんとす。猶後白河の近く義仲を疎じて、遠く賴朝に款せしが如くならんのみ。是れ新田氏の上計なり。然かならずば、其始め鉞を授けらるゝに當り、進みて信濃、上野に據り、之を奥羽に連ね、俯して八州を瞰ひ、賊の吭を扼して、其背を拊つときは、賊、形格り勢禁じ、必我を棄てゝ以て闕を犯さじ。是れ又其次なり。其叡山を辭するに及びては、則事爲す可からず。然れども太子を擁するを得て、進退自如たり。越前に赴かんと爲して、潛に上野に歸るも、勢或は達す可し。舊部を收合し、賊の巢窟を奪ひ、據りて以て根本と爲し、進めば、則恢復を成し、退けば、則翼戴を圖り、又以て其才を展べ、其志を得べし。計此に出でず、無根の兵を以て東西に奔走し、而して謀と戰と皆已に由らず。宜なるかな其困屈して成る所なきや。然りと雖、令を奉じて周旋し、鋭意王に勸め、便利を占むるに暇あらざるは、義貞たる所以なり。其死する時、猶錦囊の詔書を佩びしを觀る。其報國の志、百敗して挫けざるを見る。今に至るまで凛として生氣あり。而して老賊の骨、朽腐する已に久し。十三世の室町も、徒に市塵に迷離せらる。其斷礎を索むるも復識る可からず。義貞の運を天に聽すとは其れ此を以てか。余嘗て謂ふ、「新田、足利の兵爭、猶朱李の唐季に於けるが如し」と。義貞の忠勇、克用に勝り、而して義興等の英邁、存勗に讓らず。存勗は汴梁を覆滅す。而して義興等、室町に報ずる克はざりし者も、亦牽制する所有りての故に非ざるか。抑々我が東北の形勝は、河北、太原に同じくして、新田氏は據有する能はず。然れども義貞山靈に祈るに、其子孫再起りて賊を滅さんことを以てせり。猶邈佶烈の天に祝り、眞主を生じて天下を安んずることを願ひしが如し。世に稱す、「趙鑾祖は祝に應じて生る」と。我が二百年の後、足利氏に代りて起りし者は、實に新田の遠裔より出づ。則天運果して復する時あり。勝敗の數未だ歲月を以て較ぶ可からざるなり。

新田氏の上計

次計

義貞運を天に聽す

【邈佶烈】唐明宗【趙鑾祖】宋の大祖趙匡胤

外史氏曰。余見二義貞手記者一。蓋其未レ擧レ事時。語二家子弟武門法戒一。淺近而已。然有レ言曰。爲レ將者。奉レ上撫レ下。決レ志而行。聽二運於天一。勿レ尤レ人也。義貞成レ於二元弘一。而敗レ於二延元一。亦時運有二可不可一邪。將上之人有レ負レ之邪。至二叡山之事一。可レ謂二負レ之甚一矣。帝蓋前レ此未三曾面二議事一。至レ此亦嘗二試兩端一。僥二倖孰成一。以レ是待二將師一。惡濟二時艱一哉。吾嘗咎義貞之東伐。不下按レ兵持レ重。俟三奥兵擾二其內一而後應上之。懸軍長驅。一敗成二賊勢一。及二賊西奔一。則不二捲レ甲窮追一。頓二兵堅城一。以致二賊再燃一。是緩急兩失レ機也。然當時主聰壅蔽。國論苟媮者如レ此。蓋雖レ有二善謀一。難レ於二輙行一。則不レ可三亶罪二其戰一也。是故爲レ官則敗。爲レ私則成。寧敗而忠義。不二成而奸賊一。義貞之志亦可レ悲矣。吾居二平安一。每レ覩二東山岡阜起伏一。指二義貞力戰處一。仰觀二叡山一。又念二其拜辭北行時一也。帝及二南遷一。蓋深悔二此擧一。下二哀痛詔一。而已無レ及矣。噫君臣際會難矣。可レ不二慨歎一歟。假令三義貞有二覇心一。當三其初克二鎌倉一。北條氏餘燼未レ滅。而足利氏反迹已形。義貞以レ此爲レ請。坐鎭二舊府一。蓄二力養レ威。與二護良親王一東西合レ謀。請清二君側一。朝廷不二敢不レ聽。使下尊氏或挾二天子一以臨上我。其逆節漸長。天子終不レ能レ堪。心將二引レ我以自援一。猶下後白河之近疎二義仲一而遠款上賴朝耳。是新田氏上計也。不レ然。當二其始授レ鉞。進據二信濃上野一。連二之奥羽一。俯瞰二八州一。扼二賊之吭一。而拊二其背一。賊形格勢禁。必不二棄レ我以犯レ闕。是又其次也。及三其辭二叡山一。則事不レ可レ爲矣。然得レ擁二太子一。進退自如。爲レ赴二越前一。而潛歸二上野一。勢或可レ達。收二合舊部一。奪二賊巢窟一。據以爲二根本一。進則成二恢復一。退則圖二翼戴一。又可下以展二其才一而得上其志。計不レ出レ於レ此。以二無根之兵一。奔二走東西一。而謀與レ戰皆不レ由レ己。宜其困屈無レ所レ成也。雖レ然。奉レ令周旋。銳意勤王。不

レ暇レ占ニ便利一。所三以爲ニ義貞一也。覩三其死時猶佩ニ錦囊詔書一。見ニ其報國之志。百敗不レ挫。至レ今凛有ニ生氣一。而老賊之骨。朽腐已久。十三世之室町。徒見ニ市塵迷離一。索ニ其斷礎一。不ニ復可レ識矣。義貞之聽ニ運於レ天。其以レ此邪。余嘗謂。新田足利之兵爭。猶三朱李之於ニ唐季一。義貞忠勇勝レ於ニ克用一。而義興等英邁不レ讓ニ存勗一。存勗覆ニ滅汴梁一。而義興等不レ克レ報ニ室町一者。亦非下有レ所ニ牽制一故上歟。抑我東北形勝。同レ於ニ河北太原一。而新田氏不レ能ニ據有一也。然義貞祈ニ山靈一。以ニ其子孫再起滅レ賊。又猶下邈佶烈祝レ天願生ニ眞主一安ニ天下甲也。世稱。趙藝祖應レ祝而生。我二百年後。代ニ足利氏一而興者。實出レ於ニ新田遠裔一。亦烏知レ非レ應ニ義貞之祈一哉。則天運果有ニ復時一。勝敗之數。未可下以ニ歲月一較上也。

詠史十二首其五

左將義貞天地知。曾沈寶劍感馮夷。軍中一范驚賊膽。
河北二顏連義旗。誰道晉藩無亞子。人傳楚帳有虞姬。
太原遺孽雖凋落。華冑遙遙久益滋。

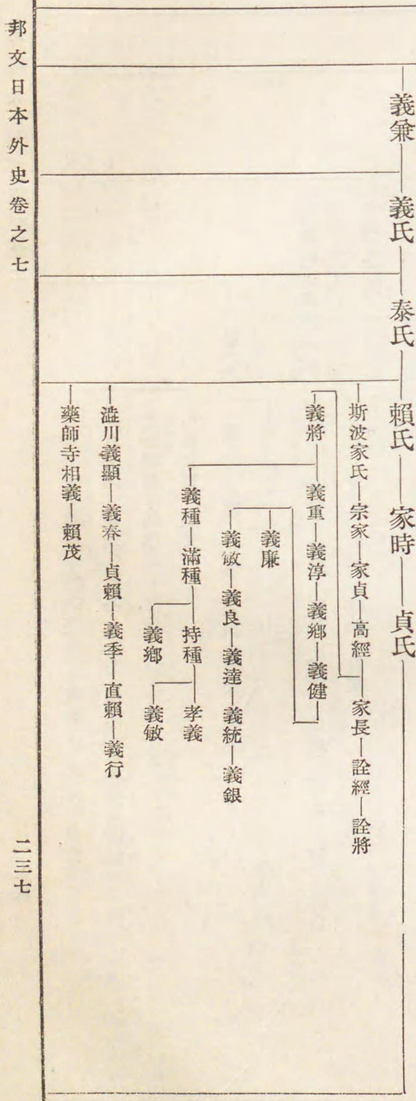
改版

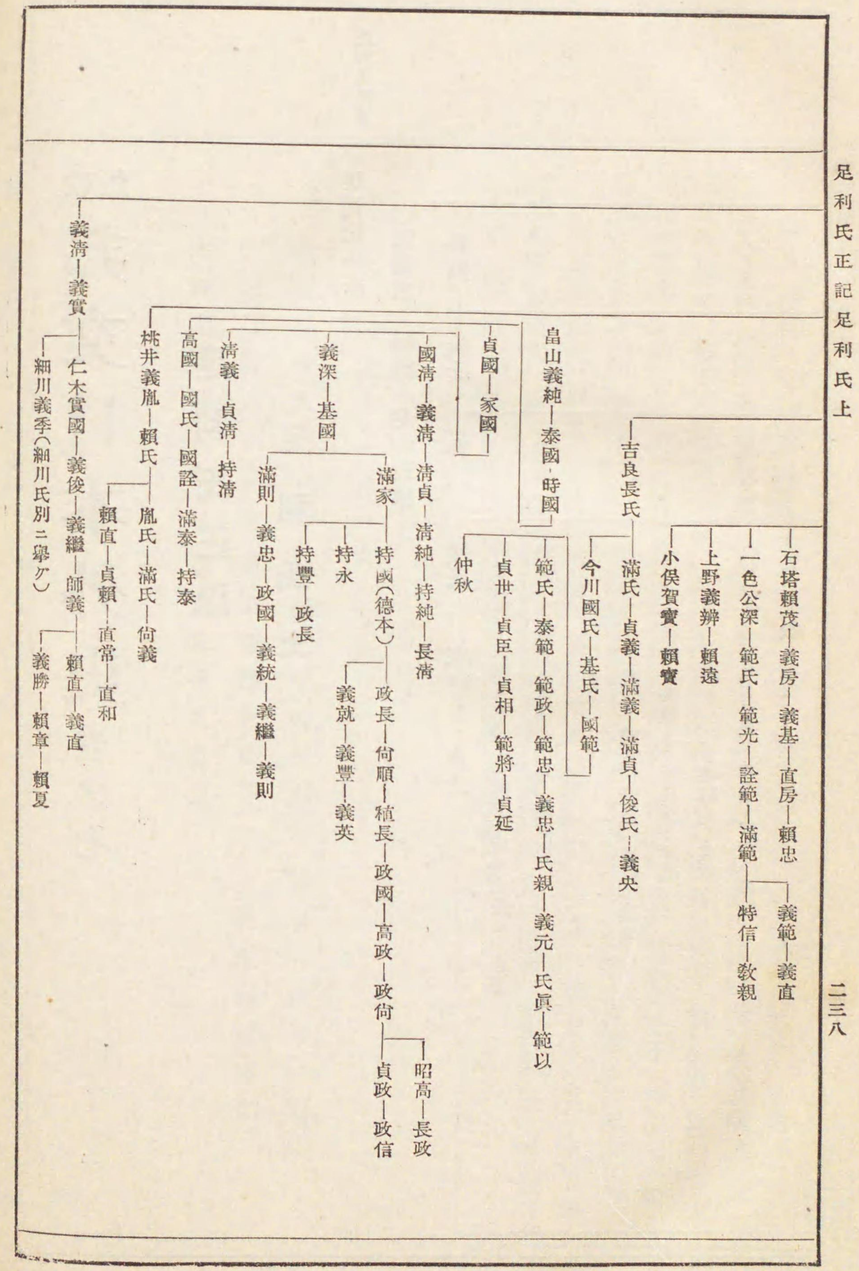
邦文日本外史 卷之七

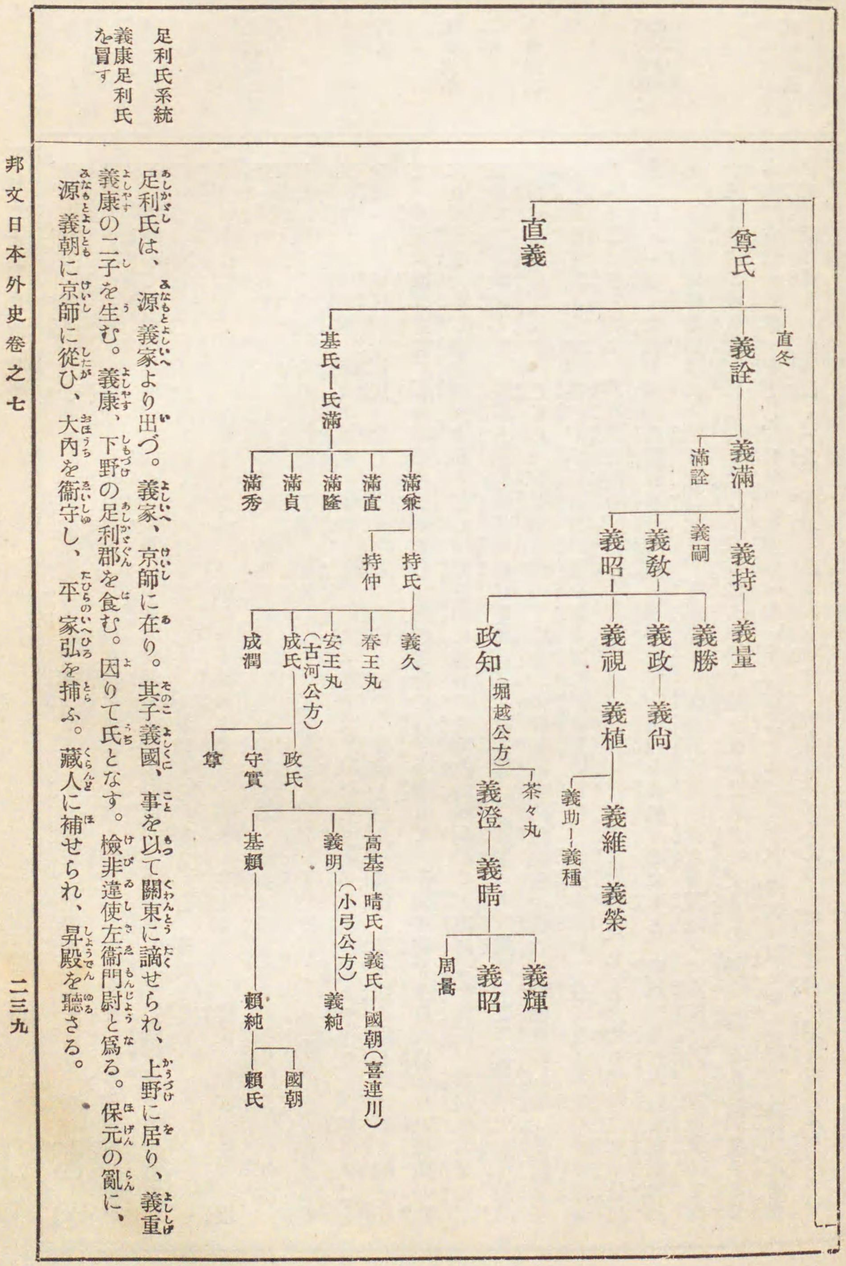
足利氏正記

足利氏上

足利氏略系







足利氏系統

義康足利氏を冒す

足利氏は、源義家より出づ。義家、京師に在り。其子義國、事を以て關東に謫せられ、上野に居り、義重義康の二子を生む。義康、下野の足利郡を食む。因りて氏となす。檢非違使左衛門尉と爲る。保元の亂に、源義朝に京師に從ひ、大内を衛守し、平家弘を捕ふ。藏人に補せられ、昇殿を聽さる。

【藤原氏】泰衡

足利氏の旗號

高氏

元弘元年

二年

六波羅攻

高氏官軍に志あり

直義の議

義淸、義長、義兼の三子を生む。義兼、雄偉にして循謹なり。其二兄皆源義仲の將と爲り、西、平氏と水島に戰ひて之に死す。義兼、征夷大將軍、源頼朝に鎌倉に從ひ、最も親待せらる。從ひて平氏を筑紫に擊つ。又從ひて藤原氏を陸奥に擊つ。陸奥再亂るる　義兼、諸將を統べ往きて之を討つ。頼朝、天下を定むるに因りて、奏して之に上總介を授く。北條時政をして、女を以て之に妻さしむ。義氏を生む。義氏、數、北條氏を助け、其家難を靖ず。正四位下左馬頭と爲る。義氏、泰氏を生む。泰氏、頼氏を生む。頼氏、家時を生む。家時、貞氏を生む　皆足利に居る。旗は白を用ゐ、旗號は重書なり。細川、畠山、仁木、岩松、桃井、吉良、今川、斯波、石橋、澁川、石堂、一色の諸族みな足利氏より出づ。足利氏、世北條氏と婚し、互に相倚賴す。然して家時、貞氏、自門地を負ひて、人下に立つを恥ぢ、時を俟ちて之を滅さんことを思へり。貞氏、上杉氏を娶り二子を生む。高氏と曰ふ。直義と曰ふ。高氏、又太郎と稱し、治部大輔に任じ、直義は兵部少輔に任ず。高氏嫡嗣たり。赤橋守時の妹を娶りて、子の千壽を生む。赤橋は北條氏の族なり。元弘元年、後醍醐天皇兵を起し、笠置山に據りて北條高時を討つや、高時乃高氏、直義等を遣し、往きて之を攻めしむ。高氏兄弟、時に外憂に丁り、强起して西す。城陷り、乃返る。二年、高時、天皇を隱岐に流し、光嚴帝を立つ。已にして帝伯耆に歸る。官軍、並び起りて六波羅府を攻む。府帥北條仲時、北條時益、數戰ひて利あらず。高時、高氏及び名越高家を遣し赴き援けしむ。高氏疾あり。往くことを欲せず。之を强ふること再三なり。高氏大に慍り、乃使者に答へて曰く、「當に不日に發すべし」と。因りて陰に其親信に謂て曰く、「彼、舊我が家の臣隷たり。時遷り勢變じて、乃我を僕役するに至る。我れ、今日を以て官軍に歸し、以て我が家を興さんと欲す。如何」と。上杉憲房、細川和氏等、皆之を贊成す。高氏、乃、家を挙げて行かんと欲す。或人、高時に說きて曰く、「源氏、天下の兵權を失ふこと久し。今日の勢、焉ぞ其異圖無きを知らん。宜しく其挙を質とし、且其誓を要すべし」と。高時之を然りとし、溫言を以て來り請ふ。高氏、之を患ひて直義に謀る。直義曰く、「公、無道を誅せんと欲す。神豈右けざらんや。要盟は神の鐲とせざる所なり。

【孺子】千壽

【祖道】征行者を送る宴

高氏一族を率ゐて西す

高氏官軍に歸す

狐川

勝持寺

三年

一番の旗章

矢を八幡の廟に納む

高氏京師に入り六波羅を攻む

【新帝】光嚴帝

宜しく親信を留め、孺子を護らしむべし。而して夫人は、則赤橋氏に屬せば、當に憂ふる所なかるべし。公、第彼の言ふ所を聽き、亟に大事を成せ」と。高氏之に從ふ。高時祖道し、一の白旗を取り高氏に授けて曰く、「是れ八幡公より傳りて　右大將に至り、而して我が家、之を受けたるものなり。請ふ、以て賸と爲ん」と。八幡公は義家を謂ふ。右大將は頼朝を謂ふなり。高氏之を受け、心竊にこれを喜び、乃直義以下宗族三十二人、兵三千を率ゐて西す。三河に至り、謀を其故黨吉良貞義に告ぐ。貞義曰く、「臣、固より將にこれを言はんとす」と。高氏、意益々決す。京師に抵り、卽密に使を伯耆に使して降らんと請ふ。帝、素より其家聲を聞く。則大に悅び、使者に賜ふに邑を以てす。勅して曰く、「諸國の官軍、汝其れ之を帥ゐて以て、國賊を滅せ。賊、滅びん後、賞は當に請ふ所に從はん」と。已にして名越高家後れて至り、官軍の將源忠顯、赤松則村と狐川に戰ひ、敗れて死す。高氏方に宴を桂川の西に張り、一佛舍を指して其名を問ふ。或人答へて曰く、「勝持寺」と。高氏哂ひて曰く、「吾、將に勝ちて之を持たんとす」と。乃「往きて行在を攻めん」と聲言し、遂に馬に上り、行きて丹波に入る。

三年四月二十七日、篠村に至り、旗を八幡の廟前に建つ。州人久下時重、二百騎を以て先至る。旗號は一番の字なり。高氏之を見て故を問ふ。對へて曰く、「右大將の起るとき、臣の祖重光、衆に先だちて至る。右大將親書してこれを賜ふ。遂に以て號と爲す」と。高氏大に喜びて曰く、「我が家の嘉兆なり」と。五月七日、高氏兵を引きて、南六波羅を攻めんとし、自戰勝を祈り、一矢を廟に納む。直義以下の宗族皆之に倣ふ。矢積りて堆を成す。乃發す。沿道の兵皆之に附く。京師に入る比、凡五萬人、神祇官の址に軍す。府帥、兵二萬を遣して來り拒がしむ。我が軍擊ちて大に之を破る。忠顯、則村と、兵を合せて府を圍む。細川和氏、說きて曰く、「之を圍むは彼が志を固くして、我が兵を損するなり。誘ひて之を走らすに若かず」と。高氏乃其一角を闕く。果して逃れ降る者多し。府帥、遂に新帝を奉じ、走りて近江に死す。

高氏行在に奉ず

高氏乃、捷を行在に奏す。帝乃闕に還り、新主を廢して位に復す。卽日、高氏を以て從四位下に叙し、左兵衛督に任じ、昇殿を聽し、直義を正五位下に叙し、左馬頭に任ず。甲士五千を以て乘輿の後に扈ふ。是に於て高氏、細川和氏を遣し、弟頼春と兵を將ゐ、往きて關東を定めしむ。是より先、千壽逃れて下野に歸る。新田義貞兵を起すと聞き、往きて之に從ふ。義貞は義重の遠孫なり。北條高時、誅に伏し、鎌倉平ぐ。義貞、源氏の故器を閲し白旗を得たり。旗號は重畫なり。新田氏の號は中黑なり。故に用ゐる可からず。和氏之を聞き、其足利氏の號あるを以て就きて之を求む。義貞與へず。和氏、乃、大に高氏京師に在りて寵遇を得る狀を稱して、以て將士を搖かす。將士稍義貞を去りて千壽に就く。新田氏、是に於て足利氏と隙あり。而して帝方に高氏を寵し、從三位參議に進め、御諱の「尊」の字を賜ひ、改めて尊氏と名づく。十二月皇子成良を遣し鎌倉を鎮せしむ。直義執權たり。

新田義貞中黑旗

高氏御諱の字を賜り尊氏と改む

直義建武元年

建武元年、戰功を廷論し、尊氏を首と爲し、武藏、常陸下總の守護を管せしめ、直義に遠江の守護を管せしむ。時に關東大亂の後を承け、人心未だ定まらず。直氏、北條氏の舊政を修め、散亡を招き瘡痍を撫す。遠近心を歸す。而して京師の政は、務めて其舊を改め、守護、地頭の食邑二十分の一を徵して、以て大内を修め、又交鈔を造る。民之を不便とす。朝廷の臣僚、異時、武人の爲に輕侮せられし者、是に至りて競ひて武人を驅役す。武人力を興復に效したる者、狀を奉り、賞を冀ひて闕下に群聚す。有司、甄別する能はず。月餘に乃十餘人を定む。而して内敕已に北條氏の邑を以て、分ちて妃藤原氏、皇子護良等に給し、其餘は悉く京官の内臣、又び歌童、舞妓に散賜す。六十餘州復遺る地なし。是時に當りて朝議と内旨と牴牾を相爲し、往、數人同じく一邑を爭ふ。食邑故の如きを許す者も、旋沒收せらる。赤松則村に播磨の守護を授け、已にして之を褫ひ、僅に佐用の一莊を食ましむ。時に綸旨翻覆の譏あり。諸武人、私に相語りて曰く、「是の如くにして止まざれば、我が輩皆奴虜とならん。安ぞ一將種を戴きて天下の權を執るを得んや」と。尊氏の聲望素より著る。衆、意を屬す。皇子護良、大將軍たり。心深く尊氏を疾む。尊氏の初め京師を定むるや、護良の將殿良忠、其下を戢めず。尊氏、十餘人を捕へて之を梟す。護良怒りて、尊氏を誅せんと欲す。帝聽さず。護良聲色に耽り、又客を喜ぶ。客に妾豪多く、酬して人を殺す。又私に兵を徵し尊氏を圖る。尊氏其兵を徵する書を得て、これを上り、誣ふるに謀反を以てす。帝、乃人をして護良を執へしめ、鎌倉に流す。直義迎へて之を幽す。

綸旨翻覆

護良親王

北條氏の餘黨亂を作す二年

尊氏怒て京師を發す

是の歲、北條氏の餘黨本間、澁谷、亂を作す。直義兵を遣し、擊ちて之を夷ぐ。二年、北條時行兵を起し、數鎌倉を攻む。直義迎へ擊ちて利あらず。遂に成良を奉じて西に走る。人をして陰に護良を害せしめ、急を京師に報ず。尊氏、親將とし東伐せんと請ふ。許さる。又、征夷大將軍に任じ、關東を管領せんと請ふ。許さずして曰く、「事平ぐを俟ちて之を議せん」と。尊氏怒り、告げずして發す。諸武人奮躍し、爭ひ起ちて之に從ふ。矢矧驛に至り、直義に合し、海道より進む。時行の兵と七遇七捷し、遂に鎌倉に入る。時行の兵奔潰す。詔あり。尊氏を從二位に叙し、義詮を從五位下に敍す。義詮は千壽なり。又詔して其西に歸るを趣す。直義、尊氏に說きて曰く、「朝廷、義貞と、皆公を忌む。公免れて此に至るは天なり。何ぞ再虎口に赴くを爲さんや」と。尊氏之に從ふ。是に於て、自征夷大將軍、關東管領と稱し、帝の許す所なりと曰ひ、府を源頼朝の故基に開き、有功を賞し、降附を納れ、新田氏の邑の關東に在る物を收め、割きて將士に予ふ。將士爭ひて之に附く。京師傳へて言ふ「尊氏反す」と。帝、人をして往きてこれを詗はしむ。而して細川和氏、尊氏が新田氏を劾する書を齎し至りて曰く、「嚮に東藩の逆を爲すに當りて、臣尊氏身を以て倡首となり、臂を奮ひて一戰し、勝を瞬息に決す。義貞は事を已むを得ざるに擧ぐ。臣が京畿を定むと聞くに及びて、乃、賊を討つを以て名となし、三たび戰へども克たず。纔に守計を爲す。臣の長男義詮、下野に起り、遠邇爭ひ歸す。義貞之に憑りて、以て賊に克つことを得たり。遂に其功を攘み、敢て重賞を要す。是れ國の蠹なり。今臣、外に勞苦して、内に讒諛の臣あり。是れ趙高、秦を專にし、章邯、楚に降るの謂に非ずや。願はくば明詔を得て、以て義貞を誅せん」と。義貞之を聞きて、亦足利氏の邑其管内に在る者を收め、上書して護

尊氏自府を鎌倉に開く

義詮

尊氏義貞の罪を擧げて訴ふ

義貞亦尊氏の罪狀を奏上す

良の害に遭ふの狀を告ぐ。時に直義、密に諸道の兵を徵す。西國其檄を得て之を上る。十一月、遂に詔して尊氏義直の官爵を削奪し、皇子尊良を遣し、來り討たしめ、義貞を副と爲す。是時に當りて諸國の兵士、

諸國の將士關東に赴くと京師に歸す

關東に赴く者と、京師に歸る者と、東西旁午し、道路織るが如し。直義以下の將校、盡く戎裝し入りて見え、官軍を邀へ擊たんと請ふ。尊氏默然、良久しくして曰く、「我、官位顯達し、宿憤を伸ぶるを得たり。微功に由ると雖も、豈、君恩に非ざらん。恩背く可けんや。今、宸怒に觸れし所以は、曰く、親王を戕ひしなり。曰く、兵を徵し、なり。二の者は、尊氏の爲しし所に非ず。詳に其寃を訴へば、猶威を霽すことを得ん。卽し許されずば、髮を削り、世を遁るゝあらんのみ」と。諸君、自計し爲せ。尊氏終に西行し、弓を關く能はず」と。色を作して入る。諸將愕眙す。居ること二日、來り告ぐる者あり。曰く、「義貞三河に至る」と。

尊氏の述懷

上杉憲房、其子憲顯、細川和氏、其族頼春等、並に直義に謂て曰く、「將軍の言ふ所、理無きに非ざるなり。然れども天下の武士、足を翹けて亂を思ふ。一たび將軍、起つを聞かば、則雲の如く合り景の如く附かん。將軍、豈、禍福を辨ぜざらんや。今、曠日彌久、敵をして要害を過ぐさしめば、悔ゆとも及ぶ莫けん」と。直義、乃、諸將をして先發せしむ。再戰皆敗る。十二月、自一二萬騎を以て赴き援ひたれども、亦敗る。十二月、諸將還りて尊氏の第に詣る。第門閉ざせり。衆、之を亂敲す。一人あり。出でて曰く、「將軍建長寺に逃れ、髮を削らんと欲す。我が曹、百方、之を止め、髻を切りて未だ剔らざるなり」と。將士、大に沮む。憲房の義子重能、僞りて官檄十餘紙を作りて曰く、「尊氏、族類、罪惡深重なり。世を遁れ迹を晦すとも、而も宥釋を得しむる勿れ」と。直義持して建長寺に至り、泣きて曰く、「之を敵の死尸中に獲たり」と。尊氏熟視し、大息して曰く、「誠に此の如きか。則吾も亦當に諸君に從ひて弓箭を執り、義貞と死を決すべきなり」と。乃、法衣を釋き、錦袍を穿ちて出づ。諸軍大に喜び、讙呼し、皆自、髻を切りて、以て其狀を亂す。將に逃れ降らんとする者、四面より來り還る。一日、三十萬と號す。直義、先六萬に將とし、義貞を箱根に距ぐ。東軍稍卻く。尊氏之を聞き、十八萬騎を以て繼ぎて進む

尊氏大に窮す

尊氏遂に志を決す

竹下

延元元年細川定禪赤松範資京師戰亂

尊氏京師に入る

ず」と。兵を引きて竹下に出づ。竹下の官軍呼譟して進む　赤松貞範等、我が先鋒たり。其陣を望みて曰く、「是れ京兵のみ」と。乃、鋒を聯ねて馳せ下る。官軍敗走す。尊氏北ぐるを追ひて、伊豆の府に至る。義貞西に走る。乃、義詮をして鎌倉を守らしめ、軍を合せて之を追蹤す。京畿震駭す。帝、遽に朝堂に榜す。

「能く賊を拒ぐ者は重賞あらん」と。復、應ずる者なし。

延元元年正月、尊氏、義貞を大渡に攻む。我軍多く溺る。是より先、赤松則村叛きて、尊氏に應じ、山陽を徇へ下す。細川和氏の從弟定禪、顯氏、並に讃岐に在り。南海を徇へ下す。是に至りて、定禪等、赤松範資と兵を合せて山崎を攻む。尊氏之を聞き、貞範を遣し、助け攻めて之を破る。義貞顧て敗走し、乘輿を奉じて叡山に據る。尊氏、乃京師に入る。範資、貞範は皆則村の子なり。是に於て尊氏、園城寺を誘ひて之を下し、定禪を遣してこれに據りて、以て叡山に逼らしむ。會、北畠顯家、陸奥の兵を擧げ、入りて行在を援ふ。定禪、連に兵を益さんことを請ふ。尊氏以て意と爲さず。旦日、定禪敗れ還る。義貞追至して東山に陣す。尊氏指さして將士に語りて曰く「聞く、義貞平地の騎戰を喜ぶと。今山を負ひて出でざるは意ふに其兵寡く、我をして兵數を知らざらしむるのみ」と。一將を遣し之を嘗みる。利あらずして卻く。尊氏、乃親進む。會、敵兵我が軍に雜入し、軍遂に亂れ走る。日暮に及びて敵も亦引き去る。細川定禪、其兵に謂て曰く「敗は我に由る。我一たび其恥を雪がんと欲す。料るに敵兵みな疲る。疲れざる者は出でゝ掠む。以て襲ふべきなり」と。兵三百を以て夜返り、火を其前に縱ちて後より之を襲ふ。義貞果し、備へず。敗れ走る。定禪追ひ擊ちて、其將領數十人を獲たり。尊氏復京師に入る。已にして官軍復來り攻む。我が軍利あらず。陸奥の兵二萬騎　粟田口を火きて來る。尊氏之を望みて曰く、「彼は其北畠氏なり。吾れ自之に當らん」と。進みて四條に鬪ふ。義貞の軍大に至る。我が軍之を顧て遂に敗走す。止まりて桂河に戰ひ、其一隊を鏖にす。官軍乃引きて還る。尊氏復入る。義貞等死し、其兵逃れ走ると謬り聞き、兵を分ちて之を要す。官軍虛に乘じて來り攻む。尊氏敗れて丹波に走る。

熊野道有

二月、尊氏兵庫に赴く。熊野道有といふ者、軍中に在り。廢主の臣僚と相識る。尊氏召して之に謂て曰く、「吾の敗るるは、戰の罪に非ざるなり。吾れ賊名を負ふを以てのみ。吾れ始め一皇胤を擁立せんと欲す。其悉く叡山に在るを以て、如何ともす可からず。吾れ意ふに廢帝抑鬱して、志を得ざること久し。汝安ぞ我が爲に其詔旨を得ざらんや。吾れ將に兩主、位を爭はしめて、以て吾が事を成さんとす」と。道有諾して去る。赤松則村、尊氏に、入りて摩耶城を保たんことを請ふ。或人曰く、「是れ天下の望を失ふなり。今、見兵猶以て京師に取るに足る」と。乃兵を直義に屬して東上せしむ。豐島に戰ひて敗れ還る。大友貞宗、大内弘世等、兵艦を以て來り援くるに會ひ、官軍を湊川に迎へ擊ちて又大に敗る。則村、又尊氏を說きて曰く、「師用ゐる可からず。公、宜しく諸將を中國及び南海に留めて、身は鎭西に赴きて、再擧を圖るべし」と。尊氏之に從ひ、書を則村に與へ之を呼びて父と爲し、以て深く之に結納す。是に於て、尊氏、直義と貞宗の舟に乘じて西す。諸將士多く義貞に降る。義貞頗る驕怠にして、女色に耽溺し、復尊氏を窮追せず。尊氏、赤間關に達するを得たり。三月、菊池武敏、兵を起し官軍に應じ、攻めて小貳貞經を殺す。貞經、其子頼尙に遺囑して曰く、「吾れは三浦義明たるなり。汝吾が志を體し、愼みて將軍に仕へよ」と。頼尙、兵を引きて尊氏を迎ふ。尊氏、貞經の死せりや否やを問ふ。頼尙、軍氣の沮むを恐れ、答へて曰く、「訛傳のみ」と。因りて導きて宗像氏に至る。武敏の來り攻むるに會ふ。尊氏、香椎祠に上りて以て其軍を望む。四五萬騎可りなり。而して我が兵を顧るに、僅に五百人にして鎧馬具らず。曰く、「吾死せん」と。乃進みて赤坂に陣し、直義を遣し先進ましむ。頼尙曰く、「彼の鬪士三百に過ぎず。其餘は將軍至ると聞かば、皆將に降らんとするなり」と。進みて鞴濱に戰ふ。仁木義長、細川顯氏等、奮ひて敵兵を搏つ。鎧を剝ぎ馬を奪ひて進む。北風起るに會ふ。沙石皆走る。敵兵沮卻す。直義風に憑りて縱擊し、追ひて博多に至る。武敏、全軍を以て返り戰ふ。直義自支へざるを慮り、使を尊氏に馳せ、衣袖を截りて之を遺りて、訣と爲して曰く、「公亟に長門に走れ。直義、將に此に留り死せんとす」と。尊氏報を得て曰く、「吾が弟、如し死せば吾れ何ぞ生く

兩主位を爭はしめて事をなさんとす

豐島

赤松則村

尊氏直義西に下る

菊池氏

小貳氏

宗像氏

香椎

赤坂

多々良濱

博多

太宰府鎭西皆尊氏に服す

白旗城

廢帝の詔書至る尊氏錦旗を建つ

尊氏皇統を擁し東寺に據る

ることを爲さん」と。親將として赴き援く。松浦氏、神田氏、大兵至れりと謂ひ、其衆を舉げて來り降る。今擊して大に武敏の軍を破り、追ひて太宰府に至る。是に於て、貞經死せりと聞き、尊氏、直義、之が爲に哀を舉ぐ。尊氏、乃、一色頼行、仁木義長を遣し、攻めて菊池、八代の諸城を陷る。鎭西皆服す。而して中國南海の諸將、又並び起りて之に應ず。義長の兄頼章、久下時重等と丹波に據り、赤松則村、播磨に據り、石橋和義、備前に據る。是に於て、義貞、則村の白旗城を攻む。城壁未だ成らず。則村詐りて之に書を遺て曰く、「元弘の初め、臣、數、强賊を挫く。而して賞は降虜の下に出づ。故に此に背き彼に嚮ふ。豈其れ志ならんや。願くば、州の守護を得て、以て報效を圖らん」と。義貞喜び、爲に詔旨を請ふ。往反旬餘にして詔至る。而して壁成る。則村詔書を還し、受けずして曰く、「守護已に之を將軍に獲たり。何ぞ此翻覆の綸旨を以ゐるを爲さんや」と。義貞大に恚り、兵六萬を合せて則村を圍み、弟義助をして石橋和義を攻めしむ。和義、則村皆堅く守りて下らず。使を遣し急を尊氏に告ぐ。五月、尊氏、頼行、義長をして鎭西を守らしめ、而して諸軍を率ゐ、太宰府を發し、嚴島に至る。僧賢俊、廢帝の書を奉じ至るに會ふ。尊氏大に喜び、諸將をして錦旗を立てしむ。遠近競ひ附く。兵艦凡そ七千餘艘、進みて鞆津に至る。小貳頼尙の策を以て、二十萬人を直義に附し、陸に上りて福山を拔く。義貞遽に圍を釋きて走る。備前、丹波、美作の官軍、風を望みて解き去る。尊氏、室津に至る。赤松則村圍を出でゝ迎へ謁す。敵遣す所の族幟百餘を城下に收めて、以て尊氏に獻ず。其族號を視るに故の部屬多し。曰く、「害を避くるのみ、今將に來り歸せんとす」と。已に來り降る者、果して多し。而して陸軍も亦會す。楠氏の兵を兵庫に夾擊して之を鏖にし、軍を合せて義貞を擊つ。義貞走り歸り、復乘輿を奉じて叡山に據る。法皇、廢帝、廢帝の弟豐仁親王、皆疾に託して從はず。往きて尊氏に依る。尊氏東寺に據りて城と爲す。六月、軍を遣し仰ぎて叡山に攻むれども利あらず。義貞、追ひて京師に入る。尊氏、兵を街巷に伏せて羸兵を出し、且戰ひ且卻き、敵を誘ひて京中に入る。伏起りて大に戰ふ。義貞敗走す。又義貞、夾攻を計ると聞くや、乃兵を遣して邀へ擊ちて之を走らす。

師直、師泰惡源太

義貞尊氏に決鬪を過る

義貞、興福寺の僧徒を誘ひ、畿内、南海の兵をして我が糧道を絶たしむ。乃細川定禪、今川範國を遣し、擊ちて南海の兵を走らす。七月義貞、數〻志を得ざるを以て、四面より來り攻めんと計る。藤原隆資先至りて、南門を攻む。我兵盡く北に出でゝ義貞を拒ぐ。獨、高師直、弟師泰とこゝに在り。出で戰ひて敗る。敵、門樓を焚く。城内惶擾す。尊氏方に經を誦して自若たり。土岐頼氏侍坐す。曰く、「惡源太如し在らば、之を拒ぐに於て何か有らん」と。惡源太とは、其子頼直なり。適〻、頼直入りて見ゆ。頼氏喜び問ひて曰く「北面の戰未だしか」と。曰く「知らざるなり。適三條に在りて、東寺の烟揚るを望みて乃還るのみ」と。師直曰く、「敵南門に至る、公の出でゝ拒ぐを煩す」と。頼直諾して出づ。尊氏、之を呼び返し、之に寶刀を賜ふ。頼直拜して之を受け、北門より敵の左に出で、馬を下りて射る。敵兵亂れ潰ゆ。乃馬に上り騎して之に馳せ、手づから六人を斫る。師直等、復、出でゝ援け擊つ。遂に隆資を走らす。而して義貞、已に北門に至り、尊氏と各獨身決鬪せんと請ふ。尊氏奮然として、起ちて曰く、「亟に門を開け、吾れ敢て官家に敵するに非ず。獨、義貞と決せんと欲するのみ」と。上杉重能諫めて曰く、「彼れ窮して此に出づ。將軍何ぞ自輕んずるか」と。會土岐頼遠、大宮の敵を破り、勝に乘じて義貞の軍後に踵す。義貞大に敗れ其左眉を傷け走りて叡山に歸る。

光明帝卽位

誓書を後醍醐帝に上る

足利氏、是に於て、廢帝を奉りて位に復するを議す。衆、元弘の事を以て不祥と爲す。八月、乃豐仁親王を立つ。是を光明帝と爲す。號は建武を用ひ、後曆應と改む。尊氏、權大納言と爲り、直氏、左馬頭と爲る。九月、議して利を以て興福寺に昭せ、足利高經は越前の兵を以る、小笠原貞宗は信濃の兵を以て、並びに東北の糧道を絶たしむ。又佐々木高氏をして、貞宗を援けしめ、新田義助の兵を擊ちて之を走らす。山門援絶え食竭く。是に於て、尊氏陰に誓書を獻じて曰く、「臣初め讒を被りて罪を獲、髮を削りて命を待つ。而るに、義貞、義助、公義を假りて私怨を修め、以て此に至れり。陛下苟も臣の志を諒とし、駕を廻らし來り還り給はゞ、則當に政を朝廷に歸し、諸の廷臣、安堵故の如くすべし」と。帝遽に之を納る。義貞聞きて懌ばず。帝、義貞をして太子を奉じ、越前に赴かしむ而して駕を命じ闕に還る。直義兵を將ゐて之を迎ふ。乃、新主の爲に劍璽を請ふ。帝、僞器を傳ふ。乃文臣の官爵を褫ひ、武臣を執へ、帝を花山院に寘き、其詔を請ひ越前に下す。足利高經、因りて州兵を併せて、義貞を金崎に圍む。又高師泰を遣し助けて之を攻めしむ。既にして帝、逃れ走り、之く所を知らず。内外驚き騷ぐ。尊氏曰く、「是れ吉祥善事なり。帝をして猶在らしめば、監護する期なし。亦承久、元弘の爲を襲ぐ可からず。而るに今乃是の如し。豈、善事に非ずや。度るに、其れ必畿内に在さん。其底り給ふ所に任せて、徐に之を圖るべきなり」と。二年、瓜生保、杣山より金崎を援ふ。師泰、今川頼國をしてむかへ擊たしむ破りて之を殺す。金崎益困む。義貞、出でゝ杣山に走る。或人、師泰を說きて曰く、「間、城兵馬を浴せず、糧竭きて馬を食ふに非るを得んや」と。是に於て、師泰、高經、城を凌ぎ齊しく登る。城兵、束して飢羸し、戰ふ能はずして、皆自殺す。太子、虜に就き、後害に遭ふ。時に、帝、吉野に在りて、行宮を建つ。是より天下、京師を稱して北朝と曰ひ、吉野を南朝と曰ふ。

後醍醐帝花山院を逃れ給ふ

二年

金崎城陷る

北朝、南朝

義貞、復た杣山に起る。高經之を拒ぐ。義貞の少子義興、北畠顯家と兵を關東に起す。義詮、鎌倉に在り。細川和氏、上杉憲顯等を遣し、利根川に拒がしむ。敗れ還る。冬、顯家、十餘萬騎を以て鎌倉に逼る。鎌倉の兵一萬可りなり。諸將、避けて安房、上總の間に匿れんと欲す。義詮、時に十一歲、諸將を叱して曰く、「勝敗は兵の常なり。卽、敵を怖れば、將たらざるに若かず。義詮、此に在り。衆を望みて逃れば、天下之を何とか謂はん。我が兵寡と雖、猶一戰す可し。免れずば、則死せん。免れば、乃避け匿れて、敵に尾して西し、家君と夾みて之を擊たんのみ」と。諸將皆奮ひ、兵を分ちて四と爲し、逆へ戰ひて克たず。義詮を奉じて逃れ匿る。顯家等西上す。諸將乃起ちて之に尾す。明年正月、美濃に至る。土岐頼遠、桃井直常、顯家と戰ひて復克たず。顯家、焚掠して進む。京師の諸將、宇治、勢多に拒がんと議す。高師泰曰く、「古より未だ此に拒ぎて克ちたる者有らざるなり。何となれば、攻むる者の勢千里の外に伸び、拒ぐ

官軍鎌倉を攻む

義詮

三年

雲津
桃井兄弟
男山
安部野
足羽城
高經
平泉の僧徒
藤島
義貞戰死
鬼切、鬼丸
四年
興國元年
義助卒す
尊氏の業終に初志の如し

者の力は、咫尺の内に縮むのみ。之を畿外に邀へ擊つに若かず」と。尊氏曰く、「善し」と。師泰に附するに萬人を以てし、美濃に赴き、黑血川を背にして陣せしむ。顯家之を避け、路を伊勢に取る。二月、師泰之を雲津に追擊して之を破る。顯家、南都に入り、將に京師を攻めんとす。高師直、桃井直常を薦めて往きて擊たしむ。直常、兄直信と命を受けて卽發し、奮擊して顯家を走らす。顯家の弟顯信、敗軍を收めて男山に據る。諸將直常の賞を獲ざるを視て　赴き攻むる者なし。師直、直常を助けて之を攻むれども下す能はず　四月、師直、顯家の和泉に在るを聞き、其楠氏と合するを慮り兵を分ちて南し、擊ち　之を安部野に殺す。五月、帝と遙に義貞に命じて男山を救はしむ。義貞、高經と相持し、義助をして二萬騎を以て山門に赴かしむ。七月、尊氏　急に師直を召し還す。師直、夜、諜を遣し、男山の積聚を燒く。顯信、遂に守を棄てゝ走り、義助火を望みて退き去る。是に於て義貞、義助、三萬騎を合せて、高經を足羽城に攻む　城兵三百に滿たず。高經曰く、「守るも克つべからず。走るも達すべからず。寧、守りて死せん」と。城主朝倉廣景之を贊く。乃、塹壘を修めて、之を藤島に屬す。平泉の僧徒來り告げて曰く、「叡山、我と藤島を爭ふ。今、公、之に我に附せば、則、願くは力を効さん」と。高經、之を許す。新田氏の兵、藤島を攻む　僧兵力め拒ぐ。高經、細川孝基、鹿草君相をして、三百人を以て之を救はしむ。途に敵兵と遇ふ。楯を蔽ひて亂射し、其一將を斃す。氏家、重國、其首を持ちて歸る。高經、之を視て曰く、「何ぞ左中將に肖たるの酷しきや。果して然らば、則、左眉當に箭瘢あるべし」と。命じて面を洗はしむるに、瘢覩る。其の尸を驗するに帝の詔書を齎す。其二刀を驗するに鏤めて鬼切、鬼丸と曰ふ。乃其義貞なるを知る。尸を收めて之を葬り。首を尊氏に獻ず。徇へて獄門に梟す。北朝、是に於て、尊氏を正二位を陞せ、征夷大將軍に任ず。四年、諸將を遣して、高經を援けしむ。新田義助を走らし、畑時能を殺す。北陸盡く平ぐ。義助、美濃に走る。土岐頼遠、攻めて之を走らす。興國元年、義助病みて伊豫に卒す。細川頼春攻めて諸城を拔き、悉く其族黨を殺す。是に於て、官軍の諸將大半死亡し、其將士相率ゐて來り降る。而して尊氏の業終に初志の如し。尊

直義と師直とに政を執らしむ【右大將】頼朝
王功なくして帝位を將軍に受く
土岐頼遠の無禮
足利氏の恩威
天龍寺
先帝の追福
興國三年
四年
正平三年
四年
四條畷

氏、直義、高師直とをして、並に政を執らしむ。之に謂て曰く、「吾、右大將の信賞必罰を慕ふ。而して其多疑刻刑を憾む。汝、我が意を副けて、功臣に猜忌なる勿れ　宿仇勁敵たりとも、降らば、輒之を納れよ」と。是の時に當りて、氏族、最富貴なる者四十三人、地を割き功を賞す。軍糧を徵發するに、朝貴の邑と雖、避けざるなり。朝貴務めて東人の言貌を學びて、以て侮謾を免れんと計るに至る。初め尊氏の光明帝を立つるや、時人之が爲に語りて曰く、「王、一戰の功無くして、帝位を將軍に受く」と。光嚴上皇、嘗て出でゝ行く。途に土岐頼遠に遇ふ。前驅叱して馬より下さしむ。曰く、「院なり」と。頼遠時に酒を被り、怒りて曰く、「院か犬か、誰か能く我を下す者ぞ」と。環りて其輿を射て去る。蓋し、院、犬國音、相近ければなり。直義之を聞きて頼遠を誅殺し、姪頼康をして家を承けしむ。時人復た相謂て曰く、「院、且、之を下す。卽將軍に遇はゞ、當に手行すべきか」と。天下、方に足利氏の恩威に服し、稍無事に屬す。而れども連年飢疫ありて、災異多し。僧疎石說を進めて曰く、「是れ先帝憤怒の致す所なり。宜しく寺を興し、以て冥福を修むべし」と。時に帝旣に行宮に崩じ、後村上天皇位に卽く。故に先帝と稱するなり。尊氏、直義、以て然りと爲し、寺を龜山殿の趾に興す。興國より正平に至り、七歲にして乃成る。名づけて天龍と曰ふ。疎石を以て主と爲す。親臨みて之を慶し、大に法會を設く。又文を爲りて先帝を祭り、其舊恩を叙す。

然れども行宮の君臣、及び新田　楠、北畠、菊池氏の遺孽、諸國に伏匿する者、必ず足利氏に報んと欲す。興國三年、高師直、從弟師冬、北畠親房を陸奥に攻む。四年、親房走りて行宮に歸る。新田義治、京師に匿れ、尊氏を襲はんと謀れども成らず。正平三年正月、楠正行兵を河內に起す。細川顯氏、山名時氏を遣し、摂津に戰ひて敗れ還る。更に高師直を遣し諸將を率ゐて之を擊たしむ。四年師直、正行と四條畷に戰ふ。縣某、其前を擊ち、武田信氏、其後を擊ち、佐々木高氏等、之に繼ぎ、大に正行を破る。正行決し前む。將士散じ走る。上山高元といふ者、常服を以て從ひて、師直、麾下に在り、正行の突き入るに會ふ。高元、急

上山高元、師直に代りて死す

崇光帝卽位師直兄弟の亂行を發く

菅二品の墓上杉、畠山、師直兄弟を嫉む妙吉

に師直の副甲を取る。左右、之を止む。師直曰く「母れ。彼、能く我に代りて死する者。我何ぞ一甲を惜まん」と。高元感激して、僞りて師直と稱して死す。師直因りて免るゝを得たり。竟に正行を斃し、進みて行宮を焚き、師泰をして壘を石川に築かしめて、以て楠正儀を攻めしむ。是の歲、北朝の太子禪を受く。是

崇光帝卽位。師直兄弟、屢功を立てゝ專横なり。時方に大亂、親王、公卿流離する者多し。師直、乃其子女を略して妾と爲す。妾數十あり。嘗て鹽冶高貞を讒殺し、其妻を奪はんと欲す。師泰、嘗て別第を興し、菅原氏の墳墓を發く。參議菅原在登、怨言を出すと聞き、密に人をして之を刺さしむ。世敢てこれを言ふなし。上杉重能、畠山直宗、其權勢を嫉み、直義を輔けて以て之を排せんと計る。直義方に禪を疎石に學ぶ。疎石の弟子妙吉、最、崇信せらる。人爭ひて之に事ふ。獨、師直兄弟之を輕侮す。重能、直宗、因りて妙吉に結ぶ。妙吉從容として直義に說きて曰く、「古しへより家の安危は、宰の賢否に由る。君、獨、趙高の骨肉を離間せしを聞かざるか。公、速に師直を誅し、代ふるに上杉、畠山を以てし、以て郎君を輔けしめよ」と。郎君は、直義の幼子を謂ふなり。直義、又尊氏の庶長子、直冬を養ひ、左兵衞佐に任ず。是に於て、出でゝ中國探題たり。

【二高】師直師泰

直義言下師直を圖らんとす

鞆津に居り、守吏の功罪を按驗す。而して二高の過惡、益、著る。八月、直義、重能、直宗、及び粟飯原清胤、齋藤利康等と謀り、甲を伏せて師直を召す。師直、直義の三條の第に至る。清胤、意中に變ず。師直に目して去らしむ。師直覺り、輙起ちて出づ。其夜清胤、利康と、就きて其謀を告ぐ。師直、乃該黨を聚めて衞り、師泰を石川に召す。乃畠山國清をして代り守らしめて還る。直義之を聞き、人をして逆說せしめて曰く、「我、子を以て乃兄に代らしめんと欲す」と。師泰曰く、「枝を剪り根に及ぶ。尊意知る可し。臣、將に面たり之に答へんとす」と。騎三千、卒七千を率ゐ、人ごとに一楯を持たせ、卽日、京師に入る。師直、赤松則村をして杉、舟の二阪を扼し、以て直冬に備へしむ。尊氏、驚き使をして直義を召さしむ。直義、尊氏の東洞院の第に入る。其兵稍、去りて師直に歸す。留まる者、千人に滿たず。旦日、二高、兵數萬を以

師直兄弟尊氏の第を圍む

義詮を召し基氏を鎌倉に下す

直義を蠻居せしめ師直の兄弟の意を解く

五年

鎭西直冬に附く

直義南朝に降る

六年尊氏兄弟相鬩ふ

將士多く叛き去る

尊氏師直遂に自殺せんとす

尊氏兄弟媾なる

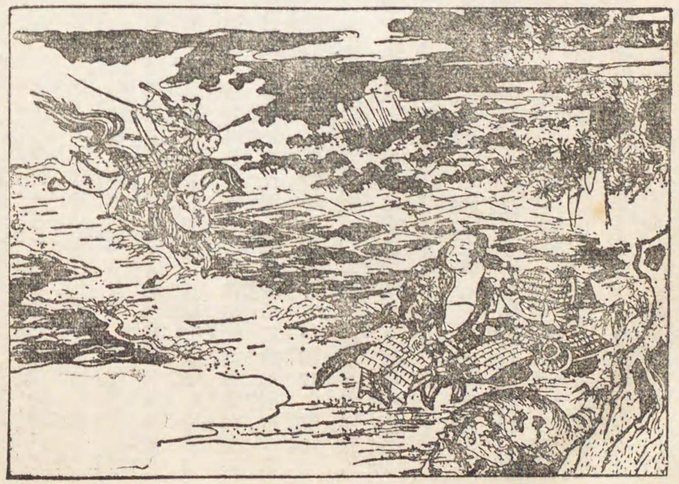
て來りて之を圍む。尊氏、人をして出でゝ之を責問せしむ。答へて曰く、「讒人を執へんと欲するのみ」と。兵を麾きて逼り攻む。尊氏、怒りて親出でゝ戰はんと欲す。直義、之を扼めて曰く、「且く、其言ふ所を聽け。何ぞ遽に家僕と爭はん」と。尊氏、之に從ふ。師直乃、圍を解きて去る。兵を遣し妙吉を捕へんとすれども獲ず。重能、直宗を流し、義詮を召して政を執らしめ、其弟基氏を以て、代りて鎌倉に居らしむ。師冬、上杉憲顯と、これを輔く。直義を擠けて錦小路の第に居らしむ。人敢て往くなし。獨僧玄慧、時に之を問ふのみ。尋いで髮を削らしめて、以て二高の意を堅くす。二高、密に人をして重能、直宗、及び直冬を殺さしむ。直冬、肥後に逃る。少貳頼尙、女を以て之に妻す。三角某、兵を石見に起し、以て直冬に應ず。五年、二高往きて之を擊つ。會土岐頼明叛く。尊氏、乃師直を召し還し、義詮を佐け、頼明を擊たしめて之を虜にす。義詮、參議に任じ、左近衞中將を兼ぬ。師泰、攻めて石見の五城を拔き終に三角を圍む。未だ下す能はずして鎭西悉く直冬に附く。師直、尊氏に親征して以て、嚮背を示さんことを勸む。尊氏、之に從ふ。師直又、直義を殺して往かんと欲す。直義、卽夜、南都に出奔す。內れず。走りて越智某に倚り、終に南朝に降る。石堂義房、其子頼房、畠山國清、上杉顯能、みな降る。顯能は重能の子なり。明年直義入りて男山に據る。桃井直常、素より師直の己を賞せざるを怨み、越中の兵を以て、入りて叡山に據り、約して義詮を攻む。義詮西に走り、尊氏、師直の備前より還るに遇ふ。兵を合せて直常を擊ちて、之を走らす。而れども將士多く叛く。旦日、義詮、丹波に走り、尊氏、師直、播磨に走る。直義、頼房を遣し、來りて尊氏を攻めしむ。師泰の石見より至るに會ふ。尊氏、其兵を幷せて逆へて頼房を擊つ。時に赤松則村、已に死して、子の則祐、白旗城を保ちて出でず。直義、又、國清を遣し、頼房を援けしめ、御影濱に戰ふ。尊氏大に敗れ松岡城に入る。城、狹隘にして兵士塡咽す。師直、雜卒を逐ひて之を出す。衆、怒りて散ず。將士も亦出でゝ亡ぐ。在る者僅に五百人。尊氏、師直、甲を釋き、且に自殺せんとす。訣飲して夜半に至る。會亡將饗場氏直、門を敲き、來り報ず。曰く、「臣、潛に國清に就きて媾を謀る。國清曰く、『錦小路公、固より

二高出づる所を知らず

（足利尊氏自殺を謀る圖）

師直師泰の最後

之を顧ふ』と。因りて男山の來書を出し示す。藥師寺公義、づる所を知らず。髪を削り降らんと欲す。其戰死を勸むれども聽かず。二高四國に奔らんと欲す。細川顯氏四國を擧げて直義に應ずと聞き、則、海に航して、東、師冬に投ぜんと欲す。會、甲斐の人來りて、「上杉憲顯、義子能憲上野に起り、直義に應じ、師冬を擊ち、師冬、終に甲斐に走り、諏訪氏に攻殺せらる」と告ぐ。二高、愕然として遂に髪を削り、笠を被り面を蔽ひて東走し、尊氏に追及せんと欲す。上杉顯能の兵、故に其間を遮り、相及ばざらしむ。武庫川を濟に比びて、三浦某、師直を叱して曰く、「何物の比丘ぞ、敢て爾く面を蔽ふ」と。笠を奪ひて面を觀る。曰く、「是なり」と。薙刀もて之を斫る。師泰望み見て走らんと欲す。吉江某、鎗もて之を刺す。師直の子師夏等皆殺さる。是に於て、尊氏は播磨より、義詮は丹波より、直義は男山より、皆京師に入る。酒を置きて會宴す。然れども語を寡くして罷む。直義、素より情を飾り、譽を要む。之に歸する者多し。上杉顯能、擅に師直を殺せしを以て、尊氏に逐はる。而れども畠山、石堂、桃井氏、勢に乘じて驕肆なり。仁木、細川、土岐、佐々木氏と相惡む。時に訛言す、「毎夜、兵を郊に勒する者あり」と。二黨、交、警備を



二高、出づ。書辭信に然り」と。尊氏、喜び身を挺して京師に歸る。二高、出

藤原有範

【參議】義詮

直義意益々驕る

直義又遽に出奔す

尊氏兄弟再相鬪ふ

【薩埵山】駿河

直義卒す

七年楠氏帝を奉じて京師を冒す

北朝二上皇一帝皆虜へらる

爲す。少納言藤原有範、儒學を以て直義に親信せらる。太公望を以て自比す。直義に說きて曰く、「參議、淫亂商紂に軼ぐ。公は周文の德を修む。誰か嚮服せざらん」と。直義、意益驕る。七月、直常、義房、又說きて曰く、「聞く、仁木頼章等、各、其國に歸り、赤松則祐南朝と通ずと。皆將軍父子の意を以て公を圖るなり。公、宜しく速に北國に赴き、臣が邑越中、甲斐を連ねて自固むべし」と。直義も遽に出でゝ奔る。將士率ゐて之に從ふ。京師空虛なり。義詮大に懼る。旦に尊氏の第に抵り、其返り襲ふに備へんと請ふ。尊氏曰く、「命天に在り。何ぞ虞るゝに足らんや」と。吟嘯して自如たり。八月、直義、敦賀に在りと聞き、萬人を以て赴き討つ。九月、直義の兵六萬、來りて八相山に陣す。迭に勝敗あり。細川顯氏、畠山國清、直義に勸めて和を講ずれども聽かず。二人忿りて尊氏に降る。十月、直義、越前より走りて鎌倉に赴く。尊氏之を患ふ。乃、赤松氏に因りて和を南朝に請ひ、義詮を留めて京師を守らしめ、自ら將として東伐す。遠江以東、盡く直義に附く。尊氏、三千人を以て、薩埵山を保つ。直義伊豆の府に陣す。上杉憲顯、石堂義房等を遣し、數千に將とし、尊氏を迎へ擊たしむ。十二月、宇都宮氏綱下野の兵を發し、尊氏に應ず。桃井直常に利根川に遇ふ。戰ひて之に克ち、進みて足柄山の麓に至る。炬火、野に彌る。直義の兵、望み見て輙潰ゆ。仁木義長三百騎を以て、追ひ擊ちて伊豆に至る。憲顯信濃に走る。直義、義房と、北條に匿る。尊氏、義長等を遣し、直義を執へて、鎌倉に入らしむ。基氏、切に之を救解すれども聽かず。基氏、出でゝ安房に奔る。尊氏、人をして之を召し還さしむ。幾も無くして直義暴に卒す。尊氏、留りて關東を鎭む。七年二月、楠氏北畠氏、兵數千人を以て、帝を奉じて京師を襲ふ。細川顯氏敗れ走る。細川頼春之に死す。義詮百餘人と、勢多橋に至る。橋已に斷つ。自殺せんと欲す。曾我某泗ぎて前岸に至り、舟を取りて之を渡す。佐々木、土岐氏に依る。北朝二上皇、一帝、皆虜へらる。新田義興、義治も、亦宗良親王を奉じて、兵を東國に起し、來りて鎌倉を攻む。十餘萬と稱す。諸將、兵寡きを以て、復之を安房、上總に避けんと議す。尊氏曰く、「關東の諸國、我れ鎌倉を逃ぐと聞かば、則、必ず率ゐて敵に歸せん。逆へ擊つに如かざるなり」と。乃、基

尊氏武藏に至る

義詮京師に入る

男山陷る

正平七年

後光嚴天皇

佐々木道譽

山名時氏

氏をして留守せしめて、自五百騎に將として發す。行兵を收めて、武藏に至り、數萬騎を得たり。鏖場氏直先鋒たり。義興の弟義宗と戰ふ。其兵、皆少壯にして銳進す。敗れ走りて尊氏の軍に入る。尊氏の軍亂れ、遂に大に敗る。走りて石濱に至る。近士二十餘騎返り戰ひて之に死す。仁木義長、兵を伏せて、義興等を擊ちて、大に之を破る。初め石堂義房、三浦高通、叛きて內應を爲す。戰酣にして起ちて尊氏を刺さんと約す。義房之を其子義基に語る。義基之を尊氏に告ぐ。義房、高通、出でゝ奔る。是に於て義興と、七千人を合せ、反りて鎌倉を襲ふ。基氏出でゝ戰へども克たず。走りて尊氏に石濱に歸す。諸將士、稍〻來り集まる。凡八萬餘人。而れども上杉憲顯、信濃より叛きて義宗に附く。二萬騎を合し、碓氷に陣す。尊氏曰く「先衆き者を破らば、寡き者は自走らん」と。進みて義宗を攻めて之を走らす。義興等も亦散じ走る。京畿の將士尊氏の捷を聞きて、則ち、率ゐて義詮に歸す。義詮、兵三萬を得て、京師に入る。官軍退きて男山を保つ。三月、義詮、細川顯氏、赤松則祐と會し、官軍の糧道を絕ち、男山を圍むこと數日。山名時氏、子師義と、亦山陰の兵を率ゐて、來り助くるに會ふ。攻めて淀口を奪ふ。四月、諸將齊しく進みて北畠顯能を園殿に、楠正儀を更科に攻めて、之を破る。五月、終に男山を陷る。帝南に走る。

正平七年八月、義詮、崇光の太弟を立つ。初め光明の立つや、後醍醐天皇、僞器を以て之に授く。二月の亂に其器又毀す。是に於て、公卿劍璽なくして、位に卽くの不可を議す。關白藤原良基曰く「尊氏を劍と爲し、良基を璽と爲す。何ぞ不可ならん」と。遂に是を後光嚴院と爲す。

是の時に當りて、攻、義詮に在り。義詮、佐々木道譽を寵す。道譽は、卽高氏にして、信綱五世の孫なり。初め尊氏に勸めて北條氏を滅し、數〻新田氏を困ましむ。直義、直冬の叛くに及ぶも、爲に志を變ぜず。屢〻義詮の危を救ふ。故を以て寵幸せられて事を用ゐる。子秀綱、弟氏賴等、皆親信せらる。山名時氏功を負み、邑を若狹に得んと欲し、師義をして、道譽に就きて之を請はしめて曰く「將軍約する所なり」と。道譽、方に宴して顧ず。師義立ちて日暮に至る。乃、忿りて曰く「我れ寧ぞ汝を須ゐんや」と。

八年

義詮近江に走る

尊氏京師に入る

直冬

足利高經

九年

十年

仁木賴章

細川賴之

馳せて伯耆に歸り、時氏と俱に官軍に應ず。吉良滿貞、石堂賴房、嘗て直義に黨す。赤松氏範、兄則祐と惡し。皆起ちて之に應ず。

八年六月、同時に京師に入る。義詮、北帝を叡山に移し、而して自、鴨河の東に陣す。道譽、先敗る。細川清氏、獨り止り戰ふ。義貞、之を召し還す。已にして山徒、又款を敵に通ず。義詮近江に走る。新田氏の餘黨、堀口貞祐土寇を率ゐて要し擊つ。秀綱之に死す。行きて臨津に至る。土寇復起る。兵潰ゆ。清氏、馬を下りて、北帝を負ひて東に走り、垂水に達す。尊氏已に關東を定め、基氏を留めて、之を鎭せしめ、佐くるに畠山國清を以てす。而して、西、義詮と遇ひて、與に共に京師に入る。而して時氏の兵、日に逃れ亡ぐ。走りて伯耆に歸る。

時氏、乃曰く「衆の我に歸せざるは、我れ其由を知るなり」と。乃、直冬を索む。直冬、直義の死しより、長門に匿る。是に於て、時氏之を擁戴す。歸する者果して多し。足利高經、桃井直常、みな來りて款を送る。

高經の新田義貞に克つや、其二刀を得たり。尊氏、之を取らんと欲して曰く、「源氏の寶なり、宜しく之を宗家に傳ふべし」と。高經之を惜み、紿きて曰く「嚮に長崎道場に託して、災に罹れり」と。他の刀二を取り、燒きて之を獻ず。尊氏、怒りて高經を擯斥す。高經怨望して、終に直冬に歸す。

九年冬、直冬等、並び起ちて、東、京師を攻む。義詮、道譽と出でゝ播磨に拒ぐ。明年正月、直冬、時氏丹波より入る。仁木賴章、新に執事と爲り、敢て要し擊たず。尊氏、駕を奉じて近江に走る。六角氏賴仁、木義長等、來りて之を援く。而して細川賴之、四國の兵を以て入りて援く。賴之は、賴春の子なり。是に於て、義詮、神南山に陣す。時賴、師義、楠氏の兵と還りて神南山を攻む。諸將拒ぎ戰ひて大に敗る。師義、四目の旗號を覩て曰く「彼れ道譽に非ざるか」と。卒を麾きて逼り擊つ。赤松則祐、義詮に侍し、騎兵を呼びて之を勗めしめ、高に憑りて馳せ下る。師義、傷を被りて走る。尊氏、叡山に在りて、神南の捷を聞き

（足利尊氏肖像）

十三年尊氏薨す

菊池武光

國清義興を殺す

【兩公】義詮基氏

十四年

楠氏金剛山に匿る

き進みて東山に陣す。義長、清氏を遣して、高經、直常と戰はしむ。終に直冬を東寺に攻む。義詮、山崎に軍し、賴章、嵐山に軍して、其糧道を絶つ。直冬、遂に界浦に走り、戰を八幡廟に卜す。巫曰く「神意父に抗する者を右けず」と。諸將、乃ち、解き去る。尊氏、駕を迎へて京師に歸る。三上皇も亦吉野より至る。

十三年四月、尊氏、癰を患ふて薨ず。年五十四なり。北朝、從一位左大臣を贈る。義詮を以て、征夷大將軍を襲はしめ、基氏を左馬頭と爲す。官軍、足利氏の喪に乘じ、所在並び起る。鎭西探題一色直氏、菊池武光の爲に敗らる。義詮、細川繁氏を遣し、之に代らしむ。病みて道に死す。少貳賴尙、大友氏時、數、武光を擊つ。而して新田義興、鎌倉を襲はんと謀る。某氏、畠山國清をして誘ひて義興を殺さしむ。親、兵を入間川に觀す。關東大に伏す。

國清、基氏に說きて曰く、「故將軍世を捐て、天下、兩公の相忌むを疑ふなり。臣請ふ、兵を將る、南吉野を定むるを得て、以て新將軍の意を解かん」と。基氏之を然りとす。八州の兵を發し、國清に附して西上せしむ。十四年冬、國清、京師に入る。明年正月、義詮、諸將を率ゐて尼崎に軍す。國清進みて筒山に軍す。弟義深をして別に龍門を攻めしむ。敗れ歸る。又弟義熙をして、代り攻めて、之を拔かしむ。赤松氏範、約して內應を爲せども、成らず。來奔す。諸將も又三城を拔く。遂に楠氏を赤坂に攻めて、之を走らす。楠氏、帝を奉じて金剛山に匿る。五月、義詮凱旋す。

國清の京師に入るや、仁木義長の專橫を視て、深く之を嫉む。乃密に諸將に謂て曰く、「是の役、實は義長を圖るなり。彼れ日に西宮に陣し、未だ嘗て進み戰はず。敗を聞けば則喜び、捷を聞けば則憂ふ。吾れ請ふ。諸公に從ひて姦臣を誅せん」と。時に細川清氏等、素より義長と隙あり。亦之に同す。七月、楠氏兵を攝津に出す。國清、清氏、卽、之に赴き、義長を返擊せんと議す。義長、之を聞き子弟を遣し、諸路を拒

義長の兵潰散す

義長官軍に降る

十六年楠氏秀詮を殺す

細川清氏

がしめて、自、兵を以て義詮を守る。佐々木道譽、夜、潛に側門より入り、義詮に見えて曰く、「諸將の圖る所にして、將軍を右くるは何ぞや。然れども、諸將の意も亦測る可からざる也。今臣、義長と事を外に議す。將軍、其間を以て、出でゝ西山に逃れよ」と。義詮、乃、疾作ると稱して、寢に就く。義長、罷め出づ。道譽の來るに會ひ、與に語りて、夜に至る。道譽去る。義長、臥內に入りて事を白す。答ふる者なし。乃、大に之を索むれども得ず。其兵潰散す。遂に走りて伊勢に歸る。官軍、弊に乘じて並び起る。衆、罪を國清に歸す。國清、惧れて東に歸る。路に義長の邑を經、僅に免れて歸れり。義長、弟義住をして、石堂賴房と、葛木山に陣せしむ。義詮、六角氏賴、土岐直氏をして擊ちて義住を降さしめ、遂に義長を討つ。義長、遂に官軍に降る。

十六年、山名氏、遙に義長に應じ、攻めて美作を取る。楠氏、攻めて攝津を取り佐々木秀詮を殺す。秀詮は道譽の孫なり。

初め赤松範資、攝津の守護たり。之を子の光範に傳ふ。道譽、譖して之を奪ふ。又加賀を富樫氏より奪ひ、之を其婿の斯波氏に予へんと欲す。細川清氏、之を廷爭するに因りて乃止む。清氏は、和氏の子なり。時に執事たり。赤松則祐も、亦道譽の女を娶る。清氏、則祐の管內一邑を得て、以て其戰士を賞せんと欲す。道譽許さず。清氏、嘗て宴を設けて義詮を請ず。道譽、更に高會を爲してこれを請ず。義詮、顧て佐々木氏に如く。故を以て兩家相惡し。清氏、其子を八幡の祠に冠し、名を八幡と命ず。源氏の故事なり。義詮、之を猜む。會僧の善く禱る者ありて、鎌倉より來る。一日、佐々木氏に造り、從容として、語次清氏願書を託するの事に及ぶ。道譽其書を索觀して、復返し與へず。明日、袖して伊勢氏に適き、義詮に上らんと請ふ。伊勢は、足利氏の傳宣を司る者なり。伊勢、其書を視るに、義詮、基氏を呪して、自之に代らんとする也。伊勢、心に之を疑ひ、未だ上らざる也。義詮、偶疾あり。道譽、入りて之を視る。問ひて曰く、「清氏の書を見たるや」と。義詮曰く、「未だし」と。伊勢を召して、之を上らしむ。義詮、因りて八幡の

清氏官軍に降る
畠山國清基氏に叛く

祠を檢して、又清氏の願書を得たるに、前書と同じ。是に於て、陰に之を誅せんと謀る。後、數日、清氏、天龍寺に詣づ。多く甲士を率ゐる。義詮、以て謀泄ると爲し、夜、遽に新熊野に走り、橋を徹して守る。清氏大に驚き、人をして其寃を訴へしむれども答へず。乃、其邑若狹に歸り、弟將氏を留めて、以て異志なきを明せども聽かず。十月、義詮、兵を遣し清氏を討つ。清氏南に走り、石堂賴房に困りて官軍に降る。畠山國清も、亦基氏に叛く。國清の西するや、關東の將士亡け歸る者多し。國清盡く其邑を收む。將士連署して之を基氏に訴ふ。基氏、國清を攻む。國清、惧れて伊豆に走り、弟義深、信濃に走り、並に兵を起して官軍に應ず。

清氏等北上す

清氏奏す、「足利氏の兵、東、義長を拒ぎ、西、時氏を防ぐ。臣請ふ、其虛に乘じて、京師を克復せん」と。詔して之を許す。十二月、清氏、賴房等、北上す。諸將敢て邀へ擊たず。義詮、道譽と北帝を挾み、近江に走る。義詮の子春王、猶幼し。從者に抱かせ、南禪寺に走る。僧良芳、之を衣被中に匿し、送りて赤松則祐に致す。則祐、之を白旗城に奉じて、兵を引きて入りて援く。弟氏範を遣し、行宮を襲はしむ。姪範實、足利高經等と、義詮に近江に從ふ。凡一萬餘騎なり。而して清氏に附く者なし。十七年正月、清氏遁れ去る。

十七年

義詮、乃京師に歸る。

楠正儀

初め道譽、將に走らんとするや、其第を洒掃し、大壺に酒を貯へ、二僧を留め、誡めて曰く「來る者は之を犒へ」と。已にして楠正儀來る。僧迎へて之を犒ふ。清氏其第を毀んと欲す。正儀肯せず。鎧刀を留め、謝して去る。時人稱す、「道譽の老手、正儀の鎧刀を博へ得たり」と。傳へて以て笑と爲す。

清氏、讃岐に走る

清氏、讃岐に走りて、再擧を圖る。山名師義、兵を出して援を爲す。義詮、細川賴之に清氏を擊たしめ、今川貞世に師義を擊たしむ。師義、糧盡きて走る。

細川賴之

清氏、弟氏春等と白峰に據る。宮軍の將中院氏、西、長尾に據る　遠近競ひ起りて之に應ず。賴之、方に備中に在り。七月、航して歌津に歸り、先其母を遣し、清氏に說かしめて曰く、「公、讒を蒙りて逃る。僕其心を亮とす　然りと雖、自舊勳を棄て、親戚を割離するは、公も亦何ぞ忍びんや。今苟にも圖を改めば、則公の自新にするを聽され、邑土故の如くならん。僕、公の爲に之を保す」と。清氏、問答すること累日。中國の兵賴之に追付し、城壘全く成る。乃清氏と絕ち其將新開直行を召して曰く、「彼れは主、我れは客、客は速戰を利とす。汝、長尾に向ひ、彼をして兵を分たしめて、潛に歸りて吾と狹みて清氏を攻めよ。清氏、慓悍なり。獨身輕しく出でん。一戰して擒にす可し」と。直行、乃兵五百を以て行、火を縱ち長尾に向ふ。清氏曰く、「長尾陷らば、則敵我が背に出でん。救はざる可からず」と。氏春を遣し、千餘騎を以て赴き救はしむ。直行、射戰して暮に至り、炬を列ねて、潛に還る。黎明、賴之と白峯を攻め呼譟して戰を挑む。清氏輕甲して馳せ出づ。馬、箭を負ひて噎る。兩騎と搏ちて死す。氏春、直行の去るを覺りて之を追ふ。途に白峯を望む。みな賴之の旗幟なり。乃和泉に走る。長尾攻めずして陷る。四國盡く定まる。

新開直行

清氏死す

而して國清、義深、又基氏に降る。基氏、將に之を誅せんとす。國清、西に走りて官軍に降る。許されず。終に餓死す。義深、脫走し、後、義詮に降る。是に於て、降るもの相踵ぐ。大內弘世、久しく官軍に屬し、周防、長門を略取す。乃二國を擧げて來り降る。十九年、山名時氏、仁木義長、石堂賴房、吉良滿貞等、みな降る。義詮、皆其罪を宥す。

大內弘世十九年

基氏も亦上杉憲顯の己を育てたるを思ふや、之を信濃に招き、援くるに越後の守護を以てし、舊守護清禪可を逐ふ。禪可、憲顯を拒ぐ。克たず。下野に走る。已にして基氏、憲顯を鎌倉に召す。禪可、又要し之を擊つ。基氏怒りて、自將として之を討つ。大に苦林に戰ひて、之を破る。禪可遁れ走る。乃憲顯を以て執事とし、以て畠山國清に代ふ。

細川清氏の敗るゝや、衆、斯波氏因を推して、代りて執事たらしむ。氏因は、高經の子、道譽の婿なり。高經、氏因を短なりとし、後妻の子義將を薦めて執事たらしめ、而して己れ之を決す　高經、北條氏の盛時を

斯波氏因

二十一年　二十二年　管領　義詮薨す　基氏卒す　氏滿　義滿　童坊

覩るに及びたり。衆、其治平を期す。已にして爲す所、多く人望を失ふ。初め尊氏、直義、文武の邑入五十分の一を賦して、軍興の費に充つ。高經之を倍し、建武の故事の如くす。衆之を怨む。義詮、坊門の第を造る。諸將に課して工を助けしむ。赤松則祐、功緩し。高經、罰して其邑一所を奪ふ。五條橋を造る。道譽、役を董し、京師の戶租を徵す。久しくして成らず。高經、私金を捐て、立所に之を成す。後、高經、諸將と幕府に宴す。道譽、乃、事に託して會せず。而して私に伎樂を大原に張る。高經これを啣む。會、道譽、賦を納れざる二歲、因りて其攝津の守護を奪ふ。道譽、終に則祐等と共に高經を譖る。義詮、卽密に兵を召して之に備ふ。高經、入りて見え寃を訴ふ。義詮、慰解して越後に遣歸す。二十一年十月、山名時氏、畠山義深等を遣し、高經父子を攻む。二十二年七月、高經病死し、義將降る。高經既に死し、義詮、道譽を以て執事たらしめんと欲す。基氏、細川頼之を薦めて之に代らしむ。執事を更稱して管領と曰ふ。

十二月、義詮、疾あり。幼子春王をして政を監せしむ。是を義滿と爲す。義詮、遂に薨ず。義詮、官、正二位大納言に至る。

是の歲夏、基氏も亦病みて卒す。基氏、宮、從三位左兵衞督に至る。基氏、材武あり。義詮の爲に關東を鎭して、尊氏の舊業を失はざらしむ。時論、之を惜しむ。其子金王、嗣いで立つ。是を氏滿と爲す。義滿立つ。甫めて十歲なり。細川頼之管領たり。初め義詮、終に臨みて、義滿を撫で、頼之に謂て曰く、「汝に一子を予ふ」と。又頼之を指して、義滿に謂て曰く、「汝に一父を予ふ」と。頼之、既に遺託を以て幼主を輔く。內外、治を望む。乃方正の士、文武備具の者を選みて、其左右に侍せしめ、又滑稽者數人を選み髮を削り大袴を穿ち、長刀を佩き、大巾せしめ、日するに童坊を以てし、府中に出入せしめ、將士の弄客と爲し、將士の中に便佞なる者あらば、頼之、輒其善くする所の衆をして之を呼ばしめて、有髮の童坊と曰ひて以て之を朝辱す。更相懲戒し、士風大に革る。頼之又五箴を作り、將士に授けて曰く、「愛憎に偏る毋れ。恩仇を修むる毋れ。是非を枉ぐる毋れ。僥倖する毋れ。私匿する毋れ」と。又今川、小笠原、伊勢の三氏をして、將府の禮式を草せしむ。尊氏、義詮の下せし所の文書を檢し、其高氏、佐々木氏の宣達に出づる者は、漸く之を收奪す。世、基氏、善く人を知り、義詮善く人を任ずと稱せり。基氏終に臨み、亦氏滿を上杉憲顯に託して曰く、「謹みて京師の約束を奉じ、倍畔するある莫れ」と。氏滿、義滿より少きこと一歲。憲顯心を盡して輔翼す。關東倚りて安し。

今川、小笠原、伊勢　二十三年　平一揆　上杉能憲　新田義宗　建德二年　菊池武敏　鎭西探題　文中元年　後圓融帝　二年　花御所　天授四年　五年　憲春自殺

二十三年、義滿、冠す。頼之、賓と爲る。義滿、遂に征夷大將軍を襲ふ。

是の歲、上杉憲顯病みて卒す。義子能憲代りて執事と爲る。是より先、平一揆といふ者あり。叛きて河越に據る。憲顯、義滿を奉じ、討ちて之を滅す。宇都宮氏叛く。又擊ちて之を平ぐ。能憲、代りて執事となるに及びて、新田義宗等兵を起す。能憲、弟憲春と、擊ちて義宗を獲たり。

建德二年、菊池武敏、兵を肥後に起す。頼之、今川貞世を以て、鎭西探題と爲し大內義弘をして、これを助けしめ、以て之に備ふ。又弟頼元に命じ、南朝の降將を助けて、以て吉野を攻めしむ。

文中元年、北朝の太子禪を受く。是を後圓融帝と爲す。二年、細川氏春を遣し、吉野を攻めしめて、藤原隆俊を獲たり。是の歲、直冬、石見より來り降る。

義滿、第を室町に起す。花御所と稱す。四足門を造る。天授四年、徙りてこれに居る。五年、義滿、軍を東大寺に出し、山名義理、山名氏淸を遣し南侵せしめて、土丸城を拔く。益々兵を近江、美濃に召す。美濃の土岐康行叛く。因りて又兵を鎌倉に召して之を討たしむ。是の時、憲春、鎌倉の執事たり。其弟憲方を遣し、兵を將ゐて西せしむ。康行の降るに會ひて、乃止む。而して氏滿、將士の義滿を怨望する者多きを聞くや、竊に異謀あり。謀、寖泄る。義滿、南師を召し還し、潛に手書を憲春に賜ひ、氏滿を諫めしむ。氏滿聽かず。憲春、憂懣して自殺す。氏滿、驚き悔い、謀遂に解く。憲方を以て執事と爲す。上杉、細川の二氏、久しく權を東西に執る。義滿、漸く長じ、頗る頼之を忌む。近臣從ひて之を惡る。四月

賴之職を罷む　**斯波義將**

義兵を幕府に集め、使者を遣し、賴之の第に就きて職を罷め、國に就かしむ。斯波義將を以て、代へて管領と爲す。賴之、卽日、途に上る。尋いで髮を削り、常久と號す。詩を作りて曰く、「人生五十功無きを愧つ。花木春過ぎて夏已に中なり。滿室の蒼蠅掃へども去り難し。起ちて禪榻を尋ねて清風に臥す」と。已にして義滿、其勳勞を思ひ、命じて南海を總管せしむ。

六年　**弘和元年**

六年、山名氏春、大に官軍を南海に破る。弘和元年、又大に之を破る。南海盡く定る。獨吉野、南朝に隷するのみ。

後小松常元中四年　**藤原良基**

是の歲、北朝の太子禪を受く。是を後小松帝と爲す。三年、帝、室町の第に幸す。元中四年、帝、冠す。義滿、髮を理め、攝政藤原良基、冠を加ふ。以て恒例と爲す。良基、六朝に歷仕し、中立して自全うし、

五年　**六年**

最義滿と親善し。

五年、義滿、紀伊及び駿河に遊ぶ。東南を圖る也。六年、又西海を圖らんと欲し、嚴島に遊び、賴之を召見し、命じて人を屏け與に語ること、久くす。賴之、感涕して出づ。義滿、遂に京師に歸る。是の時に當りて、四方漸定る。諸〻の宿將、赤松則祐、佐々木道譽の如きは、前後死亡す。其嗣みな孱し。獨、山名氏、聲威甚熾なり。初め山名時氏叛き、五州を略取して降る。因りて其守護と爲す。八子あり。師義、義理、時義、氏清、氏冬、義數、高義、氏重、みな世に顯れ、富、諸將に最たり。世、相語りて曰く、「其家を大にせんと欲せば、叛くより善きは莫し」と。義理、義清又攻めて南海を取るに及びて、凡山名氏の管する所十州に跨る。世呼びて六分一氏と曰ふ。海內を六分して其一を保つを謂ふなり。義滿之を惡み、常に陰に之を誅鋤せんことを計る。時義、師義の後を承け、其二子時熙、氏幸、但馬、伯耆の守護を分襲す。師義の子滿幸、寢之を譖りて、其國を奪はんと欲す。七年、義滿、氏清と滿幸とに命じ、赴きて、時熙、氏幸を討たしむ。氏清、發するに臨みて請ひて曰く、「彼れ降りて赦す可くば、則、臣先之を諭し來らしめん。必しも赴き討たざる也」と。義滿曰く、「降るとも赦さざるなり」と。乃往き、擊ちて之を走

山名氏

六分一氏

七年

八年　**細川賴元**

らす。義滿因りて二州を、氏清、滿幸に分ち賜ふ。又細川賴之をして、討ちて備中を平げしむ。八年春、賴之を京師に召し、其養子賴元を以て管領と爲す。而して賴之、事を決す。會時熙、氏幸、來りて寃を訴ふ。義滿之を許さんと欲す。

十月、氏清、義滿を宇治の別第に請じて、紅樹を觀る。期に先だつこと一夕、氏清、和泉を發して北上し、將に具を視んとする也。滿幸、之を淀に邀へ、告げて曰く、「聞くが如くば、幕議、時熙、氏幸を、舊領に復すと。詰朝の會、將に面のあたり之を命ぜんとする也。公、宜しく病と稱して會を辭すべし」と。氏清怒りて曰く、「何ぞ去歲の言と相反くや。輕侮せらるる此の如し。何ぞ拜趨を爲さん」と。乃、人をして義滿を途に要せしめて曰く、「臣、俄に疾を獲て、迎送する能はず」と。義滿、已に宇治に至り、駕を廻して歸へる。一行驚き異しむ。滿幸、氏清の女を娶り、尤も親愛せられ、言ふ所皆聽かる。自、京師に在りて、四州を總管す。管內に上皇の邑あり。奪ひて之を幷す。義滿、數敎を下して還し納れしめんとす。滿幸、伴り上皇の使を迎へて、陰に邑人を誡めて之を逐はしむ。義滿、大に怒り、滿幸に命じ、罷めて國に就かしめて曰く、「汝宿衞するも益なし。宜しく去りて汝が國に據るべし」と。十一月、滿幸、丹後に歸る。京師、指目して、之を快とす。滿幸、慙恚し、潛に界城に往き、氏清に說きて曰く、「近日の政、公、之を何と謂ふ。去歲、吾が曹をして、時熙、氏幸を討たしめて、今歲、之を赦す。將に反りて、吾が曹を討たんとす。是れ枝を剪り根を絕つの計に非ずや。今闔族力を戮せて、以て大事を舉げば、京に在る諸將、誰か我に敵せん。苟も京師を取るを得ば、附く者必多し。土岐、富樫、諸族の如きは、方に怨望を懷く。必衆に先だちて來り屬せん。公、速に兵を揚げて、細川氏を除くを以て辭と爲せ。事成らざる無けん」と。氏清、素より異志あり。自、財武を負む。上岐康行の叛くや、義滿、卽、討ちて之を平ぐ。氏清、聞きて笑ひて曰く、「康行與し易きのみ。乃公の如きに至りては、自然らざる也」と。是に於て、遂に滿幸の言を納れ、謀を合せ、期を約して別れ、各自、兵を集め、幕府を夾み攻めんと欲す。幕府米だ之を覺らざる也。議して曰く、

滿幸上皇の邑を奪ふ

氏清異志を懷く

「氏清の亡狀、譴責せざる可からず。而して事は復邑に端まる。邑果して復せざれば、則是れ予奪を下に聽くなり」と。是に於て、果して時熙、氏幸の邑を復す。遂に氏清を討たんことを議す。氏清之を聞き、故に使をして前日の罪を謝せしむること再三す。義滿、誓書を徵して之を宥す。事卒に解く。

滿幸等反す

十二月、丹後の人變を上り、滿幸反すと告ぐ。幕府、未だ信ぜず。畠山基國の將游佐某、又河内より、之清、大に戰具を修め、將に發せんとすと告ぐ。基國は、義深の子なり。已にして、氏冬出でゝ男山に奔る。義理、又紀伊の兵を舉げて北に嚮ふ。京師大に擾る。義滿、書を以て義理に諭す。義理聽かず。是に於て義滿乃、親、古山滿藤の第に臨み、諸將を會して戰を議し、以て其嚮背を視る。諸將みな至る。衆議決せず。或は曰く、「審に彼輩の訴ふる所を聽きて、以て之を舍さば、必事無からん」と。義滿曰く、「氏清、異志を蓄ふる日久し。今日の擧、必訴ふる所有るに非ず。卽、今日之を舍さば、明日復反せん。吾れ聞く、彼れ諸君を輕易して曰く、『幕府の諸將、誰か能く我に敵せん』と。吾れ諸君の爲に之を恥つ。誅せざる可からざる也。意ふに彼れ必、我れ東山、叡岳に據ると謂はん。吾れ乃親出でゝ東寺に陣し、諸君は兵を內野に盛らば、彼れ內野の軍を見て、必來り衝かん。則鼓螺相應じ、夾みて之を擊たば一戰にして殲す可きなり」と。衆、皆之を然りとす。一色詮範、前みて曰く、「臣、敢て異議を獻ず。夫れ元帥後に在りて、諸將前進す。是れ戰の宜しき也。前議之に反す。且、東寺と內野とは、地勢隔絕して、策應するに難し。諸將內野に陣し、一隊を東寺に屯し、而して臣の第を以て、牙營と爲すに如かず。則彼れ必銳を悉し、我が中軍に赴かん。其獲べきなり。彼れ卽東洞院より北上せば、則諸將迭に出でゝ之を街巷中に要し、東寺の兵、其後を尾擊し、以て之を鏖にす可し」と。義滿曰く「善し」と。明早、今川泰範、六角滿高を遣し、八百騎を以て東寺に據らしめ、自弟滿詮と、三千騎を率ゐ、出でゝ詮範の堀川の第に陣す。烏帽直垂にて、刀を帶びて甲せず。家僕を討つの禮なり。諸將みな偏甲し、次を以て前む。細川頼之、細川頼元、畠山基國、赤松義則、其西北に備へ、佐々木高詮、斯波重義、其西南に備へ、大內義弘を以て先鋒と爲す。

一色詮範

堀川に陣す

小林時直

兵凡五千餘、內野を環りて陣す。初め氏清、滿幸、是の月二十七日、京師に入らんと期す。而して游佐某をして、河內の岳山に寨し、以て氏清の兵を要せしむ。兵、期に後るゝ二日にして男山に至る。氏清、男山に在りて、其宰小林時直を召して、謂て曰く、「吾れ新田氏の支族たり。卽、足利氏に代るも誰か不可と爲さん。吾、將軍爲るを得ば、汝を以て執事と爲さん」と。時直涕を流して曰く、「臣、諫めて此擧を止めんと欲す。而るに久しく疎斥せらる。乃今日見ゆるを得るのみ。今諸將の富、誰か君の家に如く者ぞ。恩に背きて事を擧ぐ。神豈之を右けんや。卽克を獲るとも、諸將安ぞ能く我が下たらんや。臣、嚮背に惑ふ。獨前みて死する有るのみ。夫執事職の如きは、則之を他人に命ぜよ」と。氏清、退きて義數に囑して曰く、「時直、意色甚決す。汝之と耦し、浪に死せしむる毋れ」と。義數の意も、亦速に死せんと欲す。唯々として退く。滿幸の臣大足某も、亦滿幸を諫む。滿幸聽かず。卽夜、氏清千二騎を以て浮橋にて淀を濟り、氏冬をして三百騎を以て、馬羽路を繞りて軍に會せしむ。而して滿幸の千餘騎、梅津を濟り、後より之に應ぜんと欲す。已にして滿幸、夜、迷ひて道を失ふ。氏冬の軍又鄕導なし。淖中を徑り、相驚きて退く。氏清報を待つも至らず。乃、義數、時直を遣し、先づ進み、呼譟して義弘に逼らしむ。

時直、義弘に逼る

義弘　大宮に陣す。其兵に謂て曰く、「我が曹、數功を鎭西に樹つ。上國に戰ふに至りては、今日を始めと爲す。汝等之を勗めよ」と。射手二百を縱ち、而して三百騎、馬より下りて楯進す。接戰すること數合、死傷相當る。義數、時直、顧て義滿の軍に馳す。義弘曰く、「敵の隻騎をも、我營を過ぎて北せしむるは、我が罪なり」と。走りて之を遮り、手づから薙刀を揮ひて時直を斬る。義數間を得て北に馳せ、垣を踰えて墜つ。牙兵に獲はれたり。義弘、馳せて中軍に赴き、上言して曰く、「臣誅死して戰ふ。而れども氏清の大兵繼ぎて至る。請ふ援兵を賜へ。將軍臣を喪はば、誰か臣に繼ぐ者ぞ」と。義滿、其鎧馬を視るに朱殷なり。之れ壯なり」と。手づから佩刀を賜ひて曰く、「更に此を以て一戰せよ」と。因りて義則を麾きて赴き援けしむ。

義弘、時直を斬る

滿幸賴之等と戰ふ

滿幸敗走す

氏清潰奔す

詮範氏清を斬る

九年諸將を賞す

明德の役

鹽谷師高

滿幸誅せらる

滿幸、梅津に至り、大宮の戰、已に酣なりと聞き、則疾く進み、賴之、基國と戰ふ。高詮來り援け、土屋黨を擊ちて之を殲し、大足を斬る。而れども基國等の兵利あらず。義滿、親赴き之を援け、大に呼びて曰く、「蓋ぞ速に豎子を梟せざる」と。諸將爭ひ進む。滿幸、遂に敗走す。義數、滿幸、既に敗る。敗卒走りて之を氏清に報ず。氏清、乃ち、氏冬と合して進む。義則、逆へ戰ふ。其弟滿則、之に死す。山名時熙、事端の已より起れるを以てにや、力戰して氏清に當り、悉く其兵を亡ひ、走りて義弘に歸す。義弘、義則、交使を馳せ、援を義滿に乞ふ。義滿、左右を顧るに、遣す可き者なし。詮範、軍吏を以て麾下に在り。自、請ひて往く。勝敗、未だ決せず。是に於て、義滿、牙旗を建て、進む。氏清の兵望み見て曰く、「將軍至れり」と。乃潰え奔る。詮範、子滿範と與に目を氏清に注ぎて、前み鬪ひ、遂に之を斬り、其義兒辰房に及ぶ。辰房は、氏重の子なり。氏清の首、麾下に至る。義滿、顧て衆に謂て曰く、「諸君、反逆を謀る者を視よ。終に如何ぞや」と。時十二月晦日なり。

明年、正月、山名氏の地を割きて、諸將を賞す。和泉、紀伊を義弘に、隱岐、出雲を高詮に、美作を義則に丹波を賴元に、山城を基國に賜ふ。詮範に賜ふに今富莊を以てす。義則は則祐の子、高詮は道譽の曾孫なり。時に北朝の年號は明德。之を明德の役と謂ふ。

滿幸の走るや、詔めて之を止むる者あり。聞かざる爲して逃る。二月、伯耆に歸る。其將鹽冶師高をして出雲を守らしむ。高詮の將吏、來り誘ふに利を以てす。師高答へて曰く、「山名氏の此に至る所以は、義を足利氏に失へばなり。吾もまた義を山名氏に失ふを欲せず。吾が父の分自吾と異なり。將に出でて命に應ぜんとす。幸に善く之を視よ」と。乃其父を諭して、出でゝ降らしむ。送りて城下に至り、既に訣れて自殺す。曰く、「吾れ父と鬪ふに忍びず」と。城卽陷る。其兵走りて、滿幸に報ぐ。滿幸、氏冬の因幡に在るを聞き、又走りて之に歸す。氏冬、素より降る志あり。滿幸を迎へ擊ちて、以て口を藉らんと欲す。滿幸終に髮を削り、鎭西に逃る。氏清は後ゝこと五歲にして、獲はれて誅せらる。

細川賴之卒す

氏滿

小山義政

今川貞世

大內義弘和を講ず

氏清、二子あり。滿氏、時滿と言ふ。初め父の命を以て逃れて、滿幸に歸せんと欲す。而れども相遇はず。亦髮を削りて南に走り、其母に見えんと欲す。母惶りて見ず、刃に伏して死す。二子走りて義理に歸す。義理、降を乞ふ。義滿許さず。義弘をして國に之かしむ。紀伊の人盡く義弘に附く。義理、海に航して逃る。氏冬、降を乞ひて、其初め叛く志なかりしを陳ず。特に之を許す。是に於て事卽定まる。

三月、義滿諸將を率ゐて、捷を男山に賀せんと欲す。細川賴之、疾篤し。義滿、行を止め、賴元をして、其言はんと欲する所を問はしむ。賴之答へて曰く、「近者山名氏の族、動もすれば敎令を蔑にせり。臣、常に之を憂へき。今既にこれを獲られたり。天下誰か復將軍の患を爲す者ぞ。臣以て暝す可きなり」と。乃卒す。義滿、親其喪に臨み、泣を垂れて之を送る。爲に手づから佛經を寫し、又法會を內野に設け、陣亡の將士を弔ふ。

始め氏滿、氏清の叛を聞き、兵を發して將に西上し、其黨援を爲さんと欲し、其敗死を聞きて乃止む。是より先、新田氏の餘黨小山義政、宇都宮基綱を殺す。氏滿、上杉憲方を遣し、攻めて義政を降す。義政、復叛く。義滿、自、將として擊ちて之を殺す。其孤稚狗、又兵を陸奧に起す。復攻めて之を殺す。其黨田村則義、小田五郎といふ者、亦兵を起す。上杉朝宗を遣し擊ちて之を夷ぐ。新田氏の遺孽二人を獲たり。京師に送りて之を斬る。義滿、乃、封を氏滿に加ふるに、陸奧、出羽を以てす。

今川貞世、亦擊ちて少貳冬資等を平ぐ。是に於て、四方大に定まる。獨楠氏の遺孽、大和、河內の間を保守し、以て吉野の藩蔽と爲る。義滿、畠山義深、大內義弘をして之を圖らしむ。義深、盡く楠氏の城壘を拔く。吉野孤立なり。義弘、乃義滿の意を以て、南朝に奏請すらく、「和を講じて兵を弭め、駕、京師に還り、器を北朝に授けば、乃、今より以後、兩統更々立ち、猶北條氏の時の如くせんしと。帝之を許す。乘輿北に還る。義滿は北朝の意を以て、來降の禮を用ゐんと欲し、帝は禪讓の禮を用ゐんと欲す。物議洶々たり。六角滿高、義滿に謂て曰く、「器、彼れに在り。彼れ乃眞の天皇

神器の授受
後小松天皇

なり。君、第之を聽せ」と滿高は義滿の弟、六角氏賴の子と爲れる者なり。義滿乃、駕を迎ふ。大覺寺に御す閏五月五日、後小松天皇、神器を後龜山天皇に受く。後龜山は、卽後醍醐天皇の皇孫なり。後醍醐、南遷せしより、凡、五十有七年なり。而して北朝は五帝なり。改元すること、曆應より明德に至るまで十有七。天下、足利氏の故を以て、概其正朔を奉ず。是に至りて、南朝と合し、物情益之に服す。

南朝と合す
應永元年
義持

後小松天皇の應永元年、義滿、請ひて征夷大將軍を長子義持に讓る。

二年
金閣寺
四年
（鹿苑寺、金閣之景）

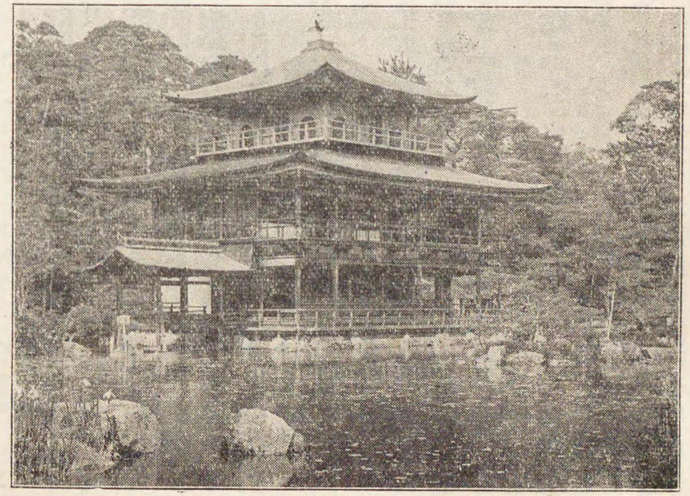
一年、義滿、髮を削り、道義と號し、北山の別業を營み諸將をして役を助けしめ、金閣を起て、四年、これに徙る。

氏滿卒す
朝鮮使者來る
今川貞世

義持は室町の第に居る。而して內外の事、決を北山に取る。

十一月、氏滿卒す。子滿兼、關東管領を襲ふ。是の時に當りて、足利氏の威、外國に及ぶ。朝鮮、數使者鄭夢周等を遣し、今川貞世に造りて隣好を修めんと請ふ。是の歲、使者遂に京師に來る。義滿、大內義弘をして之を接待せしむ。

義弘、嘗て貞世に說きて曰く、「方今の勢、弱き者は誅せられ、强き者は禍を免る。公、盍ぞ我及び大友



義弘義滿を圖る
義弘界に陣す
滿兼武藏府に陣す
中津
義滿界城を攻む
滿家、義弘を斬る
應永の役
土岐詮直

氏と兵を連ねて以て、自强くせざる」と。貞世聽かず。義弘、反りて斯波義時等と俱に貞世を譖る。義滿乃、貞世の約束を更ふ。九國みな危み疑ふ。菊池、大村氏、並に兵を起す。義弘擊ちて之を平ぐ。兵力益强し。陰に滿兼と謀りを合せて、東西相援け、以て義滿を圖る。

六年、滿兼、密に貞世を招く。貞世、其書を封じて義滿に上る。義滿、義弘を召す。義弘來らず。十月、義弘遂に周防・長門、諸國の兵を帥ゐ、界城に至る。土岐詮直は美濃に起り、京極某は近江に起り、山名氏清の二子は丹後に起り、並に義弘に應ず。而して滿兼も、亦出でゝ武藏の府に陣し、義滿を援くと宣言す。義滿、是に於て、急に貞世を召して曰く、「吾れ公を見るを愧づ」と。時に幕府、兵募し。土岐賴益、六角滿高等、往きて美濃、近江を討つ。在る者、皆戰ふに堪へず。義弘曰く、「氏清は唯京師を攻め、自、兵馬を疲らせたり。敗れたる所以なり」と。因りて守計を爲し、塹壘を修め、樓櫓を起て、自、巡り視て曰く、「百萬の衆ありと雖も、拔く能はざるのみ」と。義滿、先僧中津を遣し、兵を起すの由を詰る。義弘對へて曰く、「吾れ十六歲より鎭西に在りて、大小二十八戰、義清を夷げ、南朝に媾す。功勞尠きに匪ず。昨年の役に介弟又沒す。而して幕下、其孤を恤まず。且聞く、國を削るの議ありて、密に少貳、菊池をして、我を誅せしむと。而して頻々我を召す。我疑無きこと能はず。吾、已に鎌倉公と約し、船に入りて幕下の虐政を諫めんとするなり」と。中津歸り報ず。義滿、笑ひて曰く、「奴輩自其强を負み、乃公の實に然らしむるを知らず」と。乃、自、管領以下の諸將を率ゐ、出でゝ東寺に陣し、遂に進みて男山に至る。近畿の將士、來り集るもの三萬餘騎。細川賴元等の十一將を以て之に將とし、往きて界城を攻めしむ。城甚堅固なり。義滿、諸將をして戰を息め、長圍を築かしめ、十二月に至る。乃火を四面より縱ちて進む。樓櫓皆倒る。大戰良久しくす。義弘走り出で誤りて管領畠山基國の軍に入る。基國の子滿家、與に鬪ひて之を斬る。義滿、乃、紀伊を滿家に賜ふ。賴元の子滿元功あり。之に和泉を賜ふ。之を應永の役と謂ふ。土岐詮直等、皆平ぐ。初め詮直の舅を康行と曰ふ。康行は、賴康の子なり。天授中、美濃の守護を襲ぐ。其

上杉朝宗

弟滿貞京師に在り。兄の職を奪はんと欲し、譖りて曰く、「詮直反を謀り、康行之を助く」と。義滿、滿貞及び從弟賴益を遣し、往きて討ちて、之を降す。康行を宥し、詮直を逐ふ。故を以て、詮直遂に叛に死す。近畿既に平ぐ。滿兼、卽、兵を引きて鎌倉に還る。義滿、謀して其謀を知る。或る人、因りて貞世を間して曰く、「貞世の子弟、遠江を留守する者、謀に與る。彼れ曩に命を被り、卽來らざりしは此を以てなり」と。貞世惧れ走りて、遠江に歸る。義滿怒り、貞世を討ち、以て滿兼に及ばんと欲す。滿兼の執事上杉朝宗百方和を講ず。義滿、卽、滿兼に賜ふに足利莊を以てす。凡、謀に與りし者は皆釋して問はず。貞世、退きて藤澤に居る。上杉憲定、人をして貞世に謂はしめて曰く、「子の退居は、適以て疑を招くに足るのみ」と。貞世、乃、遠江に歸る。憲定は、憲方の子なり。已にして義滿、其功勞を思ひ、召して京師に至らしむ。之を待すること初の如し。歳を踰えて卒す。貞世、頗、書史に涉り、書を著して、時政を譏切す。往々中ることありと云ふ。初め貞世の父範國、尊氏に仕へて駿河、遠江の守護と爲り、貞世に命じて襲領せしむ。貞世受けず。兄範氏をして駿河を領せしめ、襲ぎて姪氏家、姪孫泰範に至らしむ。義滿の時に及びて、乃、駿河の數郡を割きて、貞世に加へ賜ふ。康範、貞世の請ふ所と意ひ、義弘と俱に之を譖る。是に至りて、義光終に貞世の養子仲秋をして遠江を襲領せしめ、細川賴元の故事の如くす。

貞世卒す

今川仲秋

七年、大内義弘の子持盛來り降る。其嘗て父を諫めしを以て、之を許す。其封の半を削る。義滿、性豪侈にして、數亂逆を平げ、志益々驕る。將帥を待つに甚だ倨る。朝臣、其家に往來する者、或は家隷を以て之を遇す。其髮を削るの歳、叡山に適く。儀、法皇の御幸に准ず。又土木を喜び、寶幢、相國の諸禪寺を創し、定めて五山と爲す。僧錄司を置く。僧の中津、妙葩、祖阿、周信等、皆厚遇せらる。是より先、我が西南不逞の徒、外國を侵擾す。義詮の時、元主、韓人をして、來りて爲に之を戢めんと請はしむ。元亡びて明興り、明主元璋も、亦數僧に託して來り請ふ。

五山僧錄司

八年

八年五月、義滿、私に祖阿を遣し、好を明に通ず。參議菅原秀長、書を草す。書辭甚恭し。九年、明主、

明に通ず

九年

明使來る

義嗣

十五年

僧道彝をして、書及び冠服を齎し、義滿を封じて日本國王と爲す。義滿、之を受く。足利氏中世に至るまで、使聘往來、皆王を以て稱す。義滿又內嬖多し。少子義嗣を生みてこれを愛し、義持を廢せんと欲して未だ果さず。是より先、帝、「ふたたび室町の第に幸す。十五年三月、北山に幸を請ふ。義滿自法服を被り、義嗣を携へて奉迎す。義嗣を拜して五位左馬頭と爲し、四位少將に選ざる。四月、宮中に冠す。儀、親王に准ず。是より嫡庶ノ善からず。識者之を譏る。然れども尊氏、義詮の世には諸將、恩に狃れ、叛服常なし。氏淸、義弘、誅に伏してより、畏服せざる者なし。世稱す「義滿の生れし歳は戊戌なり。字、皆戈に從ふ。故に能く戈戟を以て天下を平ぐるなり」と。

奉二母及叔父一遊二芳野一　賴山陽

前度尋レ春花已闌　今來暖雪照二人顏一
十年纔補平生缺　奉レ母重遊芳野山
侍レ輿下レ坂步遲遲　鶯語花香帶二別離一
母已七旬兒半白　此山重到定何時
疊疊春山別有レ天　花開花落鎭依然
可レ憐萬樹香雲暖　曾護南朝五十年

笠置山觀二元弘行在所一作レ歌

巨靈手拔二地骨一起、怪巖萬尺爭層累、竪者爲レ櫓、横者爲レ墻、天作二高城一淹二天子一、元弘之元秋八月、龍旂憑レ險事倉卒、黠賊蟻附緣二間道一、一敗蒙塵更播越、普天何人非二王臣一、誰赴二急難一來竭蹶、猶賴二祖宗在レ天誘二帝心一、夢賚二異材一是良弼、君在臣敢死、臣在賊滅可レ指レ日、唯願君心終始一、笠山南望芳野山、再狩之駕不二復還一、君王唯忘在二此厄一、九仞一簣眞可レ惜、吾來慷慨憶二當時一、時認石顚、鑿二礎基一、藤公傳レ勅楠公跪、此處是邪未レ可知、居民爲レ我指二村墟一、爲二賊鄉導一、實由レ渠、至レ今猶不レ通二婚嫁一、童孺唾罵斥如レ奴、嗚呼蚩氓猶能辨二大義一、寄レ語人間士大夫

改版 邦文日本外史 卷之七 終

改版

邦文日本外史 卷之八

足利氏正記

足利氏中

久我氏

五月、義滿薨ず。義滿、初め從五位に叙し、左馬頭に任ぜらる。從一位左大臣に累遷し、右近衛大將、右馬寮御監を兼ぬ。終に太政大臣に至り、三宮に准ぜらる。初め久我氏、源氏長者となり、淳和、奬學、兩院の別當に充つ。義滿の時に至り、乃之を足利氏に屬す。足利氏の世を終ふるまで、其官爵叙位、例として概此の如し。而して太政大臣に至りし者は義滿に止る。義滿の薨ずるや、詔して太上皇の號を贈らる。義持惶懼し、辭して受けず。明主、義滿に諡して恭獻王と曰ふ。義持之を受く。明年六月、滿兼卒す。初め氏滿、從三位左兵衛督に至る。而して滿兼は從四位下左兵衛佐を以て終る。遂に以て例とす。

（足利義滿肖像）

恭獻王十六年滿兼卒す

持氏十八年

滿兼、二子、持氏、持仲あり。持氏を以て嗣と爲す。是より先、宇都宮氏廣亂を作す。斯波持詮、陸奥探題たり。擊ちて之を斬り、首を鎌倉に献ず。滿兼、持詮に賜ふに、氏廣の邑を以てし、以て之を賞す。伊達政宗、亂を作す。滿兼、執事上杉氏憲を遣し、擊ちて之を平げしむ。十八年、飛驒國司藤原尹綱の兵起る。義持、京極高數を遣し、擊ちて之を平げしむ。

十九年稱光帝

二十年諸國兵起る

二十一年

公方

三管四職

七頭

兩上杉

三管八館

滿隆

十九年、帝、位を皇太子に讓る。是を稱光帝と爲す。諸〻の南朝の遺臣、後龜山の後を立て、約の如くせんと請ふ。足利氏の議、南朝の皇胤を立つるは、我が家の志に非ざるなりと。終に其請を聽かず。是に於て諸國兵起る。二十年伊達氏、懸田氏、陸奥に起る。持氏、畠山國詮をして、之を攻めしむ。二十一年、北畠氏、關氏、伊勢に起る。義持、土岐頼益をして、之を攻めしむ。明年皆平ぐ。

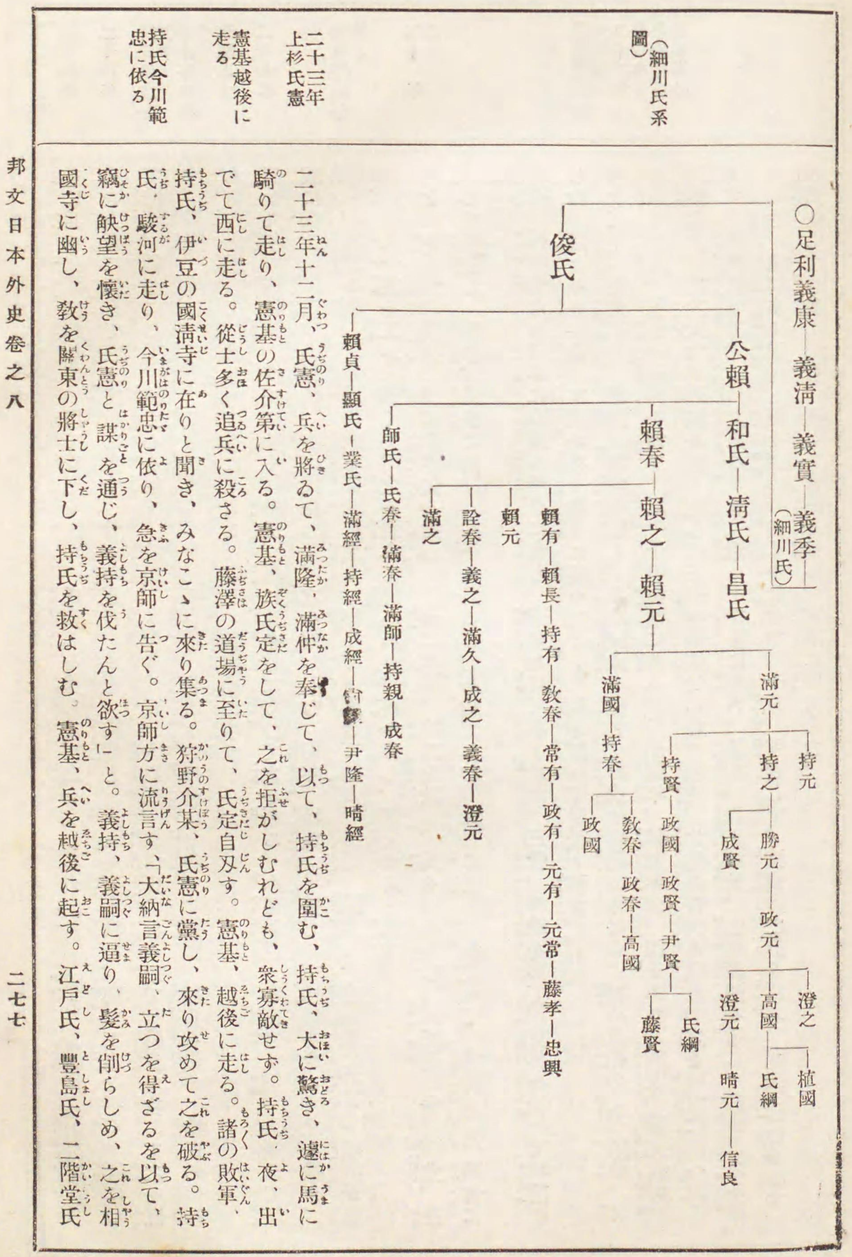
此時に當りて、關東の兵力、京師に倍す。而して天子の廢立、公卿の易置は、則京師之を專にし、威權比無し。世俗呼びて公方と曰ふ。初め義滿幕府の官制を定む。武衛、細川、畠山氏、更管領と爲る。之を三管四職と謂ふ。山名、一色、京極、赤松氏、更侍所別當と爲る。之を四職と謂ふ。武衛は卽斯波氏、京極は卽佐々木氏なり。武田、小笠原氏、更弓馬の禮式を司る吉良、今川、澁川氏、更武者頭と爲る。伊勢氏、奏者と爲る。之を七頭と曰ふ。關東も亦之に擬し、自稱して公方と曰ふ。故上杉憲房の後、世鎌倉の山内に居る。憲房の兄は重顯なり。其後、世扇谷に居る。兩上杉と稱し、更管領と爲る。而して故氏滿の弟滿直、陸奥、出羽を管す。號して三管と曰ふ。千葉、小山、長沼、結城、佐竹、小田、那須、宇都宮の八族を八館と曰ふ。

持氏の時に當りて、上杉氏憲執事たり。持氏之と隙あり。氏憲、職を辭す。上杉憲基を以て、之に代らしむ。憲基は憲定の子、憲房の玄孫なり。持氏の叔父を滿隆と曰ふ。頗る聲望あり。姪滿仲を養ひて子と爲す。氏憲、滿隆に說きて曰く「公方、酒色に耽溺し、師を統ぶ可からず。而して憲基、政を爲す。又偏私あり。邪を匡し、難を靖ずるは、君に非ずして誰ぞや。君、若し事を擧げば、臣請ふ、之を補けん」と。乃義持の敎令と矯り、密に將士を招く。將士競ひ附く。

細川氏略系

二十三年上杉氏憲憲基越後に走る

持氏今川範忠に依る



二十三年十二月、氏憲、兵を將るて、滿隆、滿仲を奉じて、以て、持氏を圍む、持氏、大に驚き、遽に馬に騎りて走り、憲基の佐介第に入る。憲基、族氏定をして、之を拒がしむれども、衆寡敵せず。持氏、夜、出でて西に走る。從士多く追兵に殺さる。藤澤の道場に至りて、氏定自刃す。憲基、越後に走る。諸の敗軍、持氏、伊豆の國淸寺に在りと聞き、みなこゝに來り集る。狩野介某、氏憲に黨し、來り攻めて之を破る。持氏、駿河に走り、今川範忠に依り、急を京師に告ぐ。京師方に流言す「大納言義嗣、立つを得ざるを以て、竊に觖望を懷き、氏憲と謀を通じ、義持を伐たんと欲す」と。義持、義嗣に逼り、髮を削らしめ、之を相國寺に幽し、敎を關東の將士に下し、持氏を救はしむ。憲基、兵を越後に起す。江戸氏、豐島氏、二階堂氏

岩松持國

二十四年

持氏鎌倉を復す

滿隆等自殺す

義嗣卒す

二十九年

滿重持綱を斬る

三十一年

西室

【軍職】征夷大將軍

三十二年

義量卒す

赤松持貞

赤松滿祐

並に兵を武藏に起して、以て氏憲を討つ。氏憲兵を遣して、之を攻めしめ敗れて歸る。氏憲の婿岩松持國、兵を上野に起して以て氏憲に應ず。廿四年正月、氏憲、持國と、武藏を夾み攻め、勝ちて之を平ぐ。既にして持國、驕恣にして、將士心を離す。持氏、乃今川氏、大森氏、葛山氏の兵を以て、鎌倉を攻めて之を復す。滿隆、滿仲、氏憲、及び氏憲の宰長尾氏春等、皆雪下の僧舍に自殺す。持國、殘兵を聚め、持氏の將舞木宮内と戰ひて、兵敗れて擒にせらる。明年、義嗣暴に卒す。

二十九年、佐竹某、持氏に叛く。持氏、與に比企谷に戰ひて之を斬る。小栗滿重、宇都宮持綱、又叛きて結城に據る。持氏、上杉氏、小山氏をして、之を擊たしむ。明年、持氏、自將として結城を攻めて之を拔き、滿重、持綱を斬る、京師の援軍駿河に至り、事平ぐと聞きて歸る。持氏、凱旋し、武藏府に至り、義持が故氏憲の孤子某を庇ふと聞くや、之を怨みて畔心あり。兵を移し、西上せんと欲す。

三十一年三月、義持、僧の服西堂を遣し、武藏に至り、持氏を諭し、兵を弭めしむ。持氏聽かず。西堂、往來して辨說し、義持、持氏に請ひ、父子と爲ることを約せしむ。九月に至り、和成りて、持氏、乃鎌倉に歸る。

義持、性嬾惰なり。時に京畿事無きに會し、游宴を以て事と爲す。三管、四職をして、更具を治めて招請せしむ。是より先一歲、軍職を長子義量に讓りて、自髮を削りて道詮と稱す。

三十二年、義量卒す。義持、再政を聽く。赤松持貞を寵す。持貞は貞範の孫なり。初め貞範の弟則祐、功を以て播磨、備前、美作を領す。以て子の義則に傳ふ。三十四年、義則卒す。四子あり。則友、滿祐、祐之、義雅なり。則友夭す。滿祐を嗣と爲し、三州を襲領せしむ。義持、其領する所を削り、之を持貞に與へんと欲す。滿祐怒りて、自其第を焚き、走りて播磨に歸る。義持、細川持元、山名滿熙を遣し、往きて之を擊たしむ。諸將多く滿祐と姻を連ぬ。往くを欲せず。十月、連署して、持貞の亡狀を訴ふ。義持、已むを得ず、持貞をして自裁せしむ。而して滿祐を赦し、京師に歸らしむ。

正長元年義持薨ず

義教

稱光帝崩ず

永享元年

還俗將軍

二年

三年

四年

【岳】富士山

義持、疾作り、正長元年正月、薨ず。內大臣右近衞大將從一位に至る。初め義持六弟あり。義嗣の禍に懲り、皆以て僧と爲す。義持、疾篤に及びて、嗣子なし。幕議、或は其一人を擇びて、嗣と爲さんと欲す。或は意を持氏に屬す。持氏も亦立たんことを冀ふ。管領畠山滿家、建議すらく、「之を神に質すに若かざるなり」と。自石淸水祠に赴き、之を鬮して、義圓を得たり。義圓は義持の第三弟、靑蓮院の僧正たり。是て於て、髮を蓄へ、義持の薨ずるに及びて、室町に入りて、喪主と爲る。三月、爵に叙す。其髮猶短きを以て、頭を裏みて諸將を見る。名を義宣と改め、後義教と更む。

七月、稱光帝崩ず。義教、崇光帝の曾孫を、伏見に迎へて、之を立つ。初め崇光の南遷するや、後光嚴、太弟の故を以て位に卽く。崇光還りて伏見に居る。其子榮仁を立てんと欲し、之を細川賴之に囑す。賴之、詔を奉ぜず。後圓融を立て、以て帝に至る。伏見氏、日に微なり。上皇之を憫み、宣を下し、榮仁の子貞成を以て、無品親王と爲す。中外皆稱す、「宮車晏駕するが如きことあらば、親王必立たん」と。帝、疾あるに及びて、上之を聞きて懌ばず。貞成、髮を削り、以て之に意を示す。貞成の子を彥仁と曰ふ。帝、疾篤に及びて、上皇、義教と議を決し、管領滿家をして、彥仁を迎へ、之を立たしむ。是を後花園帝と爲す。後龜山の皇子立つを冀ひて得ず。怒りて伊勢に走る。明年、北畠氏、越智氏、並に兵を起す。義教、土岐持數をして、北畠氏を攻めしむ。未だ下す能はず。之を破り、皇子を以て歸り、之を嵯峨に寘く。畠山持國をして、越智氏を高島城に攻めしむ。是の歲、元を永享と改む。朝議謂ふ、「正長の號、王室將家に於て、皆凶となす」と。而して持氏、將軍と爲るを得ざるを慍り、猶私に正長を用ゐて曰く、「吾れ何ぞ還俗將軍に屈せんや」と。義教も亦、自天下己に服せざる者多きを知り、銳意政を爲す。諸將を待するに、辭色を假さず。軍國の事、釐革する所多し。

二年、鎭西の豪傑を徙し、以て京師に充つ。又東南を圖らんと欲す。三年、伊勢及び、紀伊に遊ぶ。四年、駿河に遊び、今川範政に館し、岳を觀んと宣言す。是の時越智氏、猶高島城に據る。城固くして拔けざるこ

八年

と數歲なり。義教、益兵を遣し、之を攻む。義教、武技を學び、小笠原政康に從ひて、射を受く。八年、政康　村上頼清と信濃に鬪ふ。頼清輙く敗れ、援を鎌倉に乞ふ。持氏、之を援けんと欲す。憲基の子憲實、執事たり。諫めて曰く、「彼は我が管國に非ざる也。何ぞ我が事に關らんや。且我れ頼清を援くれば、則將軍必政康を援けん。是れ兄弟の邦を以て、天下の爭を開くなり」と。持氏、憲實の權力を憚り、勉めて之に從ふ。上杉憲直、一色直兼、持氏に寵り。因りて憲實を間ず。明年四月、持氏、憲直、直兼をして、頼清を援くるに託して、兵を武藏に召さしめ、憲實を誅せんと欲す。府下騷擾し、兵士大に山内に集まる。持氏惧れ、自山内に往き、憲實に面諭し、罪を憲直に歸して、之を逐ふ。憲直逃れて、藤澤寺に入る。事輙釋く。

九年

十年、持氏、其子賢王に冠し、禮を鶴岡祠に行ひ、遠祖義家の故事の如くせんと欲す。憲實、又爭ひて曰く、「室町に冠し、將軍の偏諱を受くるが禮なり。先公より公に至るまで、三世以てこれを恒と爲す。今、君乃之を變ふるは不可なり」と。持氏曰く、「還俗將軍、何ぞ以て吾が子に冠するに足らんや。吾が子に冠する者は、今上に非ざれば則伏見、龜山の二王のみ」と。遂に祠前に冠し、名を義久と命ず。諸將皆入りて之を賀す。獨、憲實病と稱して入賀せず。持氏怒り、兵を發して憲實を攻めんと欲す。憲實乃上野に奔り、平井城に據る。明日、持氏、卽一色時永を遣し、兵を將ゐて、往きて憲實を討たしむ。遂に三浦時高を留めて、義久を輔けて鎌倉を守らしめ、而して自、將として、出でゝ武藏府に陣す。憲實、急を義教に告ぐ。義教奏して、持氏を討つべき一行の詔を請ひ、副ふるに教書を以てし、故上杉氏憲の二子、持房、教朝をして之を齎し、以て東北三道を徇へしむ。東海、東山の兵は持房に從ひて、箱根より進み、北陸の兵は教朝に從ひて、直に平井に赴き、憲實に合して南に下り、分陪に陣す。持氏、兵を分ちて之を拒ぐ。九月、持房等持氏の兵と箱根に戰ふ。利あらず。又早川尻に戰ひて之を破り、進みて鎌倉に逼る。十月、三浦時高、持氏に叛き、義久を攻む。義久、祖叔父滿貞と走りて、扇谷に匿る。梁田某、名塚某、力戰して之に死す。其他

十年
賢王加冠

義久
憲實上野に走る
持氏憲實を討つ

義教持氏を討つ

持氏降を乞ふ

の將士は、皆率憲實に歸す。持氏、窮蹙す。十一月、持氏、遂に髮を削り降を乞ふ。憲實、長尾芳傳をして、持氏を永安寺に徙さしめ、兵を置きて監守す。憲直、直兼に迫りて自殺せしめ、盡く其從士を殺し、自關東の將士と連署して、義教に持氏の死を宥さんことを請ふ。使者十餘反すれども、義教、竟に聽さず。

十一年
持氏自殺す
春王、安王

十一年正月、憲實、義教の令を以て、兵を遣し、諸軍をして、永安寺に圍ましむ。持氏、火を寺塔に縱ち、其妻と俱に自殺す。義久、滿貞、皆死す。持氏、少子二人あり春王と曰ひ、安王と曰ふ。皆髫齔なり。乳母長尾氏の爲に挈へられ、遁れて日光山に走る。義教、使を鎌倉に遣し、諸將を勞ひ、憲實を以て東國を管領せしむ。憲實、君を殺したる名を負ふを恐るゝや、自永安寺に往き、伏して持氏の影前に謝し、刀を抽きて、將に自殺せんとす。從者の爲に止められて果さず。乃髮を削り、退きて國清寺に居り、弟清方、教朝を視しむ。憲實、辭すれども聽されず。憲實、乃東、東北三道の兵を率ゐて、氏朝を攻む。氏朝、士卒を勉勵し城に嬰りて固く守る。憲實等、拔く能はず。是の時に當りて、越智氏の城、旣に陷る。而して北畠氏、復兵を起す。義教、人をして、就きて和を講ぜしむ。曰く、「吾、關東を定め、然る後之を剪滅せん」と。義教の季弟僧となり、義昭と云ふ。後龜山の皇子、

十二年
結城氏朝

氏朝兵を擧ぐ

清方結城を圍む

北畠氏
義昭

【舊業】南朝
菊池氏

義昭逃る

嘉吉元年
結城陷る
氏朝戰死
永壽王

【垂氷】美濃

嵯峨の大覺寺に在す者あり。義昭之と親み善し。是に於て、義昭、皇子に說きて曰く「東西、兵亂あり。皇子舊業を復せんと欲せば、是の時を可と爲す。北畠氏、既に和すと雖、皇子の起つを聞かば、必ず復、兵を起さん。土岐一色等、皆將軍を怨む。其來り附くこと必せり」と。又密に人をして、菊池、大村の諸族に約し、兵を起し、遙に聲援を爲さしむ。菊池答へて曰く「結城下らざること二歲ならば、天下必動搖せん。以て乘じて起つべきなり」と。義昭、乃、門を閉ぢ髮を蓄ふ。義敎、其久しく出でざるを怪み、廉問して實を知る。則兵を遣し、且之を捕へんとす。義昭逃れ亡げて、之く所を知らず。則、其形を圖して、諸國に索め、購ふに千金を以てす。

嘉吉元年三月、義敎、伊勢の神祠に詣づ。北畠氏の義昭を匿すかと疑ひ、親之を訊察するなり。四月、結城、古河、皆陷る。氏朝父子戰死す。城兵悉く之に死し、以て一孤を脫す。二孤逃れ走り、上杉氏の兵に獲へらる。獨、持氏の季子永壽王は信濃に走り、氏朝の季子成朝は常陸に走る。上杉氏の兵、二孤を檻して西す。五月、薩摩の人、亦、義昭の首を得て東し、先京師に至る。首、壞敗して辨ず可からず。義敎、義昭が睨くる所の童子を召して、之を視しむ。童子曰く、「果して僧正ならば、則其二齒缺けたらん」と。之を驗するに果して然り。義敎、大に喜び、則使者を遣し、二孤を迎へ、途に戮せしむ。之に垂氷に遇ふ。護將長尾某則道傍の佛寺に入り、浴を二孤に進む。二孤も亦其意を知り、正座して刃を受く。春王は年十三、安王は年十一なり。首、京師に至る。義敎、其乳母を召し持氏の子猶在るかと問ふ。乳母答へずして舌を嚙みて死せり。

初め尊氏、直義と謀りて曰く、「義詮は武あらず。以て重任を寄せ難し。宜しく基氏をして關東を領し、以て之を鎭護せしむべし」と。則、基氏を立て、義詮を輔けしめて、曰く、「子々孫々相輔けて、相背く勿れ」と。然れども義滿、義持は、皆鎌倉を滅すの志あり。義敎に至りて則能く之を成すと云ふ。基氏の家既に敗れて、義詮の家も亦是より亂る。

赤松滿祐

小辨一色義貫
土岐持頼

赤松貞村

三尺入道

滿祐、義敎を怨む
幕府怪あり

義敎、人と爲り猜暴、盛氣を以て下を馭す。既に關東を滅し、意益驕る。自謂ふ「父祖の爲す能はざる所を爲す。天下復畏るゝに足る者無し」と。是より先、義敎、職を襲ひて、三歲の間に侍女三人罪ありて死を賜ふ。赤松滿祐の女これを與る。或人曰く、「滿祐怨望して、異心を有す」と。義敎聞きて、之を囚す。滿祐逃れて播磨に奔る。兵を遣して之を攻む。滿祐力窮り、髮を削り、出でゝ降る。之を許す。其七歲、一色義貫、土岐持頼を遣し、越智氏を攻む。義敎の嬖姬小辨といふ者、其家、一色氏と怨あり。因りて義貫款を越智氏に通ずと讒す。義敎、卽武田信榮に命じ、軍中に就きて、義貫を誅し、其族を平けしむ。又持頼を疑ひ、細川持常に命じて、之を殺す。諸將士、人々自危む。併して滿祐、最疑懼す。滿祐の持貞と爭ふや、持貞死するに及びて、遂に其邑を併す。持貞の兄の子、貞村、幼にして父を喪ひ、邑除かる。義敎、其姿容美なるを見て、收めて近侍と爲し、甚之を寵す。曰く「家兄は其庶を庇ひ、吾は則其嫡を庇ふ。自別あるなり」と。因りて滿祐を疎斥す。滿祐、形貌矮陋なり。義敎、戲に呼びて「三尺入道」と曰ふ。滿祐、嘗て宴に侍し、醉ひて舞ひ、謠ひて曰く「軀矮として侮る勿れ三國の主」と。義敎愈之を憎む。義敎、猴を畜ふ。滿祐入る每に、則、人をして猴を放ち、其面を爬しむ。滿祐、刀を拔きて之を斬り、心深く義敎を怨む。而れども顏色に形さず。時に幕府、怪多し。狐あり、夜、屋上に鳴く。宿直の者、或とき空室中を窮ふに、偶人數十有りて鵜飼を爲すを見る。鵜飼は、散樂の曲名なり。忽として見えず。義敎、略意を加へず。貞村已に壯となる。之を寵すること衰へず。遂に滿祐の邑を割きて、之に予へんと欲す。將に其第に就きて意を諭さんとす。從容として滿祐に謂て曰く、「聞く、汝が園の梟、乳すと、一觀す可きや否や」と。滿祐伴り喜び、期を請ふ。六月廿四日を期す。

滿祐の從子を敎祐と曰ふ。幕府の近臣爲り。微に邑を削るの議あるを聞きて、滿祐に告ぐ。滿祐大に恚る。是に於て、長子敎康、家臣渥美等を召し、議して曰く「吾が宗、功を將家に積めども、將家の我を遇するに、亡狀一に非ず。我れ伏して其制を受く。何ぞ底止する所あらんや。吾れ先發して大事を行はんと欲す。汝等

滿祐義敎を弑す

持世卒す
義勝
滿祐を討つ

【肇阪】播磨山名持豐

吾爲に努力せよ」と。敎康等、之を贊く。乃、甲三百を第中に伏せて、義敎を請ず。義敎、卽往く。隨兵を門外に置き、獨、朝貴、諸將と入り、置酒高會して、散樂を觀る。樂、鵜飼に至る。時已に暮に薄る。第中呼ぶものあり。曰く、「厩馬逸す」と。因りて急に門を關す。門を關して甲發す。義敎將に起たんとす。敎康、敎祐、耦進し、其左右の手を執りて、之を伏せて曰く、「今日の事公自之を取るなり」と。渥美、屏の後より出でゝ、刀を揮ひて其首を斫る。一坐刀を拔きて起つ。起つ者は則殺さる。相殺す者又數十人。斯波義廉、大內持世、創を被り、垣を越えて逃る。隨兵皆潰ゆ。滿祐、既に義敎を弑し、府兵の來り討つを持ちて、戰死せんと欲す。而して諸將士、悉く幕府に聚り、惶惑して出づる所を知らず。旦日、滿祐、乃三百騎を以て、京師を出で、攝津の中島邑に至り、義敎の首を崇禪寺に葬りて、而して西播磨に歸り、白旗城に據る。是より幕府、鵜飼を以て凶となし、樂府に列ねず。義敎、官、左大臣右近衞大將從一位に至る。薨ずる年四十八なり。七月、持世、創劇しくして卒す。八月、畠山持國は滿家の子なり。管領細川持之等と議し、義敎の子義勝を立てて嗣となす。甫めて八歲なり。天子、義勝に詔して、滿祐を討たしむ。乃、細川持常、赤松貞村、武田信賢を遣して播磨よりし、山名持豐、山名敎之、山名敎淸を美作よりせしむ。兵、凡五萬人なり。滿祐、貞村の來るを聞きて、大に喜びて曰く、「竪子の來るは、吾が願ふ所なり」と。持常、滿祐と姻ひ、自一軍を以て前に居り、故に逗撓して進まず。乃兵を遣し、逆へて蟹阪に擊ちて、大に之を敗る。九月、持豐進みて法華山に至る。山太險なり。滿祐の兵、其隘を阨守し、巨材を懸けて俟つ。持豐之を患へ、夜、土兵數千人をして、人每に一炬を持ちて其傍の山に上らしむ。滿祐の兵、吾が險を冒して入ると謂ふや、走りて之を拒ぎ、隘を守るの兵減ず。持豐則、牛數百頭を收め、藁を縛して人と爲し、牛背に跨らせて、驅りて敵軍に赴かしめ、精兵數百、鼓躁して之に從ふ。曉に隘口より進む。滿祐の兵、藥人を以て敵となし、悉く其懸材を發す。牛死して兵入る。滿祐の兵驚き潰ゆ。持豐進みて播磨に入り、連に諸砦を陷れ、衆に先立ちて白旗城に至る。城兵逃れ降りて

滿祐自殺す
大內敎世

三年
義勝卒す
畠山持國
義政
文安二年
永壽
龍穉

憲賈晦匿す
長尾昌賢

成氏
憲忠
結城成朝

赤松敎祐

略盡く。滿祐、渥美等と皆自殺す。乃三國を以て、分ちて持豐等に賜ふ。持豐は時熙の孫なり。敎康は、北畠氏に走り。內れられずして死す。敎祐は少貳嘉賴に走る。嘉賴之を內る。大內敎世は、持盛の孫なり。命を奉じ擊ちて之を破る。嘉賴、敎祐並に對馬に走る。乃、嘉賴の邑を敎世に賞賜し、明德、應永の二役より、山名、大內氏、皆微なりしも、是に至りて復興る。三年、義勝卒す。義勝、幼よりして馬に驗るを喜び卒に馬より墜ちて死す。官は四位左中將に止る。義勝の母は卽小辨にして、一色義貫を讒殺したる者なり。世、義貫崇を爲すと稱すといふ。畠山持國、管領となる。議して義勝の同母弟義成を立つ。甫めて八歲、後、名を義政と改む。文安二年、關東の將士、相與に共に請ひて、故持氏の子永壽を立てゝ、鎌倉の主となし、故憲賈の子龍穉を以て執事となす。永壽、初め信濃に走り、母の黨大井持光に依る。上杉氏、之を知らざるなり。憲賈既に髮を削り、又結城を攻むるに與り、心甚之を慚つ。結城陷るに及びて、卽其二子を以て僧となし、携へて西に奔り、以て自晦匿す。猶一子あり、伊豆に在り。是を龍穉と爲す。持氏亡びしより、關東靖せず。長尾昌賢建議して、持氏の胤子を立て、以て衆心を慰藉せんと欲す。乃永壽を索め、獲て之を京師に請ふ。京師議して之を許し、永壽に名を成氏と賜ひ、龍穉に名を憲忠と賜ふ。既にして結城成朝、陸奧より來りて成氏に仕ふ。成氏之と謀りて、怨を上杉氏に修めんと欲す。寶德二年、謀泄れ、成氏、江島に走る。憲忠迫ひて海濱に戰ふ。將士、之を和解し、成氏を奉じて鎌倉に歸り、事纔に釋くるを得たり。而して京師、比年、虞多し。南國の兵、隙に乘じて並起る。赤松敎祐、朝鮮に在り。亂を聞きて還り、其家を復せんと欲し、發覺して誅せらる。初め赤松氏亡びし時、畠山持國謂へらく、「滿則は明德の役に死して、則重は嘉吉の逆に與らず。是れ宜しく立つべきて祀を奉ぜしめんと欲して曰く、「滿則の子則重をしなり」と。赤松氏の遺臣、因りて則重を擁して播磨に起る。山名持豐、之を聞きて曰く、「吾れ功を樹て封を

【輿與】綱代
持國と持豐
細川勝元

義就
政長
遊佐
神保

享德三年

持國卒す

細川成之

受く。賊黨敢て之を奪はんと欲す」と。乃、兵を將ゐて但馬を發し、擊ちて則重を殺す。持國不平なり。持國の父子、三將軍を擁立し、官、從三位に至り、頗る驕恣なり。其政府に朝するに、或は籃輿に乘りて、騎士を從ふ。其下も亦法を犯す者多し。藤原兼良、藤原房嗣、皆關白を冀ひ、交持國に賂ふ。其威權是の如し。而して持豐之と抗衡す。持豐髮を削り、宗全と云ふ。女を以て細川勝元に妻す。勝元は、滿元の孫なり。勝元、父持元、伯父持行より、畠山氏と交管領となる。故を以て深く持豐に結び、以て持國を傾けんとす。持國、子なし。姪の政長を養ひて嫡嗣と爲す。尾張守に任ぜらる。已にして、義就を生む。右衛門佐と爲る。持國、之を愛して、政長を廢せんと欲す。其家長遊佐某、數南兵を擊ちて功あり。持國因りて遊佐に命じて、義就を輔けしむ。遊佐の同僚神保某、遊佐の權勢を嫉み、政長を立てゝ遊佐を排せんと欲す。乃政長に敎へて、自持豐、勝元に託せしむ。

享德三年四月、持國、義政に請ひ、義就を立てゝ政長を誅せんと欲す。政長、走りて勝元の家に匿れ、神保等をして持豐に依らしむ。八月、畠山氏の將士、率政長に屬す。京師大に騷ぐ。幕府、諸將を召して自衛る。獨、持豐・勝元、往かず。其夜、人あり。火を持國の第に縱つ。持國は走りて、伯父滿則の第に入り、義就は奔りて、山名敎之に依る。敎之內れず。則遊佐の家に入る。遊佐の家又火く。終に河內に奔る。持國遂に建仁寺に匿る。是に於て、勝元、政長を携へ、入りて幕府に謁し、義政に白して曰く、「近日の事、臣の僕磯谷の爲す所なり」と。九月、磯谷を誅し、以て謝す。而して政長、竟に立つことを得、兵を遣して持國を擁して歸る。歲を踰えて、持國卒す。

義政、持國の第を焚きしは、持豐の爲す所なりと聞くや、十一月、諸將を召して、命じて持豐を誅せしむ。勝元、俄に其衆を拔きて、東山に赴く。族を舉げて之に從ふ。幕府、兵寡し。勝元、乃、爲に持豐を赦さんと請ふ。持豐又謝し、誓言を獻ず。事輒釋く。乃持豐を罷めて國に之かしむ。細川成之、間に乘じて、赤松氏の裔を祿せんと請ふ。義政之を許す。成之は持常の子なり。

康正元年
赤松則尙
【婦翁】勝元

赭入道
石見

【皇子】後醍醐帝の曾孫

細川氏
山名氏
伊勢氏
斯波氏

斯波氏の三老

康正元年夏、赤松敎祐の弟、則尙を召して、之に播磨を賜ふ。持豐怒り、則尙を逆へ擊ちて、之を殺す。因りて怒りて曰く、「則尙の立つ、勝元何ぞ之を沮み止めざる。乃之をして刃を婦翁の腹に刺さしめんと欲するか」と。勝元、子なし。持豐の子を養ひて嗣と爲す。已にして子を生む。則之を廢す。持豐、是に因りて勝元を恨む。幾何もなくして、持豐赦されて京師に歸る。勢益熾なり。持豐、長身赭面なり。人呼び て赭入道と曰ふ。時に赤松氏の遺臣、所在に伏匿す。持豐を憚り敢て爲すあらず。こゝに石見といふ者あり。內大臣藤原實量に仕ふ。常に赤松氏を復せんと思ひ、從容として、實量に語るに其志を以てす。曰く、「細川氏、山名氏、內に釁隙あり。臣以爲らく、此時を以て細川氏に附かば、則志成らん」と。因りて尊氏の則村に與へし書を出して示す。實量書を視て、嘆じて曰く、「其祖は將軍の父たり。其孫は將軍の仇たり。仇讎の責、汝、何を以てか償はん」と。石見曰く、「今將軍立つの歲、南人闕を犯して璽を奪ひ、璽、今、吉野に在り。臣請ふ、往きて之を收復せん」と。乃舊僚中村某等をして吉野に往き、伴りて南朝の皇子に仕へしむ。

長祿元年、中村終に南朝の皇子を殺し、璽を取りて還り獻ずるを得たり。

義政、議して其功を賞す。勝元之を贊し、邑を赤松政則に賜ふ。政則の父性存は、義雅の子なり。滿祐に於ては姪たり。嘉吉の變には猶幼なり。建仁寺の僧龍澤に依りて免る。後、政則を生む。甫めて五歲、是に於て加賀の半を賜ふ。持豐怒り、刺客をして石見を刺し殺さしむ。

是の時に當りて、三管領は、細川氏獨盛にして四職は山名氏獨盛なり。而して伊勢氏の權勢、七頭に甲たり。是より先、斯波義將、義重、義淳、義繼、父子相襲ぐ。享德中、義繼夭して、子なし。族義敏を以て嗣と爲す。義敏は義將の弟、義種の曾孫なり。斯波氏の家に三老あり。甲斐、織田、朝倉と曰ふ。三老、常に義敏を喜ばず。相共に竊に之を詈りて曰く、「新主人、何ぞ舊家臣に無禮なる」と。伊勢貞親に因りて之を廢せんと請ふ。貞親、甲斐氏に娶る。則之を右けて、爲に義政に請ふ。義政、兩ながら之を和解せんと欲す。

三年　義廉

伊勢氏富子

義政奢侈

熊谷

寛正元年政長、勝元等義就を攻む

三年

四年

山名是豐

三老肯ぜず。乃義敏を諭し、其子松王に讓りて自退かしむ。三年、義敏、致仕す。貞親、乃、義廉を立てんと請ふ。之を許す。義廉は、義種の孫なり。義敏、望を失ひ、走りて大内教弘に依る。伊勢氏は、世出納を掌り、甚權あり。而して義政に至りて最甚し。義政の妻を富子と曰ふ。藤原重政の女なり。寵あり。言ふ所聽從せざる莫し。内謁公行し、號令抵捂す。而して伊勢氏、權を中間に專にす。義政、獨遊宴を事とするのみ。義政、奢侈を喜ぶ。高倉第の障子一間の直二萬錢。其他之に稱ふ。故を以て征賦前代に十倍す。前代は畿内富商の金を借ること、率一歳數次に過ぎず。義政の時に至りては、則一月に或は八九次なり。故事に、將府に大儀ある毎に、諸將に課して其費用を助けしむること、率十年に一舉なり。義政は五歳に九舉す。天下凋弊す。近江の士人熊谷某、學を好む。密に書を幕府に上り、義政を極諫す。義政怒りて曰く「其言は則然り。而れども其人に非ず」と。貞親に命じて熊谷の邑を奪ひ、之を逐はしむ。是より先、畠山政長、義就河内に相鬩ぐ。義政、兩ながら之を赦し、京師に入らしむ。寛正元年九月、義政、貞親に命じて義就を逐はしむ。義就曰く、「吾れ顧ふに罪なし。將軍豈讒を信ずるか」と。乃河内に奔る。義政、政長をして之を攻めしめて、若江の城を陷る。細川勝元、政長を援けんと請ふ。三年、勝元、族成之をして、假管領爲らしめ、二十餘州の兵を將ゐて、赴き援けしむ。義就、數百人を以て、嶽山、金胎寺の二城に據り、擊ちて京軍を卻く。而して金胎寺、竟に陷る。四年三月、京軍、嶽山を圍む。山名是豐、備後の兵を以て先登し、義就と戰ひて、七勝七敗す。城兵疲れて卻く。是豐曰く、「我は宗全の子なり。城を拔かずば已まず」と。城兵敢て出でず。義就刀を揮ひて、身、士卒に先だつ。是豐曰く、「義就は勇士、眞に吾が敵なり」と。戰ひて日暮に至る。乃交解く。四月、嶽山陷る。義就、自殺せんと欲す。湯淺二郎代りて死す。義就、脫走して高野に入る。政長之を攻む。又吉野に走る。政長、凱旋す。是豐歸りて父に語るに義就の勇を以てす。持豐、心之を奇とす。

後土御門帝

義視

六年義尙生る

義敏と貞親

義廉と持豐

【普光公】義敎

五年、皇太子禪を受く。是を後土御門帝と爲す。義政も、亦政に倦み職を辭せんと欲す。而して歳三十にして、未だ子あらざるなり。弟義尋、髮を削りて淨土寺の門主たり。義政、職を義尋に讓らんと欲す。義尋、固辭して曰く、「近日の人情反覆畏るべし」と。義政人をして、言はしめて曰く、「子、豈顧慮する所あらんや。吾れ若し他日男を擧げば、禍崇に就きて卽僧と爲さんのみ。必子を廢せじ。子第、速に我に代れ」と。義尋、乃、髮を蓄へ今出川の第に徙り、名を義視と更む。將士赴き謁す。勝元執事たり。已にして義政殊に職を讓るの意なし。六年十一月、富子、男義尙を生む。内外慶賀す。富子以て僧と爲すに忍びず。日夜啼泣し、立て〻嗣と爲さんことを願ひ、一强援を得んと欲す。諸將の威力あるを念ふに、曰く「赭入道に如く者なし」と。密に書を作りて、持豐に囑して曰く「吾れ孺子を立てんと欲す。而れども義視、業已に嗣となりて、勝元之を輔く。撼す可からざるなり。願くは公、吾が爲に之を圖れ」と。持豐、素より勝元を恨む。義尙を立て〻、己、執事たらんと欲す。乃、之を許諾す。因りて請ひて義就を赦して京師に入れ、以て己を援けしむ。持豐、又女を以て斯波義廉に許嫁す。時に義敏、周防に在り。其妹は伊勢貞親の妾と爲りて寵あり。其子松王は僧の貞蕊の弟子たり。是に於て、妾と貞蕊と、日義敏を復せんと請ふ。貞親、遂に敎旨を以て、義敏を召して京師に入れ、義廉の朝從を禁じ、其第宅を收む。義廉走りて、之を持豐に告ぐ。持豐、大に怒りて自其第に往きて、以て公使を拒がんと欲す。家臣垣屋、太田垣等、交諫めて曰く、「私姻を以て公命に背く。其れ之を若何。君盍ぞ其武衞に適く者を以て、轉じて公方に適かざるや。是れ禍を轉じて福と爲すなり。君、臣等に聽かずば、臣等、當に髮を薙り衣を染めて、高野、紛河に住むべきのみ。君の禍に及ぶを視るに忍びざるなり」と。持豐笑ひて曰く、「吾れ箭を奴輩に加ふる何の不可か之れ有らん」。赤松滿祐の普光公を紿するや、細川、六角、武田の諸人、往く者雲の如し。大に蟹坂に敗れて、踏跳して進まず。然して但馬口より入り、一戰して、逆賊の首を梟し、以て將軍の仇を報ぜし者は誰ぞ然るに未だ幾何ならずして

賊の餘孽を召し、我が功田を奪ひて之に予ふ。吾れ聞く、父の讎は與共に天を戴かずと。田夫野人も、猶此義を知る。今、父の讐を疾まずして、仇を報ゆる者を疾み、此を奪ひて以て彼に予へんと欲す。此の如き公方は、眞に賴む可けんや。饒令、吾れ公命に背くとも、而も若が輩、謹愼して以て媚を納れよ。何ぞ必しも高野、紛河に之かんや」と。因りて衣を拂ひて入り、大聲に罵りて曰く、「大姓に罰す可き者あり。當に管領に告げ、諸將に諮りて、以て其議を決すべし。貞親の一豎子、敢て三職を進退し、武衛の家をして、亦畠山氏の禍に踵がしめんと欲す。禍敗の至る。眞に測る可からず。今日は彼に在り。明日は我に在り。我れ必往きて義廉と生死を共にせんのみ」と。是に於て、山名氏の家臣咸意を決し、兵を修む。京師訛言あり「今出川氏も亦、義廉を右く」と。義視懼れて、乃走りて勝元の第に入る。人あり。貞親に告げて曰く、「細川、山名、命を奉じて來り討つ」と。四月、貞親は東して伊勢に走り、義敏は北して越前に奔る。諸將連署して、貞親を誅せんと請ひて曰く、「貞親、誅に伏せずば、乃群臣、復朝從する能はず」と。

貞親走る

義政已むことを得ず、之を聽す。人をして義視を諭解せしむ。義就に報ぜしむ。義就是に於て、持豐、復義就を赦さんと請ふ。義政、之を許す。持豐、喜びて使をして、義就に報ぜしむ。義就熊野に在り。報を得て、卽發し、九月、河内に入る。政長の部將、若江城を守る。怖れて城を棄て、走る。義就、盡く河内を定む。十一月、京師に入りて、幕府に謁し、徑に詣りて持豐に謝し、歡を極めて出づ。或人、夜、義就の門に書して曰く、「右衞門佐、二物を拜戴す。御所の盃、山名の足」と。義就謂へらく、勝元、政長の黨の爲す所なりと。

應仁元年

明年、應仁と改元す。故事に歲首ごとに、管領以下更將軍を饗す。是の時、政長、管領たり。正月二日、政長、具を治めて義政を請ず。義政往かず。政長驚きて曰く、「吾が勤仕異等なり。饒使褒賞を蒙らずとも、何ぞ遽に疎斥せらるゝに至らんや。蓋し宗全、義就が讒言の致す所ならん」と。義就、之を聞き、大に喜びて曰く「彼れ已に將軍に疎斥せらる。當に往きて之を驅逐すべし」と。政長の家宰神保長誠、政長に

請ひて守備を修む。

義就兵を聚む

十五日、持豐、義政を饗し畢りて、義就、義廉等の諸將を聚め、幕府を圍みて請ひて曰く「義就既に赦さる。當に本第に移住すべし。而るに勝元、政長を右けて以て、公命を梗ぐ。請ふ、之を詰問せん」と。義政、乃使を遣し、勝元に問はしむ。勝元曰く、「臣、將に自往きて答へんとす」と。使者還り報ず。幕府、戒嚴す。兵の細川氏に聚る者一萬可り。義就等も亦、兵を幕府に聚む。義政、令を出して曰く、「政長、義就、獨身戰を決し、諸將、援くるを得る毋れ」と。持豐怒りて曰く、「三日之を請ひて、一朝に之を失ふ。如何」と。義就曰く、「獨身戰を決するは、吾が願ふ所のみ。旦日、僕當に手兵を以て赴き攻むべし。諸君、勝敗の如何を傍觀せよ」と。是に於て、諸將、皆令を奉ずれども、勝元肯はず。義政、細川敎春をして、往きて勝元を諭さしめて曰く、「令を奉ぜざる者は叛なり」と。勝元、歎息すること、之を久しくして、乃答へて曰く、「賴春、國難に死す。賴之、幼主を輔けて、以て臣に至る迄六七世。未だ嘗て倍叛せざるなり。今寧友誼に背くとも、叛名を被るに忍びず。當に謹みて令を奉ずべきのみ」と。長誠之を聞きて、政長に謂て曰く、「右京太夫、已に我を援けず。我孤立なり。義就は幕府より來る。諸將、豈潛に之を援くる者無からんや。本第は平夷、拒ぎ守る可からず。今の計を爲す者は、宜しく上御靈の林に據り、南、相國寺を負ひ、西大夫の第に依るべし。戰卽利あらずば、大夫、豈坐視せんや。且大夫の家老安富元綱は、臣と親み善し。卽大夫をして援けざらしむるも、而も元綱は必來らん」と。政長、之を然りとし、乃其第を燒き、六千人を以て出づ。從士以爲らく、奔るなりと。行道より亡げて、御靈の林に至る比、裁に二千人のみ。義就曰く、「兵の利は勝に乘るに在り。これを失ふ可からず」と。十八日、晨を侵して之に赴く、時方に雪ふる。兵凍えて輙く前まず。政長の兵、亂射して數百人を斃す。而して義廉等、潛に來りて、義就を助く。政長、苦戰す。細川氏門を闔ぢ、敢て出で援けず。長誠、人をして、元綱に言はしめて曰く、「旦より戰ひて暮に至る。我が兵疲れたり。敢て援兵を望まず。特

政長兵を出す

義就、政長と戰ふ

義廉、義就を助く

（應仁の亂之圖）

勝元兵を發す

勝元の兵

に請ふ。一樽の酒を恵め。將に主公と訣飲して、自裁せんとす」と。元綱答へず。政長、夜、火を祠宇に縱ち、林を穿ちて逃る。義就入りて、宇下に三屍あるを覩て曰く、「尾張守死せり」と。乃凱旋す。持豐、大に喜びて其兵を散遣す。世、勝元の政長を援けざりしを嗤ふ。謠ひて曰く、「細川宜しく洲股川と改むべし。尾張を害する者は、是れ此川なり」と。勝元之を愧ぢ、門を閉して出でず。叔父持豐、數之を激怒せしむ。

時に勝元の第は東に在り、持豐の第は西に在り。以て室町府を夾む。義視、二人の間に往來して、之を和解す。勝元陽に之に伏從す。持豐、益驕り、復備を設けず、勝元之を窺ひ、潛に兵を諸國に發す。勝元、自其管する所の摂津、丹後、土佐、讃岐の兵を發す。族政之は、阿波、參河を以て、師春は備中を以て元春は、和泉を以て、政春は、淡路を以て、斯波義敏は、越中を以て、畠山政長は、紀伊、河内を以て、京極持清は、隱岐、出雲、飛驒、近江を以て、赤松政則は、播磨、備前、美作を以て、武田國信は、安藝、若狹を以て、並に勝元に屬す。兵凡十六萬餘人なり。議して曰く、「幕府の門前に一色義直の第あり。西陣と相接して、之が爲に守る。我れ今一將を遣し、實相院に陣して、以て之を隔絶せば、則、義直、必怖れて走らん。我れ以て幕府を取る可きなり」と。五月廿四日、武田國信等を遣して、之に陣せしむ。義直果して走る。

勝元乃幕府に入り、將軍の牙旗を請ひ、之を四足門に樹て、又義視を迎へて府中に置き、將士をして諸街巷に屯せしめ、以て持豐を討つ。

持豐兵を發す

持豐の兵

兩軍相戰ふ

東西の陣營

大内政弘等西陣に黨す

【備前守師春】

持豐、之を聞きて曰く、「悔ゆらくは、豎子に先ぜられたり」と。是に於て、亦兵を發す。持豐、自其管する所の但馬、播磨、因幡の兵を發す。族教幸は、伯耆、備前を以て、教清は、美作、石見を以て、斯波義廉は越前、尾張、遠江を以て、畠山義就は、大和、河内、紀伊を以て、畠山義統は、能登を以て、六角高頼は近江を以て、一色氏直は丹波、伊勢、土佐を以て、土岐成頼は、美濃を以て、並に持豐に屬す。兵凡十一萬餘人なり。山名是豐は、勝元と約して父子と爲る。故を以て獨り東陣に屬す。西陣、垣屋を遣して實相院を攻め、太田垣を遣して東面の前壘を守らしむ。京師の人民負擔して奔竄す。後二日、細川氏の兵、前壘を攻め、火箭を發し、燒きて之を走らす。持豐、義廉、教幸を遣し、師春を大宮第に攻めしむ。師春、援を勝元に乞ふ。勝元、乃、持清を遣し、萬人を將ゐしむ。戾橋を過ぎ、未だ陣せず、義廉の將鹿草、朝倉等、呼譟して之に薄る。持清の兵卻き、遂に大に奔り、橋を爭ひて墜つる者數千人。政則曰く、「備前守、孤軍にして壁に嬰る。之を援けざる者は、士に非ざるなり」と。三百騎を勒して、猪熊巷より赴き援け、擊ちて義廉の兵を走らせ、師春を拔きて、政之の村雲第に入る。山名氏の兵、之を蹂し、火を第外に縱ちて、烟焰の中に戰ふ。此の如きこと兩晝夜なり　伏尸街衢に塡塞す。

六月、東西の陣、交解きて退き、東陣は相國寺に據り、西陣は武衛氏に據り、相持して未だ戰はず。西陣の兵、漸く加はる。大内政弘、素より西陣に黨す。河野氏と、兵三萬を合せて來り援く、東陣、政則を遣し、之を摂津に拒がしむ。政國、國信を遣して、武衛の壘を攻めしむ。政弘、未だ至らざるに及びて之を拔かんと欲す。迭に攻むること二十日。未だ拔く能はず。而して政弘、已に至りて、政則を擊つ。政則走りて、五條に至る。入るを得ず。乃東して岩倉山に走る。西陣、其炬火を望見して、兵を遣して三道より要擊し、皆敗れ卻く。政則、神樂岡を經て御靈口より東陣に入る。敗を取る所以なりと。八月東陣、流言すらく、「將軍の近臣、款を西陣に通ずる者あり」と。常に密謀を泄す。勝元、家臣と議し、甲六千を以て、諸門を扼守し、教春をして、請ひて番衆十二人を逐はしむ。義政之を聽

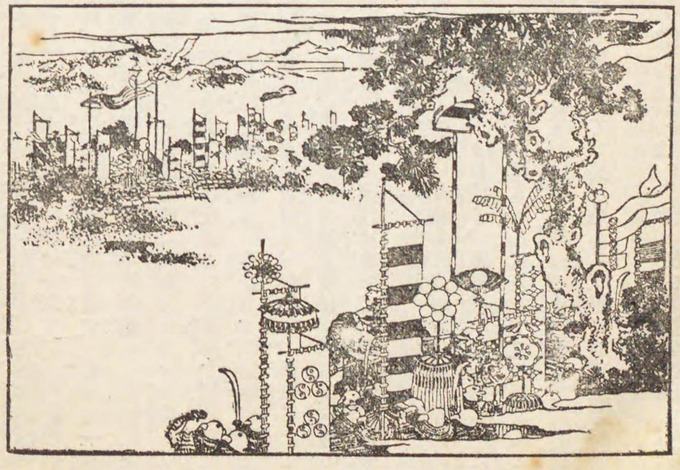
勝元上皇天皇を幕府に迎ふ

す。近臣皆怒りて曰く「上意の注する所は西に在り。西勝てば則笑ひ、東勝てば則顰む。何ぞ獨吾儕のみならんや。吾儕、衆中に選まれて、特に放逐の命を受く。亦以て死するに足れり」と。爭ひて結束し、將に鬪はんとす。是の時に當りて、勝元、上皇、天皇を幕府に迎ふ。政長、特に三位に叙せられ、輿を護りて門に至る。門中喧騒す。輿、門外に止ること、午より亥に至る。藤原公春、吉良義信、義政の旨を以て、近臣に諭す。近臣乃出で、西陣に奔る。而して輿乃入る。蓋し勝元義政如已を右けずば、則天子を挾みて以て戰はんと計るなり。

（山名、細川東西對陣之圖）

持豐も亦、下京の敵を攘ひ、以て敵の東面に出で、三寶院、相國寺を取りて、以て御靈口を塞がんと計るなり。九月、義就、政弘、成賴、高賴、義直をして、赴き攻めしむ。五將發するに臨みて、持豐に誓ひて曰く「此行相國寺を取らざれば、復生きて還ること無し」と。乃、各萬人を率ゐて、三寶院を攻む。武田國信、弟基綱、其父信賢と、二千人を以て之を守る。力めて拒ぐこと終日、兵皆散亡す。基綱獨院門の偏扉を開き、身を以て敵に當る。敵、敢て逼らず。畠山氏の驍卒野老源三、膂力あり。身を挺して之を搏つ。基綱叱して曰く「試に吾が刀を受けよ」と。乃其胄を擊つ。刀折る。基綱、大に號

武田基綱



西陣相國寺に向ふ

びて奔逸す。敢て遏むる者なし源三、頭碎けて死す。西陣の兵、既に三寶院を取り、進みて淨華院を攻め、守將京極持清を追ひ、近衛、鷹司以下、三十七第を焚き、遂に相國寺に向ふ。勝元、安富元綱、三千騎をして、相國寺を守らしめ、別に兵を一條に出す。而して寺僧、陰に款を西陣に通じ、火を擧げて應を爲す。一條を扞ぐ者、駭き顧て引き還る。西陣の五將、追ひて寺門に至る。元綱の兄弟、手兵を以て總門を拒ぎ政弘、成賴と、確鬪すること七合。殺傷大に當り、晨より昏に至る。西陣の兵終に入る能はず。已にして東門、守を失ふ。西陣の兵全り入る。元綱の兄弟、咄嗟して之に馳せ、箭、胸を洞きて死す。政弘、成賴、既に相國寺を取る。獲る所の首級を收め、之を載するに車八輛を以てし、以て西陣に送致す。因りて相國寺の址に屯す。

政長相國寺に向ふ

政之來りて勝元に請ふて曰く「敵、相國寺に屯す。我れ猶釜中の魚の如きなり。急に一將を遣し、擊ちて之を走らせん」と。勝元曰く「吾も亦此を思ふ。而れども諸將士、各守る所ありて、敵と相拒ぐ。足を拔く可からず。誰か赴き援ふ者ぞ」と。秋庭某進みて曰く「畠山公其人なり」と。勝元曰く「然り」と。政長を召して、之に故を語りて曰く「事急なり。公の一行を煩さん。果して勝たば、乃當今の忠勳、誰か公の右に出づる者ぞ」と。政長對へて曰く「僕無似と雖、辱く此命を受く。敢て往かずばあらず。顧ふに御靈林の役に、多く士卒を亡ふ。在る者僅に二千のみ。之を若何せん」と。勝元、慚色あり。政長、乃其部將東勝某をして、政長を援けしむ。

政長、是に於て、四足門を出づ。觀る者、相語りて曰く「此寡兵を以て、恐らくは克つ能はじ」と。政長、鞍に據りて、言て曰く「諸君、憂ふる勿れ。政長往かば百萬の敵ありと雖、能く之を破るを保す。卽克つことを得ば、今日の事、僕專其功に任ぜん。諸君、幸に之を證せよ」と。乃進みて敵陣を望み、指して其候騎に問ひて曰く「彼の山門の前なる者は誰とか爲す」と。曰く「成賴」と。「山門の後なる者は誰ぞ」曰く「義直」と。「其南なる者は誰ぞ」曰く「衞門佐氏」と。神保長誠、政長に說き曰く「敵兵の衆盛なる彼

義就政長相國寺を取る

貞親勝元に依る

二年

【廢立】將軍の廢立持豐義視を奉す

文明元年

の如し。君厚く其兵を集め、力を合せて之を衝突せよ。彼れ必ず兵を縱ちて我を圍まん。我れ以て其一面を破る可きなり」と。政長之に從ひ、乃楯を蒙りて前み、敵薄るに比びて、乃楯を捨て直に門前の陣を衝く。陣、大に潰ゆ。卻きて門後に入る。門後の兵、沓盛して鎗を揮、能はず。義就、其將甲斐莊某に謂て曰く、「彼は其れ尾張守なり。我が前軍、鎗鋒整はず。必敗れん。亟に隊を勒せよ。吾れ將に代り進まんとす」と　言未だ畢らざるに、門後の兵、大に敗れ走りて、義就の軍を壓す。軍、戰ふことを得ずして退く。東陣、復相國寺を取る。政長の名、兩軍の間に震ふ。是に於て兩陣皆戰ひ疲れ、交綏く。相國寺を以て界と爲し、壘を高くし、塹を浚くして持久の計を爲す。

是の時に當りて、伊勢貞親、鈴鹿關に在り。京師の亂を聞き、乃歸りて勝元に依る。勝元、其持豐に善からざるを以て、置きて己が黨と爲さんと欲す。爲に其舊職を復し、以て府中の敵に應ずる者を伺察せしめんと請ふ。義視、素より貞親に惡し。其兄弟を離間するを恐れ、意自安ぜず。竊に逃れ奔らんと謀り、遂に間行して、北畠教親の營に至り、與に俱に伊勢に奔る。一年四月、義政、書を以て之を招き還す。義視、狐疑して應ぜず。勝元、政長、政義等、連署して之を請ふ。則還る。九月、幕府に入る。會蜚語あり。「勝元廢立を謀る」と。義政、疑惧す。勝元之を聞き、乃陰に義視を西陣に走らせんと計る。十一月、武田信賢をして、義視を擁し、雨を冒して叡山に上らしむ。持豐、之を聞きて喜び、兵を遣して之を迎へ、武衞氏に奉ず。時に義視、正二位權大納言なり。十二月、詔して其官爵を削る。大納言藤原敎忠等七人、留りて禁內に在り。遂に西陣に奔る。亦其籍を削る。

勝元、復管領となり、政則、侍所司となり、政則の家老浦上某、所司代となる。是より兩陣、將軍兄弟の爭ふ者の如し。

文明元年三月、勝元、部下の兵を遣し、夜、火を、西陣に縱ち、入りて持豐の營に至る。持豐、薙刀を提げ出でゝ、親庭中に戰ふ。從兵四集して、安富某等、十四人を殺す。餘兵走り歸る。四月、義政、丹後を信

多賀高志東陣を援く

細川勝元肖像

政弘歸る

中村

二年上皇崩ず

三年

四年

五年持豐卒す

勝元卒す

賢、政國の二人に分ち予へ、吏を遣して國に入らしむ。山名氏の吏、拒ぎ戰ふ。迭に勝敗あり。五月、多賀高志近江の兵を率ゐ、入りて東陣を援く。西陣の黨六角龜壽、近江に起ると聞きて、則引き還る。勝元、乃、國信をして、北白河に城かしめ、之を叡山に屬し、以て近江の商賈を通ず。又是豐をして、天王山に城かしめ、西陣の糧道を塞ぐ。持豐、義就をして勝龍寺に屯せしめて、之を拒がしむ。又政弘をして狛野に城かしめ、其家臣二尾某を以て、之を留守せしむ。二尾叛きて東陣に應ず。會少貳嘉賴の子敎賴對馬より歸りて、其國を復せんと謀り、西陣大に亂る。政弘、走りて周防に歸る。西陣、勢を失ふ。赤松氏の將中村某も亦、播磨、備前、美作を略し、盡く其國を復す。

二年十一月、上皇、幕府に崩ず。三年正月、上皇を葬る。葬儀修らず。義政、徒步して奉送す。四年、勝元、將軍の旨を以て、畠山義統に說く、義統降る。義政、之に越中、能登を賜ひ、以て北國の糧道を通ず。西陣、益勢を失ひ、逃れ降る者相屬す。

五年三月、持豐、病みて卒す。西陣猶解き去らず。勝元喪に乘じて、之を擊たんと欲す。五月、勝元も亦、病みて卒す　子政元嗣ぐ。勝元、持豐と難を構へて、未だ勝敗を決せずして死す。然れども政權は終に細川氏に歸す。

謁楠河洲墳有作

東海大魚奮鬣尾、蹴起黑波汗黼扆、隱嶋風雲重慘毒、六十餘州總鬼虺、誰將隻手排妖氛、身當百萬哮闘群、揮戈擬回虞淵日、敎重同劉卽墨雲、關西自有男子在、東向寧爲降將軍、旋乾轉坤答値遇、洒掃蹙道迎鑾輅、論功睢陽最有力、謾稱李郭安天步、出將入相位未班、前狼後虎事復艱、獻策帝闈不得達、決志軍務豈生還、且餘兒輩繼微志、全家血肉殲王事非有南柯存舊根、偏安北闕向何地、攝山透迤海水碧、吾來下馬兵庫驛、想見訣兒呼弟來、戰此刀折矢盡臣事畢、北向再拜天日陰、七生人間滅此賊、碧血痕化五百歲、茫茫春蕪長大麥、君不見君臣相圖骨肉相呑、九葉十三世何所存、何如忠臣孝子萃一門、萬世之下一片石、留無數英雄之淚痕、

義尙
義統
九年東西陣解く
勘合の印
十一年銀閣寺
朝倉敏景

改版 邦文日本外史 卷之九

足利氏正記

足利氏下

兩陣、皆首領を喪ひ、猶屹然として相對す。十二月、義政、軍職を義尙に讓る。甫めて九歲なり。畠山政長管領たり。七日にして辭し、族義統を以て之に代らしむ。東陣に降りし功を賞せしなり。九年十一月、西陣の諸將、各解きて國に歸る。義視、往きて土岐氏に依る。東陣も亦解く。應仁元年より此に至るまで、凡十有一歲なり。兩陣の兵士、交出でて焚掠し、文武の第宅、蕩として荒野と爲る。關白兼良以下諸公卿散じて四方に走り、或は戕害に遭ひ、歷朝の典籍、槧兵燹に罹る。而れども義政、宴詠自若たり。使者を發して朝鮮に赴かしめ、勘合の印信を求めて、以て海外の珍寶を購ふ。

十一年、遂に退きて東山に居り、銀閣を起て、以て、義滿の金閣に擬し、爭亂を以て意に加へず。諸國の强臣、往々闘に乘じて國を奪ふ。上皇を葬るの歲、斯波氏の家臣甲斐某、其君を弑し、越前を奪ひて、以て西陣に應ず。朝倉敏景、甲斐を誅殺す。義政、之に越前を賜ふ。是に於て、織田氏、乃尾張を奪へども、義政問はざるなり。是より天下の武人復足利氏に朝せず。山名氏及び其黨與の諸將、散じて諸國に在るもの、往々、漸く衰滅に就く。而れども細川氏、上杉氏、東西に據ること故の如し。上杉憲忠の成氏と和するや、義政も亦使者をして之を諭解せしむ。而れども君臣、猶相嫌隙す。後四歲、成

成氏、憲忠を殺す

氏、結城成朝と謀り、力士を門の側に伏せて、憲忠を召す。憲忠至りて門に入る。力士、擊ちて之を殺す。上杉氏の族、皆怒りて成氏に叛く。明年、長尾昌賢、京師に請ひ、憲忠の弟房顯を立て、管領と爲す。扇谷の上杉定正と共に、成氏を攻め、武藏、相模の間に轉戰す。房顯、壘を五十子に築く。兵結びて解けざること三歲なり。房顯、定正、京師に請ひて曰く、「願くは一將補を戴きて、以て成氏を討つを得ん」と。義政、乃其弟の髮を削り、香嚴院の主と爲れる者をして、髮を蓄へしめ、名を政知と命じ、之を關東に遣す。關東の將士、多く心を成氏に歸して、政知に附く者少し。是に於て、政知留りて、伊豆の堀越に在り。房顯、既に卒して子の顯定嗣ぐ。顯定、定正と、政知を奉じ、數成氏を攻む。成氏、走りて古河城に據る。城は常陸を負ひ、下野を右にし、下總を左にす。千葉、小山、結城、宇都宮の諸族、之か羽翼たり。顯定、定正、之を攻む。十一歲にして陷る。成氏、千葉に奔る。後七歲にして、上杉氏と媾し、古河を復するを得て、和を義政に請ふ。義政之を聽す。實に文明十年なり。

房顯
定正
【五十子】武藏

政知

顯定

慈照寺銀閣之景

古河城陷る

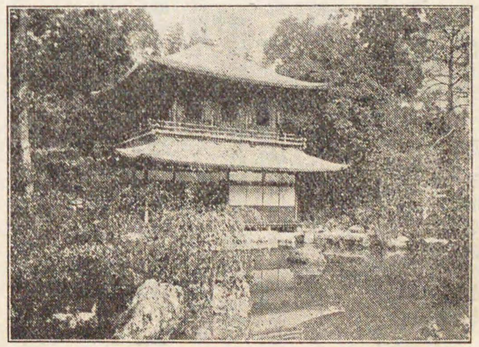
文明十年

太田持資

江戸城

十八年

顯定、是に於て、上野の平井に在りて、八州を管領す。八州、推して內山公と稱す。扇谷の上杉定正は、相模の大場に在り。其臣太田持資、才略あり。髮を削り道灌と稱す。道灌、築城の術に精し。江戸、河越の二城を築きて之に居る。父の道眞と心を協せ、大に恩威を播く。八州の將士、漸く山內に背き、扇谷に歸す。顯定、之を患へて、數定正を擊てども志を得ず。顯定、陰に道灌を除きて、以て定正の手足を斷たんことを計る。乃反間を縱ちて、盛に道灌の材武にして士心を得、定正の下爲る者に非ずと稱す。定正、稍之を忌む。十八年、定正、道灌を



定正、持資を殺す

長享元年

招きて酒を賜ひ、酒酣にして浴を命じ、人をして鎗もて之を刺し殺さしむ。子資安、道眞と、共に顯定に降る。顯定大に喜びて曰く、「定正、我か計中に陷る。復圖るに足らず」と。長享元年、兵を將ゐて平井を發し、定正を擊つ。定正使を古河に遣し、援を成氏に乞ふ。成氏、子政氏をして、兵を將ゐて定正を援け、顯定を討たしむ。

義尙、高賴を討つ

【鈎里】近江藤原兼良樵談治要

是の年九月、義尙、自、將として、六角高賴を討つ。其命に背きて來らざるを以てなり。十月、高賴、甲賀山に逃る。義尙留りて鈎里に陣す。義尙、幼より文學を喜び、藤原兼良と政事を問答す。兼良、爲に其語を錄して、樵談治要と曰ふ。又騎射を習ふ。鈎里に在りて年を蹉ゆ。左氏春秋を幕中に講ず。曰く、「吾れ此賊を滅さずば、復京師に還らず」と。延德元年三月、疾作り、幕中に薨ず。官、內大臣右近衞大將從一位に至る。薨ずる年二十五なり。內外之を惜しむ。義尙晩に名を義熙と更む。義熙、子なし。義政、義視を美濃に召し、其子の義材を養ひて嗣と爲す。義材、後名を義尹と更め、終に義植と更む。二年正月、義政、薨ず。官、左大臣右近衞大將從一位に至り、三宮に准ぜらる。明年、義視、京師に薨ず。政知、伊豆に卒す。

延德元年

義尙薨ず

（足利義尙肖像）

義植

義政薨ず

義視薨ず

政知卒す

茶茶

政知、子あり。茶茶と曰ふ。政知、後妻の子義通を愛し、茶茶を疎んず。茶茶怨望し、遂に政知を弑す。義通、奔りて今川氏親に依る。氏親、其將伊勢長氏を遣し、茶茶を誅せしむ。長氏、遂に伊豆を取り、遂に相模を窺ふ。是の時、上杉定正、方に顯定に克ちて、鉢形城に居る。兵威頗る振ふ。復、成氏を撤せず。小田原の城主大森實賴、書を以て之を諫めて曰く、「扇谷は支庶なり。能く山內に抗する所以の者は、太田道灌の力なり。今既に道灌を喪ひて兵力衰削す。而して偶、勁敵に克つは眞に僥倖のみ。乃君長を輕蔑し、重ぬるに將士の心を喪ふ。禍の至る、日無けん」と。定正、悛むる能はず。長氏、使を遣し、好を扇谷氏に通じ、今川氏と俱に定正を助けて、以て顯定を擊つ。兩上杉氏是より衰ふ。

義通

義植、高頼を討つ

畠山義豐

二年

三好之長

義植脱走す

政長自殺す

【東山公】義政

義澄

大内義興

高國

成氏卒す

政氏

義通の今川氏に走るや、今川氏、之を京師に護送す。細川政元、管領たり。義植に請ひて、義通を天龍寺に寓せしめ、行僧と爲さんとす。義植、既に職を襲ひ、近國の諸士、盡く來りて之を賀す。獨、六角高頼至らず。義植曰く「吾れ將に義父の志を繼かんとする也」と。明應元年九月、義植、親將とし、高頼を討ち、攻めて觀音寺の城を拔く。高頼、復甲賀山に逃る。義植凱旋す。是の時に當りて、畠山政長、管領たり。政長、宿將を以て、其威望を負み、諸將を輕侮す。諸將不平なり。畠山義豐は、義就の子なり。政長の驕横を訴へ、譽田城に據りて、兵を擧ぐ。二年三月、政長、義植を奉じて之を討つ。四月、義植、正覺寺に陣し、數譽田を攻むれども、下す能はず。義豐、細川政元の政長と權を爭ひ、相忌むを知るや、陰に使を遣し、細川氏の家老三好之長に說く。之長の子之慶、政元に勸めて、義豐を援け、兵を合せて正覺寺を圍む。義植脫走す。政長の子尙長、紀伊に走る。政長曰く「吾れ以て死す可きなり」と。其臣丹下某等と訣飲して自殺す。政元、京師に歸り、將軍の繼嗣を議す。前關白藤原政基、故政知と姻あり。因りて政元に說きて曰く、「義通、天龍寺に在り。未だ髮を削らず。當に立つべし」と。政元、之を然りとす。乃諸將を會し、言て曰く、「東山公、嘗て堀越氏の子を養ふを約せり。今將軍、政長に黨し、自國家を亂る。以て師を統ぶ可からず」と。諸將敢て異議なし。乃義通を立つ。甫めて十五なり。名を義高と更め、後義澄と更む。

閏月、政元、義植、匿れて筒井に在り。尙長、高屋に在りと聞き、兵を遣して之を攻め、義植を捕へ、家臣物部氏に幽し、人の出入を禁じ、一僧を縱して、これに侍せしむ。六月、義植、逃れ出でゝ越中に奔り、終に周防に赴き、大内政弘に依る。政弘卒す。子の義興兵を起し、義植を復せんと計る。政元の養子高國、事を以て政元を怨み、叛きて大内氏に通ず。是に於て、細川氏、黨を分つ。京畿大に援る。兩上杉氏も亦、關東に鬪ひ、槪虛歲なし。六年、成氏卒す。子政氏嗣ぐ。政氏、定正の子朝良と數顯定を攻む。已にして之と和す。

九年

後土御門帝崩ず

後柏原天皇文龜元年

永正元年

高基

三年

四年

政元殺さる

【鬼神の說】政元深く摩利支天を崇め、魔法を行ふと或は愛宕神を信ずと云ふ

上館

下館

三好長輝

澄元

是の時に當りて、海內の武人迭に相爭奪して、復天子、將軍あるを知らず。九年九月、帝崩ず。柩を黑戶に置くこと、四十餘日にして、乃葬る。十一月、太子位に卽く。是を後柏原天皇と爲す。天皇の、文龜元年に、義澄、義植、各自兵を聚む。義澄、奏し請ひて、義植の官爵を削る。永正元年、政氏、子高基と郤あり。兵を構ふ。初め政氏、三子、高基、義明、基賴あり。政氏、高基を廢せんと欲す。高基、兵を擧げて政氏を攻む。上杉顯定、これを和解し、政氏をして退老せしむ。高基立つ。義明、陸奥に奔り、基賴、下野に奔る。是の時、伊勢氏、勢漸く强大なり。兩上杉氏、連和して以て之を拒ぐ。三年、顯定の弟義房、其臣の長尾爲景の爲に殺さる。四年、細川政元、賊の爲に殺さる。三好長輝、其賊を誅す。政元、素より鬼神の說を好み、婦人を近づけず。故を以て子なし。藤原政基の子澄之を養ひ、又族政春の子高國を養ふ。皆意に中らず。更に族元勝の子澄元を養ふ。初め賴之の後、世管領と爲り、上館と曰ふ。二弟、詮春、滿之あり。世讃岐、阿波を領し、下館と曰ふ。猶、關東に兩上杉あるが如し。政春は詮春の後なり。元勝は滿之の後なり。澄元、猶幼にして阿波に在り。三好之慶の子長輝、之を輔く。藥師寺與次、香西又六、並に政元の家宰たり。議して曰く「管領の言行、常なし。久しきこと能はざるなり。澄元を嗣と爲して、長輝、權を執れば、則我輩、其下に出でざる能はず。速に大事を行ひ、澄之を擁立するに若かず」と。乃政元の近士福井、戶倉等に賄ひ、政元を伺察す。是の年六月、政元、齋戒し、夜、浴室に入る。戶倉就きて之を刃す。近士波波伯部、走り救へども亦刃せらる。殊せず。而して阿波に奔る。香西等、乃澄之を丹波に迎へて、之を立つ。義澄、制する能はず。七月、三好長輝、兵を發し、澄元を擁して京師に入る。香西、嵐山に城きて之に據り、兵を出して、百百橋に拒ぐ。波波伯部、長輝の先鋒たり。戶倉に遇ひ、鬪ひて之を斬る。澄之、香西、藥師寺と皆死す。長輝、義澄に請ひて、澄元を以て管領と爲し、而して自政事を執る。後、髮を削り希雲と稱す。希雲の先を小笠原長淸と曰ふ。長淸の子長房、阿波の守護と爲る。信濃よりこれに徙り、三好鄕に居る。細川氏、

五年
義植、義興京師に入る
六年
七年
顯定敗死す
憲總
細川政賢
義澄薨ず
十年
十五年
細川高國

四國を領するに及びて、部下に屬して重臣と爲る。是に至りて始めて著る。而して細川氏始めて衰ふ。大内義興、變を聞き、山陰、山陽、西海の兵を擧げて、義植を奉じて東す。細川高國も亦、兵を擧げて之に應ず。義澄懼れて、書を高國に與へて和を講ず。高國聽かず。五年三月、義澄、近江に奔り、六角定頼に依る。澄元、長輝と阿波に奔る。四月、義植、義興、界浦に至る。是より先、畠山尚長、其臣木澤某等と、畠山義豐を攻め殺し、數政元と戰ふ。是に至りて、兵を以て來りて義植に屬す。義植、義興、京師に入る。長輝、兵を攝津に出し、六角氏の兵と夾みて京師を攻む。大に敗れ、知恩寺に自殺す。六月、詔して義澄の官爵を奪ひ、之を義植に還し予ふ。義植、義興を以て管領と爲す。六年十月、夜盗あり。幕府に入り、義植を刺さんと欲す。義植、刀を拔き、手づから四人を斬り、身又九創を被る。義澄の使しむる所と謂ふ。是に於て、兵を遣して、義澄を近江に窠むれども、獲ず。七年、義植、自、將として六角定頼を攻め敗れて歸る。

是の年六月、上杉顯定、長尾爲景を討つ。房義の爲に仇を復せんと欲し、信濃の高梨に戰ひて敗死す。顯定、子なし。政氏の子顯實を養ひ、又憲實の子憲總を養ふ。其死するに及びて、諸家臣、顯實を逐ひて、憲總を立てゝ管領と爲す。

八月、細川政賢、南海、東國の兵を將ゐ、入りて義植を攻む。政賢は持賢の孫なり。義植、大内義興の策を以て、之を丹波に避け、政賢を誘ひ京師に入らしむ。已にして其を聚めて南に歸り、政賢と船岡山に戰ひて大に之を敗る。義興の功を奏して、從三位に叙す。畠山政長、赤松政則の故事の如くす。是の月、義澄、近江の嶽山に薨ず。官、參議三位に至る。二子あり。長を義晴と曰ひ、季を義維と曰ふ。義晴を赤松義村に託し、義維を細川澄元に託す。義村は政則の子なり。

十年、義植、又六角氏を攻め、敗れて歸る。十五年、大内義興、西して周防に歸る。久しく京師に居り、費用支へざるを以てなり。細川高國、代りて管領と爲り、政を專にす。十七年五月、澄元、義興の去るを

十七年
澄元卒す
大永元年
義晴
【僧】光兼
後奈良天皇
七年
享祿元年
【北畠】伊勢
【六角】近江

聞きて、則三好元長と、兵を發して攝津に至る。元長は、長輝の孫なり。高國、敗れて近江に走る。五月高國、六角定頼と、兵を合せて京師に入る。元長、大に敗れて虜はる。澄元、播磨に走り、遂に阿波に歸り、病みて卒す。元長、逃れて阿波に歸る。高國、益〻專横なり。義植、之を厭ひ、畠山尚長の子植長を以て、代へて管領と爲さんと欲す。高國、聞きて怒る。大永元年三月、義植、高國の爲に逼られて淡路に出奔す。二歲にして薨ず。官、權大納言從二位に至る。高國、義晴を播磨に迎ふ。詔して義植の職を奪ひて、これを義晴に予ふ。高國の請に依るなり。

是の年、朝廷、始めて卽位の禮を行ふ。本願寺の僧、其資を献ず。因りて勅して僧を以て門跡に准ず。六年帝崩ず。太子、位に卽く。是を後奈良天皇と爲す。

高國、讒を信じ、其臣の香西光重を殺す。京師亂る。義晴、阪本に走り、遂に近江の朽木に赴き、佐々木植綱に依る。三好元長、阿波に在りて之を聞き、乃澄元の子聰明五郎を奉じ、兵を擧げて京師に入る。高國援を近江、若狹、越前に乞ふ。朝倉孝景、來りて高國を援く。七年二月、元長、京師に至る。高國、桂川の東に陣す。孝景、烏羽に陣す。元長、三軍と爲し、高國と水を夾みて陣す。上軍は上流を濟り、下軍は下流を濟る。高國の陣、左右を顧て動く。元長、乃中軍を以て圓陣と爲し、中流を濟りて高國の陣を衝く。陣合ひて之を圍む。上軍、下軍、皆濟り、内外夾み擊つ。高國、大に敗れ、旗を棄てゝ走る。元長の軍、之を追ふ。部伍頗る亂る。孝景乃横に擊ちて、元長を破る。元長、走りて阿波に歸る。三月、元長、大擧して界浦に至り、連に諸城を下す。高國、兵を遣して之を救ひ、自、東寺に陣す。畠山義豐の子なり。兵を起して三好氏に應じ、丹波の香西氏と、皆高國を攻めんと約す。高國、支ふ可からざるを度り、乃和を講ず。元長、伴りて之を聽す。

享祿元年、諸の高國を援くる者、皆解きて國に歸る。元長、乃、高國を攻めんと欲す。高國、大に懼れて出奔し、北畠、六角、尼子氏に歷抵す。皆納れず。終に備前に往き、浦上村宗に依る。村宗、方に其君赤松

【尼子】出雲浦上村宗
【朝倉氏】朝倉氏の世々斯波氏仕ふ、文明中自越前を領し諸侯に列す
晴元、政長二年

四年
天文元年

海雲自殺す

大阪城

義村を殺し、列して諸侯と爲り、朝倉氏の比の如くならんと欲す。乃、高國と相結託す。時に元長、冠を聰明五郎に加へ、名を晴元と曰ひ、界城に居る。元長、之を輔佐す。元長の叔父政長、宗三と稱す。元長の權を專にするを嫉み、晴元の寵する所の木澤長政、柳本彈正と相結び、俱に元長を譖る。正政は、畠山義宣の家臣なり。柳本は、香西の族なり。二年、柳本、伊丹を攻む。元長、伊丹の城將と姻あり。之を援けんと欲す。柳本、牧方に奔る。晴元、柳本をして兵を將ゐて、攻めて伊丹を陷れしむ。元長怨望し、自阿波に歸る。高國、元長の在らざるを聞き、乃、兵を發して晴元を攻む。晴元、意、悔ゆ。元長を召して、自援く。十一月、高國、村宗と兵を合せて、來りて晴元を攻む。赤松氏の遺臣、村宗に服せざる者、赤松晴政を擁して、款を晴元に通ず。四年春、元長、兵を發して晴元を助く。六月、大に天王寺の側に戰ひ、村宗を殺し、高國を走らす。高國、尼崎に走り、染戸の甕中に匿る。元長の兵、索め獲て、之を殺す。播磨の力人島村、奮戰して死す。天文元年正月、元長、柳本の子某を京師に殺して、以て伊丹の怨に報ゆ。晴元、大に怒る。元長、髮を削りて之を謝し、海雲と稱す。晴元、意猶釋けず。密に三好宗三、木澤長政をして、之を圖らしむ。晴元の族持隆諫めて曰く、「彼れ大功あり。之を殺すは不義なり」と。聽かず。遂に宗三、長政を遣し、本願寺の僧徒を誘ひて、海雲を顯本寺に圍む。海雲、其妻をして子の長慶を携へ、阿波に逃れしめて、自殺す。長政、終に其君義宣を弑す。二年、本願寺の僧徒、晴元と郤あり。攻めて界城を取る。晴元、淡路に奔る。木澤長政、京師法華の徒を誘ひて、攻めて界城を復す。四月、晴元、阿波の兵を率ゐ、歸りて長政を助く。僧徒、大阪に城きて、之に據る。晴元、之を攻めて、拔く能はず。和して兵を弭む。乃京師に入り、義晴を朽木に迎へて、自管領と爲る。義晴の朽木に在るや、高基、古河より使をして來りて、其子に冠せしめ、將軍の偏諱を受け、故事の如くせんことを請はしむ。因りて命じて晴氏と曰ふ。上杉憲總已に死し、子の憲寛、管領と爲り、伊勢氏綱と武藏を爭ふ。高基、晴氏の爲に氏綱の女を娶り、其力を假りて、以て宿仇を報ぜんと欲す。高基の弟義明、陸奥に在り。享祿中、上總の守護武田豐三、原氏と鬪ふ。千葉氏、原氏を援く。豐三克たず。豐三、乃、義明を迎へて主と爲す。遠近爭ひて之に附く。遂に攻めて原氏を滅す。義明は御弓に居り、御弓御所と稱す。常に關東を定めて、以て基氏の舊業を興さんことを思ふ。高基、意之を害とし、伊勢氏に勸めて御弓を滅さしむ。

【御弓】下總

七年
義明戰死す

十四年
兩上杉伊勢氏を攻む

七年、伊勢氏大擧して來りて、義明を攻む。義明、弟の基賴と、兵を將ゐて之を迎ふ。義明馳突す。敵軍皆靡く。乃留りて後騎を竢つ。飛箭に中りて死す。基賴、復下野に走る。伊勢氏盡く其地を幷す。十四年、上杉憲政、上杉朝定と、兵を合せて伊勢氏を攻む。憲政は憲寛の子、朝定は朝興の子なり。是に於て、憲政、朝定、並に使を遣して、援を晴氏に乞ふ。晴氏遲疑す。其臣交往くを勸む。乃往く。兩上杉氏と俱に河越を圍みて歲を踰ゆ。伊勢氏康、大に兩上杉氏の軍を破る。晴氏、逃れて古河に歸る。十五年、義晴、其子に冠せんと欲す。時に京畿騷擾して、禮を行ふ可からず。乃携へて坂本に赴き、日吉の祠官の家に冠し、名を義藤と命じ、遂に義輝と改む。之に軍職を讓る。六角高賴、假、管領と爲りて之に賓たり。

晴氏
義明

十五年
義輝
六角高賴

三好長慶

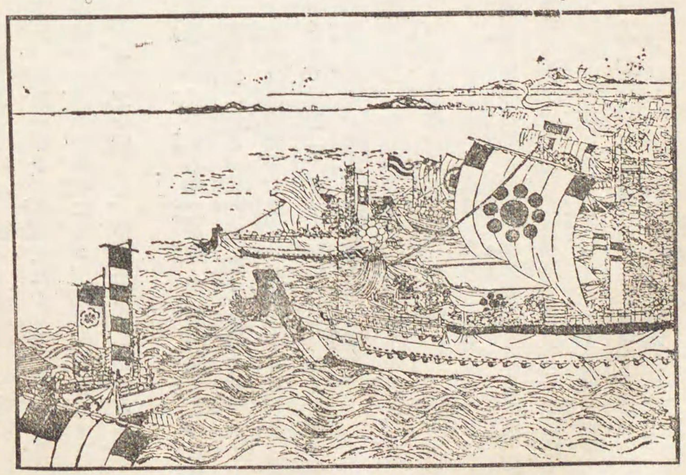
是の時に當りて、細川晴元、京師に在り。王井某は故細川高國の義子氏綱を擁し、遊佐長敎は故畠山植長の弟、政國を擁して、並に攝津、河内に起り、大阪の僧徒と兵を連ねて北に鄕ふ。晴元、三好宗三等を遣し、拒ぎ戰へども克ず。乃三好長慶を召す。長慶、時に年十九。細川持隆の兵を掌りて勇名あり。父の故を以て晴元を怨み、輒く命に應ぜず。其弟之虎これを諫む。乃海に航して兵庫に至り、越水城に入る。宗三之を迎へ、兵を合せて、氏綱、政國を擊つ。迭に勝敗あり。宗三、嘗て元長を讒殺す。是に至りて、又長慶を讒す。長慶之を怨む。

十八年
【榎南の城】摂津
十九年
【穴太】近江
義輝（細川氏綱、三好長慶と計り海を航して京師に入る圖）
二十年
二十一年
【右京大夫】晴元

十八年、長慶、遊佐長教と連和して、以て、宗三を一藏城に攻む。宗三援を晴元に乞ふ。晴元、京師を發し、榎南城に入る。六角定頼、晴元と姻あり。兵を出して之を助く。長慶曰く、「吾れ義榮を以て將軍と爲し、氏綱を管領と爲さば、何の患かこれ有らん」と。義榮は、義維の子なり。六月、長慶、其弟十河一存と、攻めて榎南を拔く。宗三、走りて江口に死す。晴元、坂本に走る。

十九年三月、晴元、長慶の且に來り襲ふと聞くや、如意岳に城きて、義晴を奉ず。義晴、病みて穴太の山中に薨ず。義晴、官、權大納言右近衛大將從三位に至る。晴元、定頼、義輝を奉じて、寶泉寺に徙る。十一月、長慶、京師に入りて、阿彌陀峯に陣し、兵を分ちて三井寺に屯し、火を大津に縱つ。義輝、又朽木に徙る。晴元、志賀に陣す。二十年正月、晴元、長慶の兵を迎へ擊ちて、大敗す。

二十一年、六角定頼、其子義賢をして、長慶に抵りて和を講ぜしむ。曰く、「將軍、公に遜り、畿外に越在すること數年、公、武多し。亟に和を講ぜずば、恐らくは天下、公を議する者あらん」と。長慶曰く、「臣敢て將軍を犯すにあらず。特に右京大夫、宗三を右くるを怨むのみ。今、宗三既に死す。大夫をして髪を削り、氏綱を立てゝ之に代へ、以て大夫の子信良に及ばしめば、則臣請ふ、謹みて兵を戢めん」と。和議卽成る。晴元、髪を削り、丹波に



氏綱
松永久秀
兩上杉滅ぶ
長尾景虎【官號】管領職
二十二年 三好實休
弘治元年
三年 後奈良天皇崩ず
正親町天皇 永祿元年
晴元卒す 氏綱卒す
三年 景虎入京す

奔る。二月、義輝、信良を携へて京師に歸る。長慶、入りて相國寺に謁し、氏綱を立てゝ管領と爲し、信良を越水城に置く。其實は之を質とするなり。是に於て、三好氏、細川氏に代りて、京畿の諸政を領し、家臣松永久秀を留めて幕府を護らしむ。而して兵を引きて南阿波に歸る。久秀は西岡の賈人なり。慧黠を以て、長慶の爲に親任せらる。

是より先、伊勢氏康、上杉憲政を攻めて、平井城を陷る。八州の將士、憲政の子龍穉を捕へて、以て氏康に降る。山内の上杉氏、是に於て終に滅ぶ。是より先、扇谷の上杉氏も亦氏康の爲に滅さる。憲政は越後に奔りて、長尾景虎に依り、盡く其姓氏官號を以て之に授く。景虎は、爲景の子なり。長尾氏、是に於て、上杉氏を冒し、因りて關東を管領す。晴氏、和を氏康に請ひ、伊勢氏の生める所の子義氏を立てゝ、自老す。氏康、義氏を鎌倉に置き、後、京師に請ひて、任じて左馬頭と爲す。

二十二年五月、三好實休、其君持隆を弑して、其妻を奪ふ。實休は卽之虎なり。義輝、三好氏の專恣なるを苦み、晴元を召し還す。晴元、舊臣を糾合し、入りて三好氏の第宅を焚く。長慶、之を聞きて大に怒る。八月、長慶、兵二萬を率ゐて、京師に入り、將に義輝を堀川の第に攻めんとす。義輝、晴元、復近江に奔る。長慶、軍を移して、丹波を攻めて諸城を陷れ、又播磨を攻む。弘治元年、播磨皆降る。

三年、帝崩じ、太子立つ。是を正親町天皇と爲す。永祿元年五月、義輝、晴元、坂本に陣し、兵を北白川に出し、長慶の兵と戰ふ。將士の死する者百餘人。六角義賢來り援ふ。復和を講ず。十一月、義輝、京師に歸る。長慶、入りて謁す。晴元を芥川城に囚す。歳ゝ踰えて卒す。氏綱、淀城に在り。後、五歳にして卒す。

是時に當りて、細川、上杉の二家、俱に衰亡に瀕す。而して三好氏、長尾氏、之に代りて並び興る。三年、長尾景虎、京師に來る。三好長慶、導きて義輝に謁せしむ。景虎を長慶の上に班す。景虎、密に義輝に啓して曰く、「長慶、將軍を輕蔑す。臣請ふ、之を擊殺して、以て將軍の患を除かん」と。義輝危みて許さず。

四年
五年 實休敗死す

六年 久秀、義長を毒殺す
七年 長慶死す
三好の三黨

八年

三好の黨幕府を襲ふ
進士晴舍

四年二月、長慶、義輝を其子義長の新第に饗す。松永久秀、其事を董す。

五年三月、三好實休、畠山高政と、久米田に戰ひて、敗死す。高政は、政國の子なり。初め高政、長慶を助けて功あり。已にして六角義賢と、三好氏を滅さんと謀り、連年兵を構ふ。實休を獲るに及びて、兵益振ふ。長慶、子義長、弟冬康、叔父康長、政康、松永久秀等をして、高政を攻めしめて、高屋城を取る。時に長慶、老いて病み、恍惚として人を知らず。政を久秀に委ぬ。久秀、義長の才望を忌み、陰に之を除かんと計る。

六年八月、久秀、遂に義長を芥川に毒殺し、十河一存の子義繼を以て、代へて長慶の嫡嗣と爲す。七年五月又冬康を長慶に讒す。長慶、冬康を飯盛城に召して、之を殺す。七月、長慶死す。政康、康長、及び岩成左通を三好の二黨と稱す。久秀、之と謀りて喪を秘し、又義輝を廢して、義榮を立てんことを謀る。義榮、將軍を冀望して、數〻意を長慶に示す。長慶背せず。是の年冬、義輝、二條武衞の等を修め、畿内に課す。特に攝津の戸ごとに金二分を稅す。物情囂然たり。義榮、乃、其情を以て、三黨に告ぐ。三黨、久秀と議して之を肯ふ。八年四月、義輝、已に新第に徙る。門扉未だ成らず。三黨相謂て曰く、「時失ふ可からず」と。五月三黨、久秀及び其子久通等と、千餘人を率ゐ、人ごとに一竹枝を佩びて號と爲し、「清水寺に詣つ」と宣言して、以て京師に入る。又其備を紓めしめて之に逼らんと謀り、伴りて訴狀を奉じ、幕府の近臣進士晴舍に因りて、之を義輝に納る。義輝の母慶壽、義輝に謂て曰く、「切して訴ふる者は、師直、宗全の故事なるのみ。今亦當に且其請を聽して、以て無事を計るべし」と。晴舍、往復再三す。而して賊已に幕府に傅さ、四面より閧して入る。一府中、大に驚く。宿直の者、一色秋成、上野輝清、高師宣、彦部晴直、細川隆是、武田信景、杉原晴盛等三十餘人、鋒を聯ねて突出し、肉薄して賊と鬪ひ、數十人を斬る。晴舍曰く、「悔らくは賊に誑され、君をして我を疑はしむ」と。乃自刄して死す。是の時に當りて、府兵の京師に在る者、變を聞きて三樹里に聚る。或は曰く、「速に之を救はん」と。或は曰く、「衆寡敵せず。救ふも益なきなり」と。

治部藤通

【姫人】名は小侍從

(足利義輝、三好と鬪ふ圖)

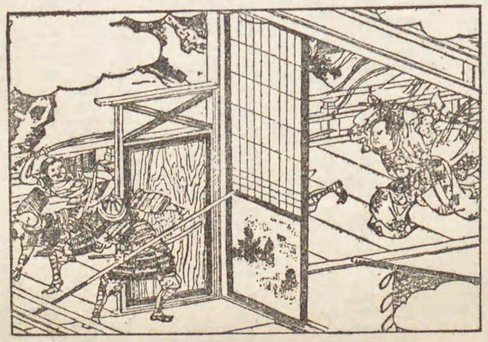
池田

三黨久秀義輝を弑す

池田盲す

十年

治部藤通、其弟福阿彌、沼田某と、奮ひて曰く、「吾れ死あるのみ」と。鎗を提げて馳せて府門に至り、呼びて曰く、「吾れ將軍と共に死せんと欲す。願くば入るを得しめよ」と。賊許さず。乃竹枝を佩び、賊に混じて入る。則義輝、方に衆を會して訣飲す。三人の者を憫みて、脫れ去らしめんと欲して曰く、「汝出でゝ來らざる者を招け」と。三人の者、辭して曰く、「之を他人に命ぜよ」と。義輝、絶命の辭を爲りて、之を姫人の衣袖に書して曰く、「足利氏の運命此に窮る」と。傳家の寶刀十餘口を出し、更取りて、出でて鬪ふ。刀皆缺折す。因りて庫を發きて、盡く其珍寶を庭に散ず。賊、爭ひて之を攫む。義輝三十餘人と、從ひて之を蹂躪す。殺傷過當す。而して我が兵、紓ふ。殺傷過當す。而して我が兵、紓ふに皆之に死す。義輝、猶奮戰す。賊敢て逼らず。賊の池田某、扉の陰より跳り出でゝ、義輝の足を刈りて之を踣す。賊堆集して、障を其上に仆し、鎗を攢めて之を弑す。遂に其姫を殺し、夫人近衞氏を脫す。慶壽、大に慟して曰く、「將軍死せり。老婦何ぞ生るを爲さん」と。火を縱ちて自燒殺す。池田、目を障に傷き、後、終に盲して廢人と爲り、行市に乞ふ。京師の人指して、以て弑逆の報と爲す。



是に於て、三黨、義繼を擁して、高屋城に據りて、以て義榮を迎ふ。六月、義榮、阿波を發して、攝津に至る。十二月、普門寺城に入る。爵を叙し、官に任ぜらる。三黨、功を專にして得色あり。義繼、之を惡む。十年三月、義繼、逃れて久秀に歸す。久秀、多門城に據り、畠山高政と兵を合せて、康長を攻む。康長、東大寺に陣す。十月、久秀、焚きて之を走らす。

義輝、薨ず。年三十。官、參議從四位下に至る。初め義輝、二弟あり。覺慶と曰ふは、南都一乘院主たり。

細川藤孝
米田宗賢
義昭
織田信長
十一年 信長義昭を迎ふ

暠と曰ふは、禪を鹿苑寺に習ふ。義輝の弑せらるゝや、賊平田某をして、詐りて周暠を誘はしめて曰く、「公來れ。將に奉じて將軍と爲さんとす」と。周暠、之を信じ、往きて夷川を渡る。平田、後より周暠を斫り殺す。從人、四散す。獨、小四郎と云ふ者、甫めて十六。刀を拔きて平田と鬪ひて之を斬る。賊、又兵を遣して覺慶を守らしめ、其從者を斥けて、獨、細川藤孝を縱して給仕せしむ。藤孝は、故賴之の弟、賴有九世の胤なり。父を元常と曰ふ。大和守三淵宗薰の子を養ふ。是を藤孝となす。或は傳ふ、「藤孝は、義澄の遺腹の子にして、宗薰に育はるゝ者なり」と。長じて材能多し。覺慶、之と密に謀り、乃其策を以て、伴りて疾と稱し、醫を徵す。藤孝、醫米田宗賢を進む。宗賢、宿直すること數日。覺慶の疾瘥ゆるに託して、夜、酒を守兵に賜ふ。守兵、皆醉臥す。宗賢乃覺慶を扶けて、近江に奔る。險に遇へば輒覺慶を負ひて過ぐ。頃ありて、藤孝又至る。甲賀山を徑し、矢島に至り、和田秀盛の家に館す。賊の守者、既に覺り、四に之を追ふ。其險を冒すを度らず。故を以て獲る能はず。上野清信、和田惟政等十餘人、覺慶、矢島に在りと聞きて、來りて之に從ふ。覺慶、髮を養ひ、名を義昭と更む。明年、藤孝をして、六角義賢に就きて事を議せしむ。義賢、其子義弼と善からず。國內騷擾す。故を以て辭して命を奉ぜず。已にして久秀等、義昭、近江に在りと聞きて、義弼をして義昭を圖らしむ。義昭之を覺り、乃藤孝等十餘人と、夜、湖に航して若狹に走り、武田義統に依る。義統は義昭の妹婿なり。國小なるを以て辭す。乃越前に赴き、朝倉義景に依る。義景、之を敦賀に奉ず。敦賀に寇あり。又一乘谷に徙る。義昭、義景の大事を託するに足らざるを知りて、近國の諸將を訪察す。こゝに一人を得んと欲するに、織田信長に若く者なし。是より先、美濃の土岐氏、家臣齋藤某の爲に簒る。織田信長、尾張の兵を以て、今川氏に克ちて、三河、遠江を併せ、終に齋藤を誅殺して美濃を併す。威名四に聞ゆ。十一年六月、義昭、潛に藤孝、清信を遣し、信長に就きて意を諭さしむ。信長大に喜び、義昭を迎ふ。義昭、乃越前を發す。義景、固く請ひて之を止むれども肯ぜず。七月、美濃に至り、岐阜城に入りて信長と

義昭京師に入る
義榮薨す
十二年
元龜元年
三年
義昭信長を除かんとす
天正元年
織田氏、足利氏に代る
羽柴氏、織田氏に代る

西上を議す。使をして六角義賢に諭さしむ。義賢聽かず。八月、義昭、信長と兵を將ゐて義賢を攻めて、之を走らせ、終に京師に入る。九月、攝津、河內を攻む。義榮、已に癰を患ひて薨ず。義榮、官、左馬頭に至る。是の時に當りて、三黨、或は奔り、或は降る。義繼、久秀、爭ひて信長に媚び事ふ。信長、畿內の地を分ちて之に予ふ。藤孝、惟政等、皆邑を拜す。十月、詔して、義昭を以て征夷大將軍と爲す。義昭、信長の成功を褒して、重畫の徽號を賜ひ、呼びて父と曰ふ。尊氏の赤松則村を遇せし故事を用ゐるなり。義昭、京師の兵燹を以て、假に細川氏綱の舊宅に居り、遂に本國寺に徙る。

十二年正月、三黨、信長の京師に在らざるを伺ひ、乃萬餘人を聚め、本國寺を圍む。野村越中等、善く拒ぐ。攝津、河內の諸將、入りて援く。伊丹親興、賊を擊ち、破りて之を走らす。義昭、乃徙りて二條城に居る。元龜元年、義昭、信長と兵を合せ、三好の餘黨を攝津に擊つ。利あらず。六角、朝倉、淺井氏、並び起りて信長を大津に蹙す。義昭、教を下して之を和解す。三年六月、游佐長教、其君畠山昭高を弑す。昭高は、高政の弟にして長教の立つる所なり。織田氏、長教を討ちて之を誅す。三好義繼、松永久秀、後、皆信長に誅せらる。

信長、大に恩威を樹て、故に義昭の短を舉げて、以て上下に示す。義昭、憤懣して信長を除かんと欲す。上杉景虎、及び關東の諸將を引きて、自援く。天正元年二月、石山、堅田に寨し、兵を起して信長を討ち、信長の爲に攻め破られ、伴り和して罷む。七月、義昭、三淵某、及び廷臣二人をして、二條を守らしめ、自宇治、槇島に據る。信長、兵を將ゐて來り攻む。細川藤孝、迎へて之に降る。信長、二條を攻め下す。三淵、之に死す。三淵は、藤孝の弟なり。信長、遂に槇島を攻め破り、其將羽柴秀吉をして、義昭を河內の若江に徙さしむ。織田氏、是に於て遂に足利氏に代る。

義昭、後、和泉、紀伊、播磨に流寓し、終に毛利氏に依り、鞆津に居る。信長、秀吉を遣し、毛利氏を攻めしむ。自將として之に繼ぐ。途に其下に弑せらる。而して羽柴氏、遂に織田氏に代る。

十三年

（足利義昭肖像）

【等持公】尊氏

十六年義昭薙髪

慶長二年義昭薨す

義氏卒す

國朝

源氏の速に滅び足利氏の滅びざりし所以

喜連川公方

平島公方

足利氏本末輕重を誤る

十三年、秀吉、自征夷大將軍と爲らんと冀ふ。故事に、征夷大將軍は、源氏に非ざれば拜す可からず。秀吉、是に因りて、足利氏を冒さんと欲し、義昭に請ひて曰く、「公、吾を養ひて子と爲よ。吾れ公を封ずるに大國を以てし、安富尊榮、以て其身を終へしめん。如何」と。義昭、之を賤み、斥けて許さず。曰く、「吾れ命窮ると雖、猶八幡公、等持公の苗胤なり。安逸を計りて祖先を汚すは、吾れ則之を恥つ」と。秀吉これを强ふること能はず。十六年、義昭、髮を削る。慶長二年八月、義昭、薨ず。官、權大納言從三位に至る。此に及びて、詔して准三宮を贈らる。

義氏も亦、關東に卒す。卒して後無きこと九歲。羽柴氏、東伐して、足利氏の後を求め、基賴の孫國朝を得て、立て丶義氏の後と爲す。下野の喜連川に居らしめ、五千石を給す。喜連川公方と呼ぶ。義榮の後、阿波の平島に居る。平島公方と呼ぶ。初め義榮の父義維、義植に養はれ、義榮及び義助を生む。義助、義種を生む。義種以後、世阿波に賓たり。此兩家、細川、上杉の二氏と、皆存して今に至る。其平島に居る者は、世又太郎と稱す。尊氏の故事に仍るなり。喜連川に居る者は、世左兵衞督に任ぜらる。直義、基氏の故事に仍るなり。而して喜連川は足利氏の故國に在り。德川氏天下を定むるに及びて、特に賓禮を以て之を遇す。外史氏曰く。源氏は、王土を攘みて、以て王臣を役する者なり。故に足利氏の罪を論ずれば、源氏に浮ぐ。而れども源氏は再傳して亡び、足利氏は乃之を十三世に延くを得たるは、蓋し源氏は宗族を剪除し、孤立して自斃れ、而して足利氏は子弟舊臣を封建し、以て相維持するに足る。故に遽に滅せざるのみ。

然れども其封建や、本末輕重の勢を制することを知らず。是を以て纔に能く一時を僞定せしも、叛く者蝟毛の如くに起る。其中葉以後に至りては、天下禽奔獸遁して、復、制す可からざるなり。夫れ源氏の將士、其强驚桀黠なること、足利氏の時に減ぜざるなり。而して奔走馳驅、一人の弓を彎きて東向する者なきは何ぞ

足利氏の封建は幕府の基礎を自ら弱くせしものなり

鎌倉室町二君あるが如し

尾大不掉

天下を取て失敗す

足利氏の天下を失ひし所以

簒奪の報

足利氏を助けて虐を爲す者

や。他なし。其力微弱にして制し易く、而して進退易置の權、常に我に在ればなり。足利氏に至りては、之に與ふるに土地の饒を以てし、之に授くるに人民の富を以てす。其勢以て亂を爲すに足る。又之を子孫に襲がしめ、牢くして拔く可からざらしむ。豈以て預其變を防ぐこと莫る可けんや。然り而して漫然割與し、動もすれば、一姓をして三四州に踞するを得しむ。甚しきは天下六分の一に居りて、之を能く制する莫し。其鎌倉を封ずるに至りては、室町と二君の如し。遂に其子孫、猜疑して相圖るを致す。而して之を終ふるに、鎌倉は上杉氏に覆され、室町は細川氏に弱められる。皆謂ゆる尾大なれば掉はず、末大なれば必折る丶者なり。

然れども、其之を爲し丶ものは、こゝに故あり。彼れ、其王家中興の業を奪はんことを計る。故に濫賞侈封し、務めて其欲を充たさしむ。復其後を計らずして、以て、苟も天下を取れり。天下已に集れり。而して裁抑す可からず。一も問ふ所あれば、眦を裂きて起る。怪むに足る者なし。彼が欲に充て丶、以て我の私を濟す。彼れ、我が私を知りて、其功を以て我に邀む。我れ、何を以て之を制せんや。蓋し足利氏、土地人民を以て、天下の豪俊に餌して、これを掣する能はず。其餌を并せて之を失へり。亦哀む可きなり。故に彼の天下を取るに急にして、苟且攫竊の計を爲す者、未だ禍ひを子孫に貽さざる者有らざるなり。足利氏の宗族、君臣更々相屠戮し、十三世の久しき、而して殆ど寧日無きは、豈其簒奪の報に由るに非ざらんや。後の人臣たる者、亦以て懼を知る可し。

或は曰く、「將家の禮制、概義滿の時に成る。然れども憾む可き者あり。夫れ天子の事を行ひて、之を將軍と謂ふ。已に不稱と爲す。而して之が下たる者、封を將家に受けて、爵を王朝に班す。又不順と爲す。義滿を して、學あり、術あり、古今を參酌して、官爵を創立せしめ、己れ、天子に下ること一等にして王朝の公卿を除くの外、天下の萬姓、盡く其臣と爲さば、豈善からずや」と。

外史氏曰く。噫、是れ足利氏を助けて、虐を爲す者なり。夫れ天下、名あり、實あり。昔、我が王家、海內

名實の權

を統馭し、租を食み稅を衣、而して爵秩を以て功勞に酬ゆ。是の時に當りて、名實の權、並に朝廷に在り。

將門、頼朝及び足利

其後に及びて、其名を盜みて敗れし者あり。平將門是なり。其實を竊みて成りし者あり。源頼朝是なり。其名實を幷有せんと欲して、之を兩失せし者あり。則足利氏是のみ。夫れ將門は未だ八州を定めずして、先帝皇を擬す。天誅踵を旋さず。頼朝、乃守護の設を請ひ、天下の兵食を分取す。而して其號は則追捕使と曰ふに過ぎず。「既に其腹に充つ。何ぞ必しも其服を華にせん」と曰ふが如し。尊氏、中興の業を奪ふに及びて、尺地一民も、其有に非るは莫し。而して朝廷、徒に虛器を擁す。徒之を分取するのみにあらざるなり。然れども名分の在る所、踰越す可からず。故に北朝の天子を擁戴して、己、上將を以て天下に宰たり。

尊氏の北朝を建てし所以

猶源氏の故の如し。義滿に至りて、驕侈跋扈、乘輿を僭擬し、外國に通信して、日本國王と稱し、舊臣の門族を分ちて、以て掘鑿、清華に倣ふ。豈名實を幷有せんと欲せしに非ずや。朝廷其贈號を擬して、太上天皇を以てす。無稽の甚しき、笑を千古に貽すと雖、而も、義滿の素心蓄ふる所、亦以て見る可し。其早世にして、志を終へざりしは、我邦の幸、而して或人、之を憾むるは何ぞや。昔者、孔子、告朔の餼羊を愛す。王室既に其實を喪ふ。賴むは其名有るのみ。而して今又舉げて之を禰んと欲す。是れ足利氏を助けて虐を爲す者なり。晉は侯を以て、周の天下に宰たり。霍氏は大將軍を以て、漢の天下に宰たり。古より之あり。是、亦可なり。必しも別に名號を撰びて以て其實に稱へざるなり。且夫れ公侯より輿儓に至るまで、次を以て相僕役すれども、王臣に非る者莫し。何ぞ不順と爲さんや。饒令、新に爵號を建つるも、猶半新皇の爲の如きのみ。豈能く千歲因襲の名、民の耳目に在りて、以て其心を服するに足るが如くならんや。假足利氏をして、或者の說の如くならしむるも、吾れ、其の一日も居る能はざるを知るなり。

名實を並有せんとす

余謂ふに、足利氏の名實を幷有せんと欲するや、其自處するに於て、已に義を失ふと爲す。而して其上に事へ、下を御するの際に於ける、又こゝに計を失ふ者あり。何を以て之を謂ふとならば、我れ已に其實を有して、天子に貼すに虛器を以てす。是れ虛器を擁する者のみ。何ぞ必しも介介然として、北を扶けて南を擠さんや。唯夫れ北を扶けて南を擠す。是の故に天下囂然として、或は寧一なる莫し。而して其舊臣の門族を分つや、謂ゆる三管領は、皆大封に據る者なり。既に之に與ふるに、土地人民の富を以てし、而して又之に假すに、官號の崇を以てし、之に授くるに權柄の要を以てす。是れ奚ぞ虎に傅くるに、翼を以てするに異ならんや。應仁の亂は、是れ其由りて起る所なり。而して終に上將も亦、虛器を擁して、王室に同じきを致す。其極や、其位號を併せて之れを喪へり。是れ所謂名實を兩失するなり。豈計の失する者に非ざらんや。

三管領の權柄

應仁亂の原因

外史氏曰。源氏者。攘二王土一以摟二王臣一者也。足利氏者。奪二王土一以役二王臣一者也。故論二足利氏之罪一。浮レ於二源氏一。而源氏再傳而亡。足利氏乃得レ延二之十三世一者。蓋源氏剪二除宗族一。孤立自斃。而足利氏封二建子弟舊臣一。足二以相維持一。故不二遽滅一焉耳。然其封建也。不レ知レ制二本末輕重之勢一。是以纔能僞二定一時一。而反者如二蝟毛一而起。至二其中葉以後一。天下禽奔獸遁。而不レ可二復制一也。夫源氏將士。其强驁桀黠。不レ減二足利氏時一也。而奔走馳驅。無二一人彎レ弓東向者一。何哉。無二他。其力微弱易レ制。而進退易置之權。常在レ於レ我也。至レ於二足利氏一。與レ之以二土地之饒一。授レ之以二人民之富一。其勢足二以爲レ亂。而又襲二之子孫一。牢不レ可レ拔。豈可レ莫三以預防二其變一哉。然而漫然割與。動使二一姓得レ踞二三四州一。甚者。居二天下六分之一一。而莫二之能制一。至レ於二其封二鎌倉一。與二室町一如二二君一焉。遂致二其子孫猜疑相圖一。而終レ之。鎌倉爲二上杉氏所レ覆。室町爲二細川氏所レ弱。皆所レ謂尾大不レ掉。末大必折者也。然其爲レ之者。有レ故レ焉。彼其計レ奪二王家中興之業一。故濫賞侈封。務充二其欲一。不二復計二其後一。以苟取二天下一。天下已集矣。而不レ可二裁抑一。一有レ所レ問。裂レ眦而起。無二足レ怪者一。

充彼之欲。以濟我之私。彼知我私而以其功邀於我。我何以制之哉。蓋足利氏。以土地人民餌天下之豪俊。而不能掣之。幷其餌而失之。亦可哀矣。故彼急於取天下。而爲苟且攫竊之計者。未有不貽禍於子孫者。足利氏宗族君臣。更相屠戮。十三世之久。而殆無寧日者。豈非由其簒奪之報也哉。後之爲人臣者。亦可以知懼矣。或曰。將家禮制。概成於義滿之時。而有可憾者。夫行天子事。而謂之將軍。已爲不稱。而爲之下者。受封將家。而班爵王朝。又爲不順。使義滿有學有術。參酌古今。創立官爵。已下天子一等。除王朝公卿之外。天下萬姓盡爲其臣。豈不善哉。外史氏曰。噫。是助足利氏爲虐者也。夫天下有名有實。昔我王家統馭海內。食租衣稅。而以爵秩酬功勞。當是時。名實之權。並在朝廷。及於其後。有盜其名而敗者。平將門是也。有竊其實而成者。源賴朝是也。有欲幷有其名實而兩失之者。則足利氏是已。夫將門未定八州。而先擬帝皇。天誅不旋踵。賴朝乃請守護之設。分取天下兵食。而其號則不過曰追捕使。若曰既充其腹。何必華其服。及尊氏奪中興之業。尺地一民。莫非其有。而朝廷徒擁虛器。不徒分取之也。然名分所在。不可踰越。故擁戴北朝天子。而己以上將宰天下。猶源氏之故焉。至於義滿。驕侈跋扈。僭擬乘輿。通信外國。稱日本國王。分舊臣門族。以倣攝籙清華。豈非欲幷有名實哉。朝廷擬其贈號。以太上天皇。雖無稽之甚。貽笑千古。而義滿素心所蓄。亦可以見矣。其早世不終志。可不謂我邦之幸也。而或者憾之。何哉。昔者。孔子愛告朔之餼羊。王室既喪其實矣。賴有其名耳。而今又欲舉而褫之。是助足利氏爲虐

者也。晉以侯而宰周之天下。霍氏以大將軍而宰漢之天下。自古有之。是亦可矣。不必別撰名號以稱其實也。且夫自公侯至輿儓。以次相僕役。而莫非王臣者。何爲不順哉。饒令新建爵號。猶平新皇之爲耳。豈能如千歲因襲之名。在民耳目。足以服其心邪。假使足利氏如或者之說。吾知其不能一日居也。余謂。足利氏之欲幷有名實也。於其自處。已爲失義。而於其事上御下之際。又有失計焉者。何以謂之。夫我已有其實。而貽天子以虛器。是擁虛器者耳。何必介介然扶北而擠南。唯夫扶北而擠南。是故天下囂然莫或寧一。而其分舊臣門族也。所謂三管領。皆據大封者也。既與之以土地人民之富。而又假之以官號之崇。授之以權柄之要。是奚異傅虎以翼歟。應仁之亂。是其所由起焉。而終致上將亦擁虛器。同於王室。其極也。幷其位號而喪之矣。是所謂兩失名實也。豈非計之失者哉。

詠史十二首其四

戢翼翻然飽且颺、分明後虎與前狼、曹袁跋扈終無漢、
朱李爭衝豈爲唐、要路盡歸三管領、中原暫見兩天王、
堪知繁實披枝幹、大樹何能棲鳳凰、

下筑後河過菊池正觀公戰處感而有作

文政之元十一月。吾下筑水儆舟筏。水流如箭萬雷吼。
過之使人竪毛髮。居民何記正平際。行客長思己亥歲。
當時國賊擅鴟張。七道望風助豺狼。勤王諸將前後沒。
西陲僅存臣武光。遺詔哀痛猶在耳。擁護龍種同生死。
大擧來犯彼何人。誓剪滅之報天子。河亂軍聲代衝枚。
刀戟袒摩八千師。馬傷冑破氣益奮。斬敵取冑奪馬騎。
被箭如蝟目眥裂。六萬賊軍終挫折。歸來河水笑洗刀。
血迸奔湍噴紅雪。四世全節誰儔侶。九國逡巡征西府。
棣萼未肯向北風。殉國劍傳自乃父。甞卻明使壯本朝。
豈與恭獻同日語。丈夫要貴知順逆。少貳大友何狗鼠。
河流滔滔去不還。遙望肥嶺響南雲。千載姦黨骨亦朽。
獨有苦節傳芳芬。聊弔鬼雄歌長句。猶覺河聲激餘怒。

天下を制するは形勢に在り
鎌倉の覇
我邦の地脉
平安四戰の地
鎌倉の地勢
室町政府

改版 邦文日本外史 卷之十

足利氏後記

後北條氏

外史氏曰く。天下を制馭するは、形勢より善きは莫し。苟も形勢を失へば、分裂を致さざるは鮮し。昔在、文武、山海の形便に因りて、七道を分つ。而して王畿は中に居る。桓武、鼎を平安に定めて、四方環り嚮ふ。蓋し亦盛なり。而して王政の衰ふるや、方隅稍竊據して制す可からざる者あり。或は速に討滅に就くと雖、而も、天下の勢、漸く分裂に趨きて、以て鎌倉の覇を馴致す。是より以還、關東の形勢、常に天下に雄として、京畿之に能く勝つこと莫し。余、嘗て東西に歷遊し、其山河の起伏する所を考へて、以爲らく、我邦の地脉は、東北よりして來りて漸く西し、漸く小し。之を人身に譬れば、陸奥、出羽は其首なり。甲斐、信濃は其脊なり。關東八州及び東海の諸國は、其胸腹にして、京畿は其腰臀なり。山陽、南海以西に至りては、則股脛のみ。故に其腰臀に居て、以て其股脛を制す可けれども、以て其腹脊を制す可からず。且平安は四戰の地、天下事あらば、必先兵を被る。鎌倉の獨一面を以て、西、中原を制するにしかざるなり。元弘の時に至りて、能く一舉して北條氏を取りしは、海内怨畔し、禍、其復心に起りしに由る。能く西を以て東に勝つに非ざるなり。其盛なる時に方りて、鎌倉を以て根本と爲し、而して府を京師、筑紫に置きて、其天下を制する、臂の指を使ふが如し。而るに足利氏は其爲す所に反して、彼を舍て此に居りしは、謬れるなり。

室町亂る

群雄割據

北條氏の根據地武田、上杉二氏毛利氏織田氏

豐臣氏

四氏の論

然れども亦已むを得ざるもの有りしなり。彼れ南朝を慮りて、遠く鎌倉に居る能はず。故に鎮するに子弟を以てして、室町に藩屏たらしむ。而して適〻爭端を啓き、又其内訌に因りて之を覆して、室町遂に是より亂る。是其四方を制馭する能はずして、王家の敗を襲ひし者、形勢を失ひし故に非ざらんや。其季世に及びて、七道の豪傑更に相呑噬し、元龜、天正の間に至りて、海内裂れて八九と爲る。其最大なる者四氏あり。北條氏と曰ひ、武田氏と曰ひ、上杉氏と曰ひ、毛利氏と曰ふ。毛利氏は安藝に起りて、山陽、山陰十三州を幷せ、疆土尤も廣し　其次は北條氏と爲す。北條氏は伊豆を取りて之に據り、遂に關東八州を幷す。武田氏は甲斐に起り、信濃、飛驒、駿河、上野を幷す。上杉氏は越後に起り、越中、能登、加賀を幷せて、莊内、會津に及ぶ。皆爭ひて、耕戰を務め、帶甲數萬、積粟山の如し。龍驤虎視、東西に角立し、宇内を包舉するの心有らざるは莫かりき。

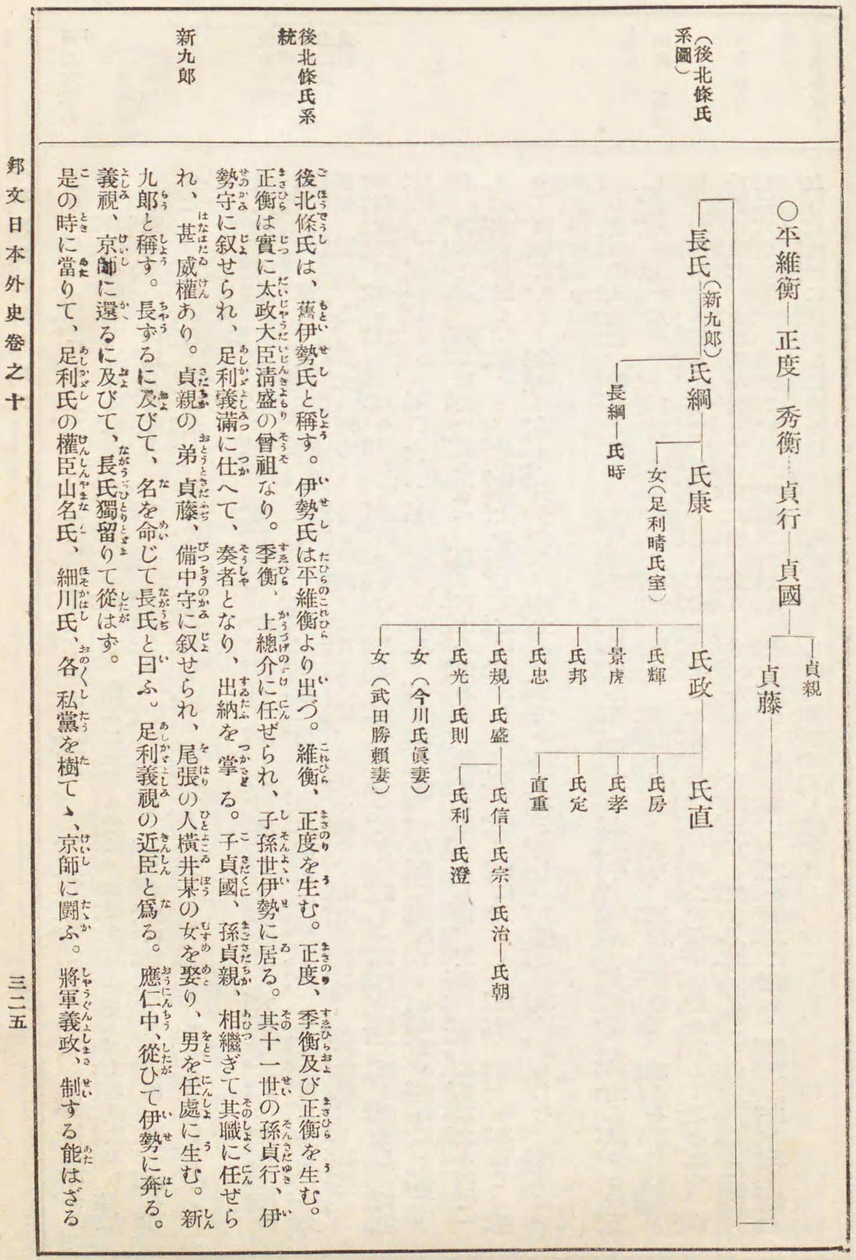
夫れ北條氏は、天下の胸腹に據りて、一たび其兵を出して、以て中原を窺ふ能はざるは、武田、上杉、其脊に據りて、以て其衝を横塞すればなり。而して二氏の勢力相敵し、相持して決せざれば、其西を圖るに暇あらず。毛利氏は疆土廣しと雖、其股脛を以て、其腰臂に向ふ。固より中原に抗衡する能はざるなり。織田氏は四氏の中に介立し、其西を先にして、其東を後にす。强を避け、弱を擊ち、險を舍てて夷を取る。是を以て力を用ゐること少くして、功を成すこと速なり。豐臣氏も亦、其遺謀に因りて、遂に以てこれを合一するを致すを得たり。織田、豐臣の形勢に於ける、これを察する有るが如し。其居る所に至りては、足利氏と未だ嘗て大に異同有らざるなり。其既に合して又裂れ、久しく天下を馭する能はざる所以は、亦此に出づるか。

夫れ織田、豐臣は、足利氏に代りし者なり。而れども其有する所の土地、山河は大に四氏を過ぐる能はず。或は大に之に過ぐるも、其久しきに及ぶ能はざりしなり。之を要するに、此四氏は、時の衰亂に乘じ、各智勇を奮ひて、一方に雄據し、一方の民、倚りて一日の安を享く。他の小國の庸主の徒に其民を糜爛して、成す所莫き者と、日を同じくして語る可からず。則其天下に於ける、功德無きに非ず。又目して足利氏の叛臣を以てするを得ざるなり。若し四氏の據る所、孰か王土に非ざると曰はゞ、則時勢の變、遞に此に至る。一日の故に非ず。四氏を咎むる所以に非ざるなり。其一方を經營するに至りては、謀臣、猛將の跡、紀するに足る者あり。吾れ、故に之を列敍して、其盛衰、興壞の由を詳にし、國家を保つ者をして、鑒みる所有らしむ。而して天下の形勢、分合の際に於ける、又以て覽るに足らんか。

外史氏曰。制二馭天下一。莫レ善レ於二形勢一。苟失二形勢一。不レ致二分裂一者鮮矣。昔在文武。因二山海形便一。以分二七道一。而王畿居レ中。桓武定二鼎平安一。四方環嚮。蓋亦盛矣。然王政之衰。方隅稍有二竊據一不レ可レ制者。雖二或速就二討滅一。而天下之勢。漸趨二分裂一。以馴二致鎌倉之覇一。自レ是以還。關東形勢常雄二天下一。而京畿莫二之能勝一。余嘗歷二遊東西一。考二其山河所二起伏一。以爲我邦地脈自二東北一而來。漸西漸小。譬二之人身一。陸奥出羽其首也。甲斐信濃其脊也。關東八州。及東海諸國。其胸腹。而京畿其腰臂也。至二山陽南海以西一。則股耳。脛耳。故居二其腰臂一。可二以制二其股脛一。不レ可二以制二其腹脊一。且平安四戰之地。天下有レ事。必先被レ兵。不レ如下鎌倉之獨以二一面一西制中中原上也。至レ於二元弘之時一。能一舉取二北條氏一者。由二海内怨畔一。禍起二其腹心一。非二能以レ西勝レ東也。方二其盛時一。以二鎌倉一爲二根本一。而置二府於二京師筑紫一。其制二天下一。如二臂使レ指。而足利氏反二其所レ爲。舍レ彼居レ此。謬矣。然亦有レ不レ得レ已也。彼慮レ於二南朝一。不レ能二遠居二鎌倉一。故鎮以二子弟一。藩二屏室町一。而適啓二爭端一。又因二其内訌一覆レ之。而室町遂自レ是亂矣。是其不レ能レ制二馭四方一。以襲二王室之敗一者。非下失二形勢一故上哉。及二其季世一。七道豪傑。更相呑噬。至二元龜天正之間一。海内裂爲二八九一。其最大者四

氏。曰二北條氏一。曰二武田氏一。曰二上杉氏一。曰二毛利氏一。毛利氏起レ於二安藝一。而幷二山陽山陰十三州一。疆土尤廣。其次爲二北條氏一。北條氏取二伊豆一據レ之。遂幷二關東八州一。武田氏起レ於二甲斐一。幷二信濃飛驒駿河上野一。上杉氏起レ於二越後一。幷二越中能登加賀一。以及二莊内會津一。皆爭務二耕戰一。帶甲數萬。積粟如レ山。龍驤虎視。角二立東西一。莫レ不レ有下包二擧宇内一之心上。夫北條氏據二天下之胸腹一。而不レ能下一出二其兵一。以窺中原上者。武田上杉據二其脊一。以横二塞其衝一也。而二氏勢力相敵。相持不レ決。又不レ暇レ圖二其西一。毛利氏疆土雖レ廣。以二其股脛一向二其腰臀一。固不レ能レ抗二衡中原一也。織田氏介二立四氏之中一。先二其西一。而後二其東一。避レ强擊レ弱。舍レ險取レ夷。是以用レ力少而成レ功速。豐臣氏亦因二其遺謀一。遂得三以致二合一一焉。織田豐臣之於二形勢一。如レ有レ察焉。而至二其所レ居。與二足利氏一未三嘗有二大異同一也。其所三以既合又裂。不レ能三久馭二天下一者。亦出レ於レ此邪。夫織田豐臣代二足利氏一者也。而其所レ有土地山河。不レ能三大過二四氏一。或大過レ之。而不レ能レ及二其久一也。要レ之。此四氏者。乘二時衰亂一。各奮二智勇一。以雄二據一方一。一方之民。倚以享二一日之安一。不レ可レ與下他小國庸主徒糜二爛其民一。而莫レ所レ成者上。同レ日語甲矣。則其於二天下一。非レ無二功德一。又不レ得三目以二足利氏之叛臣一也。若二三四氏所レ據孰非二王土一。則時勢之變。遞至レ於レ此。非二一日之故一。非レ所二以咎一レ於二四氏一也。至三其經二營一方一。謀臣猛將之迹。有二足レ紀者一。吾故列二敍之一。詳二其盛衰興壞之由一。使下有一國家一者有ヒ所レ鑑焉。而於二天下形勢分合之際一。又足二以覽一歟。

後北條氏略系



（後北條氏系圖）

後北條氏系統

新九郎

後北條氏は、蔦伊勢氏と稱す。伊勢氏は平維衡より出づ。維衡、正度を生む。正度、季衡及び正衡を生む。正衡は實に太政大臣清盛の曾祖なり。季衡、上總介に任ぜられ、子孫世伊勢に居る。其十一世の孫貞行、伊勢守に叙せられ、足利義滿に仕へて、奏者となり、出納を掌る。子貞國、孫貞親、相繼ぎて其職に任ぜられ、甚威權あり。貞親の弟貞藤、備中守に叙せられ、尾張の人横井某の女を娶り、男を任處に生む。新九郎と稱す。長ずるに及びて、名を命じて長氏と曰ふ。足利義視の近臣と爲る。應仁中、從ひて伊勢に奔る。義視、京師に還るに及びて、長氏獨留りて從はず。是の時に當りて、足利氏の權臣山名氏、細川氏、各私黨を樹てゝ、京師に鬬ふ。將軍義政、制する能はざる

長氏大志あり

なり。長氏、聰明にして大志あり。陰に財を散じて豪傑に結ぶ。一日、衆に謂て曰く、「天下の事、知る可きのみ。功名を成して富貴を取る。今を舍て、何ぞや。顧ふに關東八州は、地勢高隆にして、士馬精强なり。古より武を用ゐるの地と稱せらる。而れども永享以來、復定主なし。苟も此に割據するを得ば、天下圖る可きなり。君れ諸君と偕に東し、機に因りて變を制し、謀りて樹立する所有らんと欲す。諸君豈意あるか」と、衆奮ひて之に從ふ。

後土御門文明八年長氏今川義忠に依る

後土御門天皇の文明八年、長氏、荒木兵庫、多目權平、山中才四郎、荒川又四郎、大導寺太郎、有竹兵衞の六人と劍に伏りて東行す。終に駿河に至り、今川義忠に依る。義忠は、その姉の夫なり。會義忠卒し、子の氏親、猶幼し。將士分離して、各自爭鬪す。長氏の姉、氏親を抱きて山中に逃る。上杉政憲、上杉定正、足利政知の令を以て、兵を發して駿河を定む。長氏、迎へて之に說きて臣く「國內の將士叛く者無し。特主幼にして國疑はるゝを以て、故に黨を樹つるのみ。今二公、辱くも此に臨みて、今川氏を定めんと欲す。僕、無似と雖、願くは公の意を宣べ、以て將士を戢めん。聽かざる者あらば、二公、幸に爲に之を討て」と。政憲等曰く、「諾」と。長氏將士を會して之に誓はしめ、然る後、山に入りて、氏親の母子を奉じて、歸りて府第に入る。政知の兵乃引き去る。將士みな長氏を以て功と爲し、八幡山の城に居らしむ。政知は、義政の弟なり。

山內、扇谷

初め義政の父義敎、將軍と爲る。其族持氏、世關東を管領す。永享中、持氏、其權臣上杉氏に滅さる。蓋し義敎の志なり。上杉氏、兩宗あり。山內と曰ひ、扇谷と曰ふ。兩宗、京師に請ひて、政知を奉じて主と爲す。然れども關東の將士、持氏を思ひて命を奉ずるを肯ぜず。乃持氏の孤子成氏を索めて之を立つ。成氏既に長じ、上杉氏を討ちて、克たず。走りて古河を保つ。古河公方と號す。山內の族は上野の平井に據り、扇谷の族は相模の大場に據る。皆陽には政知を尊び戴きて君と爲し、之を伊豆に置く。伊豆は山內氏の管國なり。政知に給するに田を以てし、堀越に居らしむ。堀越御所と稱す。

古河公方

堀越御所

長享二年

長享二年、長氏、徙りて高國寺城に居り、陰に伊豆を竊ひて、未だ間を得ず。乃政令を修め、賦稅を輕くし、又其蓄ふる所を出して、遠近に假貸し、收むるに薄息を以てす。遠近之に賴り、朔望每に相率ゐて來り謁す。謁すること數する者は、或は其債を免ず。故に士民稍來りて城下に居り、漸く聚落を成す。長氏荒木、多目等を以て、之が首領と爲し、七隊を立て、政知に服事せしむ。

茶茶丸

政知、二子あり。其長子を茶茶と曰ふ。前妻の出なり。繼母の爲に讒せられ、之を囚する數年なり。茶茶、憤怨して、守者の懶るを伺ひ、出でゝ其繼母を戕ち、遂に其黨を聚めて政知を弑し、其大臣外山、秋山等を殺して自立す。長氏、之を聞きて、乃伴りて疾有りと稱し、伊豆の溫泉に浴して之を訊ふ。曰く、「伊豆取る可きなり」と。歸りて衆を聚めて議す。衆咸曰く、「吾が輩、新九郎君の一國主と爲るを願ふこと久し。敢て力を効さざらんや」と。

延德三年

延德三年四月、長氏、七隊を勒し、今川氏の援兵凡五百人を併せて、夜、黃瀨川を渡り、旦に堀越氏に抵り、火を縱ちて之を攻む。賊、走りて成就院に自殺す。伊豆の人民、其兵威を畏れて、負擔して奔竄す。長氏、號令嚴明にして、秋毫も犯さず。路に榜して曰く、「吾が來る所以は、賊子を誅するに在るのみ。暴掠する所有るにあらず。其れ各乃の堵を安じ、以て我が令を俟て、敢て逃るゝ者は、其稼を踏み、其家を火く」と。時大に疫し、疫者は奔る能はず。往往家に偃臥す。長氏、與ふるに醫藥を以てし、之を撫循す。民更相告け言ひて、來り歸する者多し。其豪族佐藤某、衆に先だちて長氏に屬す。長氏、授くるに大見鄕の地頭職を以てし、其先邑を復し、之に印信を載ふ。關戶某といふ者、深根城に據りて、長氏に抗す。長氏、兵を移し攻めて之を殺す。長氏の恩威大に國內に行はる。國內の將士、舊上杉氏に屬せし者、之を聞きて長氏に率ひ歸せざるは無し。長氏三十日を以て伊豆を略し、堀越氏の邑を以て自奉とし、其餘は取る所なし。乃父老豪傑を會し、之に謀して曰く、「吾れ聞く、『人主は民を視ること猶子の如く、民は人主を視ること猶父の如し』と。是れ古への道なり。世の澆季に及びて、武人貪殘し、民を剝ぎて自逞くす。而して胥ちて困蹙に至

長氏大に恩威を布く父老豪傑を諭す

長氏伊豆に主たり

る。吾れ甚之を憫む。吾れ羈旅の人を以て、來りて是の邦を司牧す。吾れ、汝が爲に君と爲らん。汝、吾が爲に民と爲れ、生れて君臣と相爲る、是れ豈偶然ならんや。吾れ獨我が民の富足を願ふなり。今より令を著し租稅五分の一を減じ、諸の雜課を除かん。諸將吏、令に違ひ民を虐ぐる者は、其民來り訴ふるを聽かん」と。衆、皆悅び服し、爭ひて之が用を爲さんと欲す。

北條氏と稱す

長氏、既に伊豆に主たり。韮山城に居る。長氏が外家横井氏は、北條氏の疏屬なり。是に至りて、韮山に北條氏といふ者あり。其嗣絕ゆ。乃、長氏を養ひて、女を以て之を妻す。長氏、又長子氏綱の爲に、其孫女を娶る。以爲らく、「北條、伊勢、同じく平姓に出づ」と。遂に自北條氏と稱して、三鱗の徽號を用ゐる。髮を削りて早雲と號す。早雲、日に北條氏の故業を復して、其宿志を爲さんと計り、三島神祠に祈る。夢に大杉二株あり。一鼠、其根を嚙みて之を仆し、化して虎と爲る。既に覺めて、卜人を召して之を占はしむ。卜人曰く、「公の生歲、子に次す。子は鼠神たり。是れ公、兩上杉に克つの兆なり」と。早雲、心竊にこれを喜ぶ。是の時に當りて、上杉定正、上杉顯定、更に相怨郤し、兵結びて解けず。早雲之を聞きて曰く、「以て吾が事を成すべし」と。明應二年、使を定正に使し、顯定を助け攻めんと請ふ。定正喜びて之を許す。其部將大森實賴、小田原の城主たり。定正に謂て曰く、「早雲は梟雄なり。故無くして我に親む。其意測られず。然れども彼れ好を以て來る。亦拒む可らず。宜しく禮を以てこれに答へ、而して重く之が備を爲すべし」と。定正、略意を加へず。三年十月、早雲、定正と、偕に兵を高見原に出し、顯定と荒川に夾みて陣す。定正、進みて流を亂り、馬より墜ちて死す。其子朝良走り歸りて、河越を保つ。早雲も亦韮山に歸る。時に實賴已に死して、子藤賴嗣ぐ。猶弱し。早雲、其城を取らんと欲す。而れども箱根の險を離りて、未だ發せず。四年九月、早雲、人をして藤賴に言はしめて曰く、「吾れ韮山に獵せしに、其獸、箱根に逃れたり。願はくば公、箱根を以て我に假せ。我れ縱にこれを獺取するを得ん」と。藤賴之を許す。早雲、兵百餘人を率ゐて、獵の衣裳を被て、箱根を踰え、先牛數十頭を縱ち、鼓螺して之に隨ひ、高に憑りて馳せ下り、直に城内に入る。藤賴、惶駭して、爲す所を知らず。三浦に出奔す。早雲、遂に小田原を取り、遂に大場を取る。

北條氏の故業を復す

早雲、獵に託して小田原を略す

永正元年

二年

兩上杉和す

義同

九年

三浦を攻む

十五年

三浦亡ぶ

永正元年九月、上杉顯定、來りて朝良を攻む。朝良、援を早雲に求む。早雲、今川氏親と往きて之を援け、立河原に戰ふ。二年、朝良、使を遣して、顯定に言はしめて曰く「吾れ聞く『兩虎相鬪ひ一狗隙に乘ず』と。我が族、兵を構ふること數世、國内費弊す。而して早雲、其後を窺ひ、荐に關東を食む。吾れ公と乃兩虎たる莫きか」と。顯定之を然りとして、乃朝良と和す。

義同、定正、顯定、前後して死亡す。而して早雲、已にして顯定、長尾氏と、信濃に戰ひて敗死す。子憲總嗣ぐ。定正、顯定、前後して死亡す。而して早雲、勢益張る。相模の人松田賴重等、皆來り降る。獨、三浦義同之に服せず。義同は、上杉高救の子なり。三浦時高に養はる。時高、後、子を生み、義同を殺さんと欲す。義同、走りて大森氏に依り、其兵を假りて、時高を襲ひて之を弑し、新井城に據りて、傍近を略取す。早雲、討ちて之を滅さんと欲し、外に柔弱を示して、與に爭はず。義同、其子義意を立てゝ、自岡崎城に居る。九年、早雲、遽に兵を發し、岡崎を襲ひて之を拔く。義同、徙りて住吉に居る。早雲と戰ふこと連年、早雲、終に大に之を鎌倉に破り、追擊して秋屋の隘に至る。義同、險に據りて止り戰ふ。早雲、乃兵を引きて、佐原山を踰えて、其背に出づ。義同、走りて新井城に入る。早雲、隨ひて之を攻む。城、險にして食多し。久くして拔けず。乃長圍を築きて之を攻むること數年。是の時、上杉朝良死す。其子朝興、江戸に在り、新井の急を聞き、兵を將ゐて來り援く。早雲の兵七千人、乃其二千人を留めて城に當て、自五千を以て甘繩に邀へ戰ひ、破りて之を走らす。城内益困しむ。大森、佐保田等、義同に說きて曰く「宜しく上總に走り、丸谷氏に依るべし」と。丸谷氏は、義意の妻の父なり。義同曰く、「持氏の死は、我が父、實に之を爲せり。而して吾も亦、父を弑せし罪あり。積惡の報、焉に往きてか逃れん」と。早雲、諜して之を知る。十五年七月、衆を鼓して疾く攻む。城陷る。義同父子を誅して、盡く相模を略す。

十六年 早雲卒す
氏綱 早雲遺言

（北條早雲肖像）

十六年、早雲、病みて韮山に卒す。年八十八なり。子氏綱立つ。氏綱、容貌岸傑にして、善く兵を用ゐる。早雲の業を興す、氏綱の力多きに居る。早雲、終に臨みて、氏綱等に遺言して曰く、「吾れ上杉氏を滅し、關東八州を并せんと欲す。而れども未だ其志を成さず。子孫繼ぎて其事に任じ、敢て或は懈ること毋れ。今我が邑土多からず。吾が積む所の財物を散じ、四方の士を養はゞ、以て二世を支ふるに足る。三世の後は復財を事とする所莫きなり。苟も兩上杉にして相釁隙あらば、吾が子孫以て坐ながら大なるべし。吾れ、上杉氏を視るに、其家法、日に衰ふ。亡滅する遠きに非ず。然りと雖、彼は大族なり。輒く取る可からず。日を曠しくし久しきに彌りて、其弊を竢て。之を癰疽に譬へんに、其毒の封ずる、必三十許年にして乃成らん。其成るに及ばゞ、則潰裂して救ふ毋けん」と。且法訓二十一條を立てゝ、將士に頒つ。

法訓二十一條
氏綱 大永四年

氏綱、父の遺訓を守り、益攻戰の具を修め、相摸を平定し、進みて上杉朝興と武藏を爭ふ。大永四年、氏綱遂に江戸城を拔く。朝興、走りて河越に據る。氏綱、數これを攻む。未だ下す能はず。乃使を平井に遣し、河越を夾みて攻めんと約す。憲總、兵を按めて兩ながら援くる所なし。而して朝興、數氏綱に敗らる。

氏綱、又足利高基と婚す。高基は、成氏の孫なり。伊勢氏の力を藉りて、上杉氏に報ぜんと欲す。則其子晴氏の爲に、氏綱の女を娶る。氏綱、是に於て、上杉氏の累世不臣の罪を暴き、以て關東の將士に諭す。

天文六年 朝興卒す

天文六年四月、朝興卒す。子の朝定に遺言して、益相摸を圖らしむ。卒して未だ三月ならずして、朝定、深大寺の城を修め、以て氏綱を挑む。氏綱、兵を將る、直に河越に赴き、城を去ること五十餘町にして陣す。朝定、兵を返して自救ふ。時に七月十五夕なり。月光野に滿つ。兩軍交縱つ。氏綱、終に大に朝定を破りて河越を取る。朝定、松山に走る。松山の城主難波田某、迎へて之を內る。稍く敗軍を收め、出でゝ城外に陣す。氏綱、又擊ちて大に之を破る。

山角

是の役や、相摸の人平岩重吉、朝定の叔父朝成を虜にす。氏綱の隊將山岡某、來りて朝成を奪ひて、之を麾下に効す。重吉、後れ至り、功を爭ひて決せず。氏綱、乃密に二人の鎧馬を記して、朝成を山角某に屬して、河越に囚す。山角、善く之を視る。時に置酒して款語す。嘗て從容として鎌倉の舊事を談ず。山角曰く、「僕、之を故老に聞く、右大將の東征せしとき、陸奥の勇將由利八郎、宇佐美實政の爲に虜せらる。而して天野則景、之を爭ふ。右大將、梶原景時、畠山重忠をして、更之を八郎に質さしむ。八郎、前に默して後に對ふ。重忠の禮あるを以てなり。勇士の犯すに非禮を以てす可からざるや、此の如し」と。朝成之を聞きて愾然たり。山角曰く「談偶觸犯に涉る。幸に罪と爲す勿れ」と。朝成曰く「噫、僕は猶八郎の如きなり。鄕者の役に、吾れ盡く士卒を亡ひ、單騎にて走る。黑甲赤馬なる者、我を追呼す。我れ轡を回して鬪ふ。皆馬より墜つ。吾搏ちて之を伏せ　將に刀を拔かんとするとき、其人奮起して我が上に居る。而して數人繼ぎて至る。吾れ終に虜せられたり」と。山角、以て氏綱に告ぐ。氏綱曰く、「黑甲赤馬なる者は、重吉なり」と。乃重吉を賞す。氏綱、賞罰明覈なること、常に此に類す。

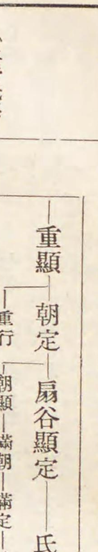
足利義明

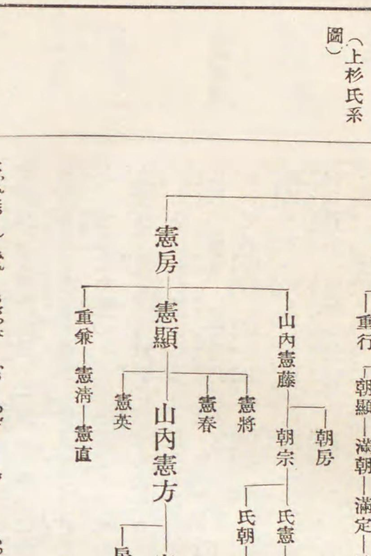
氏綱の威聲、益遠近に布く。武藏、下總の諸城、往往降り附く。獨、足利高基の弟義明、下總の御弓に在りて、氏綱と强を爭ふ。義明、初め高基と相惡し。亡けて里見義弘に依りて、其傍地を略す。兵力稍張る。高基、之を害とし、氏綱に請ひて之を圖る。是より先、義明、義弘、兵艦數百艘を以て鎌倉に抵り、鶴岡祠を毀ち、寶物を抄掠す。氏綱曰く、「吾れ、將に神に代りて罰を行はんとす」と。兵を將ゐて赴き擊ちて、之を卻く。七年、再兵を發して御弓を攻む。義弘、安房、上總の兵を擧げ、來りて義明を救ふ。十月、氏綱義明、義弘と鴻臺に戰ひて、大に之を破り、義弘を走らせ、義明を獲たり。首を斬ること二千餘級。九年、再鶴岡祠を造る。

七年
九年

上杉氏略系

○藤原高藤…顯憲—盛憲—清房—上杉重房—賴重—





（上杉氏系圖）

【道士】山伏

鳥銃始めて關東に入る

十年氏綱卒す氏康嗣ぐ

憲政

關東の士民、氏綱の風を望み、歸する者日に多し。畿内西國の商賈も亦、往往亂を避けて來り寓す。小田原日に益〻殷實なり。聲氣上國と相通ず。東國の道士、歲ごとに大峰に詣つる者、界浦を過り、鳥銃を市に見て、持ち歸りて之を氏綱に獻ず。關東の鳥銃あること、伊勢氏より始る。後益〻銃工、及び根來寺の僧の銃を善くする者を召致して、兵威を助く。十年、氏綱、病みて卒す。年五十五。嫡子氏康立つ。年甫めて十六なり。

是の時に當りて、上杉朝定の勢力削蹙す。獨、上杉憲政、東北の雄長たり。憲政は、憲總の孫なり。今川氏親の子義元、甲斐の國主武田信虎と、皆好を憲政に通ず。憲政、驕惰にして、其嬖臣菅野信方、上原兵庫

氏康の人と爲り

其政を專にす。政偏私多し。憲政、獨游宴に耽り、舞妓數十人を蓄ふ。國内、風を爲し、復武事を問はず。常に伊勢氏を微なりとして曰く、「彼れ小家のみ。何ぞ能く爲さん」と。老臣長尾意玄、獨以て患と爲す。是より先、本間某、井俣某、卒長を以て戰功あり。憲政嗣立するや、管内に令して、鹿を射るを禁ず。菅野、上原、禁を犯す。吏敢て告げず。本間、井俣、其傍に邑す。相雜りて射獵す。乃人に告げられ、邑を失ひて屏居す。意玄、乃之を召し、計を授け、遣り伴りて氏康に仕へて、之を伺察せしむ。二人、小田原に赴き、多目氏に因りて、請ひて曰く、「山内公、忠を疎じ佞を近づく。臣等、罪を獲て此に至る。縱令免さるるを得とも、仕ふるを願はざるなり。願くは君公に仕ふるを得ん」と。多目頗る之を疑ひ、且收めて行伍に充つ。居ること歲餘、二人乃亡けて、平井に歸り、狀を具して意玄に告げて曰く、「臣等、氏康の人と爲りを熟視するに、沈毅にして測られず、剛柔兼ね濟す。時として書を讀み、時として自刀鎗を用ゐ、能く禮節を等しくす。威重くして自持す。而して功を錄して下賤を略せず。其士を用ゐるに、老と無く少と無く、皆其器に適ふ。其子弟嫡嗣に非ずと雖、皆俸を給して用に充て、功あれば則之を進む。故に其下畏れて之を愛し、人人自奮ひて、爲に死を效さんことを願ふ。而して上杉氏の將士、皆陰に款を通ず。其通ぜざる者は九人のみ。早雲、遺言す、『兩上杉の亡ぶるは、我が三世の後に在り。其隙するは、則吾が家の慶なり』と。」意玄、二人の言ふ所を以て憲政に告ぐ。因りて朝定と和し、國内に令して奢華を禁じ、武備を講じて將士の子弟を錄し、則二人の邑を復す。菅野、上原、之を嫉み、其族黨と謀りて、書を憲政に上りて曰く、「早雲は伊勢の丐兒なり。今川氏の力に倚りて、伊豆を攘む。小國賤人の裔なり。何ぞ慮を爲すに足らん。而れども我が諸老、過ちて之を畏怖す。甚笑ふ可きなり。天下の右族、西に大内あり。東に山内あり。山内公の號令、遠く陸奥、出羽に及ぶ。麾下の諸帥、富、小田原に三倍する者、五六人を得べし。而して瞿々然として、丐兒の子孫を是れ怖れ、間諜を遣し、消息を詗ふ。獨隣近の嗤を顧ざるが。本間、井俣、旨に背きて罪を獲て、而して遽に復之を用ゐる。世、上杉氏、人無しと謂はん。臣聞く、氏康は歌詠を

【二人】本間井俣

管領の命駕

十三年

河越は必爭の地

黄八幡

十四年

喜び、頑童に比ひ、武事を知らず。其將の事に堪ふる者は、獨根來の法師のみ。其下、常に相恐れて曰く、『管領、駕を命ぜば、北條氏、立所に齏粉せられん』と。關東の將士、我が公の威德に馴服すること一日に非ず。何ぞ必しも人力を借るを爲さん。扇谷と和すれば、損する所甚多し。君これを聞くこと勿れ」と。憲政大に喜びて曰く「意玄、我を誑けり」と。游嬉初の如し。將士の、款を氏康に通ずる者、二人の爲に告けられて、則大に懼れ、菅野、上原に賂ひ、以て解免を求む。菅野、上原、憲政に說きて二人を斥け、從ひて之を毒殺す。又諸家臣の賂を納れて、建議して曰く「名族の嗣の弱き者は、宜しく各邑を其家宰に分つべし。則恩を戴く者衆からん」と。憲政、之を聽す。又高野の僧の弓を善くする者を舉げて、之に祿して曰く「何ぞ遽に根來の法師に下らんや」と。憲政、歲入漸く減じ、其兵漸く弱し。而れども親往きて、擊ちて氏康を滅さんと欲し、既に駕を命じて旋り止まること再三。東人、是より猶豫する者を稱して、管領の命駕と曰ふ。

十三年、今川氏親、使をして憲政と約せしめ、兵を發して伊勢の境上に臨み、長窪城を圍む。氏康、親將として、且に之を援けんとす。會使者河越より至る。曰く「兩上杉氏、連和して、兵を合せて將に來り圍まんとす」と。氏康還りて河越に赴くに、敵を見ず。乃諸將を聚めて議して曰く「河越は兩上杉の衝に當る。是必爭の地なり。一勇將を以て守らしめ、吾れ、以て、敵を致して大に之に克つ可し」と。衆、北條綱成を推す。綱成は本、福島氏、世今川氏の將たり。遠江の土方城を守る。父正成、武田氏に殺さる。綱成猶幼にして、相摸に出奔す。氏綱、之を愛して、北條氏及び其偏諱を賜ふ。常に軍鋒たり。其族黃色に八幡の二字を書して號と爲す。其戰ふ毎に敵陣を馳突し、連に「勝てり」と呼ぶ。嚮ふ所勝たざるは無し。是の時に當りて、黃八幡の名、八州に聞ゆ。是に於て、氏康、之に三千騎を授けて、河越を守らしめて還る。長窪の圍も亦解く。

十四年、兩上杉氏、大舉して來り攻む。曰く「此行、必小田原を剪滅せん」と。河越に至りて、城を圍むこ

晴氏

辨千代

と數重、意に必取らんことを期す。綱成、固く守りて下らず。上杉氏、使を古河に使し、晴氏に來助を請ふ。氏康、又以て請を爲す。晴氏、其兩ながら解かんことを欲し、依違として之に答ふ。上杉氏の臣難波田某、小野某、往きて晴氏に說きて曰く「公、北條を以て親む可しとするか」と。曰く「然り」と。「伊豆、相摸は公の嘗て領せし所に非ずや」と。曰く「然り」と。曰く「早雲、氏綱、擅に甲兵を興し、伊豆、相摸を掠取し、遂に武藏、下總の邊傍に及び、公をして、困蹙、此に至らしむ。其志、盡く關東を取り、己公方と爲るに至らずば、則已まざるなり。彼れ今日上杉を亡さば、明日必古河に及ばん。今、公を尊ぶは、乃挾みて其私を營まんとするのみ。且北條の君に親むは、新しきなり。上杉の君に仕ふるは、舊きなり。舊を去りて新に就く。君、何ぞ惑へる。今河越の城、當に陷るべくして陷らず。患ふる所は關東の將士、兩端を觀望し、其心一ならざるのみ。君、苟も大旆を進め、辱く軍陣に臨まば、則衆、嚮背する所を知り、力を戮せて決前し、必河越を擧けん。河越擧けられば、則勢に乘じて席卷して、小田原を拔き、北條氏を滅し、君を鎌倉に復して、首を睥べて之に仕ふる、往昔の如くせん。願くは公、之を熟計せよ」と。晴氏曰く「善し」と。乃其士衆を盡して、河越に至る。上杉氏、大に喜び、諸將に號令して、攻擊すること歲を超え、其饟道を四絕す。

氏康、之を聞きて曰く「吾れ必赴き援けん。獨城兵の我を竢たずして死を決せんことを恐るゝなり。誰か能く往きて我が計を告ぐる者ぞ」と。綱成の弟辨千代、年甫めて十八。從ひて氏康の左右に在り。進み請ひて曰く「此事至要なり。臣請ふ、これに往かん。卽、敵の爲に捕へられば、拷掠百端、死に至るも言ふ無けん」と。氏康、乃之に謂て曰く「往きて乃兄に告げよ。善く吾が爲に守れ。吾れ兩上杉に克つこと、數月を出でず。汝遽に出でゝ死を決する毋れ」と。辨千代、乃往く。上杉氏の號を着け單騎、城に入る。是の時に當りて、氏康の兵、疆上の諸城を四守して、在る者裁に八千餘人。乃、自、將として赴き援く。

憲政、鞠定、晴氏の兵を并せて、凡八萬騎なり。氏康、驕らせて之を襲はんと計るや、伴りて和解を請ふ。憲政等聽かず。氏康、出でゝ入間河の南に至る。上杉氏の兵、來り迎ふ。氏康、戰はずして、走りて小田原に入る。諜者に問ひて曰く「敵中何とか云ふ」と。對へて曰く、「敵皆笑ひて曰く、『豎子走る』と。」居ること五六日、又出でゝ河南に至る。敵來る。又走る。又諜者に問ふ。諜者曰く、「敵曰く、『豎子復出つる能はじ。卽し出づとも走らんのみ』と。復顧る莫きなり」と。氏康曰く、「可なり」と。夜、兵を勒して親之に誓ひて曰く、「吾れ聞く、戰の道は衆必しも勝たず、寡必しも敗れず。士心の和否如何を顧るのみ。古曰く、『小敵に怯れ、而して大敵に勇む』と。吾れ數〻上杉氏と戰ふ。我れ一人を以て敵十人に當る。寡を以て衆に敵する。何ぞ必しも今日に始まらんや。勝敗の決、此一戰に在り。汝將士、其れ心を一にし力を協せ、唯吾が向ふ所を視よ」と。其兵をして皆白布を鎧の上に尙へしめ、之に約して曰く、「白からざる者に遇はゞ、輒ち斫れ。其首を取る勿れ」と。令畢りて、乃兵を引きて河を渡り、夜半、直に上杉氏の軍を衝く。軍、大に驚きて、擾亂す。我が兵縱橫奮擊す。一、百に當らざる莫し。殺傷すること二萬餘人。朝定を虜にし、晴氏、憲政を走らす。八州の豪傑、卽夜、氏康に降る者九十餘姓、時に十五年四月二十日なり。

十五年

本間某に戰ふ。大導寺九燈を以て記幟とす

是の夜、難波田、小野、皆死す。本間某、單騎止り戰ふ。本間、軀幹魁偉なり。九燈を竿に纍して、背旗と爲して曰く、「吾れ以て闇主の闇を燭すなり」と。我が將大導寺某と鬪ひ、之に九燈を授けて曰く、「吾れ復此を用ゐる毋きなり。子、用ゐて標と爲し、好く北條公に仕へよ」と。乃死す。大導寺、之より九燈を以て記幟と爲すと云ふ。天明、上杉氏の麾下の諸將、氏康の兵寡を聞きて、則大に悔い憤り、其疲に乘じて再戰せんと欲す。返りて河越に至れば、則氏康已に松山の城に入る。諸將、聚議して決せず。綱成、城內より之を瞰ひ、門を開きて突出し、身士卒に先だちて、呼びて曰く、「勝つ」と。敵軍、相驚きて曰く、「黃八幡なり」と。則敗走す。

綱成、松山に往きて、氏康を見て戰捷を賀す。氏康、之を慰勞す。功を論じ賞を行ひ、降附を撫納す。威、

論功行賞

關東に振ふ。關東の諸國、皆爭ひて好を通ず。

憲政二十年

是に於て、憲政、獨、上野を有つ。菅野、上原を寵すること衰へず。將士益〻心を離す。二十年、氏康、八州の兵を率ゐ、往きて憲政を擊つ。七月、平井城を攻めて、之を拔く。憲政、越後に出奔し、長尾輝虎に依る。其老臣藤田、小幡、三川、成田等の六人、憲政の子龍穉を以て來り降る。氏康、神尾某に命じて龍穉を誅し、平井城を燒夷す。兩上杉是に於て、皆亡ぶ。而して東國、盡く伊勢氏に歸す。

平井城燒く。兩上杉亡び、伊勢氏大に張る。氏康の書辭

獨、足利晴氏、其餘黨を率ゐ、氏康と通せず。氏康、乃書を移して之を讓めて曰く、「臣が父氏綱、先公と婚姻を結び、心を竭し翼戴して、貳心有る莫し。御弓氏の强武を以てすら、氏綱密旨を啣みて、不日に之を滅し、遠近、其勳勞を稱せり。而るに未だ幾何ならずして、將に其子孫を誅せられんとす。臣、未だ其說を知らず。河越の役に、憲政、君の親臨むを促すや、臣乃白して曰く、「敢て援を請はず。請ふ、兩ながら授くる所無れ」と。君已に之を聽す。而るに又讒臣に惑ひ、翻りて憲政を援く。臣又白して曰く、「苟も城兵の死を宥さば、則城を獻じて退かん」と。君又之を聽し、而して攻擊已まず。往事此の如し。其曲、其直は、天將に之を鑒みんとす。氏康、復君を戴く能はず」と。二十三年十月、兵を將ゐて、攻めて古河城を陷れ、晴氏を執へ、之を渡多野に放つ。已にして之を釋して、關宿に老せしむ。其子義氏を立てゝ、鎌倉の葛西谷に居らしむ。弘治元年、氏康、使をして、入りて京師に奏せしめて曰く「晴氏、悖亂にして、關東の將士を統ぶる能はず。臣、謹みて諸將士と議し、其子義氏を立てゝ之に代らしむ」と。遂に爲に其官爵を請ふ。詔して左京大夫と爲し、從五位下に叙せらる。長尾輝虎、氏康を擊たんことを計る。又京師に詣りて、將軍足利義輝に請ひて、自ら上杉氏を冒す。太田資正、輝虎の爲に諸將を誂して曰く、「關東の將士、古より源氏に屬す。北條は平氏なり。胡爲ぞ之に附く。室町將軍、已に輝虎を以て管領となせり。公等宜しく嚮背を決すべし」と。是に於て、將士多く款を輝虎に送る。輝虎、數〻上野に入る。氏康、兵を遣して、之を防ぐ。更に勝敗あり。二年、里見義弘、又輝虎に通

二十三年

弘治元年

長尾輝虎

二年

永祿二年

三年
輝虎小田原を攻む

成田長康

六年

鴻臺の役

じて、兵艦八十艘を以て、三浦の城島に上る。氏康の戍將梶原某、富永某、擊ちて之を却け、追ひて海中に戰ひ、大に獲て還る。永祿二年、下總の將士、輝虎に應じて、關宿を攻め、晴氏を取らんと欲す。結城晴朝、來りて之を防ぐ。初め晴朝、小山、佐竹、宇都宮の三族と戰ふ。氏康、兵を遣して晴朝を援ふ。晴朝、之を德とす。故に之が爲に守る。已にして三族、輝虎に應じて、結城を攻むと聞き、則辭して還る。三年正月、輝虎、騎卒十一萬を率ゐ、來りて小田原を攻む。氏康、議して曰く、「輝虎慓悍にして前無し。而れども智慮短促にして、久しきを持する能はず。且威力を以て諸將を劫す。諸將必服せざる者あらん。吾れ厚く我が兵を集めて、與に力を抗せず、其猖獗を縱にせしめて、坐ながら其變を待たん。我が兵を損せずして、彼れ將に自潰えんとす。是れ兵法に謂ゆる、『其銳氣を避け、其惰歸を擊つ』と。戰はずして人の兵を屈する者なり」と。乃盡く八州の將士を召し、其城邑を舍て、來りて小田原を保守せしむ。三月、輝虎、城軍を將ゐて、城下に至る。氏康、出で戰ふを肯ぜず。輝虎、之を攻めて、拔く能はず。忍の城主成田長康、虎輝の無禮を憤り、告げずして去る。將士稍亡げ去り、皆輝虎に叛きて氏康に歸す。輝虎、大に驚き、卻き走る。氏康、沿途の士民をして其輜重を奪はしむ。輝虎、狼狽して、走りて越後に歸る。而して東國、伊勢氏に歸する者故の如し。

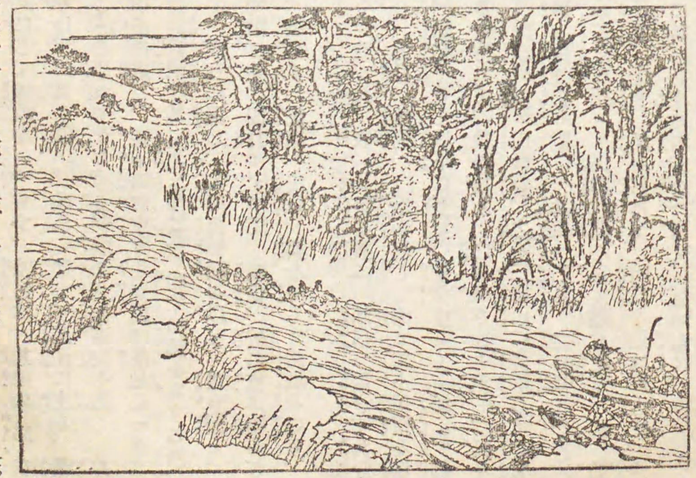
是より先、今川義元、其子氏眞、武田晴信と兵を合せて、數境上に臨み、以て我が富士河東の地を爭ふ。氏康、嫡子氏政と、俱に會してこゝに戰ふ。決せず。乃和を講ず。氏康、女を以て氏眞に妻し、氏政のために晴信の女を娶る。十二月、氏康、國を氏政に授けて老す。五年、晴信と兵を合せて、復松山を取る。松山は、太田資正の屬城なり。資正、輝虎の功を終へざるを憾み、使を遣して里見義弘に說かしむ。六年、義弘、兵を下總に出し、資正と合して江戸城を襲はんと欲す。城將遠山某、諜して之を知り、急に守備を修め、使を馳せて、氏康に報ぐ。氏康、氏政、兵を將ゐて小田原を發し、義弘と鴻臺を夾みて陣す。其夜、候騎報じて曰く、「義弘の兵卻く」と。我が先鋒遠山某、富永某、進みて搦木の瀨を濟り、平旦、兵を引きて臺

十年

三郎

（北條氏康鴻臺に里見の軍を破る圖）

上に登る。敵將正木某、臺の傍二里許に伏し、卒に起りて要擊す。我が兵大敗す。二將、力戰して死し、餘兵大に走る。敵、追ひて氏政の陣に至る。氏政、兵を麾きて橫擊して之を卻く。氏康、已に水を濟りて敗聞を得、諸將を召して曰く、「吾れ二將の爲に恥を雪がんと欲す。如何」と。氏政曰く、「曩者に一卒を遣はして敵に雜りて其陣に入らしむ。還り報じて曰く、『義弘、臺上に在りて、二將の首を檢し、意色甚驕る。曰く『敵、其良を喪ふ。度るに已に退き去らん。吾れ旦日、水を濟りて、北ぐるを追ひ之を殲さん』と。』乃甲を釋ぎ兵を休む。是れ其れ襲ふ可きなり」と。氏康曰く、「然り」と。乃二軍を勒し、氏康、氏政、自先鋒と爲る。會日旦に暮る。大霧にて咫尺を辨ず可からず。二軍、臺の南北より皷譟して登る。聲、天地に震ふ。義弘の軍大に驚きて潰え走る。氏康、愛馬に乘る。賀美と名づく。白柮薙刀を提げ、手づから三十騎を斫る。氏政等、正木以下十八將を擒にす。首を斬ること五千級。義弘、資正、僅に身を以て免る。是に於て、上總、安房の諸城、多く風を望みて降る。四隣益畏る。十年十月、氏康、晴信と、兵五萬を合せて、長尾輝虎を厩橋に攻め、火を城下に縱ち、其門に至りて還り、以て小田原の役に報ず。輝虎敢て出でず。輝虎、數河越を窺ひて、志を得ず。氏康、妾の子に三郎といふあり。輝



今川氏眞

十一年

虎、之を養ひて子と爲し、以て和議を成さんと欲す。氏康之を聽す。是に於て、諸國無事なり。今川義元死するに及びて、氏眞、其後を承く。而れども淫縱にして國政を親せず。晴信は、其母の弟なり。陰に其國を奪はんと謀る。十一年十二月、晴信、兵を擧げて氏眞を襲ふ。氏眞、逃れて遠江に走る。晴信敢て追はず。留りて府中に居る。我が兵の、之を救はんことを恐れてなり。乃辯士寺島甫安を遣し、來り說かしめて曰く、「請ふ、駿河を分ちて、富士河以西は武田氏に屬し、富士河以東は北條氏に屬せん」と。氏康、氏政、怒りて曰く「晴信、利を規りて、親を滅す。是れ豺狼なり。今川氏は我が祖宗の跡を寄する所、且姻戚たり。吾れ必氏眞を復せん」と。乃甫安を執へて、伊豆に囚し、兵四萬餘騎を以て、赴き援く。

十二年

十二年正月、薩陲山に陣す。晴信、興津に陣す。相持して戰はず。四月に至りて、晴信、終に支ふ可らざるを度り、夜、其軍を拔きて、間道より逃れ去る。氏眞乃、來奔す。氏康、氏政、兵を分ちて諸城を守り、氏眞の爲に府中の城を修む。

晴信小田原を襲ふ

六月、晴信、來りて伊豆に入り、鳴島に軍す。會大雨あり。我が兵、夜、其營を襲ふ。晴信驚きて其牙旗を棄てゝ去る。而れども關東の將士、晴信に通ずる者多し。九月、晴信、二軍を發し、來りて小田原を襲ふ。時に我が兵、大半は駿河を戍り、小田原に兵寡し。十月、晴信來りて城下に至る。聲言すらく、「鶴岡神祠に詣でゝ、戰捷を告げん」と。氏康、氏政、其鎌倉に入るを待ちて、後を斷ち、之を殲さんと欲し、兵を出して出づる勿らしむ。晴信、乃軍を引きて、甲斐に歸る。氏政の弟氏輝等、之を三增山に要擊して、其先鋒を破る。而れども衆寡敵せず。我が兵遂に敗走す。氏輝、獨身止り戰ふ。其臣大石某、之に謂て曰く、「是れ公の死所に非ず。臣請ふ。公に代りて死せん」と。進みて之に死す。氏輝、間を得て馳せ走る。馬、箭に中りて斃る。其臣師岡某、其馬を授けて之を免れしむ。氏康、氏政、兵を將ゐて、晴信を追はんとす。未だ嶺に至らざる二里にして敗報至る。乃軍を班す。而るに駿河を戍る者、守を舍てゝ難に赴く。十一月、晴信、復國兵を擧げて駿河に入る。諸城解走す。獨、北條綱重、蒲原に在り。堅く守りて下らず。

晴信駿河を取る

晴信、其力取す可からざるを知り、兵を引きて去る。綱重、出でゝ之を追ふ。晴信、兵を分ちて、直に其城に入る。綱重、戰ひて之に死す　晴信、府中を陷れ、盡く駿河を取る。氏康、乃氏眞に給するに、早川邑を以てす。而して氏政及び松田憲秀等を遣して、晴信を擊たしむ。

元龜元年氏康卒す

元龜元年九月、氏政、晴信と、伊豆に相距ぐ。氏康の疾作るを聞きて、乃還る。十月氏康卒す。年五十六なり。氏康、四方を攻擊し、往々身を以て敵に當る。大創、數十あり。而して常に心を政治に用ゐ、深く賴朝の故事に講ひて、吏の貪廉を察して、之を黜陟す。關東の諸國、倚りて安ず。嘗て晴信と會す。晴信、河越の戰略を問ふ。氏康曰く、「是れ吾が功に非ざるなり。綱成等の忠勇の致す所のみ」と。其矜らざる此の如し。故に其士民、皆廉讓を以て相尙ぶ　君事に趨くこと歸するが如し。其の卒するに及ぶや、哀慕せざる無し。

氏政

氏政、勇敢、氏康に類す。而れども器略は及ばず。氏康、既に卒して、甲斐の將士、喪に乘じて、氏政を攻めんと欲す。晴信、方に西して織田氏を擊つ。故を以て聽さず。遂に和議を講ず。氏政、已に西顧の憂なし。乃專東國を經營す。

天正五年

天正五年夏、里見義高を擊ちて、これを破る。義高、和を請ひて、其子義賴を献ず。常陸の國主佐竹義重も亦、質子を効す。

氏直

氏政、是に於て、國を嫡子氏直に授けて老す。氏政、氏直、皆氏康の官爵を襲ふ。

晴信卒して勝賴立つ

晴信、既に卒し、子勝賴數兵を出して、織田氏、德川氏と爭ひて、大に敗衂す。乃重幣を以て來りて和を請ひ、且氏政の妹を娶らんと請ふ。氏政、之を許す。是より武田氏、遂に我が屬國となる。

六年輝虎卒す景虎、景勝國を爭ふ

六年、輝虎卒す。二子景虎、景勝在り。國を爭ひて兵を構ふ。景虎は、卽氏政の弟三郎なり。氏政、景虎の爲に援を勝賴に請ふ。勝賴之を諾す。景勝、厚く勝賴の嬖臣に賂す。勝賴意を變じて、兵を遣し、景勝を助けて景虎を攻殺す。氏政、大に怒りて、勝賴と絕つ。

信長七年　織田信長、既に畿内を定め、來りて勝頼を夾み攻めんと約す。氏政、之を許す。七年九月、勝頼と三島に相持す。

八年　八年、浮島原に戰ふ。十年三月、信長、子信忠と、勝頼を擊ちて甲斐に入る。氏政、氏直、兵三萬を將ゐて境上に臨む。勝頼、困蹙して死せんと欲し、夫人をして小田原に走らしむ。夫人聽かず。與倶に自殺す。

十年　勝頼自殺す　信長、既に甲斐、信濃を定め、我が德川公をして、駿河に居らしめ、其將瀧川一益をして、西上野を守り、厩橋城に居らしむ。十年六月、信長、其下の爲に弑せらる。一益、將に西に歸らんとす。鉢形の城主北條氏邦、氏直に告げしめて、出でゝ金窪に陣し、一益と戰へども、利あらず。一益の兵、勝に乘じて進む。

信長弑せらる　氏直の先鋒、伏を設けて伴り走る。一益、伏に陷る。我が兵前後より之を擊ち、首を斬ること二千級。

一益、伏に陷る　時に甲斐、信濃、大に亂る。德川氏、上杉氏、之を爭ふ。氏政、又氏直をして、兵數萬を卒ゐしめて、會戰すれども決せず。乃與共に和し、西上野を定めて還る。是の時に當て、伊勢氏、盡く八州を定む。沃野千里、山を鑄、海を煮、小田原の繁華、關東の都會の第一たり。而して氏政、漸く驕侈にして、人を用ゐること忠佞を別たず。初め氏政の世子たりしとき、氏康に從ひて上野を略す。武田晴信と兵を合せて、松山に軍す。時方に仲夏、麥を刈り、馱して軍前を過ぐる者あり。氏政、之を見て、指して左右に「何物ぞ」と問ふ。左右の曰、「麥なり」と。氏政曰く、「盍ぞ炊ぎて以て賓に供せざる」と。晴信、哂ひて曰く、「吾れ今にして後、北條氏の大國なるを知る。郎君は大國の公子、故に此言を爲すのみ。天れ麥は、之を擊ち、之を簸し、之を舊し、唏して之を春つくもの再、然る後、之を浸して之を炊ぐ。今、郎君は乃直に之を炊がんと欲す」と。左右竊に之を笑ふ。氏政、下情に通ぜざること此の如し。故を以て國政日に弊ふ。老臣松田憲秀、權柄を弄し、士民寃枉を被るもの多し。

氏政驕侈　嘗て一僧あり。過りて、城門の榜令を觀て曰く、「北條氏將に亡びんとす」と。或人走りて之を市尹に告ぐ。市尹、僧を召し問ひて曰く、「聞く、汝北條氏將に亡びんとすと謂へりと。信なるか」と。曰く、「信なり」と。曰く、「何を以て之を謂ひしか」と。曰く、「吾れ三十年前、過りて榜令を觀しに、令四五條のみ。今は則之に三倍す。夫れ德薄ければ則政滯る。政滯れば則令煩し。令煩しければ、則衆離る。衆離るれば、則君孤立す。君已に孤立となる。亡びずして何をか待たん」と。市尹以て氏政に告ぐ。氏政、意と爲さず。獨憲秀に委任す。十一年七月、氏直、德川氏を娶る。

一僧城門の榜令を讀みて北條氏の滅びんことを知る

十一年　秀吉、政を爲す　信長既に害に遇ひて、其將豐臣秀吉、代りて政を畿内に爲し、天子を挾みて、海内に令す。德川氏、上杉氏、皆之に附く。秀吉、屢使をして、來り說かしめて曰く、「盍ぞ來りて京師に朝せざる」と。十四年八月、氏政、弟氏規を遣し、京師に赴かしめ、親往くを肯ぜず。是の如きこと再三。氏政曰く、「秀吉、口舌を以て八州を取らんと欲す。盍ぞ弓戰を以てこれを取らざる」と。秀吉怒りて、使をして戰を請はしむ。是に於て、氏政、乃城壘を修め、糧仗を蓄ふ。八州の將士、皆其部下を留めて、城砦を守らしめ、而して自小田原に聚る。

十四年　秀吉、氏政と戰はんとす　憲秀、陰に款を秀吉に送る。初め憲秀の子新六、戶倉城を守り、武田勝頼と戰ひて、數利あらず。氏直、之を聞き、罵りて曰く、「新六の怯夫、多く我が士を亡ふ」と。新六、之を聞きて慙恚し、叛きて勝頼に降る。勝頼亡ぶるに及びて、新六來り歸す。誅に當る。憲秀、爲に哀を乞ふ。乃死一等を宥して、其邑に屏居せしむ。是に至りて、新六、又憲秀に勸めて、敵將堀秀政に因りて款を通ず。秀吉之に昭すに、伊豆、相模を以てし、内應を爲さしむ。氏政、氏直、之を知らざるなり。憲秀と議して、親族の諸將を遣し、分ちて要害を守らしむ。美濃守氏規は韮山を守り、陸奥守氏輝は竹浦を守り、左衞門大夫氏勝は山中を守る。氏勝は綱成の孫なり。間宮康俊、朝倉重高、副たり。舊守松田秀植と俱にこれを守る。氏政、刀を康俊、重高に賜ひて曰く、「之を勉めよ」と。康俊曰く、「臣、死を以て事に從はん」と。重高、退きて同僚に謂て曰く、「北條氏の滅ぶる、是の役に在り。山中の城、版築備らずして、守を命ぜらる。是れ我が輩を敵に棄つるなり。吾れ十餘年來の政を視るに、道を失ふ者多し。事知る可きなり。諸君、之を謹めよ」と。

十八年小田原の大役　十八年三月、秀吉、兵二十五萬を發し、自將として來り攻む。德川氏、其先鋒たり。二十九日、山中城を

憲秀潛に秀吉に通ず

鉢形城

氏勝降る

忍城

圍む　城兵、力め戰ふ。敵將一柳直末を斬る。而れども敵衆、已に城を凌ぎ、齊く登る。康俊、秀植、之に死す。氏勝、重高、遁れ去る。德川氏の軍酒勾に至る。四月、竹浦及び湯本の守兵、みな潰ゆ。西軍、來りて小田原を圍む。氏直、諸城、守を失ふと聞き、議して曰く、「秀吉の兵衆しと雖、而も威力を以て相持す。其の心必一ならじ。我が兵寡しと雖、而も五世の君臣なり。我れ秀吉を險に要して、一戰に雌雄を決せんと欲す」と。憲秀、之を沮みて曰く、「彼れ遠くより來り、糧饟繼がず。我れ壁を堅くし野を淨めて、戰はずして之を屈せん　是れ先公、已に試し策なり。何ぞ必しも危を行ひて僥倖せん」と。氏直、乃ち止む。憲秀、潛に人をして「秀吉に告げしめて曰く、「城の西北に石垣山あり。以て牙營と爲さば、則城內の情狀、遁れ隱るゝ所なからん」と。秀吉之に從ふ。一城、大に驚く。

已にして上杉景勝、前田利家と、北陸の兵を以て來りて、上野の松枝を攻む。城主大導寺政繁、出でゝ阪本に拒ぎ、戰はずして走り、遂に降りて先導と爲る。厩橋、松山、沼田、箕輪、河越の諸城を下し、進みて鉢形城を圍む。城主氏郡、小田原に在り。留守の將士、堅く拒ぎて下らず。西軍の副將一人、秀吉の命を以て、下野、上總、下總を徇へて之を下す。氏勝、逃れて其邑甘繩に在り。氏政、氏直、之を召す。氏勝答へて曰く、「臣、何の顏ありて君に見えんや。當に此に死すべし」と。或人、其貳心あるを譖る。氏政怒る。會德川氏、氏勝を招き降す。氏勝、遂に之に降る。五月、氏直の弟氏房、出でゝ蒲生氏の營を襲ふ。利あらず。西軍の別將氏房の邑岩槻を陷る。留守妹尾兼延之に死す。秀吉、更に別將三人を遣し、館林城を攻む。城、大澤を帶ぶ。敵、浮梁を造りて、之を濟る。城兵、死守して降らず。秀吉、氏勝の書を取りて之に諭す。乃降る。六月、西軍兵を合せて忍城を攻む。謂へらく、城漢ぐ可しと。土人を募りて堤防を起す。城主成田長康、小田原に在り。留守、其灌ぐ可からざるを知るや、陰に其人を出し、募に應じて、錢を收む。既に就りて水を引く。城、一版を漸さず。而して敵、水に阻てられて近づくを得ず　數日にして、堤潰ゆ。西軍、死する者數百人。景勝、利家、鉢形を下し、八王子の城を圍む。城、氏輝に屬す。其留守横地監物、

【奥州】氏輝

氏規

（小田原合戰地圖）

氏房秀吉酒を城中に遣る

これを遁る。狩野一菴、中山家範、金子家重、近藤助實、相謂て曰く、「吾れ奥州に約するに死守を以てす。其れ言を食む可けんや」と。數百人と殊死して戰ふ。利家、高處に在りて、望み見て之を壯なりとし、降將に向ひて其姓名を知り、往きて之を降さしむ。至れば、則自殺す。事平ぐに及び、德川氏、家範の二子昭守、信吉を收用す。信吉は、備前守と稱す。水戸の傅と爲りし者なり。

是の時に當りて、里見、佐竹氏、及び陸奥、出羽の豪傑、みな秀吉に降る。秀吉、天下の兵を擧げて、小田原を圍む。氏政、氏直、衆を勵して堅く守る。令を出して曰く、「諸將士、各其所を守り、妄に相救ふ毋れ。更番に休息し、休む者は游息意に任す」と。又麾下の士六百人を分ち、晝夜巡警せしむ。秀吉、合圍すること百餘日、遂に一首級をだに得る能はず。

氏規、韮山を守る。秀吉、七將と騎卒五萬を以て之を攻む。氏規、其衆に謂て曰く、「此地、我が高祖の由りて起りし所にして、吾れ命を受けて之を守る。一障壁をも失はゞ、吾の恥なり」と。衆、みな奮激す。其將朝比奈泰能等、數出でゝ力戰す。西軍、四面より攻擊す。死傷算なし。乃長圍を築き、敢て迫らず。德川氏の將小笠原某、手兵を以て壁を傳きて皆死す。秀吉、將を更へて疾く攻めて、其外城を陷る。氏規、親戰を督し、卽日、之を復す。八州の城壘みな陷る。獨小田原と韮山とは下らず。

氏房、小田原に在り。敵將浮田秀家と壘を對す。秀家、秀吉の旨を以て、酒を氏房に遺りて曰く「聊以て城主の勞を慰めん」と。氏房、又物を遺りて、之に謝して曰く、「聊以て攻戰の勞を慰めん」と。秀家、遂に氏房に言はしめて曰く、「豐臣氏、北條氏と宿怨あるに非ず。偶爾

秀吉人をして北條氏を説かしむ

氏房、氏政に降を勸む

兵を構ふ。半歳に至るも決せず。徒に天下の人をして鋒鏑に亡ぼせしむ。今、誠に和を議し、兵を弭めば、則封ずるに伊豆、相模を以てせん」と。氏房以て告ぐ。氏政、答へず。時に堀秀政、既に死す。子秀治、秀吉の密書を以て憲秀に投ず。憲秀、敵兵を導き城に入れんと欲す。少子英春、氏直の爲に寵せられ、常に左右に侍す。憲秀、召して之を告ぐ。英春、號泣して固く諫む。憲秀、聽かずして、英春を止めて復入らしめず。遂に秀治と約す。約既に定る。秀治、夜、鎧櫃を以て自盛り、入りて氏直に見えて曰く「君苟も一人の死を宥さば、則臣請ふ。大事を告げん」と。誓ひて後告ぐ。氏直、大に愕き、憲秀を召し、詰りて之を囚す。英春、其死を宥されんことを請へども聽かず。秀治、約を踐みて、松田氏の壘下に至り、報を待つこと三日、其旗幟皆變れるを望見して乃去る。

秀吉、百方誘ひ降す。黒田孝高、羽柴勝雅をして、氏房に因りて說かしめて曰く「方今、北條氏の勢、魚の釜中に在りて、烈火之を烹るが如し。盍ぞ今に及びて降を納れ、二國を取りて、以て先祀を存せざる」と。氏房の妻子、岩槻に囚せらる。亦書を以て哀を乞ふ。氏房、心折け、氏政に降を勸む。氏政曰く、「吾れ父祖の業を承け、八州に主たり。武を爭ひて之を失ふは、吾れ必しも憾みざるなり。降を納れて存せんことを計るは死すとも且能はず」と。已にして成田長康等も亦、款を西軍に送る。親臣、宿將、互に相疑阻して、交和議を進む。

七月、秀吉、德川公をして氏規に諭さしめて曰く「子の武、已に多し。今、和議將に成らんとす。子、猶何を守るや。宜しく來りて其議を贊すべし」と。答へて曰く「氏規、戰に習ひて、和に習はざれば、未だ命に應ずる能はず」と。德川公、氏直の書を請ひて之を諭す。氏規、已むを得ず守備を撤て、封土の事を約し、小田原の西門より入れば、則氏直、已に南門より出づ。蓋し秀吉、陰謀を以て、其父子を間疎す。故に氏直惶惑して、約を俟たずして、出づるなり。是に於て、氏直、德川氏の陣に就き、請ひて曰く「願くは氏政以下を宥さば、則亟に城を致さん」と。德川氏、姻戚の嫌有るを以て、之に敎へて、羽柴勝雅に因りて

憲秀を誅して城を致す

氏政氏輝自殺す

十九年、氏直卒す

狹山城

早雲三略の說を聞く

早雲英雄の心を攬る

秀吉に告げしむ。秀吉曰く「吾れ當に其請ふ所に依るべし。獨其封土は二總を以て、伊豆、相模に代へん」と。氏規之を聞き、恚りて曰く「吾れ老賊の爲に誑されしを悔ゆ。將に韮山に歸りて、復守備を修めんとす」と。氏直、許さず。乃憲秀を誅し、城を德川氏に致す。城內の士民を出すこと、限るに三日を以てす。氏政、弟氏輝と出でゝ醫師安棲の宅に在り。秀吉、氏政の剛武を憚れ、又約を變ふ。使者五輩を遣し、其舍に就きて自殺せしむ。使者至りて之を言ふを難る。氏政、氏輝、其色を察し、間を請ひて沐浴し、絕命の辭を作りて自裁す。氏規、將に之に殉せんとす。監吏、刀を奪ひて、死するを得ざらしむ。秀吉、氏直を宥し、氏規、氏房、氏郡、英春等、數十人を率ゐて、高野山に入らしめ、給するに萬石を以てす。明年、氏直病みて卒す。年二十一なり。英春、去りて前田氏に仕ふ。長氏の相模に國せしより、是に至りて五世、九十餘年にして乃滅ぶ。

後秀吉、氏規の忠勇を思ひて、狹山の城主と爲し、萬石を食ましむ。其後氏盛、氏信、氏宗、氏治、氏朝父子相襲ぎ、豐臣氏、德川氏に歷事す。氏勝、德川氏に降り、岩留の城主と爲り、萬石を食む。關原の役に岡崎を守る。應長中卒す。保科正直の子氏重を養ふ。大阪の役に、氏重先鋒に在り。後數封を徙し、終に掛川の城主と爲る。病みて卒す。嗣無くして國除かる。

外史氏曰く。余、聞く、早雲、嘗て儒士を召し、黃石公の三略を說かしむ。其首に言あり、「主將の法は務めて英雄の心を攬る」と。早雲之を聽きて曰く、「止めよ。吾れ既に之を得たり」と。復說かしめず。嗚呼、以あるかな。其流寓漂泊の人を以て、八州を據有し、以て五世の基を開きしは。夫れ足利氏、其綱維を隳して、權臣內に鬪ぎ、海內戰爭す。然る所以は、他の故なし。天下の英雄、各其心を以て心と爲し、主將の之を收攬する能はざるのみ。早雲は蓋し早く此に見あり。以爲らく、天下の事知る可きのみ。故に一劍の任に仗りて天下を周流し、以て武を用ゐるの地を求め、一たび其地を得て、雲蒸龍變す。之を拒ぐもの或る莫し。夫れ兩上杉氏は、百年の故家、財賦の富、兵馬の雄を以てす。而して早雲、赤手を以て之を圖る。爰ぞ錐

兩上杉氏と早雲

もて山を鑿つに異ならんや。乃能く戰ひて勝ち、攻めて取り、其死命を制する者は、果して何の恃む所ありて然るか。亦其英雄を結納し、其驩心を得るを以てなり。兵寡にして志一、地狹くして力合ふ。舟を同じくして江を濟り、期せずして救ふが如きなり。此を以て敵に臨む、天下に横行すと雖、難きこと無し。而るを況や兩上杉氏に於てをや。

氏綱、氏康、緒業を纘ぎて强大を致せし所以も、亦此道に由れるなり。氏政、氏直に至りて、已に兩上杉に代りて、八州の富强を擅にし、意滿ち志侈りて、復心を此に用ゐず。上下漸く遠ざかり、君臣親まず。區々の法令を恃みて、其下を制馭せんと欲す。而して其下の心、既に已に之を去れるを知らず。將何を恃みて天下の勁敵に抗せんや。然るに豐臣太閤、不世出の略を以てし、之に加ふるに我が東照公を以てし、左提右挈せしめて、天下の猛將精兵を率ゐ、往きて其罪を問ふ。其勢力、以て天地を震撼するに足る。而れども合圍すること半歲にして、纔に能く之を舉げし者は、其父祖が人心を收攬し、固結して解く可からざるもの有るを以てするに非ざらんや。

豐臣家康相提挈して小田原を攻む

外史氏曰。余聞早雲嘗召儒士說黃石公三略。其首有言曰。主將之法。務攬英雄之心。早雲聞之曰。止矣。吾既得之矣。不復使說。嗚呼。有以夫。其以流寓漂泊之人。據有八州。以開五世之基也。夫足利氏。隳其綱維。權臣內鬨。海內戰爭。所以然者。無他故焉。天下英雄各以其心爲心。而主將不能收攬之焉耳。早雲蓋早有見於此。以爲天下之事可知已。故仗一劍之任。周流天下。以求用武之地。一得其地。雲蒸龍變。莫之或拒。夫以兩上杉氏百年故家。財賦之富。兵馬之雄。而早雲以赤手圖之。奚異錐鑿山哉。乃能戰勝攻取。制其死命者。果何所恃而然歟。亦以其結納英雄得其驩心。兵寡而志一。地狹而力合。如同舟濟江。不期而救。以此臨敵。雖橫行天下無難。而況於兩上杉氏乎。氏綱氏康所以纘緒業致强大者。亦由此道也。至於氏政氏直。已代兩上杉。以擅八州之富强。意滿志侈。不復用心於此。上下漸遠。君民不親。欲恃區區之法令。以制馭其下。而不知其下之心既已去之矣。將何恃以抗天下勁敵邪。然豐臣太閤。以不出世之略。加之以我東照公。左提右挈。率天下之猛將精兵。往問其罪。其勢力足以震撼天地。而合圍半歲。纔能擧之者。非以其父祖之收攬人心。有固結不可解也哉。

詠史十二首其六

霸庭綱弛四輿戎。　便見人豪起海東。　地按故資撫背脊。
書諳上略攬英雄。　八州驍虎歸兵籍。　五世呴濡繩祖功。
末路猶知士心屬。　孤城半歲費環攻。

謁延元陵詩

千株萬珠花如雪。中有一邱蠹翠樾。松邪柏邪錯杉檜。蟠根互護天龍骨。樵蘇相戒不敢觸。觸則風怒雲擢山欲裂。可惜威靈尙如此。當時不能殄蛇豕。遊人不知何帝陵。玉魚光闕落花裡。吾雖螻蟻亦王臣。曾私帶淚修前史。芻蕘敢欲慰帝魄。陳詞陵前獨拜跪。維昔天漢弄狡童。天之曆數在君躬。厲精誓雪列聖恥。此心上可質蒼苔。人神均敵王所憤。頹日回輪紅再中。大政豈盡乖處置。再造傾厦本難事。唯使君操心常如元弘初。不憂邦有百足利。顧命按劍語空雄。一坏長埋萬禩志。雖然五十年間萬生靈。爲誰膏鋒尸縱橫。臣正成死君在時。心己明。臣義貞懷君遺詔亦結纓。此輩忠肝纍纍及孫仍。盡爲君王死不與賊共戴天生。天定賊巢亦終覆。死骨餧犬犬不食。天家依舊傳日嗣。自祖宗視無南北。中興偉擧警百世。陰制姦雄不肆毒。噫噫君王可瞑目。

改版

邦文日本外史 卷之十 終

改版

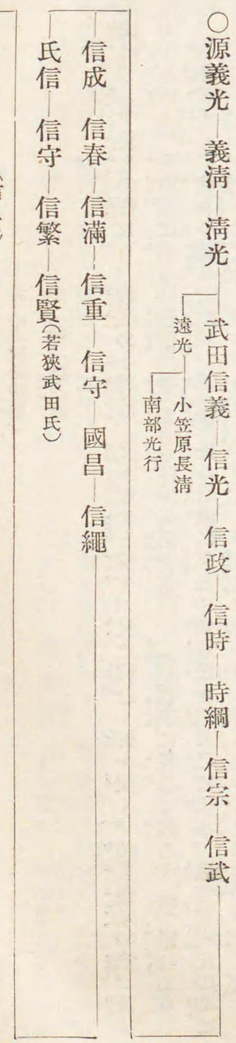
邦文日本外史 卷之十一

足利氏後記

武田氏

上杉氏

武田氏略系



（武田氏系圖）

武田氏系統【無楯の甲】源家八甲の一

【禪秀の亂】杉氏憲、上應永中氏憲足利滿隆を奉じて足利持氏を攻む

【結城の役】永享中、足利持氏叛を以て誅せらる。結城氏朝、其二孤を春王、安王を援けて兵を起す。義教兵を發して氏朝を伐ち二孤を斬る

義晴信と結托す

天文五年

- 信實
  - 信龍
    - 女（今川義元妻）
  - 信盛
  - 女（木曾義昌妻）
  - 女（北條氏政妻）
  - 女（上杉景勝妻）
  - 女（織田信忠妻）

武田氏は、源義光の裔なり。義光の子義淸、武田冠者と稱す。父に從ひし射を受く。伯父義家の族、及び無楯の甲を傳ふ。世甲斐に居る。義淸の孫信義及び子の信光等は、源頼朝に從ひて起る。數戰功あり。逸見、小笠原氏と甲斐を分領す。頼朝、小笠原氏を信濃に移し、加藤氏を以て之に代へ、以て足利氏の時に及ぶ。義光の後十餘世を、信滿と曰ふ。上杉禪秀の亂に、信滿、之と婚を連ぬるを以て、逸見の爲に讒せられて自殺す。二子信重、信長あり、信重は族父の信元と、逃れて僧となる。信長、加藤氏に依りて、逸見と鬪ふ。足利持氏、伐ちて之を降し、其邑を以て盡く逸見に付せんと欲す。將軍義持、肯ぜずして、之を信元に賜ふ。信元死して、子幼なり。其將跡部、國を專にして、信重を招きて假主となす。結城の役に、信重、功あり。新に守護に充つ。乃跡部を誅す。逸見、加藤、皆これに臣屬す。信重の後五世を、信虎と曰ふ。駿河の豪傑久島某、戰ひて、之に勝つ。是の日を以て男を生む。因りて勝千代と名づけ、長じて晴信と曰ふ。沈毅にして權變多し。信虎、少子の信繁を愛し、晴信を廢せんと欲す。晴信、故に癡駭の狀を爲し、以て自晦ます。信繁と材技を角べて、輒其下に出づ。或は伴りて馬より墮ち、人に扶け起さるゝことを爲す。諸將みな晴信を侮る。晴信、獨、駿河の國主、今川義元と相結託す。義元は其女兄の夫なり。天文五年、義元、爲に奏し請ひて、晴信を以て嫡嗣と爲し、首服を加へ、大膳大夫に任じ、信濃守を兼ぬ。

信虎、海口城を攻む

【二郎】信繁

海口城

五年

晴信、甲斐に自立す

【深志】信濃

【韮崎】甲斐

十一月、信虎、兵を信濃に出して、海口城を攻む。城主平賀源心、善く戰ふ。信虎、兵八千を以て之を攻む。月を踰えて拔くこと能はず。大雪に會ふ。諸將議して曰く、「時已に窮臘なり。請ふ、師を班さん。敵も亦必尾せざるべし」と。信虎、之に從ふ。晴信、自殿せんと請ふ。信虎笑ひて曰く、「敵必尾せずして殿を請ふ。二郎の如きは、必然らざるなり」と。晴信固く請ひて、兵三百を以て殿す。大軍に後るゝこと數里にして止舍す。親其兵を警めて曰く、「甲を釋く勿れ。鞍を卸す勿れ。馬に食せて、而して後に食へ。五更、卽發せん。唯吾が嚮ふ所を是れ視よ」と。兵みな竊にこれを嗤ひて曰く、「風雪此の如し。何ぞ警むることを爲さん」と。五更、晴信、卽發して、還りて海口に向ひ、三百騎と雪を冒して馳せて、昧爽城に抵る。源心已に其兵を散遣して、獨百人と留守す。晴信、兵を分ちて三と爲し、自一隊を以て城に入り、二隊は幟を城外に揚げてこれに應ず。城兵、其衆寡を測らず。戰はずして潰ゆ。乃源心を斬り、其首を以て歸り獻ず。一軍大に驚く。

信虎、賞せずして曰く、「城を捨てゝ歸るは怯なり」と。諸將、晴信に心服す。而れども敢て其功を稱せず。晴信仍愚色あり。信虎、狂暴にして、賞罰常なし。國人、之を苦しむ。晴信、陰に老臣飯富兵部、板垣信形と謀りて、益今川義元に結ぶ。義元、素より信虎の强亢を病へ、晴信を助けて其國を擅にせんと欲す。信虎覺らざるなり。

五年五月、信虎、晴信を駿河に逐はんと欲す。因りて之を飯富氏に託して、自駿河に適きて、之を義元に計る。義元、信虎を留めて返さずして、晴信を甲斐に自立せしむ。諸宿將、首を頫して命を聽かざるは莫し。

而れども隣國、變を聞きて、其隙に乘ぜんと欲す。信濃の士民、多く去りて、村上義淸に附く。六月、諏訪の城主諏訪頼茂、深志の城主小笠原長時、兵一萬を合して來り攻む。晴信、騎將原加賀をして留守せしめて、自六千を以て、出でて韮崎に拒ぐ。加賀、府中の農商を聚めて、五千人を得、人ごとに、一の紙旗を執り

晴信驕恣

板垣信形、晴信を諫む

十一年

山本勘助

信濃の九城を取る

十三年　勝頼生る

十四年

【鹽尻嶺】信濃十五年

て鼓譟して出でしむ。敵乃退き走る。

晴信、宴騙恣にして、宴樂に耽り、詩賦を喜びて、國政を視ず。群臣敢て諫むる莫し。板垣信形、病と稱して、潛に一僧の詩を善くする者を家に延きて、詩を學ぶこと數旬、乃出でゝ宴に侍し、詩を賦せんと請ふ。晴信、信ぜず。强ひて請ひて可さる。立所に五題を就す。晴信大に喜びて曰く、「汝何ぞ遽に能く此の如くなるか」と。信形、因りて大に諫めて曰く、「先君唯無道のみ。故に君の逐ふ所と爲る。今、君復此の如し。復君の如き者有らざるを得んや」と。晴信、感悟して、遂に精を勵して政を爲す。

十一年三月、義淸、長時、賴茂、木曾義高と、信濃の兵を擧げて來り攻む。諸將みな懼る。晴信曰く、「四人合從すれども、議必一ならじ。一戰して破る可きなり」と。乃伴りて溝を浚へ、壘を高くす。四人以て怯と爲し、進みて境內に入る。晴信夜發し、霧雨に乘じて逼り擊ちて、大に之を敗る。四人再擧して平澤に至る。又擊ちて之を破る。是より連年、相攻むれども、晴信每に勝つ。

晴信、山本勘助を擧ぐ。勘助は三河の人、眇目痿躄なり。嘗て兵を尾形某に學びて、以て今川氏に干む。駿河の舊臣みな之を侮易す。義元奇とせず。勘助、寄食せしこと數年、板垣信形、其名を聞きて、之を晴信に薦む。晴信召見して、與に語りて大に之を悅ぶ。卽日、二百貫の邑を與へて、名を晴行と賜ふ。十一月、晴信、晴行の計を以て、信濃の九城を取る。十三年、信形の計を以て、諏訪賴茂を誘殺して、其女を納れて妾と爲す。明年、男勝賴を生む。四郎と稱す。晴信、長男義信あり。以て嫡嗣と爲し、勝賴をして賴茂の後を承がしむ。

十四年五月、小笠原長時、及び伊奈氏と、鹽尻嶺に戰ひて、之を破る。

十五年三月、戶石城を攻む。村上義淸、兵六千に將として、來り援く。我が先鋒、甘利備前、橫田備中等、みな敗死し、我が軍將に潰えんとす。晴行說きて曰く、「敵鋒遏む可からず。之をして右顧せしめば則克たん」と。晴信曰く、「我が兵すら且令に從はず。曷ぞ能く敵をして、我が意の如くならしめん」と。晴行、請ひて後

【駿河】今川氏

十六年

十八年、十九年

晴信削髮して信玄と號す

【劒及び索】不動佛、手に大智劒と三昧索とを執る。今之を倣ひて威力を示すなり

二十二年

【四郡】高井、水內、埴科、更科

隊の兵を假り、左旋して出づ。義淸の軍、右顧す。晴信の軍氣復振ふ。進み擊ちて之を破る。晴行、功を以て八百貫の邑を食む。乃駿河に往きて謝す。前に嗤笑せし者、口を交へて稱譽す。義元之を悔ゆ。

上杉氏の將士、甲斐の兵、戶石に弊るゝを聞きて、二萬騎を以て碓氷嶺を踰ゆ。晴信、信形を遣して、これを至がしむ。而して自之に繼ぐ。九月擊ちて上杉氏の軍を破る。眞田幸隆、及び子昌幸、みな功あり。晴信、又幸隆の計を用ゐて、村上義淸の精兵五百を誘殺す。

十六年八月、晴信、志賀城を取る。義淸出でゝ上田原に軍す。板垣信形、前軍に將たり。戰勝ちて備へず。義淸、其怠るを窺ひ、甲を悉して襲ひて之を殺す。晴信、赴き援く。義淸、死士を率ゐ、其麾下に突入し與に又を接して、馬より墜つ。終に大敗す。

十八年八月、晴信、地を上野に略す。又小笠原時長と、諏訪原に戰ひて、之を走らす。

十九年三月、復上野を略す。長時復出づと聞きて還る。

時に今川義元、相摸の國主北條氏康と婚す。氏康の爲に、來りて晴信に請ひて曰く、「氏康、上杉氏と戰ひて將に上野を取らんとす。願くは、君これに先ずる勿れ」と。晴信、乃氏康、義元と連和す。

是の歲、晴信髮を削りて、信玄と稱す。信玄、鏡を引きて、自視て曰く、「吾が貌、不動佛に類す」と。乃畫史をして己の像を爲り、劒及び索を執らしめて曰く、「我れ死し、四隣襲び入るとも、吾が像を視ば、敢て無禮を加へざらん」と。信玄、連に村上義淸を攻む。又高梨、須田、島津氏を攻む。二十二年、盡く河中島の四郡の地を略す。義淸等支ふる能はず。相共に計りて以爲らく、「信玄に敵す可き者は、唯上杉謙信のみ」と。乃往きて之に投ず。

越後上杉氏略系

（越後上杉氏系圖）

○平景政…長尾景弘…藤景…爲景

- 晴景
- 景康
- 景房
- 景虎（輝虎謙信）
  - 景虎（實は北條氏康の子）
  - 景勝
    - 定勝
      - 綱勝
        - 綱憲（綱憲實は吉良義央の子）
- 女（上杉定實妻）
- 女（畠山義則妻）
- 女（長尾政景妻）

上杉氏は、本、長尾氏、平良文の裔なり。良文の後十世を、景政と曰ふ。鎌倉に居り、權五郎と稱す。勇を以て東國に著る。大庭氏、梶原氏、皆景政より出づ。景政の後五世、景弘と曰ふ。始めて長尾氏と稱す。長尾氏嗣絶え、上杉藤景を養ひて嗣と爲す。藤景は、本、藤原氏なり。藤原重房、皇子宗尊に從ひて、東國に適く。丹波の上杉邑を食む。因りてこれを氏とす。子孫足利氏の外戚たり。東國を管領す。藤景は其庶曾孫なり。後上杉氏に臣屬す。越後、上野、伊豆の諸國に散處す。藤景よりして後十二世を、爲景と曰ふ。爲景、上杉房能を越後に輔く。後、事を以て相隙し、兵を擧げて鬪ふ。房能終に雨溝に死す。時に永正三年なり。房能の兄顯定、管領となる。六年顯定、子憲總と、上野の兵を率ゐ、來りて爲景を討つ。爲景敗れて、越中の西濱に走る。顯定留りて越後を徇ふ。越後の士民、顯定に服せず。高梨某を推して將となし、去りて爲景に歸す。七年六月、爲景、高梨と兵を合せて、憲總を椎屋に擊ちて、之を破る。憲總走りて妻有莊を保つ。隨ひて之を圍む。顯定赴き援け、長森に戰ひて、敗死す。憲總走りて、上野に歸る。爲景、乃上杉氏の庶孽定實を立てゝ、妻すに其女を以てし、之を上條城に置きて、之を奉ず。而して己は越中府内に居り、越後を徇へて盡く之を下す。長尾氏始めて大なり。

上杉氏系統	
【平良文】葛原親王曾孫	
【宗尊】後醍醐帝第五子	
永正一年	
六年	
七年	
【椎屋】越後	
【妻有莊】上野	

天文十一年

天文十一年、一向の賊、加賀に起り、州豪椎名泰種、神保良衡と兵を連ねて、爲景に叛く。爲景、自往きて之を擊ちて、栫檀野に至る。賊將江波某、伴り降り、穽を路に設けて、爲景を迎へ陷れて之を殺す。爲景四男あり。長を晴景、次を景康、次を景房、季を景虎と曰ふ。景虎、幼字は虎千代、繼妻の出たり。甫めて八歲、精悍にして膽略あり。爲景、愛せず。之を椽尾に逐ひ、以て僧と爲さんと欲す。景虎僧の事を學ぶを肯ぜず。爲景死するに及びて、諸將多く意を景虎に屬す。而れども大臣昭田常陸は、爲景の時より、權寵あり、晴景の庸暗を利とす。二子黑田秀忠、金津某、及び三條の城主長尾俊景と、謀りて晴景を立てゝ、景虎等を殺さんとす。景房、出でゝ走る。追ひて之を貳城の門中に殺す。景虎、時に年十三、亦走る。門者爲に之を簀牀の下に匿す。夜に逮びて、發きて之を出せば、則熟眠す。喚び起して潛に出でしむ。春日山寺に入る。寺僧之を擊けて椽尾に逃れ、乳母の夫本莊慶秀の家に匿す。慶秀、宇佐美定行と心を盡して保護す。定行は、上杉氏の世將にして、好みて書を讀み、天文、兵法に通ず。景虎輔く可しと謂ふや、深く相結託す。既にして景虎、賊の己を搜索して置かざるを聞き、則出でゝ之を避く。從士十四人と、行脚僧の狀を爲し、行縢を着け、鞋を穿ちて出づ。米山に上りて、府内を瞰視して曰く、「吾れ他日兵を起して、國を復する時は必此に陣せん」と。遂に栫檀野に至る。泣き且拜し、曰く、「兒、必仇敵を夷滅して、以て寃魂を慰めん」と。是に於て北陸、東山の諸國を經歷し、山川城地の形勢を周視し、圖寫して齎し歸る。賊に告ぐるに、景虎の所在を以てする者あり。甲を遣し來り捕へんとす。景虎、慶秀、定行と謀り、兵を起し、椽尾城を修めて之に據り、命を上杉定實に聽く。十三年春、俊景、秀忠、兵を將ゐて來り攻む。景虎

【上條城】信濃長尾氏始めて大なり

【栫檀野】越中

【椽尾】越後

【貳城】外城なり、俗に之を二丸と曰ふ

景虎年十三

栫檀野

【寃魂】父爲景の寃魂

十三年

十四年　十五年　十六年　下濱の戰

防戰して大に之を破り、俊景を斬り、秀忠を走らす。

十四年、神餘昌綱を遣し、京師に赴き、賊を討つの詔旨を請ふ。十五年、賊數來り攻む。景走戰ふ毎に輙く勝つ。十六年、晴景、族の政景を遣し、大舉して來り攻めしむ。定行出でゝ戰はんと欲す。景虎、城に上り之を望みて曰く、「敵遠く來るに輜重なし。久しく留まる者に非ず。其將に引き去らんとするを竢ちて、之を擊ちて可なり」と。夜半、政景果して卻く。景虎、三千騎を以て門を開きて出で、下濱に戰ひて之を走らせ、米山に及ぶ。景虎、兵を按じて止り、敵、嶺を過ぐるころ、衆を鼓して追擊し、又大に之を破る。定行、諸將に謂て曰く、「諸君、主公の兵を按じて止むる故を知るや」と。曰く、「知らざるなり」と。曰く、「敵、險に迫る時、之を急にすれば、則返擊す。其嶺を過ぐるを聽して、高に乘じて下し擊つ時は、敵支ふる能はず。主公、年少なれども、機に臨みて變を制すること此の如し。豈、我が輩の企て及ぶ所ならんや」と。是に於て政景降り、晴景窮蹙して自殺す。十八年、國人、景虎の府内に入るを請ふ。昭田等、猶三條に據りて下らず。十九年、景虎、三條を攻め、之を拔きて昭田を誅す。賊、餘兵を以て新山、黑瀧の二城を保つ。遂に之を攻めんと欲す。上杉定實卒するに會ひて果さず。二十年、將高梨貞賴を遣し、攻めて新山を拔かしめ、黑田秀忠を誅す。宇佐美定行、黑瀧を拔きて金津を誅す。越後盡く定まる。

政景降り晴景自殺す　十八年【新山、黑瀧】越後二十年

二十一年　景虎髮を削りて謙信と號す　林泉寺

二十一年、諸將士、共に景虎を推して主と爲さんと欲す。景虎曰く、「吾れ上下の意に迫られて、兄と兵を抗す。料らざりき、其自死せんとは。而して吾れ越後に主たらば、世の人、吾を簒へりと謂はん。今國略定まる。別に主を擇びて可なり。吾逃れて僧と爲りて、以て吾が志を明にせん」と。遂に髮を削り、號して謙信と曰ふ。將に高野山に赴かんとす。諸將士、連署して、其止りて國を治めんことを請ふ。謙信曰く、「君を置くは、將に其令を用ゐんとすればなり。令を用ゐざれば、君なくして可なり。今より吾が令する所に、敢て違ふことある莫くば、則吾れ肯て止らんのみ」と。乃、諸將と誓ひて入る。明日、令を出し、命を專にする大臣十六人を收め、死を林泉寺に賜ふ。諸將股栗す。

二十二年　謙信上洛　村上義清

五月、彈正少弼に任じ、從五位下に叙せらる。謙信曰く、「坐ながら官爵を受くるは、人臣の義に非ざるなり」と。二十二年二月、路を諸國に假り、兵二千を率ゐて、北陸を經て京師に入る。先闕に詣り、遂に將軍義輝に謁す。五月歸る。

村上義清は、高梨政賴、須田親滿、島津規久と、信濃より來り投じ、謙信に謁せんと請ふ。言て曰く、「僕等、武田信玄に侵凌せられ、身を容るゝに地なし。側に公の威名を聞く。願くは一たび手を下して救援を賜らんことを」と。謙信曰く、「諸君、豈、人の下と爲る者ならんや。而れども來りて我に託るは、是れ我を知るなり。我れ今略内亂を定む。念ふに賀越は吾が父の讎なり。常に此の二國を屠りて、遂に幟を京畿に樹てんと欲す。是れ吾が素志のみ。然りと雖、我を知る者に遇ひて、爲に力を出さざるは、丈夫に非ざるなり」と。

【程頓】程は道里なり。頓は止舍なり。謂は十里すべくして、五里にして止舍し、若くは五里すべくして三里にして止舍す　河中島

因りて義清に問ひて曰く、「信玄の兵を用ゐる何如」と。曰く、「信玄の軍を行るは程頓を貪らず。戰ふ毎に勝を後に要む」と。謙信曰く、「彼れ後に勝を要むるは、意、地を拓くに在るなり。吾は則然らず。敵に遇へば輙戰ひ、要は其鋒を枉げざるのみ」と。是に於て、令を國内に下し、十月十二日を以て、兵を小田濱に治む。八千騎を將ゐて信濃に入り、火を武田氏の屬城に放つ。十一月朔、進みて河中島に陣す。信玄、之を聞きて、援を今川氏に請ひ、步騎二萬を將ゐて雨宮渡に出で、山本晴行等四人をして之を覘はしむ。返り報じて曰く、「北軍銳甚し。君宜しく厚く其陣を集め、戰はずして之を屈すべし」と。信玄之に從ふ。兩軍水を夾みて陣す。謙信戰を挑む。信玄出でず。相持すること二十七日なり。

謙信。使者を遣して、言はしめて曰く、「吾れ聞く、『公の兵を用ゐる、嚮ふ所、留り陣すること無し』と。而るに何ぞ獨我と決せざるや。我れ公に於ける、怨仇あるに非ず。特義請輩の爲のみ。敢て問ふ、公、何を以て彼の地を奪ふか。公、吾と戰ひを欲せざれば、則地を彼に還せ。地を還すを欲せざれば、則吾と戰へ」と。信玄答へて曰く、「公、義清を庇ふ。眞に高義と爲す。然りと雖、晴信にして未だ死せずば、公、志を

謙信信玄戰期を約す

成すこと能はじ。公、戰はんと欲せば、則公より始めよ」と。謙信曰く、「諾」と。乃議を決して詰朝の會戰を約す。卽夜、傳發す。七隊を以て合せて圓陣と爲し、平明に橋を度りて進む。信玄、十四隊を勒して迎へ戰ふ。卯より未に至るまで、橋を爭ひて相逐ふ。勝敗決せず。謙信、兵を分ちて上流を渡り、甲斐の軍後に出づ。甲斐の軍之を顧て退き去る。横田源助、板垣三郎等、及び駿河の七將、みな死す。而して越後の兵も、亦死傷多し。兵を引きて歸る。

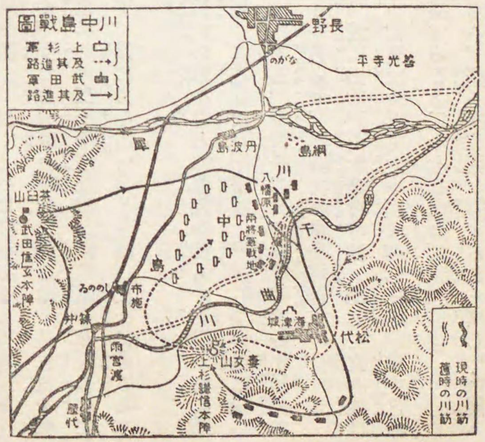
（河中島對陣地圖）

是より先、謙信、數兵を越中に出して、未だ志を得ず。是の歲、使をして、能登の國主畠山義則を招き降し、女兄を以て之に妻す。其弟義春を取りて、之を子とし養ふ。彌五郎と稱す。實は之を質とするなり。是の時管する所の佐渡、及び莊內、會津、盜起る。兵を遣し、擊ちて之を平ぐ。

二十三年【桔梗原】信濃

二十三年五月、信玄、小笠原長時と、桔梗原に戰ひ、勝ちて之を降す。長時終に京師に出奔す。

信玄、女を以て、北條氏康の婦と爲す。長子義信の爲に、今川義元の女を娶る。是に於て、二國相共に武田氏を翼けて、以て謙信を扞ぐ。而れども信濃の客將樂巖寺、布下、和田等、陰に謙信に通ず。謙信、兵を淸野に出して、火を風子驛に縱つ。客將、事覺れて誅せらるゝと聞きて乃還る。



犀川【既望】十六日

八月、謙信、復八千騎を以て信濃に入る。曰く、「吾が此行、必信玄と親戰ひて雌雄を決せんのみ」と。進みて犀川を渡りて陣す。既望なり。信玄、二萬人を以て出でゝ之と對し、壘を固くして出でず。間日、謙信、村上義淸等をして、夜、兵を伏せしめて、曉、采樵者を出して、甲斐の壘に近づかしむ。甲斐の兵出でて之を追ひ、伏に陷りて皆死す。諸隊隨ひて出で、乃、大に戰ふ。終日に十七合す。迭に勝敗あり。信玄潛に令を下して組を犀川に張りて渡り、旗幟を伏せ、蘆葦の中に徑して、直に謙信の麾下を襲ふ。麾下潰え走る。信玄勝に乘じて進む。字佐美定行等、手兵を以て、橫に擊ちて之を破り、之を河に擠す。信玄、數十騎

（河中島第一戰十四隊の圖）

山形勝頼	淺利衆	小宮山	鬼	萬山百騎
小山田土屋	小畑三河	丹後	鬼	小荷駄備
小幡典厩	今福右衛門	牢人	鬼	一條
高坂武田右衛門佐	雨宮	牢人	鬼	米倉利井
內藤穴山梅雪	安中近左	牢人	鬼	桐戸
眞田跡部大炊	旗奉行	武田	鬼	逍遙軒
馬場小曾根	笠井旗三持鎗十本	曾根內匠	鬼	淵野
板垣	使番	弓足輕	鬼	木曾
淺利衆	岡部	近習	鬼	保科
浦野	小山田	持鎗十本	鬼	仁科
相木	下曾根	六番近習	鬼	鳶巢
馬	長坂調閑	五番近習	鬼	望月
馬	土岐內衆	旗五本	馬	小荷駄備
馬	武藤喜兵衛弓足輕	一番	馬	小
馬	鎗持十本一番近習	一番小姓	馬	
馬	三番近習	奧小姓	馬	
馬	四番近習	六番奧小姓	馬	
馬	馬	五番奧小姓	馬	
馬	馬	使番	馬	

小山田備中守右七備	保科彈正	永井豐前	任我小和泉	奧若狹
旗本組左七備原隼人	駒井右京	根津	栗原左兵衛	朝比奈監物
諏訪	小笠原一宿齋			

【黄襖騮馬】黄色き陣羽織にて栗毛の馬に乗れるを謂ふ、信玄謙信を斬るを以て麾扇を扞ぐ之を扞ぐ

と走る。一騎あり黄襖騮馬、白布を以て面を裹み、大刀を拔きて來り、呼びて曰く、「信玄何に在る」と。信玄身を躍らして河を亂り、將に逃れんとす。騎も亦河を亂り、罵りて曰く、「竪子、此に在るか」と。刀を擧けて之を擊つ。信玄、刀を拔くに暇あらず。持てる所の麾扇を以て之を扞ぐ。扇折る。又擊ちて其肩を斫る。甲斐の從士之を救はんと欲すれども、水駛くして近づく可からず。隊將原大隅、槍もて其騎を刺す。中らず。槍を擧けて、之を打つ。馬首に中る。馬驚き跳りて、湍中に入る。信玄纔に免る。

弘治元年

武田信繁、信玄の危を聞きて之に返り、騎を呼び戰を索め、戰ひて之に死す。是の日兩軍の死傷大に當る。而して信玄創を被り、夜、兵を收めて退く。後に越後の捕虜を獲て、言く「鬻の騎は乃謙信なり」と。

二年

弘治元年四月、信玄攻めて、木曾義高を降し、女を以て之に妻はす。

二年、信玄、伊奈郡を取る。是に於て盡く信濃を定む。高阪昌宣を以て、貝津城を守らしめて、以て謙信に備ふ。謙信は武田氏の强敵の第一たり。諸將因りて昌宣を榮とす。

保科彈正

三月、信玄、謙信、復河中に對壘す。信玄、晴行等と、謀りて曰く、「我れ兵を分ち、遠りて越後の軍後に出で、鼓譟して之に逼り、而して本軍を以て夾み擊たば必大に志を得ん」と。乃信濃の客將保科彈正等、兵六千を以て、夜、戶神山を度る。時に月黑し。迷ひて道を失ひ、達する能はず。謙信、甲斐の軍、夜襲ぎ、人馬聲あるを見るや、潛に起ちて甲を擐き、令を傳へて、八千騎を擧げて出づ。五鼓、信玄の牙營に詣る。會天大霧なり。謙信、霧中より直に營を斫りて入る。營驚き潰ゆ。山本晴行等の大將を斬る。而して天明なり。客將の兵、上杉氏の營に達る。營、隻騎なし。顧て河中の戰聲、雷の如きを聞きて、則還りて筑摩河を渡り、北軍の後に出づ。甲斐の軍望み見て、乃返りて北軍を夾み擊つ。北軍敗走す。追ひて之に犀川に逼る。北軍輪轉して返り戰ひ、追兵を包みて、將に之を鏖にせんとす。甲斐の後軍、橫擊して之を救ふ。北軍乃隊を倒にして退く。宇佐美定行、幟を渡口に植て、之を護りて盡く濟す。甲斐の兵疲れて復追擊せず。

宇佐美定行

【族す】族を擧て誅するを曰ふ

八月、謙信、復河中に出づ。村上義淸をして舊戰ひし處に營せしめて、自進みて河を過ぎ、水を背にして陣す。信玄、其志必死に在るを知りて、敢て出で戰はず。其候騎、報じて曰く、「北軍薪を積む山の如し」と。信玄、諸將に令して曰く、「敵中、夜、火の擧るあらば、愼みて進み擊つ勿れ。進擊する者は族せん」と。暮に及びて、候騎、又報じて曰く、「北軍營を掃ひ荷擔して、將に去らんとす」と。諸將爭ひて追擊せんと請ふ。信玄曰く、「謙信、豈、暮に迫りて營を掃ふ者ならんや。之を擊たば必敗れん」と。其夜、北軍火起る。甲斐の軍動せず。天明、北軍、行首を疏し、陣を嚴にして待つを望見す。諸將、乃、信玄に服す。信玄、伏を兩山の間に設け、戰を挑み佯り敗れ、敵を誘ひ山に入れ、瞰射して之を殲さんと謀る。乃、夜、伏を設けて、明、馬を縱ちて北軍の中に入れ、輕卒を出して之を追ふ。謙信出でず。信玄、兵、老して變あるを慮り、夜に乘じて退き、上野原に入る。謙信、軍を擧げて追擊す。信玄返り戰ふ。殺傷相當る。交々兵を收めて歸る。

上野原

甲越の兵解けず

甲斐、越後の兵、連に解けず。兩國の士民之を患ひ、みな和を講ぜんと願ふ。今川義元、爲に之を周旋す。謙信、將に關東及び越中に事あらんとす。是に於て和成る。

永祿元年

永祿元年三月、謙信、自將として越中に入る。越中、加賀の將士、交請ひて降る。之を許す。是より先、上杉憲政、數北條氏康と戰ふ。戰ふ每に輒敗れ、關東盡く氏康に屬す。憲政、援を謙信に請はんと欲す。是の歲の秋、憲政走りて越後に入り、謙信に見えんことを求め、之に謂て曰く、「吾れ六州を管領すること、此に十二世なり。卒に一の氏康の爲に傾覆せらる。四隣に氏康に報ずべき者を求む。獨、公と晴信あるのみ。而れども晴信は氏康と方に親し。吾れ是を以て怨を捐て、以て公に歸す。公、能く我が爲に仇に復せよ」と。謙信曰く、「敢て力を竭さざらんや」と。是時に當りて、謙信未だ志を信濃に得ず。加賀越中も亦未だ服せず。而して憲政に許す者は、以て爲景の惡を掩はんと欲するなり。乃館を北川に築きて以て之を寘く。憲政、謙信と約して父子と爲る。謙信是に於て上杉氏と稱す。又授くるに其職號を以てす。

憲政謙信と約して父子となり上杉氏と稱す

二年謙信關に詣る
輝虎と改む
三年泉福寺
厩橋城
四年謙信相模に入る

謙信辭して曰く、「事成らば之を受くるも、未だ晩からざるなり」と。是に於て、將士と會して議し、人をして北條氏を諜せしむ。氏康戰ふ毎に奇を用ゐると聞きて、曰く、「彼は奇を用ゐる、吾は正を用ゐるなり」と。十月兵を將ゐて上野に入り、厩橋、沼田等の五城を陷る。平井を復して之に據り、使を京師に發して、東伐の事を告ぐ。且攝家一人を關東の主と爲して、己之を輔けて北條氏の故事の如くせんことを請ふ。二年四月、再京師に入り、阪本に營す。五月朔、闕に詣る。天子酒を賜ひ、侑るに寶劍を以てす。五虎と名づく。前關白前嗣の東下を請ふ。許さる。また將軍に謁す。命じて關東を管領せしめ、三管領に比す。篋輿に乘り、朱柄の麾を執るを許し、己が偏諱を賜ひ、改めて輝虎と名づく。三年五月、謙信、自、將として、和田城を攻む。未だ下さず。長尾政景を遣して、武藏を侵す。九月、前嗣來りて至德寺に館す。是に於て謙信、二萬騎を發して、泉福寺に陣す。北條氏康、大舉して之を禦ぐ。本莊繁長、部する所を以て、先鋒と爲りて接戰す。相模の軍卻く。諸隊纔ぎて進む。謙信、麾下を以て中路より進みて、氏康と戰ひて大に之を破る。關東の豪傑響の如く應ず。乃捷を越後に報ず。憲政を迎へて、之を厩橋の牙城に居らしめて、自其郭に居る。四年正月、關東の將士、正を厩橋に賀す。兵を遣して古河を攻めて、關宿、河越の諸城を拔く。三月、謙信、七十六將を部す。兵凡十一萬、進みて相模に入る。大田三樂、小幡憲重等前に居り、牙を高麗山の下に建つ。北條氏、死士を遣して、謙信を狙擊す。謙信覺りて之を捕ふ。縱ち還す。遂に小田原を圍む。氏康敢て出でず。謙信冑を脫ぎ、白布幘を穿ち、白馬に乘り、朱柄麾を執り、馳せて諸隊に入りて、軍事を指揮す。關東の將士、竊に指さし、目語して曰く、「此公吾が曹を視る。蟲蟻の如し。寧ぞ終に戴く可けんや」と。是の時に當りて、信玄、輕井澤に在り。飯富兵部、說きて曰く、「謙信の威焰此の如し。北條氏必亡ぶれば、則我も亦危し。君宜しく小田原未だ陷らざるに及び、兵を引きて三增嶺に出でゝ、直に越後の中軍に當るべし。勝を得れば大に善し。卽勝たざるも、亦以て義を天下に伸ぶるに足らん」と。信玄曰く、「不可なり。

【高麗山】相模小田原を圍む
【白布幘】頭を韜むなり、俗に頭巾と曰ふ
【輕井澤】信濃

鎌倉に入り鶴岡に詣づ
越後に歸る
【稜師谷】上野
【貝津の敵】高阪昌宣
信玄貝津に入る

謙信兵を用ゐること迅速なるは、之を天資に得る。而れども老成の計なし。關東の將士必堪ふる能はずして、終に當に氏康に歸すべし。汝暫之を待て」と。宇佐美定行、謙信に說きて曰く、「城堅し。我れ深く入りて、久しく頓らば、恐らくは變あらん。宜しく今に及びて兵を收むべし」と。之に從ふ「新發田治長、年少にして近習たり。自請ひて殿を爲す。氏康、敢て尾擊せず。乃鎌倉に入り、鶴岡祠に詣で、源氏、北條氏の舊圖を觀る。故物の小八葉車を索めて、前嗣を載せて謙信これに騎從す。關東の將士前後を擁衞す。小幡憲村、刀を操りて從ふ。千葉國胤、小山政朝、門閥最も高し。座次を爭ひて決せず。謙信に訴ふ。謙信、判じて曰く「八州に在るの士、千葉氏を首と爲すべし。小山氏を尾と爲す可からず」と。二人爭ふ能はず。忍城主成田長泰、源頼義の故事を稱して、馬を祠前に立てて以て待つ。從士、長泰を曳きて馬より下し、之を拳す。長泰、慘恚して奔り歸る。諸將、叛きて歸る者相繼ぐ。謙信、還りて武藏の府に至る。長泰、北條氏の兵と之を尾擊す。謙信、輜重を道に委棄せしむ。敵、爭ひて之を取る。因りて蹂躪して過ぎて平井に入る。四月、憲政を以て越後に歸る。六月、關東の諸將、復、氏康に附き、來りて平井を攻む。謙信、報を聞きて卽發す。軍を潛めて稜師谷より出づ。曉に比び、北條氏の軍を擊つ。前軍の戰半なるを待ちて、自牙兵を以て旁より出でゝ、中堅を橫に擊ち、別將をして、遶りて其背に出でしむ。氏康敗走す。白井、厩橋の諸城を復して歸る。謙信の小田原を攻むるや、北條氏、使をして信玄に請ひ、北越後を侵して、以て其勢を牽かしむ。信玄、乃、高阪昌宣をして、疆上を焚掠せしむ。謙信大に怒る。四年八月、復信濃に出で、西條山に壘す。水を堰きて池と爲し、以て貝津の敵に備ふ。信玄、義信と二萬騎に將として、來りて雨宮渡に陣して、以て其歸路を絕つ。越後の將士、說きて曰く、「利は速戰に在り」と。謙信肯ぜず。居ること三日、信玄、兵を收めて貝津に入り、以て謙信の歸るを瞰ふ。謙信、自若たり。信玄謀りて曰く「謙信、蓋し吾が變を竢ちて、其軍を動かさざるなり。吾れ兵を河中に伏せて、別軍貝津より直

謙信、信玄と死を決せんとす

に往きて西條を攻めば、則謙信勝敗なく、必兵を引きて北に歸らん。而して吾れ敝を承けて鏖戰せば、謙信を擒にす可きなり」と。越後の諜者、報じて曰く「甲斐の軍、貝津を出でゝ南に行く」と。謙信、諸將を召して計を問ふ。直江實綱曰く「彼れ國内に變あるならん。故に夜に乘じて引き去るのみ。當に邀へて之を擊つべし」と。宇佐美定行、齋藤朝信曰く、「然らず。彼れ蓋し二軍と爲して、吾が河を踰ゆるに及びて、夾み之を擊たんと欲するなり」と。語未だ畢らざるに、諜者又報じて曰く、「甲斐の軍廣瀬を渡り、河中を上りて陣す」と。謙信、二人に謂て曰く「汝が言の如し。吾れ將に其意外に出でんとするなり」と。乃疑兵を山上に置きて、全軍枚を啣み馬舌を縛り、雨宮渡を渉る。武田氏の斥騎十七人に遇ひ、盡く之を斬り、進みて信玄の軍を壓して陣す。本莊繁長、色部長實等をして、二千騎を將る、筑摩河岸に陣せしむ。甲斐の別軍、已に西條山に向ふ。信玄、報を俟ちて曉に至る。曉未だ人色を辨ぜず。謙信の牙旗前に在るを見る。將士みな色を失ふ。越後の軍、鼓して進む。聲、地に震ふ。信玄其陣を易ふるに暇あらず。弓銃を以て力め拒ぐ。謙信、常に、向に信玄を斫りて遂げざりしを憾み、必死を決せんと欲し、自牙兵を拙で、前みて信玄の麾下に逼る。麾下潰え亂れて犀川に赴く。荒川伊豆、逼りて信玄を擊つ。信玄脱れ走る。謙信之を追ふ。義信二騎を以て、謙信の後に尾す。甘糟景茂等、擊ちて義信を走らす。謙信既に克つ。休止して餐を傳ふ。義信復殘兵を以て、返り襲ひて之を敗り、越後の將志田義時以下數十人を斬る。謙信槍を執りて親鬪ふ。本莊繁長等來り救ひ、復擊ちて義信を走らす。或人説く、「貝津の敵、夜出でゝ我が疲に乘ぜん。宜しく急に兵を收むべし」と。謙信肯ぜず。犀川を背にして陣し、善光寺に次すること三日。使を信玄に遣し、再戰を決せんと欲す。甲斐の將士も、又これを請ふ者あり。信玄みな許さず。

犀川を背にして陣す

五年松山城

五年三月、北條氏康、信玄と兵を合せて松山を攻めんと請ふ。松山は太田三樂の屬城なり。三樂、長尾謙忠と廐橋に在り。上杉憲政の庶子、憲勝をして之を守らしめ、急を謙信に告ぐ。甲斐の卒將甘利氏の臣米倉丹後と云ふ者あり。竹を束ねて楯と爲して、以て銃丸を扞ぐ。諸隊之に倣ふ。遂に松山を陷れ、憲勝を降す。

謙信三樂に敵狀を問ふ

【私市城】武藏

【二氏】武田北條

謙忠を斬る

而して謙信方に廐橋に至る。三樂に問ひて曰く、「松山は如何」と。曰く、「陷る」と。謙信大に怒り目を瞋し、刀を按じて跪きて曰く、「汝怯夫を以て城を守らせ、吾をして事に及ばざらしむ。是れ我が武を辱しむる也。吾れ寧汝と死なん」と。三樂、慴伏して、出づる所を知らず。乃松山の糧仗、籍、及び憲勝の質子二人を上る。謙信左手に二人の髪を捽りて、右手に之を斬る。刀を收め、復問ひて曰く、「敵軍幾何ぞや」と。曰く、「五萬人」と。曰く、「將帥は誰某ぞ」と。曰く、「信玄、義信、氏康、氏政」と。謙信笑ひて曰く、「吾と敵せん者は、二人のみ。氏政、義信の如きは、吾れ直に刀背を以て一擊すれば足る。抑近地に敵城の攻むべきもの有りや」と。曰く、「私市城あり。此を距ること十里許なり」と。謙信曰く、「攻む可きなり」と。卽、親將として赴き攻む。三樂、之に從ふ。舟を綴りて刀根川を濟る。既に濟りて舟を毀つ。信玄、氏康の軍前を過りて、使を遣し言はしめて曰く、「二公、松山を攻む。而して僕、援くるに及ばず。僕、深く之を愧づ。敢て徒に歸らず。今往きて私市を攻めん。二公幸に要せられよ」と。答へず。乃城に傳きて四面より齊しく登り、一晝夜にして之を拔く。城將小田朝眞を斬り、三千人を鏖にす。志田春義を以て、代り守らしめ還る。使を二氏の軍に遣して曰く、「僕城を拔きて還る。猶以て一戰すべし。二公、豈、意有るか」と。甲斐の軍、鼓譟す。謙信、冑を免ぎ馬より下り、徐行して還る。廐橋に至り、長尾謙忠を召して曰く、「三樂我に從ふ。汝何ぞ從はざる」と。刀を拔きて謙忠を斬り、其衆二千を屠る。北莊丹後をして代り守らしめ、然る後歸る。

氏康、信玄に謂て曰く、「公何ぞ以て戰はざる」と。曰く、「吾と公と一の謙信に敵せば、勝と雖、愧づ可きなり」と。信玄從容として、氏康と語る。因りて之に問ひて曰く、「河越の戰、公、一軍を以て兩上杉氏に克つ。願くは其詳なるを聞くを得ん」と。氏康曰く、「公、こゝに在り。僕、何ぞ敢て言はん」と。信玄固く請ひて曰く、「兒をして之を聞かしめんと欲す」と。氏康、乃、其戰略を談る。信玄善と稱す。還りて其營に至る。馬場信房に謂て曰く、「氏康の手段吾これを得たり」と。